四国横断自動車道建設に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告

第四十四冊

迯田石垣遺跡

迯田谷川下池遺跡

鹿庭遺跡

2002.9

香　川　県　教　育　委　員　会
財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
日　本　道　路　公　団

四国横断自動車道建設に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告

第四十三冊

迯田石垣遺跡

迯田谷川下池遺跡

鹿庭遺跡

2002.9

香　川　県　教　育　委　員　会
財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
日　本　道　路　公　団

序　　文

財団法人香川県埋蔵文化財調査センターでは、香川県教育委員会からの委託を受け、四国横断自動車道や高松東道路の建設、サンポート高松の整備など大規模な開発に伴う埋蔵文化財の発掘調査事業および出土した文化財の整理、研究業務を実施いたしております。

四国横断自動車道建設事業（津田～引田）につきましても平成8年度から埋蔵文化財の発掘調査を、また平成11年度からは発掘調査と並行して出土品の整理業務を行っております。

このたび、「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第四十三冊」として刊行いたしますのは大川郡引田町に所在する迯田石垣遺跡、迯田谷川下池遺跡及び鹿庭遺跡についてであります。

迯田石垣遺跡の調査では掘立柱建物、土坑墓をはじめ中世の遺構、遺物が確認されております。迯田谷川下池遺跡の調査においても中世の柱穴群が検出されています。迯田地区の二遺跡における調査は当時、山間部に営まれた集落の生活や文化を究明する貴重な資料となりました。鹿庭遺跡の調査では縄文時代から中世にかけての遺構、遺物が検出されています。特に弥生時代のサヌカイトの石材を保管した土坑が検出されたこと、多数の石器が出土したことは石器生産と遺跡の機能を考えるうえで興味深い資料となりました。

本報告書が香川県の歴史研究の資料として広く活用されますとともに埋蔵文化財に対する理解と関心が一層深められる一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から出土品の整理・報告に至るまでの間、日本道路公団及び香川県教育委員会並びに関係諸機関、地元関係者各位には多大なご援助とご協力をいただきました。ここに深く感謝の意を表しますとともに、今後ともご支援を賜りますようお願い申し上げます。

平成14年9月

財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

所長　小原克己

例　言

1．本報告書は四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書の第四十三冊で、香川県大川郡引田町引田に所在する迯田石垣遺跡（にげたいしがきいせき）、迯田谷川下池遺跡（にげたたにがわしもいけいせき）、同引田町吉田に所在する鹿庭遺跡（かにわいせき）の報告を収録した。

2．発掘調査は香川県教育委員会が日本道路公団から委託され、香川県教育委員会が調査主体、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが調査担当者として実施した。

3．発掘調査の期間及び担当は以下のとおりである。

迯田石垣遺跡　予備調査　期間　平成10年4、5月
　　担当　中西昇、島田秀夫、西岡達哉、野崎隆亨、糸山晋、正山泰久
　　本調査　期間　平成11年4月1日～6月30日
　　担当　溝渕大輔、長井博志、多田歩

迯田谷川下池遺跡　予備調査　期間　平成10年4、5月
　　担当　中西昇、島田秀夫、西岡達哉、野崎隆亨、糸山晋、正山泰久
　　本調査　期間　平成10年12月1日～平成11年1月31日
　　担当　濱松春水、長井博志、多田歩

鹿庭遺跡　予備調査　期間　平成9年5、9月
　　担当　松岡宏一、信里芳紀
　　本調査　期間　平成10年4月1日～平成10年8月31日
　　担当　濱松春水、長井博志、多田歩

4．調査にあたって、下記の関係諸機関の協力を得た。記して謝意を表したい。（順不同、敬称略）
香川県土木部横断自動車道対策総室、同長尾土木事務所横断道対策課、引田町横断道対策室、引田町教育委員会、引田町歴史民俗資料館、地元対策協議会、地元自治会

5．本報告書の作成は、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが実施した。
本報告書の執筆・編集は長井博志が担当した。

6．本報告書で用いる方位の北は、国土座標系第Ⅳ系の北であり、標高はT．P．を基準としている。
また、遺構は下記の略号により表示している。
ＳＨ…竪穴住居　ＳＢ…掘立柱建物　ＳＥ…井戸　ＳＦ…竈　ＳＴ…土壙墓　ＳＫ…土坑
ＳＤ…溝状遺構　ＳＲ…自然流路　ＳＸ…不明遺構　ＳＰ…柱穴

7．石器実測図中、スクリーントーンを貼った部分は摩滅痕を、輪郭線の回りの実線は潰れを表す。なお、現代の欠損は濃く黒で潰している。石器石材は特に表記がない限り、サヌカイトである。

8．挿図の一部に国土地理院地形図　三本松及び引田（1/25,000）を使用した。

9．遺構断面図の水平線上の数値は、水平線の標高値（単位m）である。

10．土器観察表の中の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖　1992年度版』を使用して表す。また、残存率は遺物の図化部分に占める割合であり、完形品に対する割合ではない。

目　　次

序文
例言
第１章　調査の経緯 …… 1
　第１節　調査にいたる経過 …… 1
　第２節　調査の経過と体制 …… 5
　　１　調査の経過 …… 5
　　２　発掘調査及び整理作業の体制 …… 5
第２章　迯田石垣遺跡の調査 …… 7
　第１節　立地と環境 …… 7
　　１　地理的環境 …… 7
　　２　歴史的環境 …… 7
　第２節　予備調査 …… 11
　第３節　調査の方法 …… 11
　第４節　調査の成果 …… 11
　　１　土層序 …… 11
　　２　遺構、遺物 …… 16
　　Ⅰ区の調査 …… 16
　　Ⅱ区の調査 …… 35
　　３　まとめ …… 44
第３章　迯田谷川下池遺跡の調査 …… 49
　第１節　立地と環境 …… 49
　　１　地理的環境 …… 49
　　２　歴史的環境 …… 49
　第２節　予備調査 …… 49
　第３節　調査の方法 …… 49
　第４節　調査の成果 …… 49
　　１　土層序 …… 49
　　２　遺構、遺物 …… 50
　　３　まとめ …… 55
第４章　鹿庭遺跡の調査 …… 56
　第１節　立地と環境 …… 56
　　１　地理的環境 …… 56
　　２　歴史的環境 …… 56
　第２節　予備調査 …… 56
　第３節　調査の方法 …… 56

第４節　調査の成果 …… 65
1　土層序 …… 65
2　遺構、遺物 …… 66
(1) Ａ区の調査 …… 66
第１面の遺構、遺物 …… 69
第２面の遺構、遺物 …… 84
(2) Ｂ区の調査 …… 90
3　まとめ …… 100
(1) 遺構の変遷 …… 100
(2) サヌカイト剥片集積土坑（Ｂ区ＳＫ02）と遺跡出土石器について …… 102
鹿庭遺跡遺構番号変更一覧表 …… 110
迯田石垣遺跡土器観察表 …… 111
迯田石垣遺跡石器、鉄器観察表 …… 115
迯田谷川下池遺跡遺物観察表 …… 116
鹿庭遺跡土器観察表 …… 117
鹿庭遺跡石器観察表 …… 119
写真図版 …… 121
報告書抄録 …… 157
付図２枚

挿図目次

第１章

第１図　四国横断自動車道(津田～引田間)埋蔵文化財包蔵地(遺跡名番号) …… 2

第２章　迯田石垣遺跡

第２図　引田町の位置および周辺の遺跡(1/25000) …… 8
第３図　迯田石垣、迯田谷川下池遺跡の位置(1/2500) …… 9
第４図　迯田石垣、迯田谷川下池遺跡予備調査
　　トレンチ配置図(1/2000) …… 12
第５図　土層柱状図(1) …… 13
第６図　土層柱状図(2) …… 15
第７図　Ⅰ区ＳＢ01平・断面図(1/80)，出土遺物(1/4) … 17
第８図　Ⅰ区ＳＢ02平・断面図(1/80)，出土遺物(1/4) … 18
第９図　Ⅰ区ＳＢ03平・断面図(1/80)，出土遺物(1/4) … 20
第10図　Ⅰ区ＳＢ04平・断面図(1/80) …… 21
第11図　Ⅰ区ＳＢ05平・断面図(1/80) …… 21
第12図　Ⅰ区ＳＢ06平・断面図(1/80)，出土遺物(1/4) … 22
第13図　Ⅰ区ＳＢ07平・断面図(1/80)，出土遺物(1/4) … 23
第14図　Ⅰ区ＳＢ08平・断面図(1/80) …… 23
第15図　Ⅰ区ＳＢ09平・断面図(1/80) …… 24
第16図　Ⅰ区ＳＢ10平・断面図(1/80)，出土遺物(1/4) … 24
第17図　Ⅰ区ＳＢ11平・断面図(1/80)，出土遺物(1/4) … 25
第18図　Ⅰ区ＳＢ13平・断面図(1/80) …… 25
第19図　Ⅰ区ＳＢ12平・断面図(1/80)，出土遺物(1/4) … 26
第20図　Ⅰ区ＳＢ14平・断面図(1/80) …… 27
第21図　Ⅰ区ＳＢ16平・断面図(1/80) …… 27
第22図　Ⅰ区ＳＢ15平・断面図(1/80)，出土遺物(1/4) … 28
第23図　Ⅰ区ＳＢ17平・断面図(1/80) …… 28
第24図　Ⅰ区ＳＢ18平・断面図(1/80) …… 29
第25図　Ⅰ区ＳＢ19平・断面図(1/80)，出土遺物(1/4) … 29
第26図　Ⅰ区ＳＫ01～ＳＫ03、05平・断面図(1/80)，
　　出土遺物(1/4) …… 30
第27図　Ⅰ区ＳＫ04平・断面図(1/40)，出土遺物(1/4) … 31
第28図　Ⅰ区ＳＫ06、07平・断面図(1/80) …… 32
第29図　Ⅰ区ＳＴ01平・断面図(1/20)，出土遺物(1/4) … 33
第30図　Ⅰ区ＳＸ01平・断面図(1/60)，
　　出土遺物(1/4，49のみ1/2) …… 34
第31図　Ⅱ区ＳＫ01～ＳＫ03平・断面図(1/30)，
　　出土遺物(1/4) …… 37
第32図　Ⅱ区ＳＫ04平・断面図(1/30)，出土遺物(1/4) … 38
第33図　Ⅱ区ＳＫ05、06平・断面図(1/20)，
　　出土遺物(1/4) …… 39
第34図　Ⅰ区ＳＰ514平・断面図(1/10)，
　　出土遺物(1/4) …… 40
第35図　Ⅰ、Ⅱ区ＳＰ出土遺物(1/4) …… 41
第36図　Ⅰ区包含層出土遺物(1/4) …… 42
第37図　Ⅱ区包含層出土遺物(1/4) …… 43
第38図　迯田石垣遺跡遺構変遷図(1/400) …… 45

第3章　迯田谷川下池遺跡

第39図　土層柱状図 …… 51
第40図　遺構配置図(1/200) …… 53
第41図　ＳＫ01、02平・断面図(1/20) …… 55
第42図　ＳＰ出土遺物(1/2) …… 55
第43図　包含層出土遺物(1/4) …… 55

第4章　鹿庭遺跡

第44図　鹿庭遺跡の位置(1/3000) …… 57
第45図　遺跡周辺地籍図 …… 58
第46図　予備調査トレンチ配置図(1/1500) …… 59
第47図　予備調査トレンチ柱状図(1/40) …… 60
第48図　予備調査トレンチ柱状図(1/40) …… 61
第49図　予備調査6－3トレンチ柱状図(1/40),
ＳＫ01、02付近北壁土層断面図(1/20) …… 62
第50図　予備調査トレンチ柱状図(1/40) …… 63
第51図　予備調査トレンチ柱状図,トレンチ・
灰色砂礫層対応図 …… 64
第52図　土層柱状図 …… 67
第53図　Ａ区第1面ＳＢ01平・断面図(1/80) …… 69
第54図　Ａ区第1面ＳＢ02平・断面図(1/80) …… 69
第55図　Ａ区第1面ＳＢ03平・断面図(1/80),
出土遺物(1/2) …… 69
第56図　Ａ区第1面ＳＢ04平・断面図(1/80) …… 70
第57図　Ａ区第1面ＳＢ05平・断面図(1/80),
出土遺物(1/2) …… 70
第58図　Ａ区第1面ＳＢ06平・断面図(1/80) …… 71
第59図　Ａ区第1面ＳＢ07平・断面図(1/80),
出土遺物(1/4) …… 71
第60図　Ａ区第１面ＳＢ08平・断面図(1/80) …… 71
第61図　Ａ区第1面ＳＫ01～ＳＫ05平・断面図(1/30),
出土遺物(1/2) …… 72
第62図　Ａ区第1面ＳＫ06～ＳＫ11平・断面図(1/30) … 74
第63図　Ａ区第1面ＳＫ12～ＳＫ15平・断面図(1/30),
出土遺物(1/4) …… 75
第64図　Ａ区第1面ＳＫ16～ＳＫ21平・断面図(1/30) … 77
第65図　Ａ区第1面ＳＫ22～ＳＫ24平・断面図(1/30) … 78
第66図　Ａ区第1面ＳＤ01～ＳＤ05断面図(1/40),
出土遺物(1/2) …… 80
第67図　Ａ区第1面ＳＰ出土遺物(1/4,1/2) …… 81
第68図　Ａ区第1面包含層出土遺物(1)(1/4) …… 82
第69図　Ａ区第1面包含層出土遺物(2)(1/2) …… 83
第70図　Ａ区第1面包含層出土遺物(3)(1/2) …… 84
第71図　Ａ区第2面ＳＫ01～ＳＫ05平・断面図(1/30) … 85
第72図　Ａ区第2面ＳＫ06～ＳＫ08平・断面図(1/30) … 86
第73図　Ａ区第2面遺構配置図(1/200) …… 87
第74図　Ａ区第2面ＳＤ01～ＳＤ03断面図(1/40),
出土遺物(1/4) …… 89
第75図　Ａ区第2面ＳＰ出土遺物(1/4,1/2) …… 89
第76図　Ａ区第2面出土遺物(1/2) …… 89
第77図　Ｂ区ＳＢ01平・断面図(1/80) …… 90
第78図　Ｂ区ＳＫ01～ＳＫ03、ＳＫ06平・断面図(1/30),
出土遺物(1/2) …… 91
第79図　Ｂ区ＳＫ02出土遺物(1/2,1/3) …… 92
第80図　Ｂ区ＳＫ04、05平・断面図(1/30),
出土遺物(1/2) …… 94
第81図　Ｂ区ＳＫ07～ＳＫ10平・断面図(1/30),
ＳＤ01断面図(1/40) …… 95
第82図　Ｂ区ＳＸ01平・断面図(1/60),出土遺物(1/4) … 96
第83図　Ｂ区ＳＰ出土遺物(1/4,1/2) …… 97
第84図　Ｂ区包含層出土遺物(1)(1/4) …… 97
第85図　Ｂ区包含層出土遺物(2)(1/2) …… 98
第86図　Ｂ区包含層出土遺物(3)(1/2) …… 99
第87図　鹿庭遺跡遺構変遷図(1/600) …… 101
第88図　鹿庭遺跡接合資料(1/2) …… 107
第89図　国分寺六つ目遺跡サヌカイト石器集積遺構平・断面図
(1/8),出土遺物(2、3は1/2,その他1/4) …… 107
第90図　川津六反地遺跡サヌカイト石器集積遺構平・断面図
(1/8),出土遺物(1/2、1/4) …… 108
第91図　百間川沢田遺跡高縄手調査区サヌカイト石器集積
土坑1、石器集積遺構平・断面図(1/12),出土遺物
(1/4) …… 108
第92図　百間川原尾島遺跡三の坪、横田調査区土坑61平・断面
図(1/30),出土遺物(1/4) …… 109

表目次

第１表　四国横断自動車道（津田～引田）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査一覧①　…… 3
第２表　四国横断自動車道（津田～引田）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査一覧②　…… 4
第３表　調査の体制　…… 6
第４表　鹿庭、庵の谷、鴨部・川田遺跡出土石器重量表　… 109
第５表　鹿庭遺跡出土石器組成表　…… 109
第６表　鹿庭遺跡遺構番号変更一覧表　…… 110
第７表　迯田石垣遺跡土器観察表　…… 111
第８表　迯田石垣遺跡石器、鉄器観察表　…… 115
第９表　迯田谷川下池遺跡遺物観察表　…… 116
第10表　鹿庭遺跡土器観察表　…… 117
第11表　鹿庭遺跡石器観察表　…… 119

図版目次

迯田石垣遺跡

図版１　Ⅰ区遠景　真上から
図版２　調査区遠景　西上空から
Ⅰ区全景　西から
図版３　Ⅰ区ＳＢ01完掘状況　西から
Ⅰ区ＳＫ04完掘状況　南から
図版４　Ⅰ区ＳＴ01遺物出土状況　南から
Ⅰ区ＳＴ01遺物出土状況　東から
図版５　Ⅰ区ＳＴ01土層断面　北から
Ⅰ区ＳＴ01完掘状況　北から
図版６　Ⅰ区ＳＸ01礫出土状況　北から
Ⅰ区ＳＸ01遺物出土状況（床直）　東から
図版７　Ⅱ区遠景　真上から
Ⅱ区全景　南から
図版８　Ⅱ区ＳＫ01土層断面　南から
Ⅱ区ＳＫ01完掘状況　南から
図版９　Ⅱ区ＳＫ02完掘状況　南から
Ⅱ区ＳＫ03完掘状況　南から
図版10　Ⅱ区ＳＫ04下部礫出土状況　北から
Ⅱ区ＳＫ04下部礫出土状況　南から
図版11　Ⅱ区ＳＫ04完掘状況　南から
Ⅱ区ＳＫ05、06完掘状況　北から
図版12　Ⅱ区ＳＫ05礫出土状況　北から
Ⅱ区ＳＫ06礫出土状況　東から
図版13　土師器杯、小皿
図版14　土師質土器土釜、土鍋、すり鉢，瓦質土器蓋？、釜，東播系コネ鉢、小皿
図版15　湊焼甕，亀山焼甕，備前焼すり鉢、壺，器種不明
図版16　瀬戸・美濃端反皿，青磁椀，管状土錘
図版17　平瓦、軒平瓦，石鏃，鉄釘、鉄刀

迯田谷川下池遺跡

図版18　調査区全景　南から
調査区北壁土層断面〈土層柱状図Ｂ、Ｃ〉　南東から
調査区東壁土層断面〈土層柱状図Ｇ～Ｉ〉　北西から
図版19　ＳＫ02検出状況　西から
ＳＫ02礫出土状況　西から
出土遺物

鹿庭遺跡

図版20　調査前風景　南西から

A区第1面全景　南から

図版21　A区東壁土層断面〈柱状図H～I〉　西から

A区東壁土層断面〈柱状図J〉　西から

図版22　A区第1面SB群完掘状況　西から

A区第1面SK19～SK21検出状況　南から

図版23　A区第1面SK13検出状況　東から

A区第1面SK13土層断面　北から

図版24　A区北部第2面全景　東から

B区全景　南上空から

B区SB01完掘状況　東から

図版25　B区SK02検出状況〈6－3トレンチ北壁〉　南から

B区SK02大形剥片出土状況　南から

図版26　B区SK02遺物出土状況　東から

発掘調査風景

図版27　B区SK04、05、07、08完掘状況　南から

B区SX01礫出土状況　東から

図版28　土師器杯、小皿，土師質土器土釜、土鍋，管状土錘，

器種不明

図版29　弥生土器甕、底部，石鏃

図版30　石鏃

図版31　石錐、リタッチドフレイク、石匙、打製石庖丁、打製石鎌

図版32　スクレイパー、楔形石器、打製石斧、大形剥片

図版33　大形剥片

図版34　大形剥片

第１章　調査の経緯

第１節　調査にいたる経過

四国横断自動車道津田～引田間の建設については、平成５年度に建設大臣から日本道路公団総裁に対して建設の施工命令が下され、平成６年度に路線の中心杭の打設が行われた。

これに伴う埋蔵文化財保護については、平成４年度から県教育委員会と日本道路公団高松建設局とで事前協議が開始された。平成７年６・７月には県教育委員会が国庫補助事業として分布調査を行い、津田～引田間については22地区について埋蔵文化財の保護に配慮する必要があることを日本道路公団に通知した。日本道路公団は県教育委員会の意見を踏まえ、平成７年10月文化庁と協議を行い、平成８年１月文化庁から「工事の施工に先だって発掘調査を実施すること」等の回答がなされた。これにより、平成４年度からの事前協議は終了し、平成８年４月、県教育委員会と日本道路公団とで埋蔵文化財発掘調査についての委託契約が締結され、さらに県教育委員会と財団法人香川県埋蔵文化財調査センターとで発掘調査の委託契約が締結された。

一方、県教育委員会では明石大橋開通にあわせた津田～引田間の高速道路の整備は香川県の緊急かつ重要な課題であることから、平成８年度及び９年度に文化財専門職員を新規採用し、調査体制の充実を図ることで対応した。

津田～引田間22地区の調査対象地区のうち、引田町内には６地区がある。平成８年度からは、この調査対象地区の具体的な遺跡の内容を把握するため、用地買収の進捗にあわせて、予備調査を実施し、随時本調査の範囲を確定した。

平成12年度現在の遺跡位置及び遺跡内容は第１図及び第１・２表のとおりである。

迯田石垣遺跡、迯田谷川下池遺跡、鹿庭遺跡は，前記の平成７年度の県教育委員会による22地区のうち引田地区、迯田地区、鹿庭地区にあたり、平成９、10年度に予備調査を実施した。

なお整理作業については、平成13年度10月より開始し、平成14年３月に終了した。

参考文献

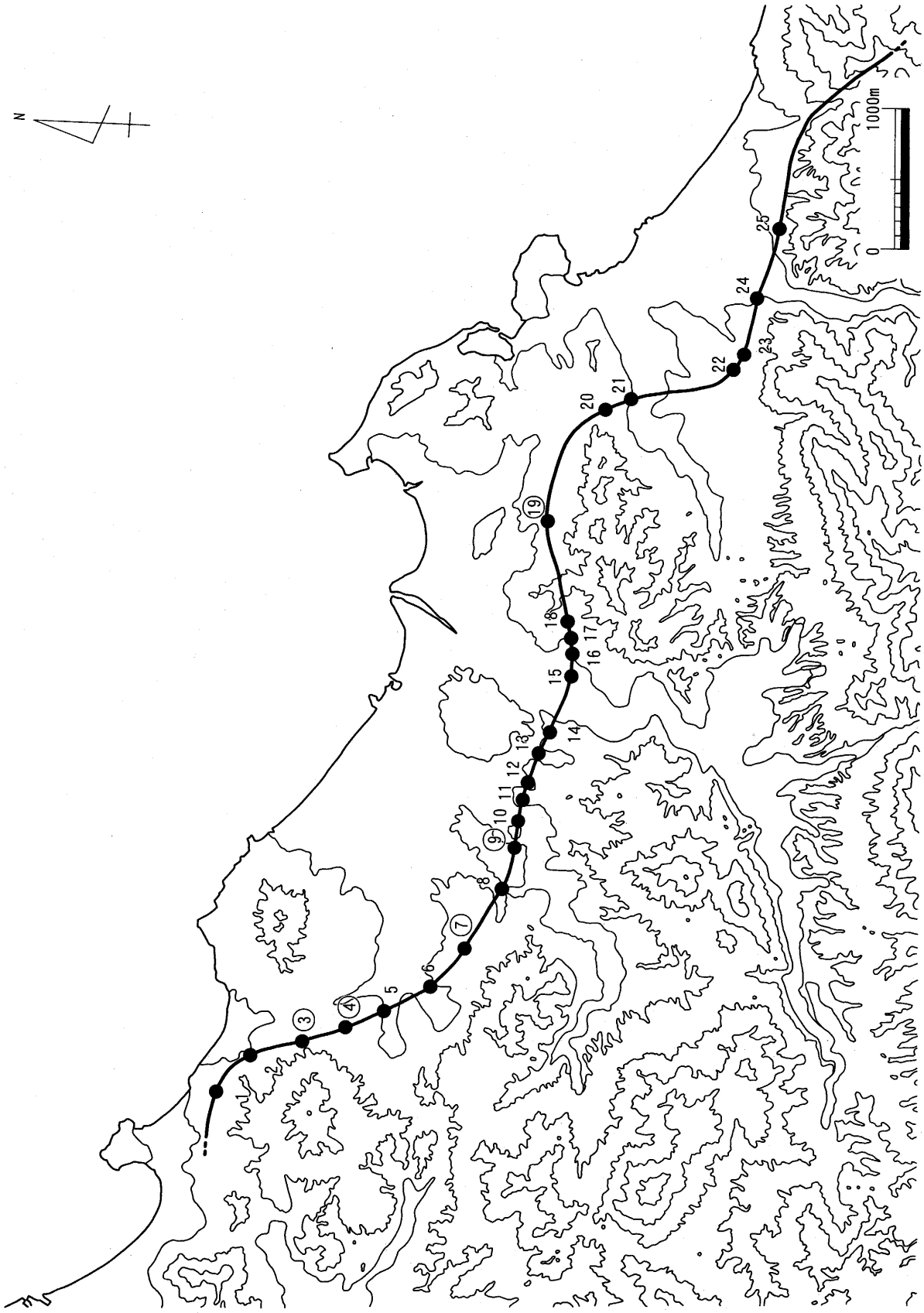
『埋蔵文化財試掘調査報告Ⅸ　国道バイパス等事業予定地内の調査』香川県教育委員会　1996.3

『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報　平成８年度』香川県教育委員会他　1997.3

『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報　平成９年度』香川県教育委員会他　1998.3

『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報　平成10年度』香川県教育委員会他　1999.3

『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第三十六冊　金毘羅山遺跡・塔の山南遺跡・庵の谷遺跡』香川県教育委員会、財団法人香川県埋蔵文化財調査センター他　2000.8



第１図　四国横断自動車道（津田～引田間）埋蔵文化財包蔵地（遺跡名番号）

遺跡名		地区名	所在地	調査面積(㎡)	調査期間	遺構	遺物	備考
1	中谷遺跡	中谷	大川郡津田町鶴羽	518	8.10.1～9.1.31	中世：柱穴	瓦器、土師器	
2	大山遺跡	大山	大川郡津田町鶴羽	2,113	8.10.1～9.1.31	弥生：溝，中世：柱穴・土坑・溝・土壙墓	弥生土器、瓦器、土師器	
③		馬篠A～D	大川郡大内町馬篠	620	9.7.1～9.8.31	（予備調査）		平成９年度概報で報告完了
④		小砂	大川郡大内町小砂	100	9.6.1～9.6.30	（予備調査）		平成９年度概報で報告完了
5	坪井遺跡	中山	大川郡大内町中山	6,566	10.9.1～11.3.31	奈良：掘立柱建物跡	刻印付き須恵器 土師器、黒色土器	平成13年度「坪井遺跡」として報告書刊行
6	三殿出口遺跡	三殿	大川郡大内町三殿	135	11.7.1～11.7.31	（予備調査）		
				6,370	11.4.1～11.6.30 11.11.1～11.11.30	近世：砂糖竈	弥生土器、土師器、須恵器	
⑦		町田	大川郡大内町町田	69	10.9.1 ～10.9.30	（予備調査）		平成10年度概報で報告完了
8	楠谷遺跡	楠谷A	大川郡大内町水主楠谷	1,000	11.3.1～11.3.31	（予備調査）		平成11年度概報で報告完了
		〃 B		1,578	9.7.1～10.3.31	弥生：掘立柱建物跡・溝・川	弥生土器	
		〃 C		460	8.12.1～8.12.31	（予備調査）		
⑨		高原	大川郡大内町水主高原	11	9.9.1～9.9.30	（予備調査）		平成９年度概報で報告完了
10	金毘羅山遺跡	下屋敷	大川郡大内町水主下屋敷	446	8.11.1～8.11.30	（予備調査）		
				100	10.3.1～10.3.31	（予備調査）		
				3,600	10.4.1～10.8.31	弥生：竪穴住居跡・土器棺 古墳：竪穴住居跡	縄文土器、 弥生土器、土師器 抉状耳飾	平成12年度「金毘羅山遺跡Ⅰ」として報告書刊行
				1,300	11.12.1～11.12.31	弥生：土器棺・竪穴式石室	弥生土器、青銅鏡	
11	塔の山南遺跡	別所	大川郡大内町川東杖の端	15	9.9.1～9.9.30	（予備調査）		平成12年度「塔の山南遺跡」として報告書刊行
				1,300	11.1.1～11.3.26	弥生：墳墓群	土師器	
12	西谷遺跡	杖の端	大川郡大内町川東西谷	2,092	9.6.1～10.3.31	弥生：溝、中世：掘立柱建物	弥生土器、土師器	平成９年度概報で報告完了
13	原間遺跡	原間	大川郡大内町川東原間	500	9.2.1～9.2.28	（予備調査）		平成13・14年度「原間遺跡Ⅰ・Ⅱ」として報告書刊行・予定
				19,254	9.4.1～10.3.31	弥生：竪穴住居跡・堀立柱建物跡	弥生土器、須恵器、土師器	
				24,243	10.4.1～11.3.31	古墳：古墳		

第１表　四国横断自動車道（津田～引田）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査一覧①

14	樋端遺跡	樋端	大川郡白鳥町西藤井	3,590	10.12.1～11..3..31	弥生:墳墓、古墳:古墳	弥生土器、土師器、須恵器、耳環、鉄鏃、青銅鏡	平成14年度「樋端遺跡」として報告書刊行予定
				1,647	11..9.1～11.10..31			
15	成重遺跡	成重	大川郡白鳥町白鳥成重	1,500	9.2.1～9.2.28	(予備調査)		
				14,650	9.4.1～10.3.31	弥生:集石・方形周溝墓・竪穴住居跡・壺棺、古墳:竪穴住居跡・古墳、奈良:掘立柱建物跡・土坑	弥生土器、石器、土師器、陶磁器、銅銭	
				6,543	10.4.1～11.3.31			
				4,192	11.6.1～12.3.31			
16	谷遺跡	谷	大川郡白鳥町白鳥谷	111	10.7.1～10.7.31	(予備調査)		
				2,741	11.9.1～12.3.31	中世:掘立柱建物跡、近世:陶器窯	陶磁器	
				900	12.4.1～12.8.31			
17	善門池西遺跡	池の奥	大川郡白鳥町白鳥谷	3,566	9.11.17～10.3.31	弥生:竪穴住居跡 古墳:竪穴住居跡 中世:掘立柱建物跡	弥生土器、石器、土師器、須恵器、備前焼、銅銭	
				2,500	10.4.1～11.3.31			
				1,050	11.7.1.～11.8.31			
18	池の奥遺跡	池の奥	大川郡白鳥町白鳥谷	8,700	10.6.1～11.3.26	弥生:竪穴住居跡・土坑	弥生土器、磨製石剣	
⑲	法月		大川郡白鳥町帰来	510	10.1.1～10.1.31	(予備調査)		平成９年度概報で報告完了
20	天王谷遺跡	塩屋	大川郡引田町小海中山	1,200	11.1.22～11.3.24	中世:掘立柱建物跡・瓦窯	土師器、瓦	
				1,475	11.7.1～11.8.31			
21	川北遺跡	塩屋	大川郡引田町小海	6,038	10.8.1～11.3.31	奈良:掘立柱建物跡	土師器、須恵器	
22	逊田石垣遺跡	逊田	大川郡引田町引田逊田	554	10.4.1～10.5.31	(予備調査)		平成14年度報告書刊行予定
				2,300	11.4.1～11.6.30	中世:掘立柱建物跡	土師器、陶磁器	
23	逊田谷川下池遺跡	逊田	大川郡引田町引田逊田	1,450	10.12.1～11.1.29	弥生:竪穴住居跡	弥生土器、石器	平成14年度報告書刊行予定
24	鹿庭遺跡	鹿庭	大川郡引田町吉田	310	9.7.1～9.10.31	(予備調査)		平成14年度報告書刊行予定
				3,800	10.4.1～10.8.31	弥生:土坑、中世:掘立柱建物跡	弥生土器、石器、須恵器、土師器	
25	庵の谷遺跡	黒羽	大川郡引田町黒羽下内	3,978	9.10.1～10.3.31	弥生:竪穴住居跡・土坑	弥生土器、石器	平成12年度「庵の谷遺跡」として報告書刊行
	合計			145,724				

第２表　四国横断自動車道(津田～引田)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査一覧②

第２節　調査の経過と体制

１　調査の経過

迯田石垣遺跡は平成10年に予備調査を実施した後、翌年本調査を開始した。調査期間は平成11年4月1日から平成11年6月30日である。調査面積は2300㎡である。整理作業は迯田谷川下池遺跡と合わせ平成13年10月から12月に調査員1人、整理作業員7名の体制で行った。

迯田谷川下池遺跡は迯田石垣遺跡と同時に予備調査を実施した後、同年12月1日から平成11年1月29日まで2ヶ月間本調査を行った。調査面積は1450㎡である。

鹿庭遺跡は平成10年4月1日から8月31日まで本調査を実施した。調査面積は3800㎡である。いずれの発掘調査も調査員3名で、直営方式により実施した。またその概要は既に概報および年報（註）で報告している。整理作業は平成14年1月から3月で、調査員1名、整理作業員7名で行った。

２　発掘調査及び整理作業の体制

発掘調査及び整理作業の体制は第3表のとおりである。
その他、日々雇用職員として発掘調査に携わった方々は以下のとおりである。

現場整理作業員　三谷百合絵
普通作業員　木村由貴夫、中山秀夫、西川昭彦、新田勝、根ヶ山岩太郎、橋本治、橋本正利、濱田博、水口雅彦
軽作業員　石原雅子、大久保尚子、大森貞子、吉川喜美子、桑島糸枝、下地秋子、永峰幸子、中山耀子、橋本希代美、橋本トキ、福島保子、丸山智子、水田サダコ、水口恵美子、水谷優美、三谷登志子、三谷房子、樫本梅子、森高三智代

整理作業に携わった方々は以下のとおりである。
整理員　岡崎江伊子
整理補助員　前田好美、鈴木奈穂子
整理作業員　東川真希子、青木麗子、白川智子、土屋実加

（註）『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報　平成9年度』1998　香川県埋蔵文化財調査センター他
『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報　平成10年度』1999　香川県埋蔵文化財調査センター他
『財団法人香川県埋蔵文化財発掘調査センター年報　平成9年度』 1998　香川県埋蔵文化財調査センター
『財団法人香川県埋蔵文化財発掘調査センター年報　平成10年度』 1999　香川県埋蔵文化財調査センター

香川県教育委員会　文化行政課			
	平成10年度	平成11年度	平成13年度
総　　括	課　　長　小原　克己	課　　長　小原　克己	課　　長　北原　和利
	課長補佐　北原　和利	課長補佐　小国　史郎	課長補佐　小国　史郎
総　　務	副主幹兼係長　西村　隆史	係　　長　中村　禎伸	副主幹　中村　禎伸
	係　　長　中村　禎伸	主　　査　三宅　陽子	主　　査　須崎　陽子
	主　　査　三宅　陽子	松村　崇史	主　　事　亀田　幸一
	松村　崇史		
埋蔵文化財	副主幹　渡部　明夫	副主幹　廣瀬　常雄	副主幹　大山　眞充
	係　　長　西村　尋文	係　　長　西村　尋文	主　　任　西岡　達哉
	主任技師　塩崎　誠司	文化財専門員　森　格也	文化財専門員　古野　徳久
		主任技師　塩崎　誠司	文化財専門員　宮崎　哲治
財団法人香川県埋蔵文化財調査センター			
総　　括	所　　長　菅原　良弘	所　　長　菅原　良弘	所　　長　小原　克己
	次　　長　小野　善範	次　　長　川原　裕章	次　　長　川原　裕章
総　　務	副主幹兼係長　田中　秀文	副主幹兼係長　田中　秀文	副主幹　大西　誠治
	主　　査　新　一郎 (6.1～)		係　　長　多田　敏弘
	主任主事　西川　大 (～5.31)		
調　　査	主任文化財専門員 大山　眞充	主任文化財専門員 大山　眞充	主任文化財専門員 真鍋　昌宏
	文化財専門員　濱松　春水	主任技師　溝淵　大輔	文化財専門員　片桐　孝浩
	技　　師　長井　博志	技　　師　長井　博志	主任技師　長井　博志
	調査技術員　多田　歩	調査技術員　多田　歩	

第３表　調査の体制

第２章　迯田石垣遺跡の調査

第１節　立地と環境

１．地理的環境（第２、３図）

迯田石垣遺跡は大川郡引田町引田に所在する。引田町は香川県の東端部に位置し、町の北側に広がる引田平野は北東部で瀬戸内海に面し、他の三方はビク山、鳴嶽、翼山、与治山といった標高 150 ～ 450 mの山塊に囲まれている。主要河川としては小海川、馬宿川がある。平野部において小海川は直線的に東流するが、これは中世以降に流路固定が行われたためであるとされている。（註１）馬宿川は町域の南部で鳴嶽とビク山の間を、北部で扇状地内を北流する。扇状地は馬宿川により形成されたもので、和泉系砂岩礫の堆積からなる。引田平野は主に両河川の堆積作用により形成されている。

遺跡は鳴嶽から北に派生する２つの丘陵に挟まれた谷筋の奥部に位置し、平野に面した谷筋の入口からは約 900 m南に入る。この大きな谷筋に沿って南に約 300 m行くと、迯田谷川下池遺跡が所在する。谷地形の内部は現状では耕作地として利用されている。遺跡は南部にある丘陵の緩斜面に展開するが、西側にはこの丘陵と西の丘陵が形成する小さな谷地形がある。また北側では上記の大きな谷地形に面している。遺跡の現地表面は標高 22､5 ～ 24 mで谷の中央へ向かう東から西および出口へ向かう南から北へ下っている。

２．歴史的環境（第２図）

町内では発掘調査があまり行われておらず、遺物の表採資料が目立つ。このため遺跡内容は不明瞭な部分が大きい。だが、今回の四国横断自動車道建設に伴う発掘調査で新しい遺跡も確認されている。以下、町内の歴史的環境を時代ごとに述べる。

旧石器時代

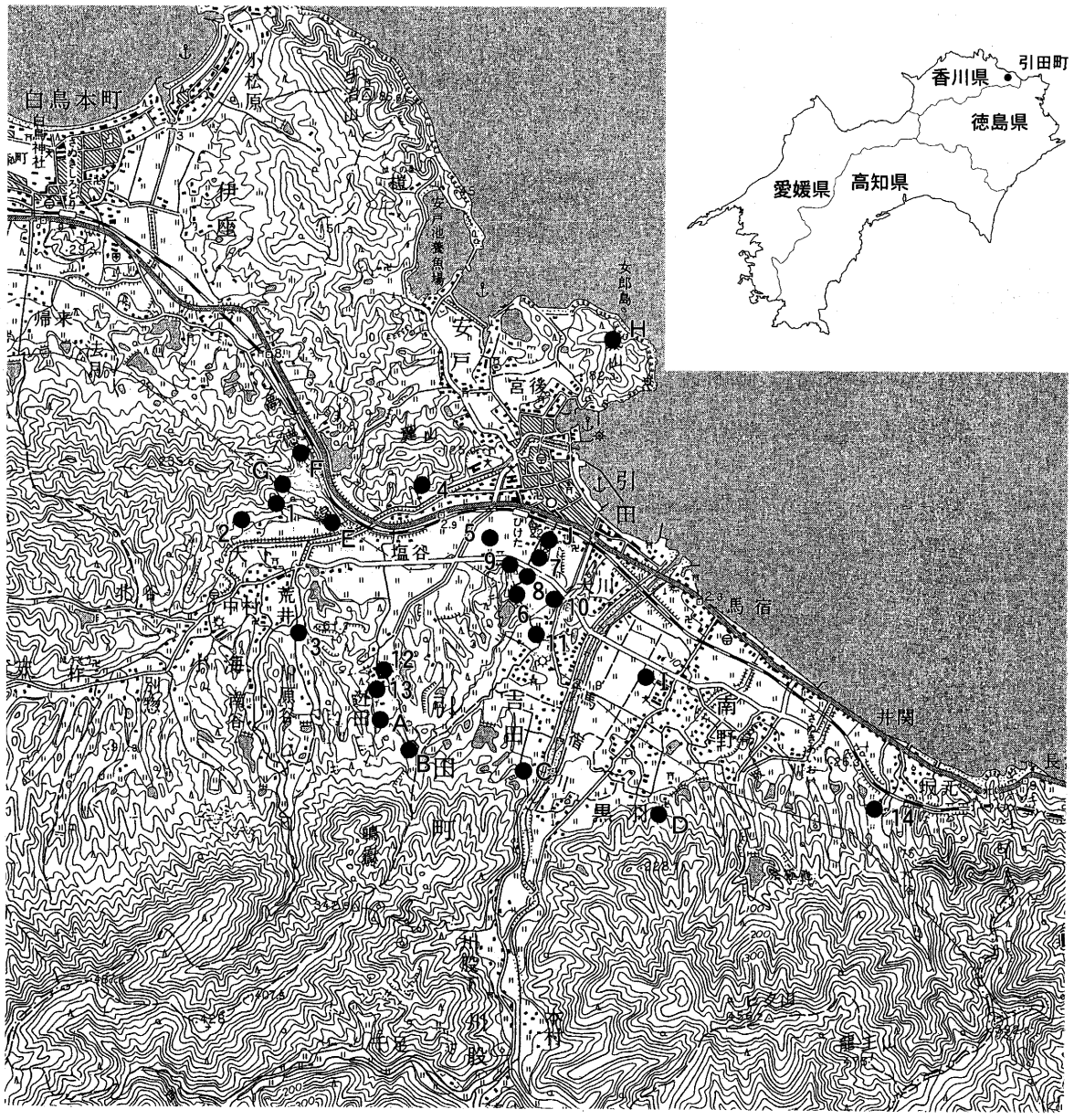
この時期に属する遺構、遺物は確認されていない。

縄文時代

庵の谷遺跡で後期の土器片とこれに伴うと考えられるサヌカイト製石鏃が出土しているが、遺構は検出されていない。鹿庭遺跡でも中世包含層からの出土遺物に縄文時代前期に比定される鍬形鏃が見られる。表採遺物として天王谷で黒曜石製石鏃がある。

弥生時代

弥生時代になると確認された遺構、遺物が増加する。庵の谷遺跡では弥生時代中期後半の竪穴住居跡群からなる集落を検出している。遺物は石鏃を中心として多量のサヌカイト製石器がある。石器未製品、小型石器製作用の石核と考えられる楔形石器、敲き石なども多く含まれ、集落内で石器製作が行われたことが窺える。中期後半の土器は迯田谷川下池遺跡でも出土している。鹿庭遺跡ではサヌカイトの大形剥片を集積した土坑が検出されている。また後期前半の土器、サヌカイト製有茎式石鏃が出土している。



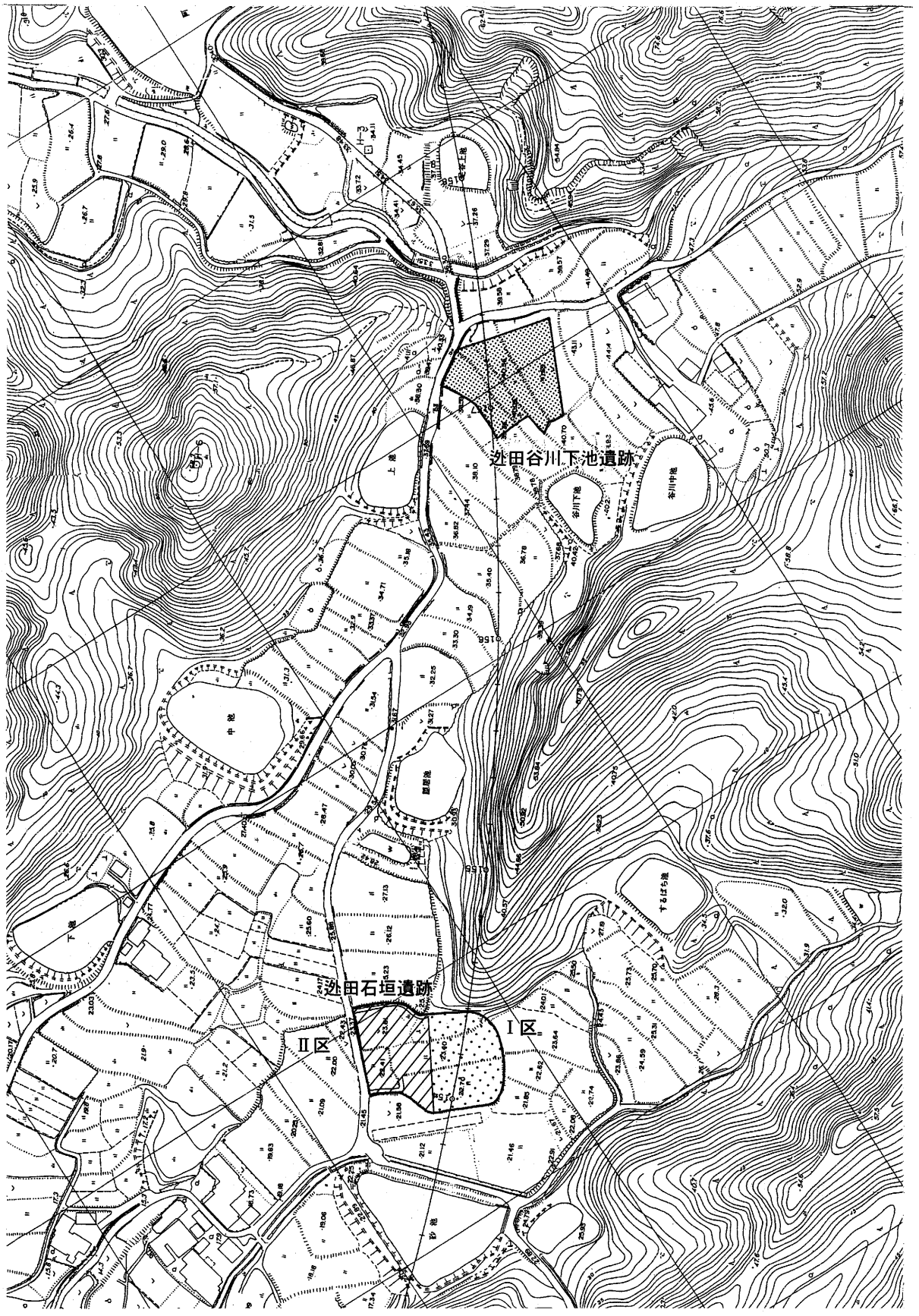
A 迯田石垣遺跡
B 迯田谷川下池遺跡
C 鹿庭遺跡
D 庵の谷遺跡
E 川北遺跡
F 天王谷遺跡
G 川北1号墳
H 引田城跡
I 馬宿畑方遺跡
J 沖田水田遺跡

1 川北
2 千葬古墳
3 川原谷
4 塩谷
5 沖代赤坂
6 沖代丸山
7 沖代蟹安
8 栄町遺跡
9 外源蔵
10 刈畑

11 内源蔵
12 天王谷
13 迯田
14 坂元大谷

※掲載遺跡は参考文献の庵の谷遺跡であげているものと同じ。

第２図　引田町の位置及び周辺の遺跡(1/25000)



第３図　辻田石垣、辻田谷川下池遺跡　位置図(1/2500)

沖代水田遺跡では後期後半の遺物が出土している。表採遺物として沖代蟹安で石臼、石斧片、土器片がある。

古墳時代

古墳として川北1号墳がある。石室現存長8､6mを測る横穴式石室である。出土した須恵器より6世紀末から7世紀前葉に位置づけられている。同時期の集落、水田などは未検出であるが、生産基盤として古墳の南側に広がる小海平野が想定されている。周囲には数カ所の古墳があったとされるが、現存していない。また、南西に位置する千葬古墳についても内容は不明である。他の遺構として川北1号墳への登り口で7世紀後半の須恵器甕､杯蓋が出土した井戸状遺構がある。また詳細な時期は不明であるが、沖代水田遺跡では奈良時代の須恵器を含む砂層に覆われた水田跡が検出されている。

古代

小海平野に位置する川北遺跡で奈良時代の掘立柱建物群からなる集落が検出されている。建物には掘り方が1m以上、面積が40㎡に近い大型のものを含む。また建物の桁、梁の柱列を相互に同一線上に乗せる企画的な配置も見られる。なお、建物の主軸方向には遺跡南部に広がる条里型地割と一致するものも含まれる。その施工時期は不明であるが、小海平野の開発を考える上で川北1号墳、川北遺跡の建物群と共に注目される。町内では沖代水田遺跡付近でも条里型地割が認められる。

遺物は馬宿畑方遺跡では奈良時代～平安時代初期の製塩土器が出土している。なお、古代の官道である南海道は四国北部を通っていたが､徳島県板野から大坂峠を越えて引田もルートに含まれていた。「延喜式」には引田に駅が置かれていたことが記されているが、その所在地については不明である。

中世

迯田石垣、迯田谷川下池、鹿庭、天王谷、川北、庵の谷遺跡で掘立柱建物を中心とした集落が検出されている。平野に位置する川北遺跡以外は丘陵緩斜面に形成された集落である。迯田石垣遺跡では集落端部で土坑墓が確認されている。天王谷遺跡では2基の瓦窯が検出されている。この瓦窯で製作された軒平瓦、平瓦が2点迯田石垣遺跡で出土している。ただし、迯田石垣遺跡は一般集落であり、瓦の供給先となる寺院などは見られない。川原谷では備前焼の焼納骨壷が見つかっている。

近世

戦国時代から江戸時代初期まで用いられた引田城がある。現在も石垣が残存している。天王谷遺跡では19世紀代の神社跡と考えられる丘陵のカット面で多量の瓦、銅製品が出土している。

(註1)『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報　平成10年度』「川北遺跡」(財) 香川県埋蔵文化財調査センター他　1999

遺跡地図関連参考文献

『引田町史　自然・原始～近世・文化財』 引田町　1995

『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第三十六冊　金比羅山遺跡　塔の山南遺跡　庵の谷遺跡』2000（財）香川県埋蔵文化財調査センター他
『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報　平成10年度』1999（財）香川県埋蔵文化財調査センター他
『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報　平成11年度』2000（財）香川県埋蔵文化財調査センター他

第2節　予備調査（第4図）

引田町迯田地区における予備調査の結果、迯田石垣、迯田谷川下池の二遺跡について本調査が行われることになった。ここでは両遺跡の予備調査についてまとめて結果を報告する。予備調査は平成10年4月13日～5月19日に実施した。

地区の西部にある迯田石垣遺跡付近の地形は大きく遺跡の背後にある丘陵と西側にある丘陵に挟まれた谷地形（4、5、18トレンチ）、遺跡の北側にある大きな谷地形（1、2、3、8、9トレンチ）、丘陵先端部（6、7トレンチ）に区分される。遺構、遺物は6、7トレンチで多く確認され、集落跡の存在が想定されたためこの部分を含む丘陵先端部の緩斜面が調査対象地となった。

地区の東部にある迯田谷川下池遺跡付近の地形は2つの丘陵に挟まれた大きな谷地形（10、11トレンチ）、東側にある丘陵斜面（19～22トレンチ）、この丘陵から西に延びる緩斜面（12～16トレンチ）に大別される。本調査の対象地については遺構、遺物が確認できた丘陵緩斜面を本調査の対象とした。ただし、西半部でも遺構は検出された（12トレンチ）ものの、きわめて希薄であるため、東半部（14～16トレンチ）のみを本調査の対象とした。谷地形では出土遺物があるが、ごく少量にとどまり、集落跡からの転落が推測されたため対象地から除外した。

第3節　調査の方法

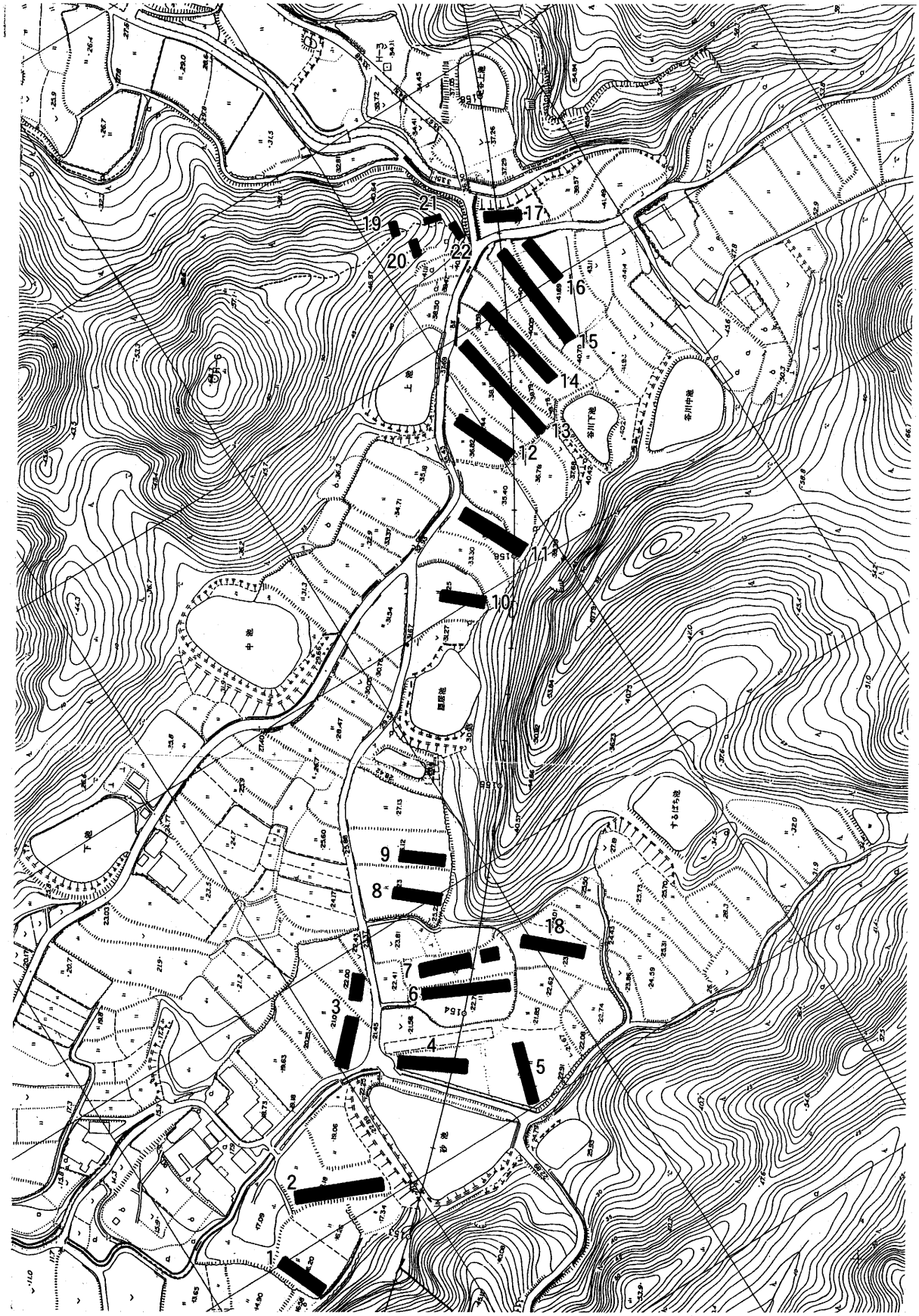
調査区を第3図のようにⅠ、Ⅱ区と設定した。調査時の遺構番号は調査区ごとに1から始まる連番を使用しており、Ⅰ区ＳＫ01、Ⅱ区ＳＫ01というように遺構名を付けている。当報告でもこれを使用している。遺構平面図は主に航空測量により作成し、一部の平面図と断面図は全て手書きで作成した。

第4節　調査の成果

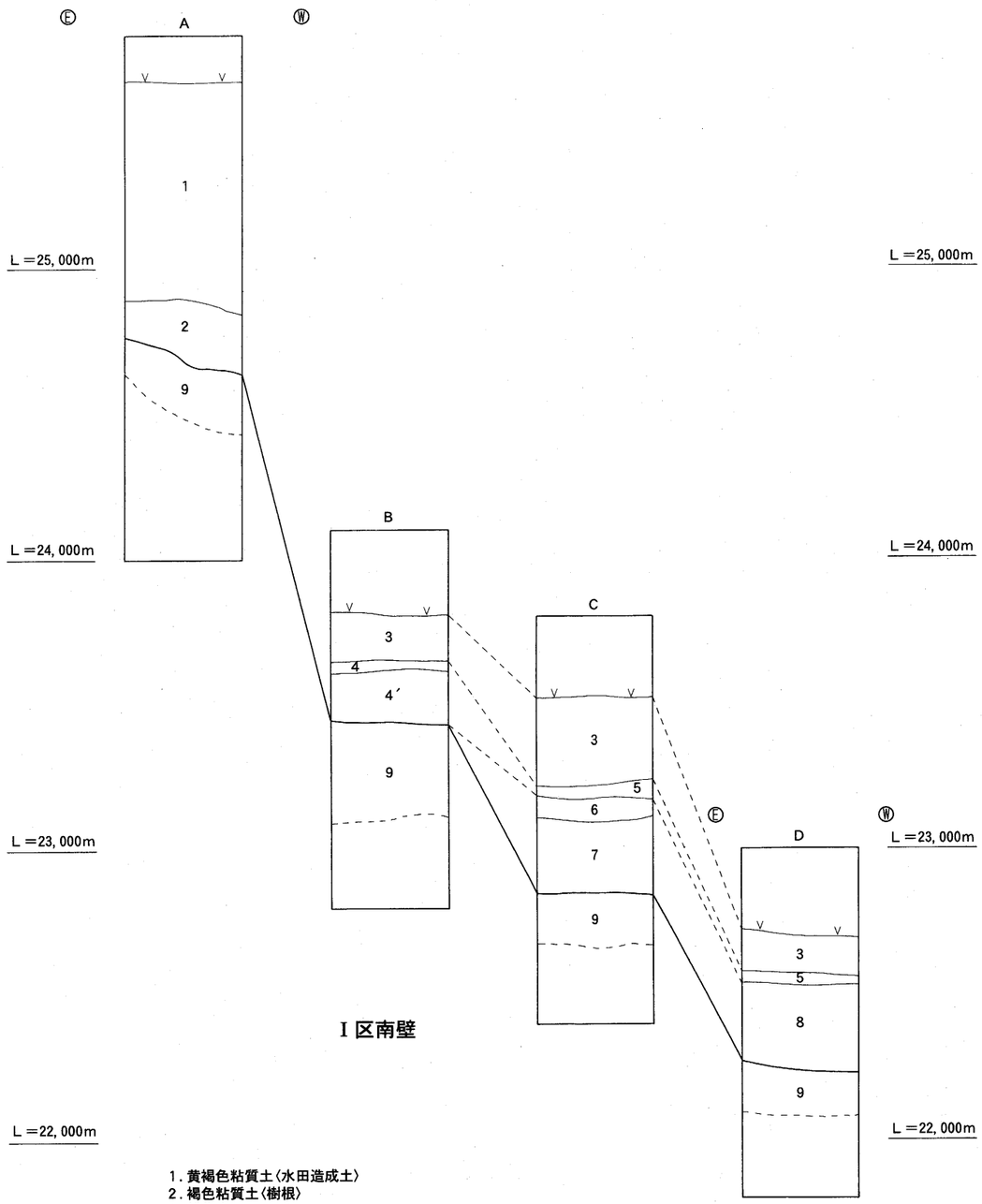
1．土層序（第5、6図）

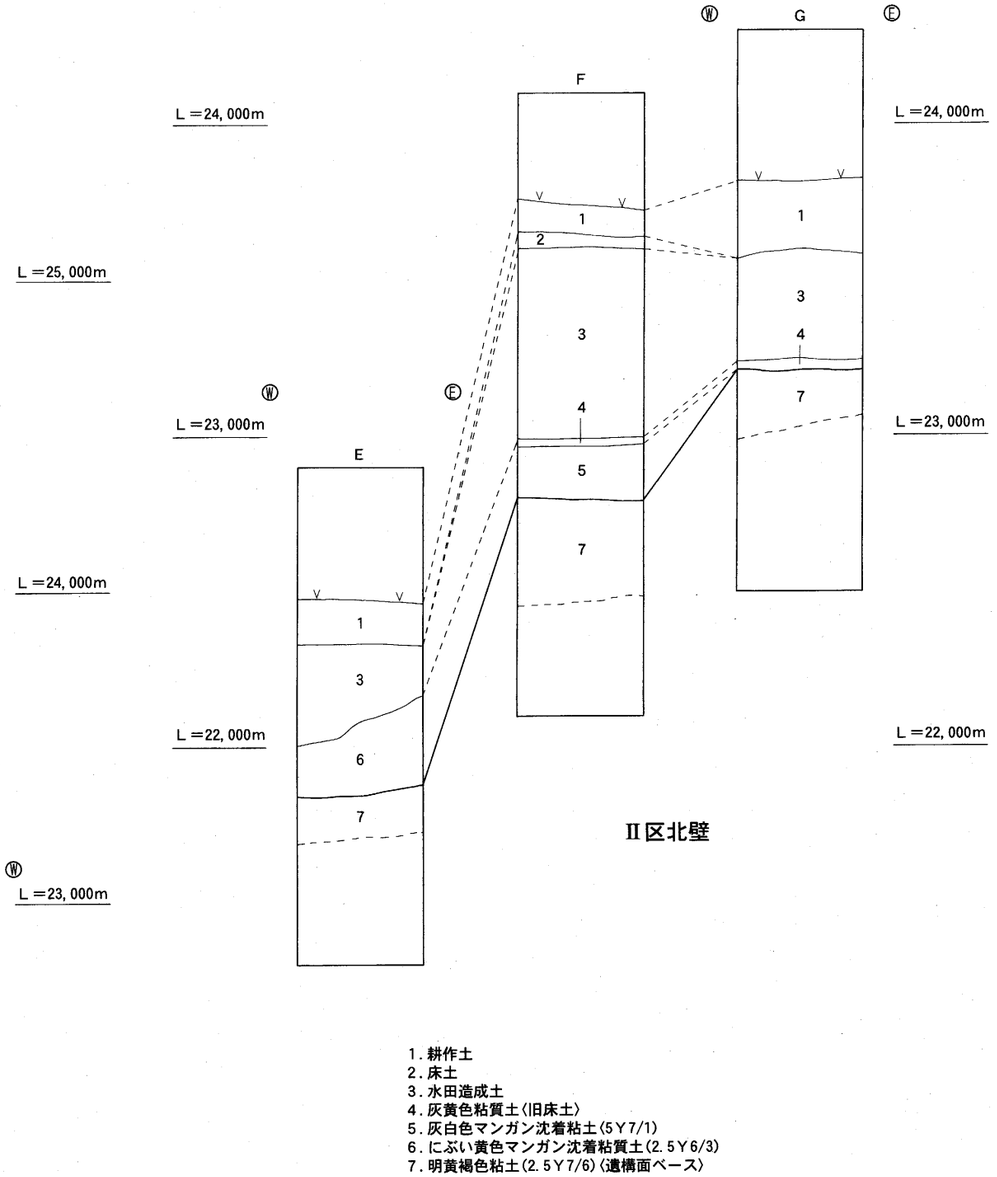
土層柱状図の作成位置は付図に表記している。

Ⅰ区は調査前には東西方向3段の階段状の耕地となっていた。調査区西部から中央部の基本層序



第４図　迯田石垣、迯田谷川下池遺跡　予備調査トレンチ配置図(1/2000)

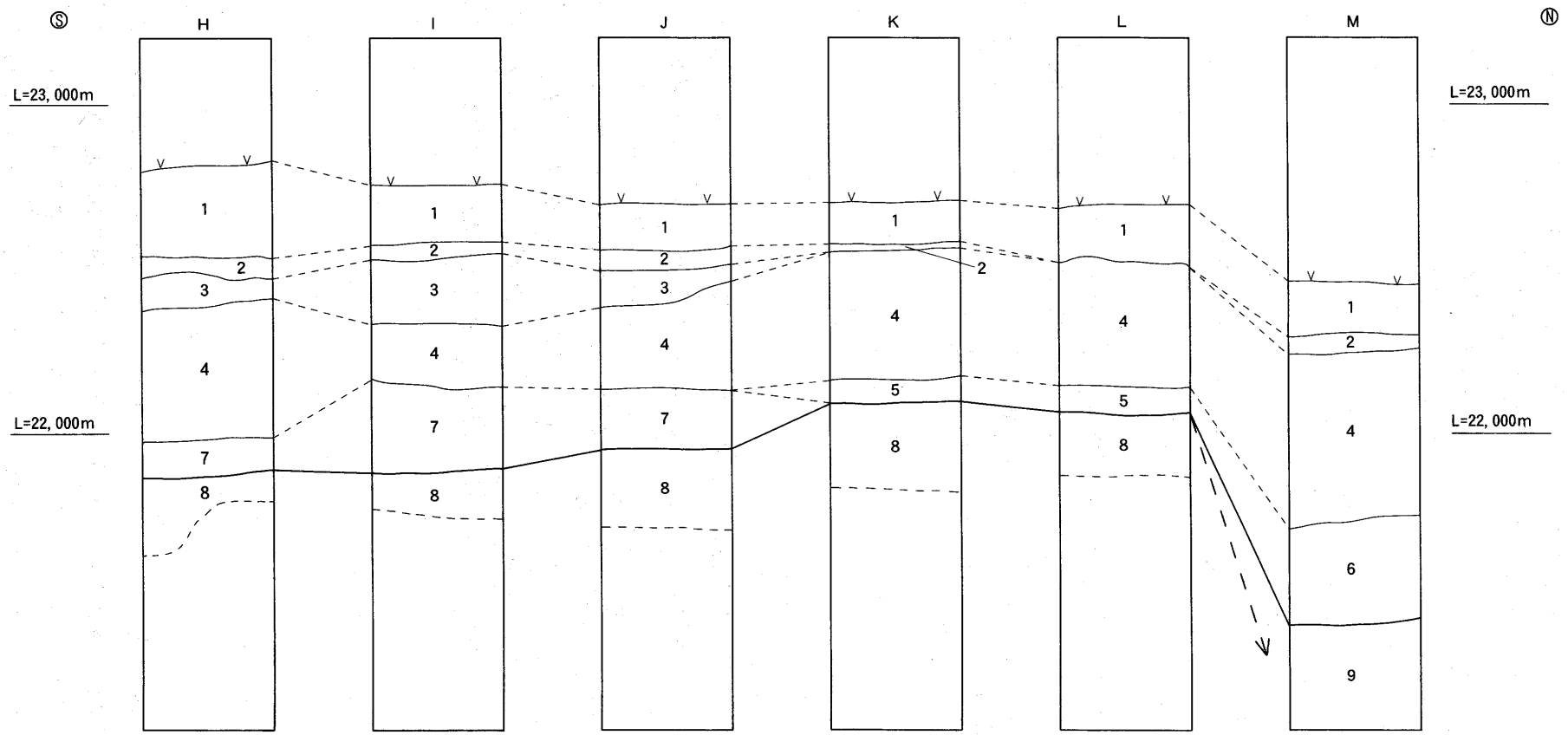




1. 耕作土
2. 床土
3. 水田造成土
4. 灰黄色粘質土〈旧床土〉
5. 灰白色マンガン沈着粘土〈5Y7/1〉
6. にぶい黄色マンガン沈着粘質土(2.5Y6/3)
7. 明黄褐色粘土(2.5Y7/6)〈遺構面ベース〉

1. 黄褐色粘質土〈水田造成土〉
2. 褐色粘質土〈樹根〉
3. 耕作土
4. 黄灰色粘土4′はマンガンが沈着しない。〈水田造成土〉
5. 床土
6. 灰黄褐色粘土(10YR5/2)〈包含層〉
7. にぶい黄橙色粘土(10YR6/5)〈包含層〉
8. にぶい黄褐色粘土(10YR4/3)〈西壁7層と似るが、灰味を帯びる〉
9. 黄色粘土(2.5YR8/6)〈遺構面ベース〉

第5図　土層柱状図



Ⅰ、Ⅱ区西壁

1. 耕作土
2. 床土
3. 褐灰色粘土(10YR5/1)
4. 灰黄褐色粘土(10YR5/2)
5. 赤褐色粘土〈旧水田床土〉
6. 灰色マンガン沈着粘土(5Y4/1)〈旧水田造成土？〉
7. にぶい黄褐色粘土(10YR4/3)〈包含層〉
8. 黄色粘土(2.5Y8/6)〈遺構面ベース〉
9. 褐色微砂混粘質土(10YR4/4)〈SR01〉

第6図　土層柱状図

（第５図）は上から耕作土、床土、褐灰色粘土、灰黄褐色粘土（造成土？）があり、２層の遺物包含層（にぶい黄褐色粘土、にぶい黄橙色粘土）を経て、地山である黄色粘土に至る。包含層からは中世土器、軒平瓦などが出土しており、層厚は最大40cmを測る。ただし、階段状に耕地化されていたため旧地形の奥方向では包含層が残存せず、耕作土直下で地山となる。耕地の段差奥際では地山も段状に削平を受けている。なお、調査区東端部では東にある丘陵斜面が調査区内まで10ｍほど延びており、きつい傾斜面となっている。この上には耕作地造成土が厚く堆積していた。

Ⅱ区はⅠ区と同様に東西方向３段、南北方向２段の階段状の耕地となっていた。南東部にはⅠ区から続く丘陵斜面があるが、５ｍほどで途切れ、緩斜面になる。基本層序（第５、６図）は上から耕作土、床土、造成土があり、地山ないし旧河道上面に至る。北端部では灰白色系砂混じり粘質土が地山直上に堆積しており、遺跡北部の谷地形に堆積する土層（予備調査　７、８トレンチの灰色系粘質土、シルトに相当）であると考えられる。

Ⅰ区で見られた包含層はⅡ区では南西部でわずかに残存するのみであり、中央から南部にかけては地山も削平を受けている。Ⅱ区ＳＫ01～04の北部、ＳＫ05、06の西部ではⅠ区同様地山が段状にカットされている。Ⅰ、Ⅱ区を通した地山層上面の標高は土層柱状図作成ポイントのＡ地点で23､7ｍ、Ⅱ区北西端で21､7ｍであり、緩斜面内で最大２ｍの比高差を持って検出された。

２．遺構、遺物

調査の概要

本遺跡においては古墳時代の旧流路、中世の掘立柱建物19棟、土坑13基、性格不明遺構（ため池状遺構？）１基、墓１基、柱穴約600基を検出した。Ⅰ区では丘陵斜面とその直近部に当たる調査区東部以外で掘立柱建物、柱穴、土坑が密集して検出された。一方、Ⅱ区では遺構は希薄であり、北部で旧流路、南部で土坑、柱穴が少数検出されたのみである。旧流路を除く遺構の埋土には灰色系、褐色系、黒褐色系粘土が見られるが、いずれの埋土からも中世土器が出土しており、細かい時期差は見られない。また遺跡全体の出土遺物はコンテナ６箱あるが、中世に属さないものは弥生、古墳、古代の土器と石器がごく少量である。12世紀に遡るものもごく少量あるが、遺構、遺物の時期は概ね13世紀から16世紀に限定される。

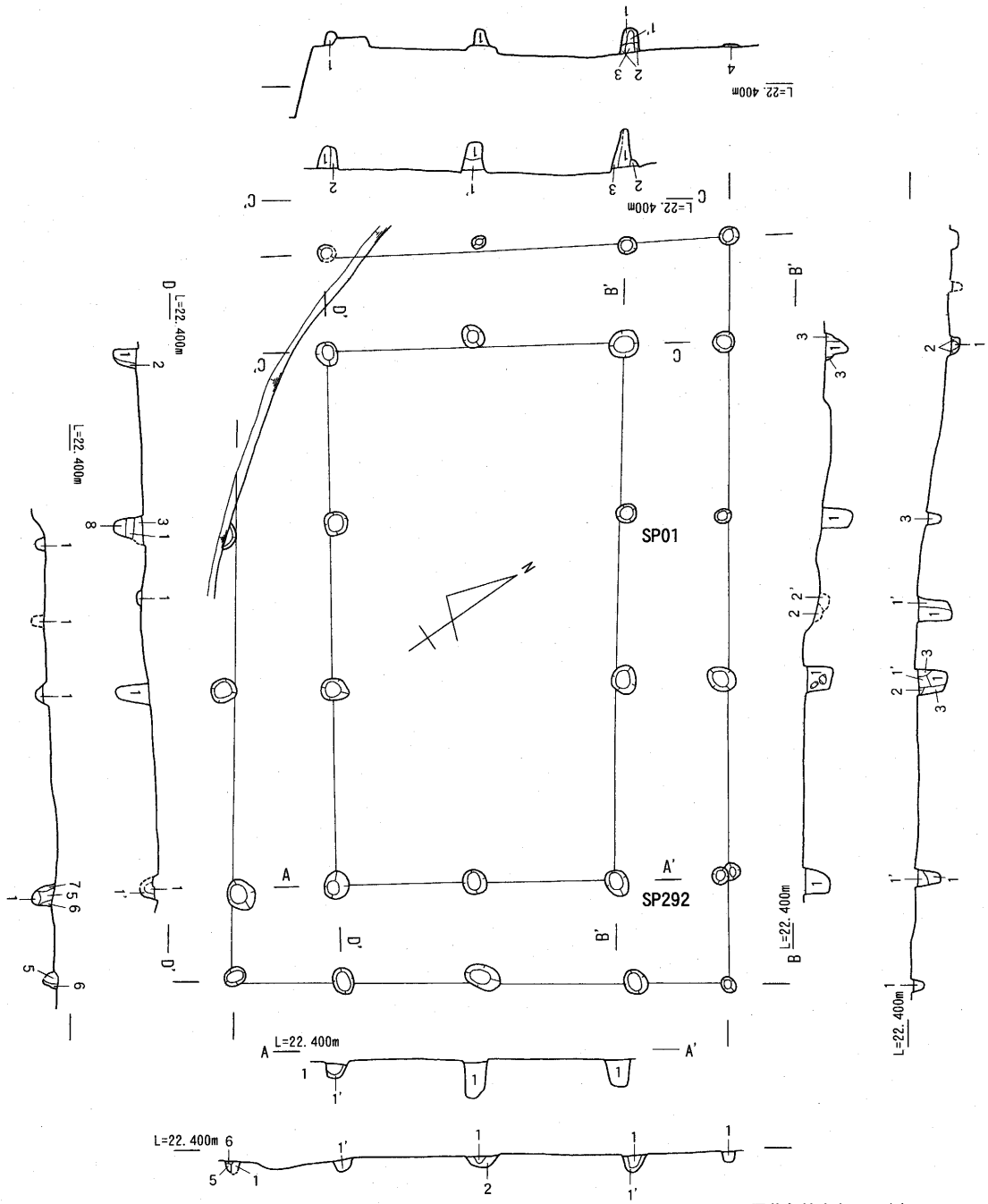
Ⅰ区の調査

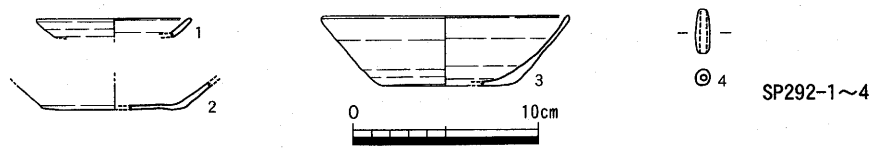
中世の遺構、遺物

(1) 建物

ＳＢ01（第７図）

調査区の南西隅で検出した四面庇の掘立柱建物である。南西隅の１穴が調査区外に延び、ＳＢ07と重複する。ＳＰ01はＳＫ05の床面で検出され、ＳＫ05→ＳＢ01という前後関係が想定できる。規模は梁間２間×桁行３間（4､2×7､8ｍ）である。主軸方向はＮ－35、5°－Ｅである。柱穴規模は母屋部分と庇部分で大きな差はないが、深さは母屋部分が25～50cm、庇部分が10～30cmのものが多く、





第７図　Ⅰ区ＳＢ01平・断面図(1/80), 出土遺物(1/4)

底部分の方が浅い。出土遺物には土師器小皿（1)、杯（2、3)、管状土錘（4）がある。2は器壁が薄く、体部の外傾度が強い。3は底部をヘラ切りする。1、3は13世紀後半～14世紀頃の所産であるが、2は16世紀代に下る。2より建物の時期は16世紀代と考えられる

ＳＢ01について平成11年度概報（註1）において以下のように捉えていた。

① ＳＢ01東半部の柱穴により構成される建物（概報でのＳＢ01。本報告ＳＢ01をＳＢ02としていた。）があり、両者はともに四面庇建物である。

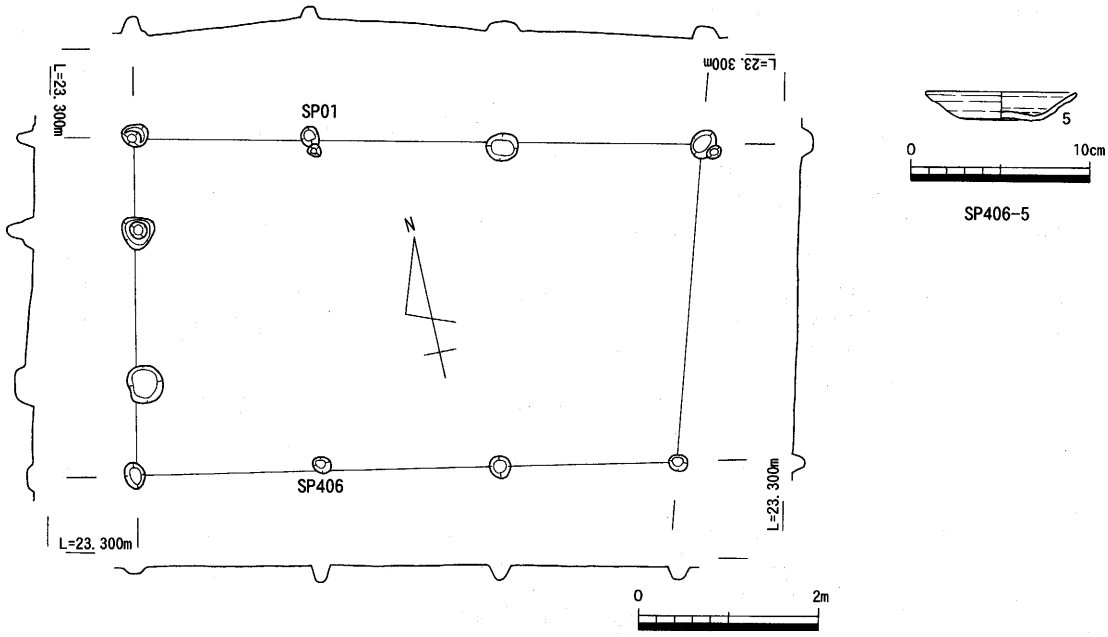
② 順序は不明だが、概報ＳＢ01、02は建て替えによる継続した建物である。

③ 機能としては付近の包含層、ＳＸ01からの瓦の出土があること、四面庇であるのにごく小規模であることから仏教関係の建物である。

だが、本報告での整理作業の結果、①についてはＳＢ01には別の建物（ＳＢ07）が重複しており、概報ＳＢ01は復元できないと判断した。②はこの結果、消滅した。③については瓦が14世紀後半に位置づけられ、ＳＢ01とは時期差があることが判明した。またＳＢ01の規模、構造で四面庇をもつ中世に属する建物の類例として県内では坂出市川津中塚遺跡（4基）（註2)、高松市空港跡地遺跡Ｊ区（3基）（註3）などがあるが、これらを宗教施設としうる根拠は見いだせなかった。よって概報段階での性格付けは現状で積極的に支持できない。

ＳＢ02（第8図）

調査区の北東部で検出した側柱建物である。北東部の2穴がⅡ区で確認された。またＳＰ01はⅡ区ＳＫ06を切る。規模は梁間3間×桁行3間（3､8ｍ×6､2ｍ）である。主軸方向はＥ－11、0°－Ｎである。柱穴の平面形はほぼ円形で、深さ約15～30cmを測る。出土遺物には土師質土器小皿(5)がある。体部の外傾度が強く、薄作りであり、16世紀代のものと考えられる。5よりこの建物の時期は16世紀代と考えられる。これはⅡ区ＳＫ06が14世紀に比定されることと矛盾しない。



第8図　Ⅰ区ＳＢ02平・断面図(1/80)，出土遺物(1/4)

ＳＢ 03（第 9 図）

調査区の西端部で検出した総柱建物である。南側梁行の中央穴を欠く。ＳＢ 04、06、12、15、16 と重複する。ＳＰ 01 がＳＢ 04 の柱穴に切られ、ＳＰ 02 がＳＢ 06 の柱穴を切り、ＳＰ 03 がＳＫ 02 の床面で検出されたのでＳＢ 06 →ＳＢ 03 →ＳＢ 04、ＳＫ 02 という前後関係を想定できる。またＳＰ 04 はＳＢ 15 を構成する柱穴ともなっている。規模は梁間 2 間×桁行 4 間（4､2 m×7､9 m）である。柱間距離は庇も含めた梁間、桁行ともに約 2 mに揃えられている。主軸方向はＮ－ 11、0°－Ｅである。柱穴の平面形は円、楕円形で、深さは 20 ～ 60cmを測る。出土遺物には青磁椀（6、7)、東播系の須恵器甕（8）がある。6、7 は口縁端部が小さく外反する。上田編年（註 4）のＤ類に該当し、14 世紀後葉～ 15 世紀前半に位置づけられる。8 は平行叩きを綾杉状に施す。6、7 から建物の時期は 14 世紀後葉～ 15 世紀前半と考えられる。

ＳＢ 04（第 10 図）

調査区北西部で検出した 1 面庇建物である。庇は北側に伴う。ＳＢ 03、06、13、19 と重複する。ＳＰ 02、03 はＳＢ 13 の柱穴に切られ、ＳＰ 05 はＳＢ 03 の柱穴を切るためＳＢ 03 →ＳＢ 04 →ＳＢ 13 という前後関係が想定される。またＳＰ 01、04 はＳＢ 06 を構成する柱穴ともなっている。規模は梁間 1 間×桁行 3 間（3､5 m×7､7 m）である。主軸方向はＥ－ 27、5°－Ｎである。柱穴の平面形は円形であり、深さは 10 ～ 45cmを測る。出土遺物は図化していないが矮小な鍔をもつ土師器土釜の小片などがある。土釜より建物の時期は 16 世紀代と考えられる。これは 14 世紀後葉～ 15 世紀前半のＳＢ 03 を切ることと矛盾しない。

ＳＢ 05（第 11 図）

調査区南端部で検出した側柱建物である。規模は梁間 1 間×桁行 2 間（1､9 m×4 m）である。主軸方向はＮ－ 11､5°－Ｅである。柱穴の平面形はほぼ円形であり、深さは 10 ～ 30cmを測る。出土遺物はないが、埋土より中世と考えられる。

ＳＢ 06（第 12 図）

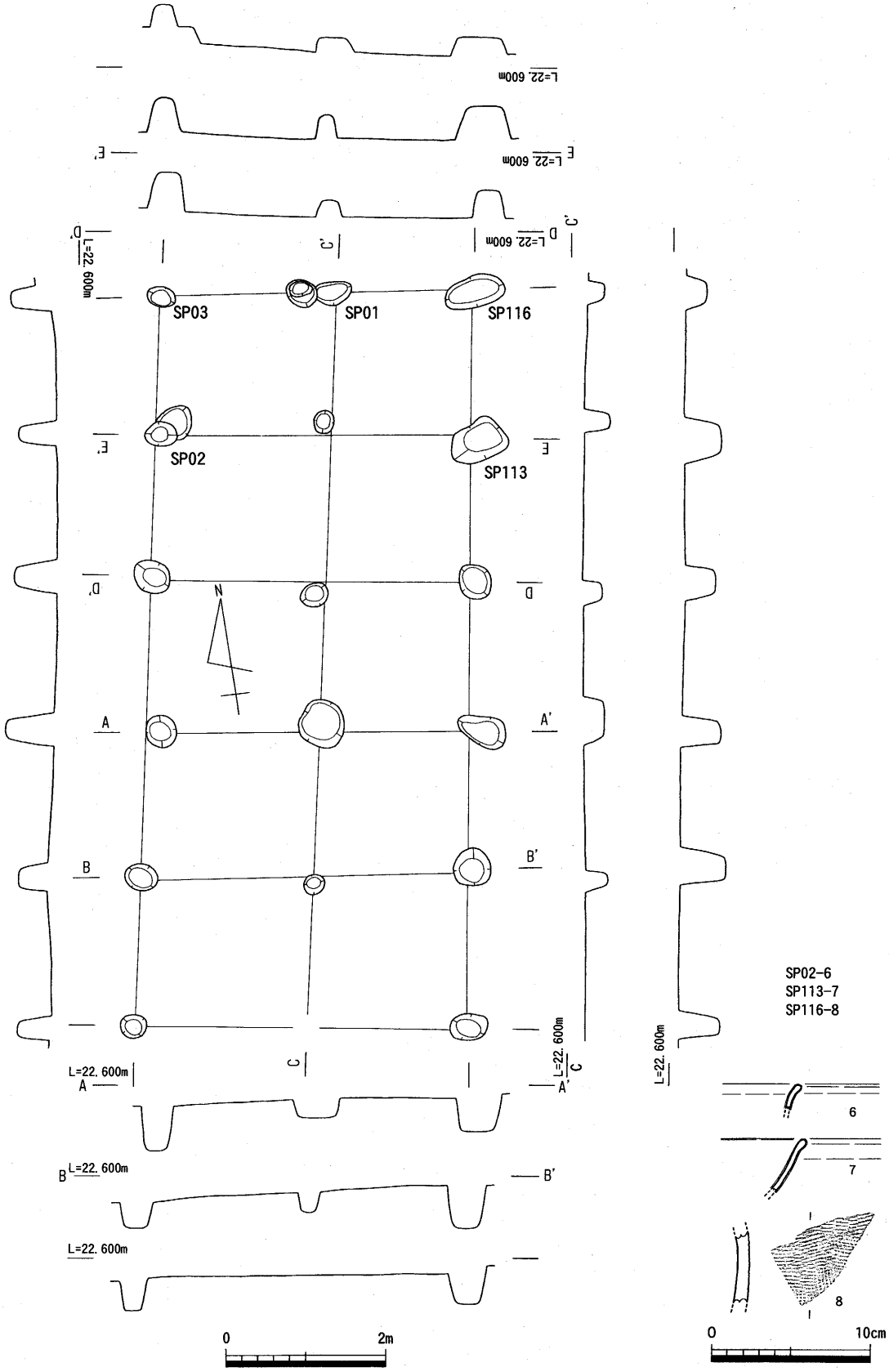
調査区西部で検出した掘立柱建物である。ＳＢ 03、04、13、16、19 と重複する。ＳＰ 01 はＳＫ 02 の床面で検出された。規模は梁間 2 間×4 間（5 m×9､8 m）である。主軸方向はＥ－ 13、5°－Ｎである。柱穴の平面形は円形であり、深さ 10 ～ 55cmを測る。内部にある 2 つの柱穴は規模が小さく、浅いため束柱であると考えられる。出土遺物には土師器杯（9）がある。器高が高く、箱形の器形を呈する。13 世紀後半～ 14 世紀代と考えられる。9 より建物の時期は 13 世紀後半～ 14 世紀代と考えられる。

ＳＢ 07（第 13 図）

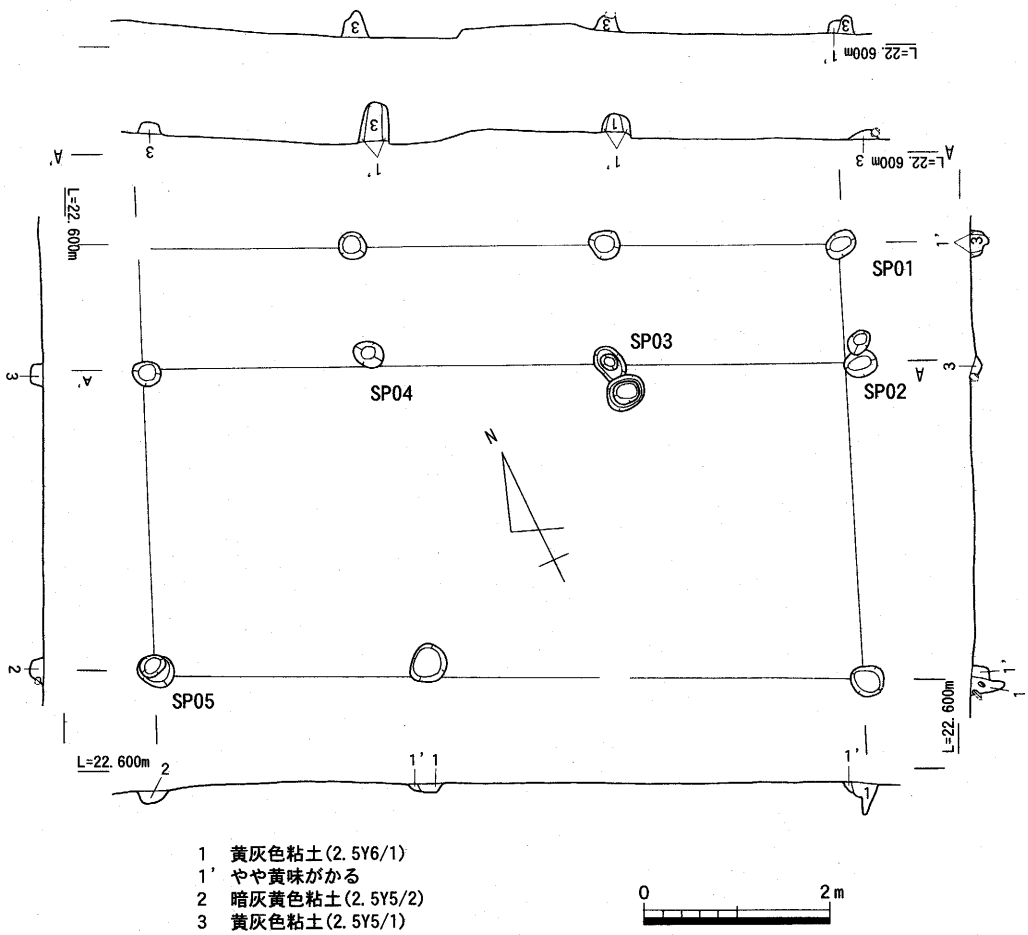
調査区南西部で検出した側柱建物である。ＳＢ 01 と重複する。規模は梁間 2 間×桁行 3 間（3､9 m×5､1 m）である。主軸方向はＮ－ 20、5°－Ｅである。柱穴の平面形は円形であり、深さ 15 ～ 45 ｃｍを測る。出土遺物には土師器杯 (10) がある。底部をヘラ切りし､13 世紀後半～ 14 世紀代と考えられる。小片であるが、10 より建物の時期は 13 世紀後半～ 14 世紀代と考えられる。

ＳＢ 08（第 14 図）

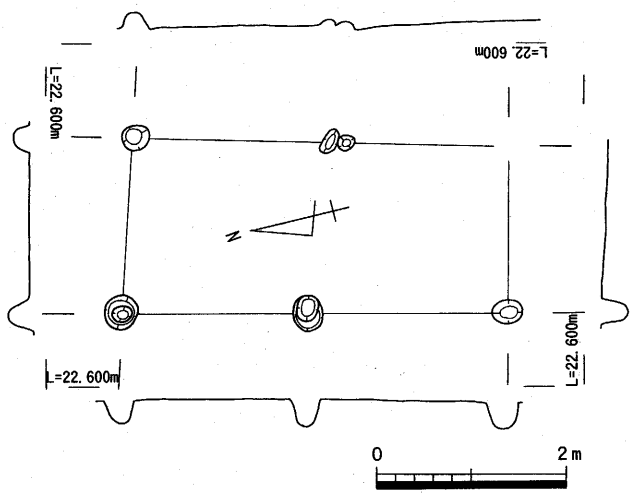
調査区南西部で検出した総柱建物である。ＳＢ 10、12、15 と重複する。ＳＰ 01 はＳＢ 10、11 を構成する柱穴ともなっている。規模は 2 間×3 間（3､5 m×5､8 m）である。主軸方向はＮ－ 10、5°－Ｅである。柱穴は円形であり、深さ 15 ～ 50cmを測る。出土遺物には土師器椀（70）がある。逆三角形の低い高台を持つ。13 世紀後半と考えられる。70 より建物の時期は 13 世紀後半と考えられる。



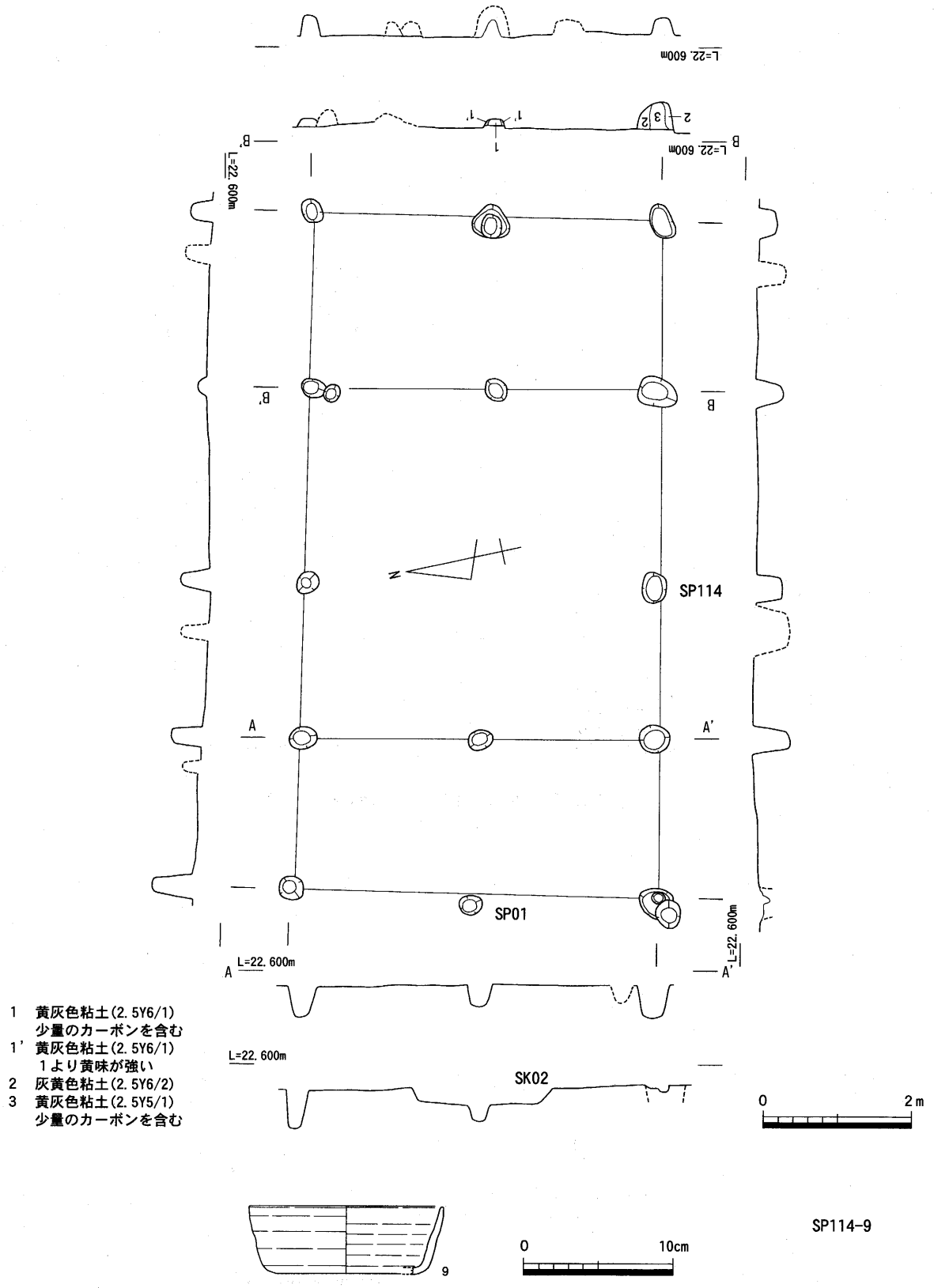
第９図　Ⅰ区ＳＢ03平・断面図(1/80), 出土遺物(1/4)



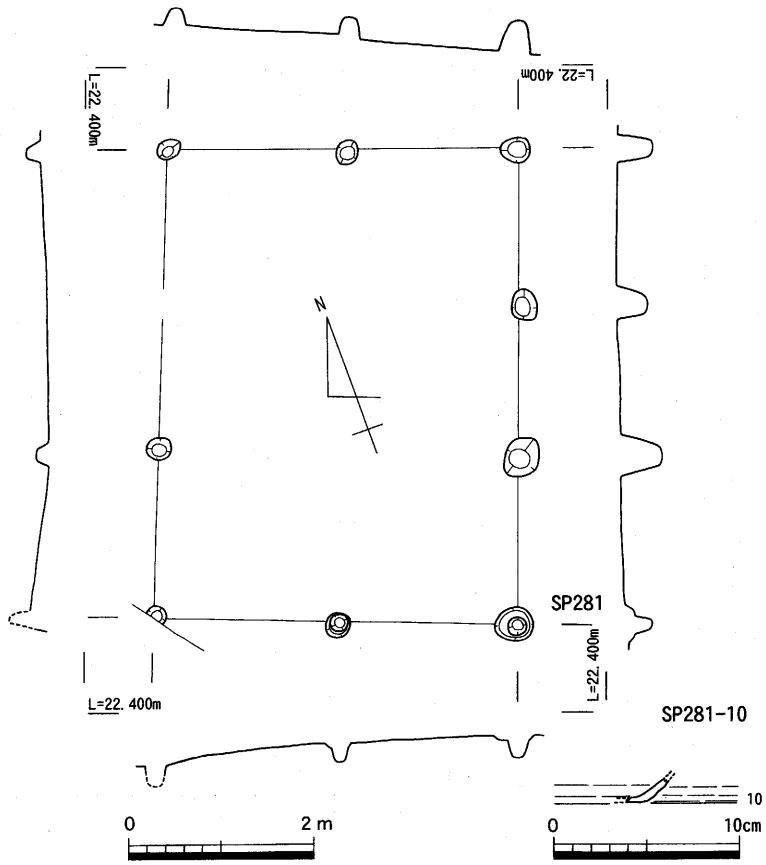
第10図　Ⅰ区ＳＢ04平・断面図(1/80)



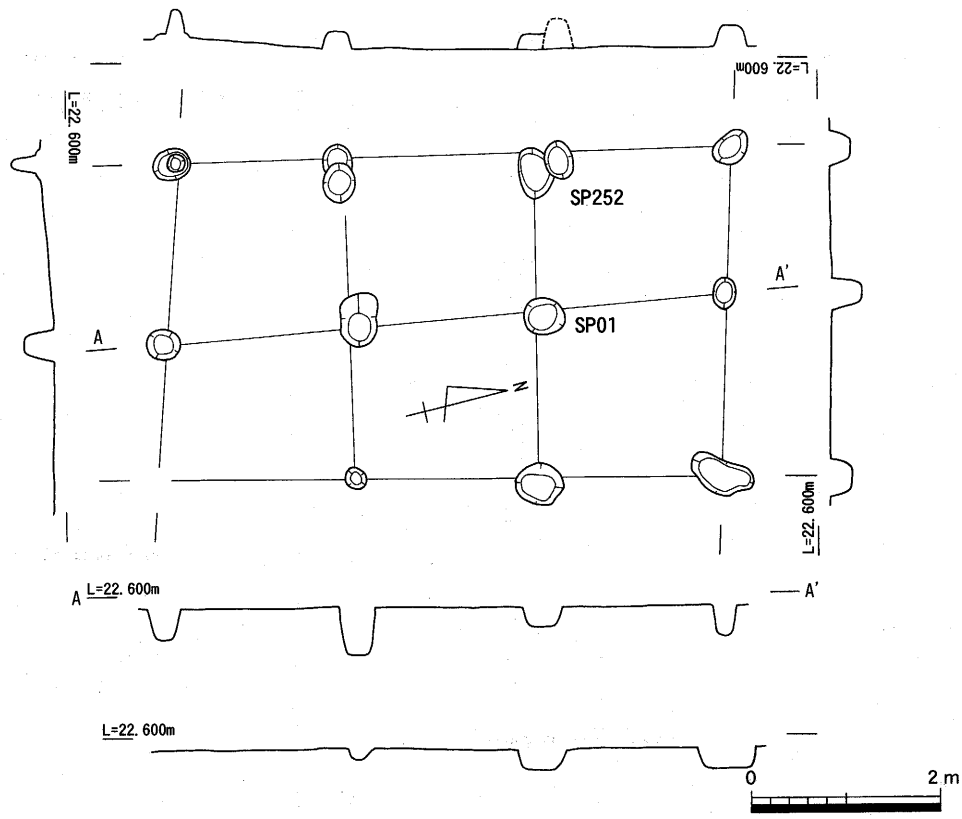
第11図　Ⅰ区ＳＢ05平・断面図(1/80)



第12図　Ⅰ区ＳＢ06平・断面図(1/80)，出土遺物(1/4)



第13図　Ⅰ区ＳＢ07平・断面図(1/80)，出土遺物(1/4)



第14図　Ⅰ区ＳＢ08平・断面図(1/80)

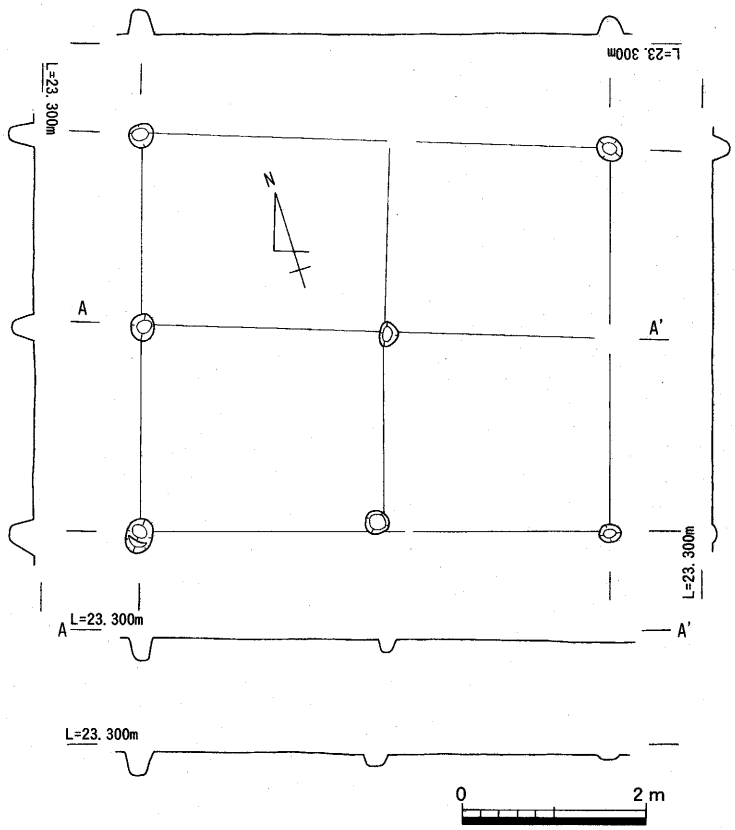
ＳＢ 09（第 15 図）

調査区の北部で検出した総柱建物である。規模は２間×２間（4、3ｍ×5ｍ）である。主軸方向はＥ－10°－Ｎである。柱穴の平面形は円形であり、深さ５～28cmを測る。出土遺物はないが、埋土より建物の時期は中世と考えられる。

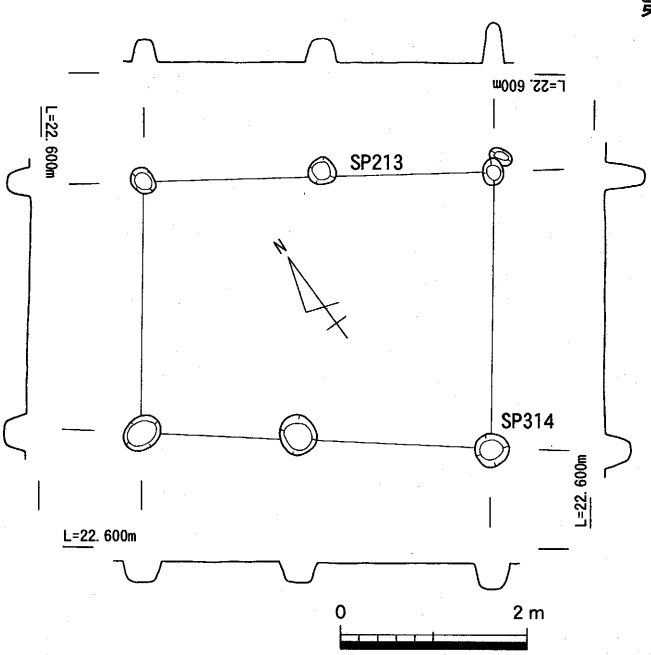
ＳＢ 10（第 16 図）

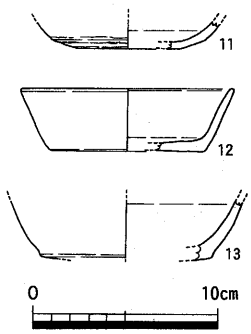
調査区南西部で検出した側柱建物である。ＳＢ 08、ＳＢ 12、ＳＢ 15 と重複する。規模は１×２間（2、9ｍ×3、8ｍ）である。主軸方向はＥ－39°－Ｎである。柱穴の平面形は円形であり、深さ 20 ～ 40cｍを測る。出土遺物には土師器杯（11、12、13）がある。11 は底部と体部の境界が丸みを帯びる。

12、13 は明瞭に屈曲し、直立気味の体部を持つ。出土遺物は 13 世紀後半～ 14 世紀代と考えられるが、ＳＢ 15（15 世紀後半～ 16 世紀前半）を切るため建物の時期は 15 世紀後半以降と考えられる。



第15図　Ⅰ区ＳＢ09平・断面図(1/80)



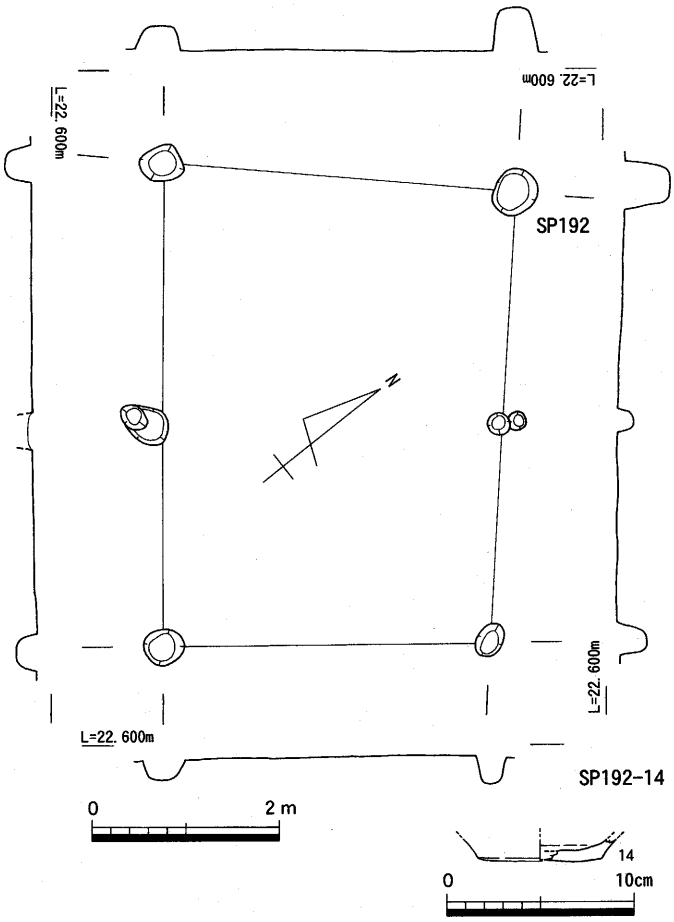


SP213-11・12
SP314-13

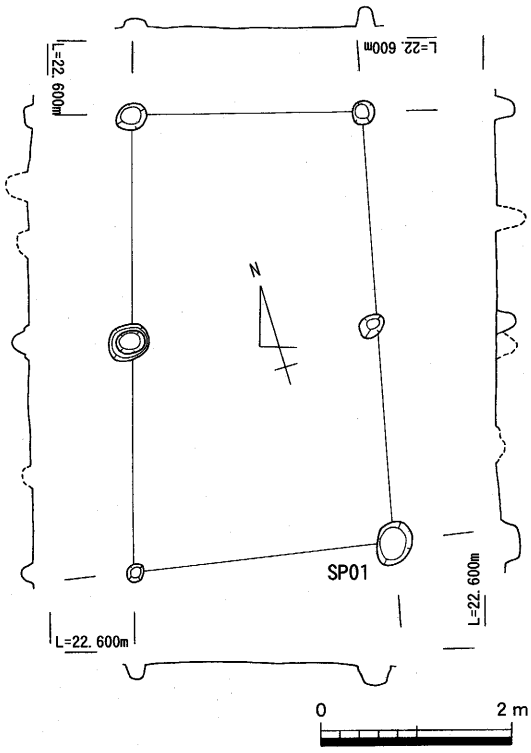
第16図　Ⅰ区ＳＢ10平・断面図(1/80)，出土遺物(1/4)

ＳＢ 11（第 17 図）

調査区南西部で検出した側柱建物である。ＳＢ 03、08、10、12、15、19 と重複する。規模は 1×2 間（3､6 m×5 m）である。柱穴の平面形は円形であり、深さ 20 ～ 40cmを測る。出土遺物には弥生土器（14）がある。甕の底部であり、やや丸みを帯びる。主軸方向はＥ－ 39°－Ｎである。ＳＢ 10 と主軸方向が一致することから時期的に近接する可能性がある。この主軸方向をもつ建物は他にＳＢ 01、04、10、11 の 4 棟しかなく、ＳＢ 01、04、10 は 15 世紀後半以降～ 16 世紀代と限定された時期の所産である。よってＳＢ 11 の時期は 15 世紀後半以降と考えておきたい。



第17図　Ⅰ区ＳＢ11平・断面図(1/80), 出土遺物(1/4)



第18図　Ⅰ区ＳＢ13平・断面図(1/80)

ＳＢ 12（第 19 図）

調査区南西部で検出した側柱建物である。ＳＢ 03、08、10、15 と重複する。規模は 2 間×3 間（4、2 m×6 m）である。主軸方向はＥ－ 10､7°－Ｎである。柱穴の平面形は円形であり、深さ 15 ～ 50 cm を測る。出土遺物には土鍋（15）がある。口縁から頸部外面にかけての屈曲が弱い。小片であるため時期を決定できないが、15 世紀後半～ 16 世紀前半のＳＢ 15 を切るため建物の時期は 15 世紀後半以降と考えられる。

ＳＢ 13（第 18 図）

調査区北西部で検出した側柱建物である。ＳＢ 04、06 と重複する。ＳＰ 01 はＳＢ 19 を構成する柱穴ともなっている。規模は 1 間×2 間（2､6 m×4､7 m）である。主軸方向はＮ－ 14､5°－Ｅである。

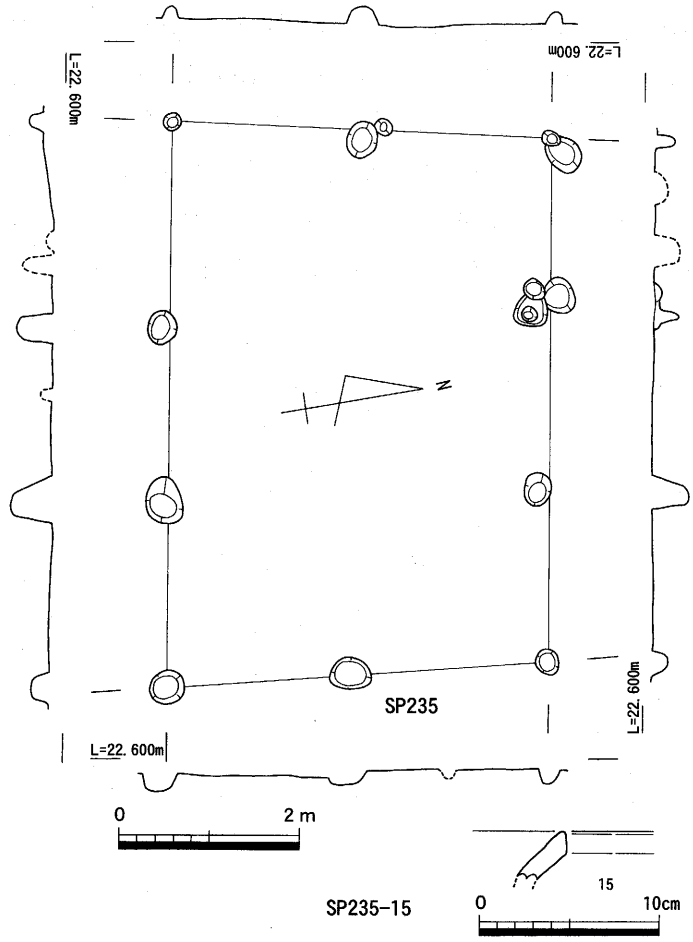
柱穴の平面形は円形であり、深さ10～20cmを測る。出土遺物はないが、埋土より建物の時期は中世と考えられる。

ＳＢ14（第20図）

調査区南部で検出した側柱建物である。規模は1間×2間(2、1ｍ×4ｍ）である。主軸方向はＮ－11°－Ｅである。柱穴の平面形は円形であり、深さ15～40cmを測る。出土遺物には東播系コネ鉢（16）がある。直立気味の細い口縁部をもつ。12世紀代と考えられる。16より建物の時期は12世紀代と考えられる。

ＳＢ15（第22図）

調査区南西部で検出した側柱建物である。ＳＢ03、08、10、12、19と重複する。ＳＰ180がＳＢ12に、ＳＰ01がＳＢ10に切られるので前後関係はＳＢ15→ＳＢ10、12である。規模は1間×3間(2、4ｍ×5、7ｍ）である。主軸方向はＥ－2、2°－Ｎである。柱穴の平面形は円形であり、深さ15～45cmを測る。出土遺物には土師器杯（19、20)、土師質土器土釜（21）がある。21は鍔が口縁部と一体化しており、15世紀後半～16世紀前半と考えられる。21より建物の時期は15世紀後半～16世紀前半と考えられる。



第19図　Ⅰ区ＳＢ12平・断面図(1/80)，出土遺物(1/4)

ＳＢ16（第21図）

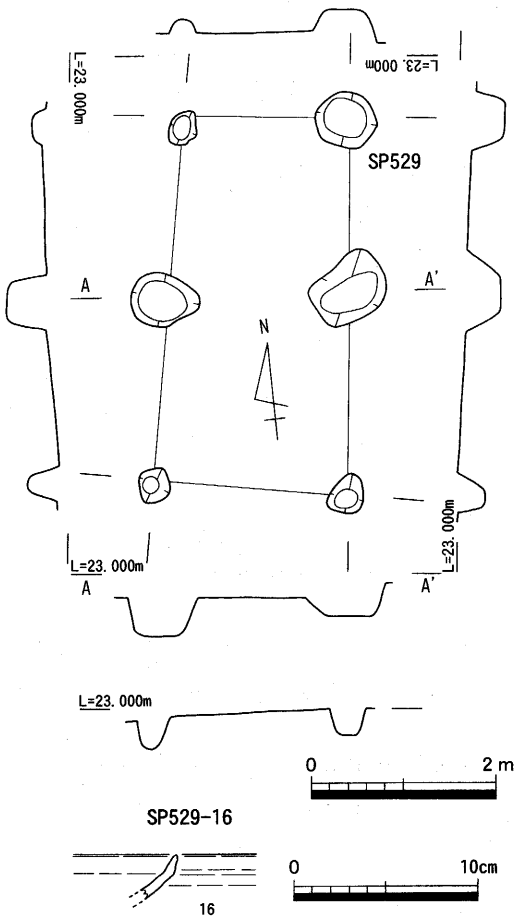
調査区西部で検出した側柱建物である。ＳＢ03、08、10、12、19と重複する。規模は1間×2間（3、1ｍ×5、2ｍ）である。梁間の柱間距離は2、2ｍ，3ｍと北側が短い。主軸方向はＥ－5°－Ｎである。柱穴の平面形はほぼ円形であり、深さ25～55cmを測る。出土遺物には土師質土器土鍋（17)、茶釜（18）がある。17は内面に横ハケを施す。18は口縁端部に丸味を帯びる。16世紀代と考えられる。18より建物の時期は16世紀代と考えられる。

ＳＢ17（第23図）

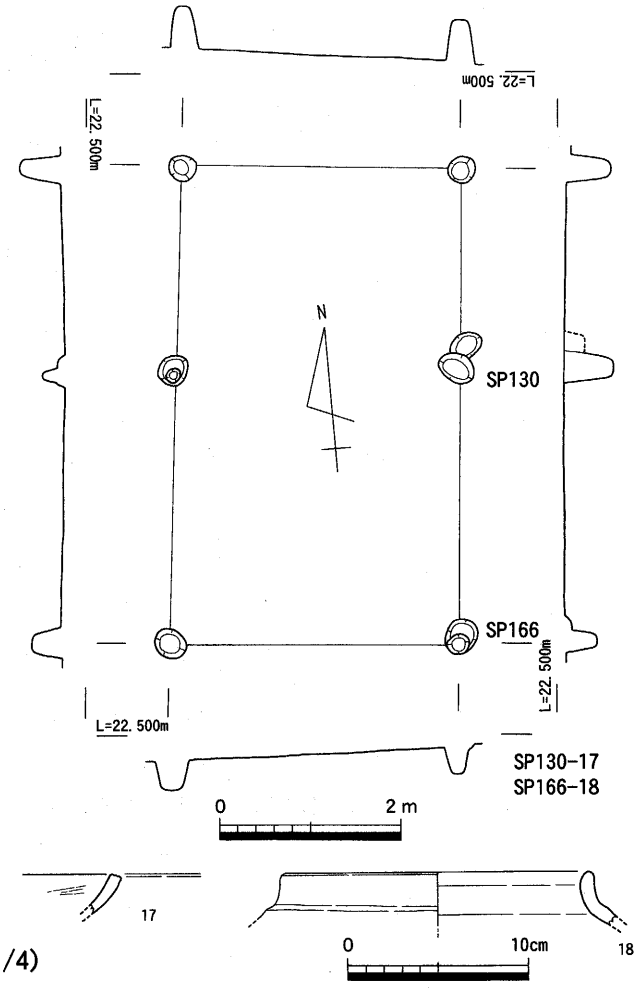
調査区の中央部で検出した側柱建物である。ＳＢ18と重複し、ＳＰ01はこの 建物を構成する柱穴ともなっている。規模は1間×2間（4、2ｍ×5、1ｍ）である。主軸方向はＷ－24°－Ｎである。柱穴の平面形はほぼ円形であり、深さ10～15cmを測る。出土遺物はないが、埋土より中世と考えられる。

ＳＢ18（第24図）

調査区中央部で検出した側柱建物である。ＳＢ17と重複する。規模は1間×2間（2ｍ×2、9ｍ）で



第20図　Ⅰ区ＳＢ14平・断面図(1/80)，出土遺物(1/4)

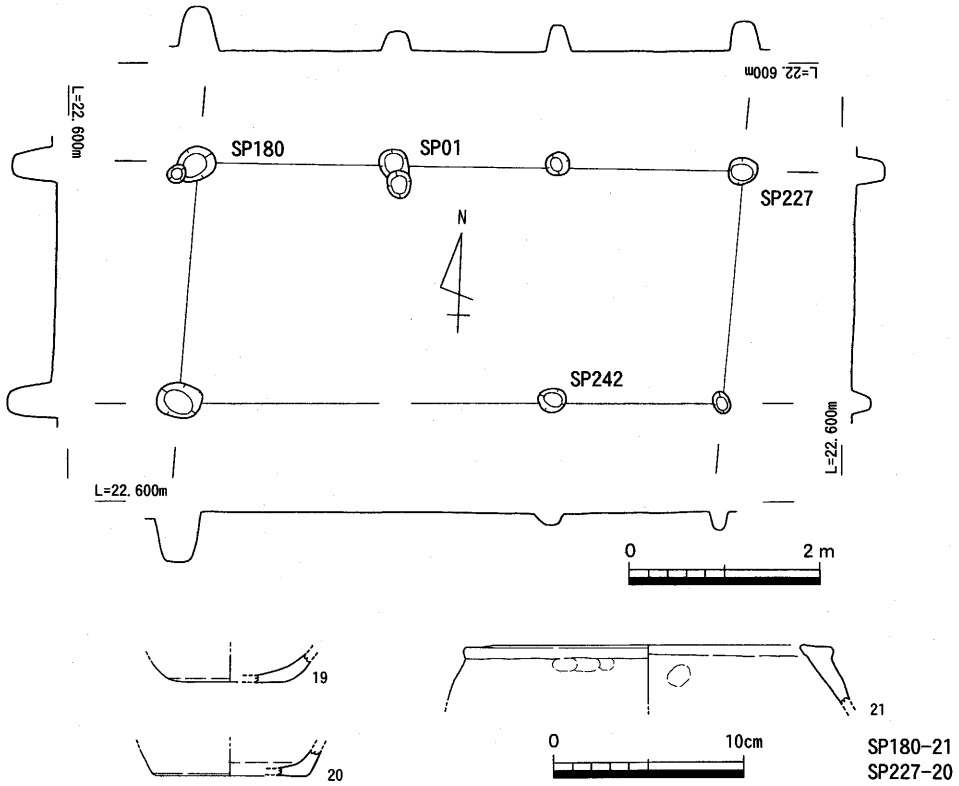


第21図　Ⅰ区ＳＢ16平・断面図(1/80)，出土遺物(1/4)

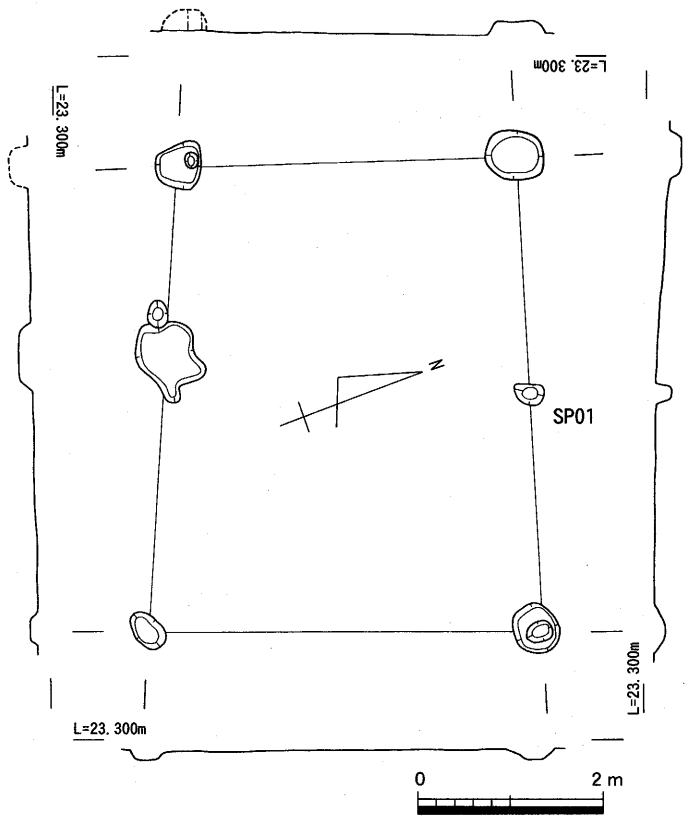
ある。主軸方向はW－22°－Nである。柱穴の平面形はほぼ円形であり、深さ8～25cmを測る。出土遺物はないが、埋土より中世と考えられる。

ＳＢ19（第25図）

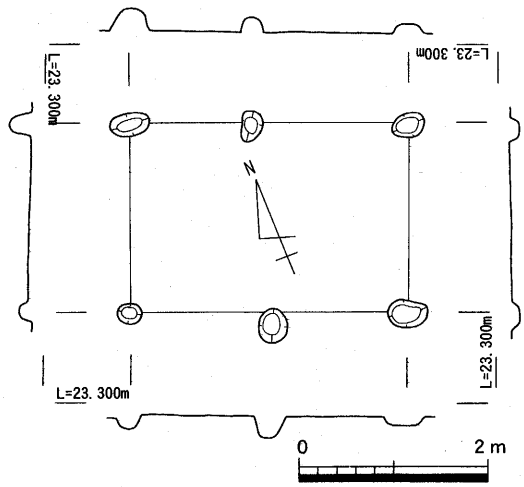
調査区西部で検出した側柱建物である。ＳＢ04、06、15と重複する。ＳＰ01はＳＢ13を構成する柱穴ともなっている。規模は2間×3間（3.8m×5.5m）である。主軸方向はN－11°－Eである。柱穴の平面形は円形、長楕円形であり、深さ15～40cmを測る。出土遺物には瓦質土器羽釜（22）がある。口縁端部の断面形が方形に近く、14世紀前半と考えられる。22より建物の時期は14世紀前半と考えられる。



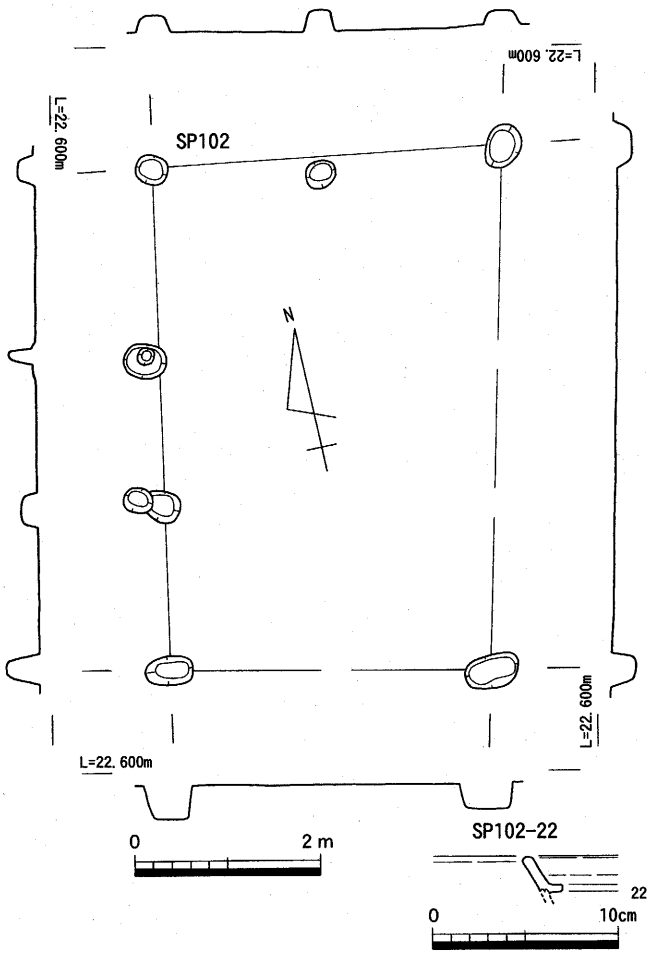
第22図　Ⅰ区ＳＢ15平・断面図(1/80), 出土遺物(1/4)



第23図　Ⅰ区ＳＢ17平・断面図(1/80)



第24図　Ⅰ区ＳＢ18平・断面図(1/80)



第25図　Ⅰ区ＳＢ19平・断面図(1/80)，出土遺物(1/4)

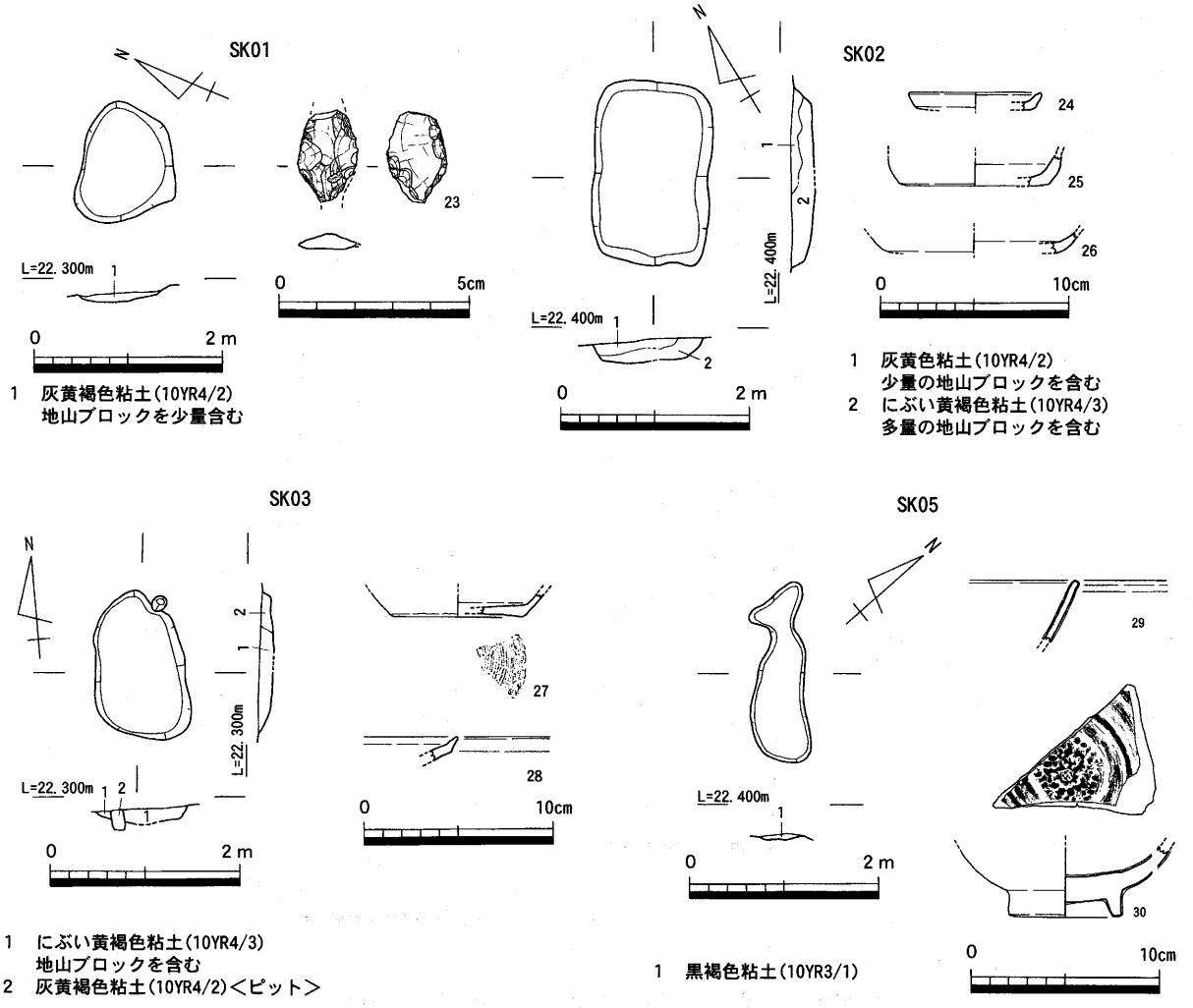
(2) 土坑

ＳＫ 01（第 26 図）

調査区北部で検出した土坑である。平面形は南側が張り出した方形、断面形は浅い皿状を呈する。規模は長径 1、28 m、短径 1、04 m、深さ 20cmを測る。埋土は灰黄褐色粘土である。地山ブロックを少量含むため、人為的な埋め戻しが行われた可能性がある。遺物はごく少量出土しており、土師器杯、石鏃(23) 1 点などがある。23 は有茎式であり、右図側では剥離面を大きく残す。土師器杯より中世の遺構であると考えられる。

ＳＫ 02（第 26 図）

調査区西端部で検出した土坑である。平面形は長方形、断面形は逆台形を呈する。規模は長径 1、96 m、短径 1、2 m、深さ 25cmを測る。主軸方向はＮ－ 35 、5°－Ｅである。埋土は 2 層に分けられるが、どちらにも地山ブロックを含み、人為的な埋め戻しが行われたことが推定される。遺物は土器細片ばかりであるが、土師器小皿（24)、杯（25、26）などがある。24 は外傾する短い口縁部を持つ。出土遺物は 13 世紀後半～ 14 世紀代と考えられる。土坑の時期については 14 世紀後半～ 15 世紀前半のＳＢ 03 を切ることも合わせて考えると、14 世紀後半に位置づけられる可能性もある。だが、出土遺物は小片であり、この時期に属すると言い切れない。よって、14 世紀後半以降と幅を持たせて考えておく。



第26図　Ⅰ区ＳＫ01～ＳＫ03、ＳＫ05平・断面図(1/80)，出土遺物(1/2, 1/4)

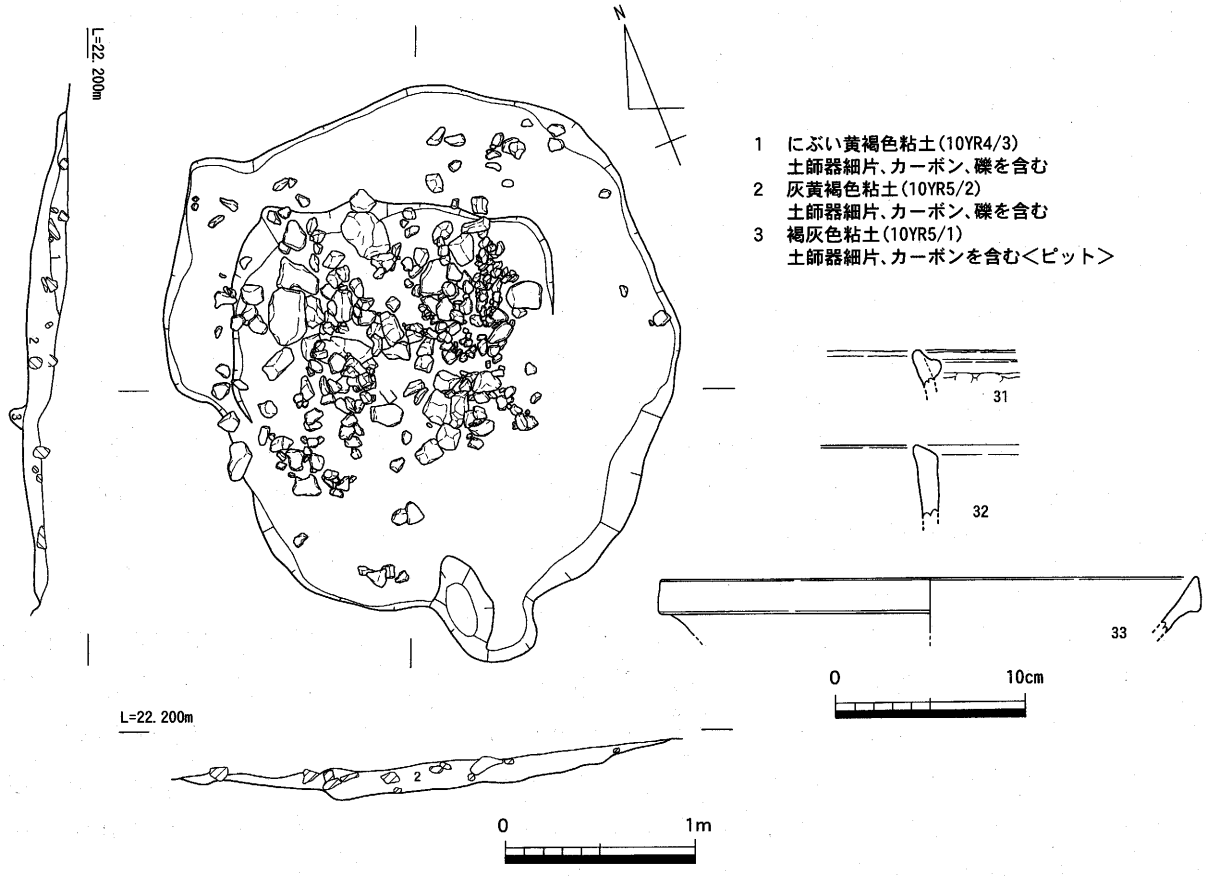
ＳＫ 03（第 26 図）

調査区西端部で検出した土坑である。平面形は不整な隅丸方形、断面形は浅い皿形を呈する。規模は長径 1､6 m、短径 1 m、深さ 16cmを測る。W－ 8°－Nである。埋土には地山ブロックを含み、人為的な埋め戻しが行われたことが推定される。遺物は土器細片ばかりで図化に耐えうるものが少ないが、土師器杯（27）、羽釜の鍔？（28）を図化した。27 は底部を糸切りする。薄作りで硬質である。13 世紀後半から 14 世紀代と考えられる。28 は羽釜であれば古代の遺物である。27 より土坑の時期は 13 世紀後半から 14 世紀代と考えられる。

ＳＫ 04（第 27 図）

調査区西端部で検出した土坑である。平面形はややいびつな隅丸方形であり、断面形は掘り込みが緩やかで浅い皿形を呈する。規模は南北約 2､7 m、東西約 2､5 m、深さ 20cmを測る。埋土は 2 層に分けられるが、2 層は粘性が強いベタベタした粘土であり、滞水状況で堆積したと考えられる。土坑中央部には拳大から人頭大の礫が多量に出土した。礫は全て地山内に多量に含まれる和泉系砂岩である。人為的に並べた形跡はなく、床面からも浮いている。土坑の底には近接して小ピット群が見られる。埋土は褐灰色粘土であり、他の遺構には見られないものである。植物の根である可能性がある。

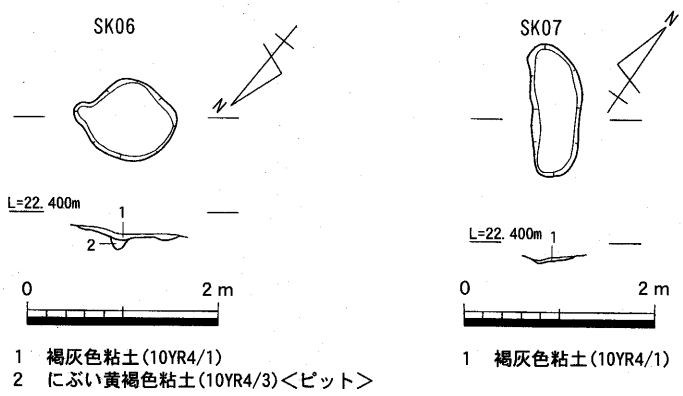
出土遺物には土師器土釜（31）、土鍋（32）、東播系コネ鉢（33）などがある。31 は非常に短い鍔、口縁部をもつ。16 世紀前半と考えられる。32 は 1 層から出土した。31 とほぼ同時期であると考えられる。33 は内面が直線的であり、口縁端部が下方に小さく肥厚する。13 世紀後半～ 14 世紀前半と考えらる。31 、32 より土坑の時期は 16 世紀前半と考えられる。



第27図　Ｉ区ＳＫ04平・断面図(1/40)，出土遺物(1/4)

ＳＫ 05（第 26 図）

調査区南西部で検出した土坑である。平面形は不整な長方形、断面形は浅い皿形を呈する。規模は長径１、92 ｍ、短径 60ｃｍ、深さ 6cmを測る。主軸方向はW－ 39°－N である。出土遺物には青磁椀（30）がある。底部内面見込みに花文を陰刻し、底部外面の釉を輪状にはぎ取る。29 はＳＫ 05 付近の包含層より出土した。口縁端部が弱く、外反する。胎土、釉の色調から 30 と同一個体である可能性が高い。上田分類のＤ類（註５）に類似し、14 世紀後葉以降と考えられる。土坑の時期はＳＫ 05 を切るＳＢ 01 が 16 世紀代に位置づけられるため 16 世紀代と考えられる。



第28図　Ⅰ区ＳＫ06、ＳＫ07平・断面図(1/80)

ＳＫ 06（第 28 図）

調査区南西部で検出した土坑である。平面形は不整な円形、断面形は浅い皿形を呈する。規模は東西 88cm、南北 84cm、深さ 7cmを測る。遺物は中世の土師器細片がごく少量出土している。出土遺物より土坑の時期は中世である。

ＳＫ 07（第 28 図）

調査区南西部で検出した土坑である。平面形はほぼ長方形、断面形は浅い皿形を呈する。規模は長径 1､4 ｍ、短径 55cm、深さ 5cmを測る。遺物は土師質土器土釜足、備前焼小片などごく少量が出土している。出土遺物より土坑の時期は中世である。

(3) 墓

ＳＴ 01（第 29 図）

調査区の北西部で検出した墓である。平面形は北側へ向かってやや開く不整な長方形を呈する。長径 1､2 ｍ、短径 85cm、深さ 36cmを測る。断面形はＵ字状を呈し、壁面は緩やかに掘り込まれている。底面も南北方向では平坦だが、東西方向ではやや丸みを持つ。主軸方向はＮ－ 11 、5°－Ｅである。埋土は３層に区分されるが、いずれも地山に酷似する。

遺物は土坑中央のやや北よりで完形の土師器小皿と折れた鉄製短刀が近接して出土している。ともに床面から約 6cm浮いているが､出土レベルは短刀の方が約 8cm高い。小皿は口縁部を上に向けた状態で、短刀は土坑の主軸方向に平行し、ほぼ水平な状態で出土した。

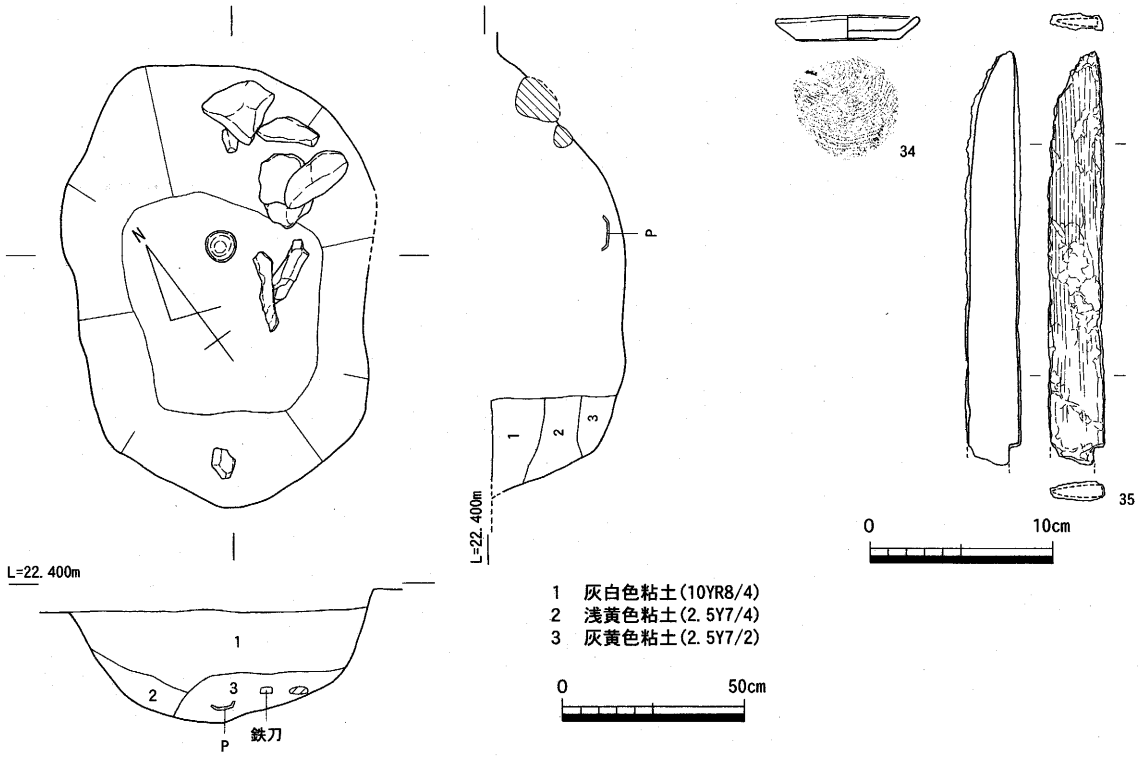
他には埋土中から土器細片がごく少量出土している。

県内で人骨が出土した中世墓の類例としては大内町三殿出口遺跡（中世）（註６）､津田町大山遺跡（中世）（註７）、高松市西打遺跡（14Ｃ）（註８）、同前田東・中村遺跡（12Ｃ）（註９）、綾歌町池下遺跡（12Ｃ末～ 13Ｃ初）（註 10）、綾南町西村遺跡（12Ｃ末～ 13Ｃ初）（註 11）、坂出市川津中塚遺跡（13Ｃ）（註 12）、詫間町本村中遺跡（中世～近世）（註 13）などがある。また、県外だが、徳島県古城遺跡（12Ｃ末～ 13Ｃ初）（註 14）でも土坑墓より人骨が見つかっている。これらの墓坑のうち長軸が１ｍ前後のもので埋葬姿勢がわかるものは、全て屈葬されている。

よって同規模のＳＴ 01 でも埋葬姿勢は屈葬であったと考えられる。頭位方向については出土した鉄

刀が先端を南に向けていること、土坑の平面形は北部がやや幅広になっており、床面は北部が高くなっていることから北側であったと考えられる。木棺については平面プラン及び土層断面の観察で棺痕跡が見られず、墓坑の断面形もU字形を呈すること、鉄釘の出土もなかったことから使用していないと考えられる。このため出土遺物が床面から浮いている理由について木棺上に置かれていたためとすることはできない。可能性としては遺体の上に置かれた、床面をある程度埋め戻した後、置かれたなどを考えることができるが、推測の域をでない。

図化できる出土遺物は先述の土師器小皿（34）、鉄刀（35）がある。34は口縁部の外傾がやや強く、底部糸切りである。13世紀後半～14世紀代と考えられる。35は折れており、基部の大部分を欠く。また両面に木質が付着している。この木質については先述の理由で木棺に由来しないと判断され、鞘に入れた状態で副葬されたと考えられる。残存部の法量、形態は実測図での比較では西村遺跡N 17－ＳＴ01出土例（註15）と類似する。なお折れた鉄刀が副葬された類例として高松市空港跡地遺跡ＳＴｆ 02（13世紀後半）（註16）がある。空港跡地遺跡ＳＴｆ 02では茎部が屈折した鉄製短刀、短刀片が出土している。前者は人為的に折り曲げられた可能性が指摘されている。だが後者も鉄刀片であるので、ＳＴ01例も含め、人為的な破損である可能性は考えられよう。34より墓の時期は13世紀後半～14世紀代と考えられる。

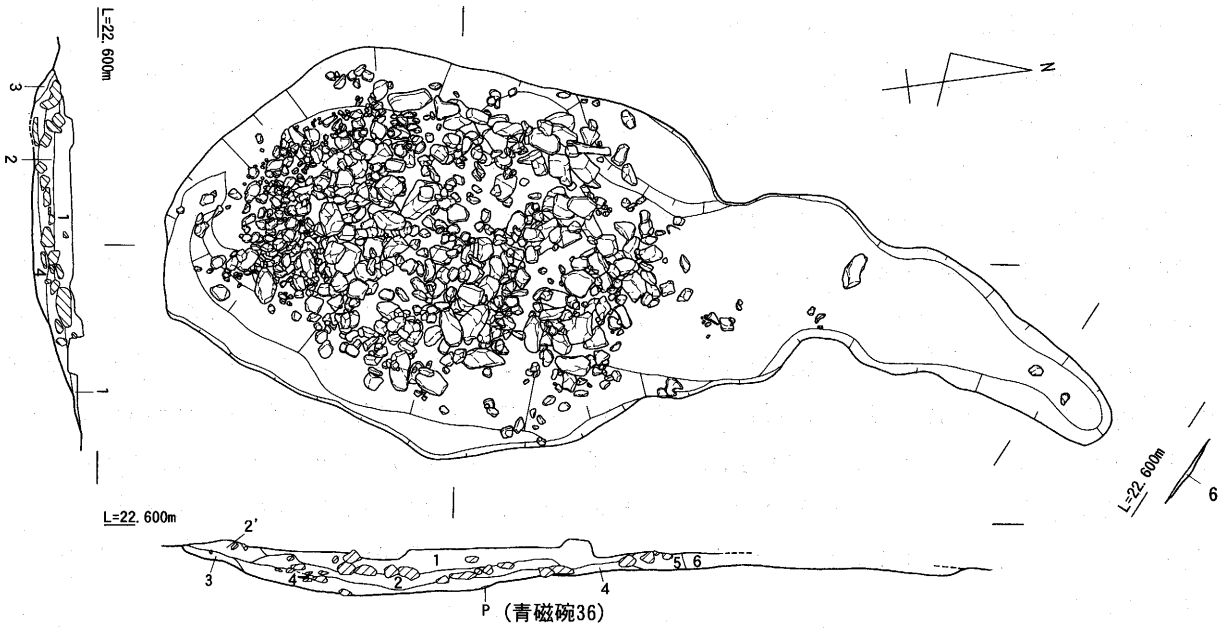


第29図　Ⅰ区ＳＴ01平・断面図(1/20)，出土遺物(1/4)

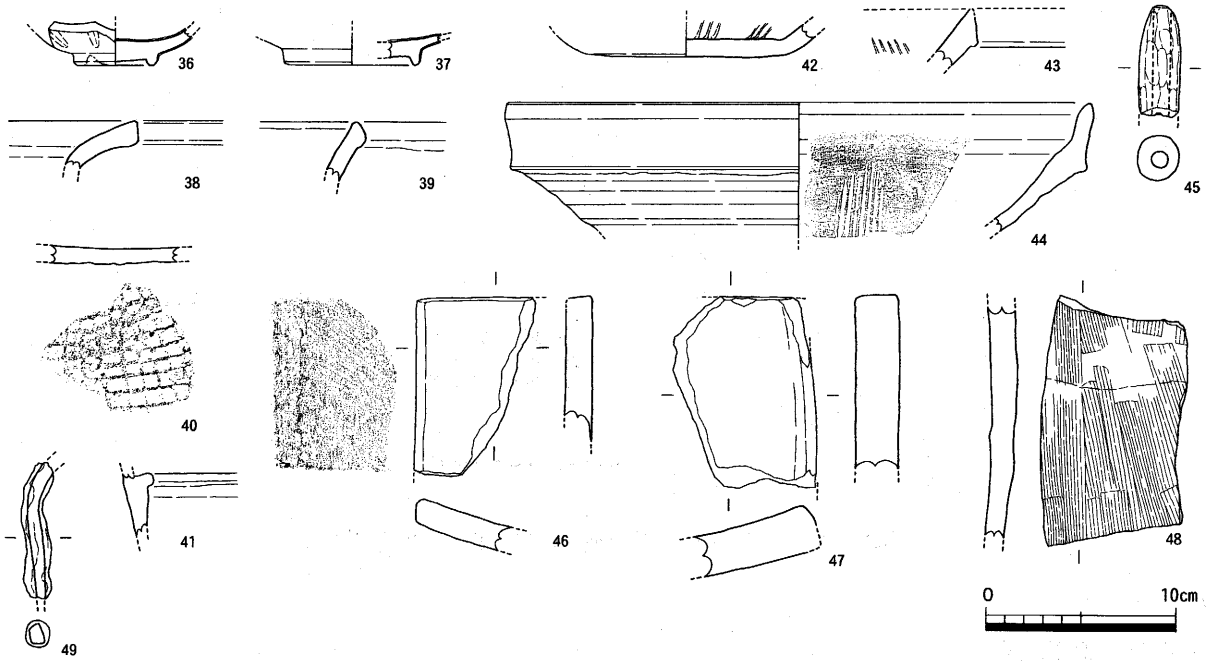
(4) その他

ＳＸ01（第30図）

調査区南西部で検出した性格不明遺構である。平面形は北側に溝状の部分があり、南側に楕円形の土坑状の部分がある。全体でおたまじゃくしのような形態である。断面形は緩やかな掘り込みで浅い皿状を呈する。主軸方向は土坑部分がN－8°－E、溝部分はやや東に傾き、N－36、8°－Eである。規模



1　黒褐色粘土(10YR3/2)　土器と多量の礫を含む＜上層＞
2　暗灰色粘土(N3/0)
　多量の礫を含む。極めて粘性が強くグライ化している＜下層＞
2'　暗灰色粘土(N3/0)　カーボンを含む＜下層＞
3　灰黄色粘土(2.5Y7/2)＜下層＞
4　黄灰色粘土(2.5Y6/1)
　少量の礫を含む。極めて粘性が強くグライ化している＜下層＞
5　灰黄色粘土(2.5Y6/2)　多量の礫を含む
6　灰黄色少礫混粘土(2.5Y6/2)



第30図　Ⅰ区ＳＸ01平・断面図(1/60)，出土遺物(1/4，49のみ1/2)

は溝部分が幅45cm～1mで南に向かって大きくなり、深さも5～10cmで南に下る。土坑部分は長径約4.2m、短径約3.1m、深さ35cmを測る。土坑部内では多量の礫が出土している。北部から中央部、特に北端と西端に人頭大の礫が、南端部に拳大の礫が集中する。これらの礫は数点の砂岩と花崗岩を除くと全て和泉系砂岩である。礫群の出土状況に人為的な配置は見られず、床面からも浮いている。なお、礫の中には 被熱したものも数点含まれるが、床面には被熱の痕跡はなく、焼土や灰も含まない。よって集落内で何らかの状況により被熱した礫が2次的に移動していると考えられる。埋土は6層に分けられるが、上、下層の2層に大別される。上層は付近の遺構埋土と同様に包含層と類似した土層である。下層は粘性が強いベタベタした粘土であり、グライ化していることから滞水状況で堆積したと考えられる。以上を踏まえて遺構の性格についてであるが、床面が湧水層でないため井戸とは考えられない。よって水溜めとして機能した可能性を考えておきたい。

出土遺物には土師器杯、小皿、土鍋（38、39、40）、土釜（41）、備前焼すり鉢（42、43、44）、甕（48）、青磁椀（36、37）、管状土錘（45）、平瓦（46、47）、鉄釘（49）などがある。遺物は多くが礫の間から出土した。38は頸部から体部にかけて内面に明瞭な屈曲がなく、なだらかである。中世後半と考えられる。40は外面に格子目叩きを施し、煤の付着も見られる。41は非常に短い鍔を持つ。15世紀後半から16世紀前半と考えられる。42は3条の条溝をもつ。43は口縁端部が下方にやや肥厚する。備前焼Ⅳ期前半（註17）に該当し、15世紀前半と考えられる。44は1層に属し、礫の間より出土した。口縁端部が上方に立ち上がる。備前焼Ⅳ期後半（註18）に該当し、15世紀後半と考えられる。49は外面に縦方向の刷毛目調整が見られる。36は底にへばりついた状態で出土した。36の半径50cm以内では椀から10cm以内のレベルで礫が出土していないため、礫により沈下したとは考えられず、遺構の掘削時期を示す資料である。外面に蓮弁文を持つが、高台は小さいことから14世紀後葉～15世紀前半と考えられる。

46は形態、胎土、法量が同引田町天王谷遺跡の瓦窯で製作された平瓦と酷似する。包含層出土軒平瓦（106）と同じく天王谷遺跡から持ち込まれたものと考えられる。45は製作時の指押さえの痕跡が明瞭に認められる。

以上の出土遺物から遺構の存続期間についてであるが、上限は青磁椀（36）であり、溯っても14世紀後葉以降である。下限を示す遺物としては土釜（41）、すり鉢（44）がある。どちらも15世紀後半に存在し、すり鉢は遺構の廃絶に伴う土層（1層）より出土している。よって、15世紀前半には機能しており、15世紀後半に廃絶したと考えられる。だが、備前焼すり鉢は耐用年数が長く、土釜も16世紀前半にも見られる形態であるため16世紀前半に下る可能性もある。

Ⅱ区の調査

古墳時代の遺構、遺物

(1) 旧河道

ＳＲ01

調査区北部で検出した旧河道である。幅約10m、深さ20cm前後を測る。地形的に下る西側へ流下する。埋土は褐色砂礫混じり粘質土である。出土遺物には土師器の甕の底部（83）がある。1点のみの出土であり、遺構の時期を示すとは言い切れないが、一応この時期に位置づけておく。83は摩耗が著しいが、内面には板ナデを施す。

中世の遺構、遺物

(1) 土坑

ＳＫ 01（第 31 図）

調査区中央部で検出した土坑である。Ⅱ区ＳＫ 02 ～ 04 と列状に並ぶ。平面形はほぼ円形であるが、北側で一段下がり 2 段掘りとなる。断面形は逆台形である。規模は径 1､2 m、深さ 33cmを測る。埋土は 3 層に分けられる。土坑北部には拳大から人頭大の礫が密集して出土した。礫は全て和泉系砂岩である。配置や重なりに人為性は見られない。拳大の礫は多くが 1 層より出土している。出土遺物はごく少量で土師器杯（51)、鍋などがある。51 は 1 層の黒褐色粘土より出土しており、底部をヘラ切りする。13 世紀後半～ 14 世紀代と考えられる。

ＳＫ 02（第 31 図）

Ⅱ区ＳＫ 01 から 1 m西に位置する。平面形はややいびつな隅丸方形であり、断面形は逆台形である。規模は南北 1､56 m、東西 1､68 m、深さ 35cmを測る。埋土は 2 層に分けられる。土坑北東部には拳大から人頭大の礫がかたまって出土した。礫は全て和泉系砂岩である。無造作に分布しており、人為的な配置とは考えられない。出土遺物はごく少量であり、土師器杯、備前焼の小片などがある。

ＳＫ 03（第 31 図）

Ⅱ区ＳＫ 02 から 40 cm西に位置する。平面形はいびつな方形であり、北西部で抉れる。断面形は逆台形である。規模は南北、東西ともに最大 1､2 mを測り、深さ 20 cmである。埋土は 2 層に分けられる。土坑全面で拳大から人頭大の礫が出土している。礫は全て和泉系砂岩である。やはり人為的な配置とは考えられない出土状況を示す。出土遺物はごく少量で、土師器の小片がある。

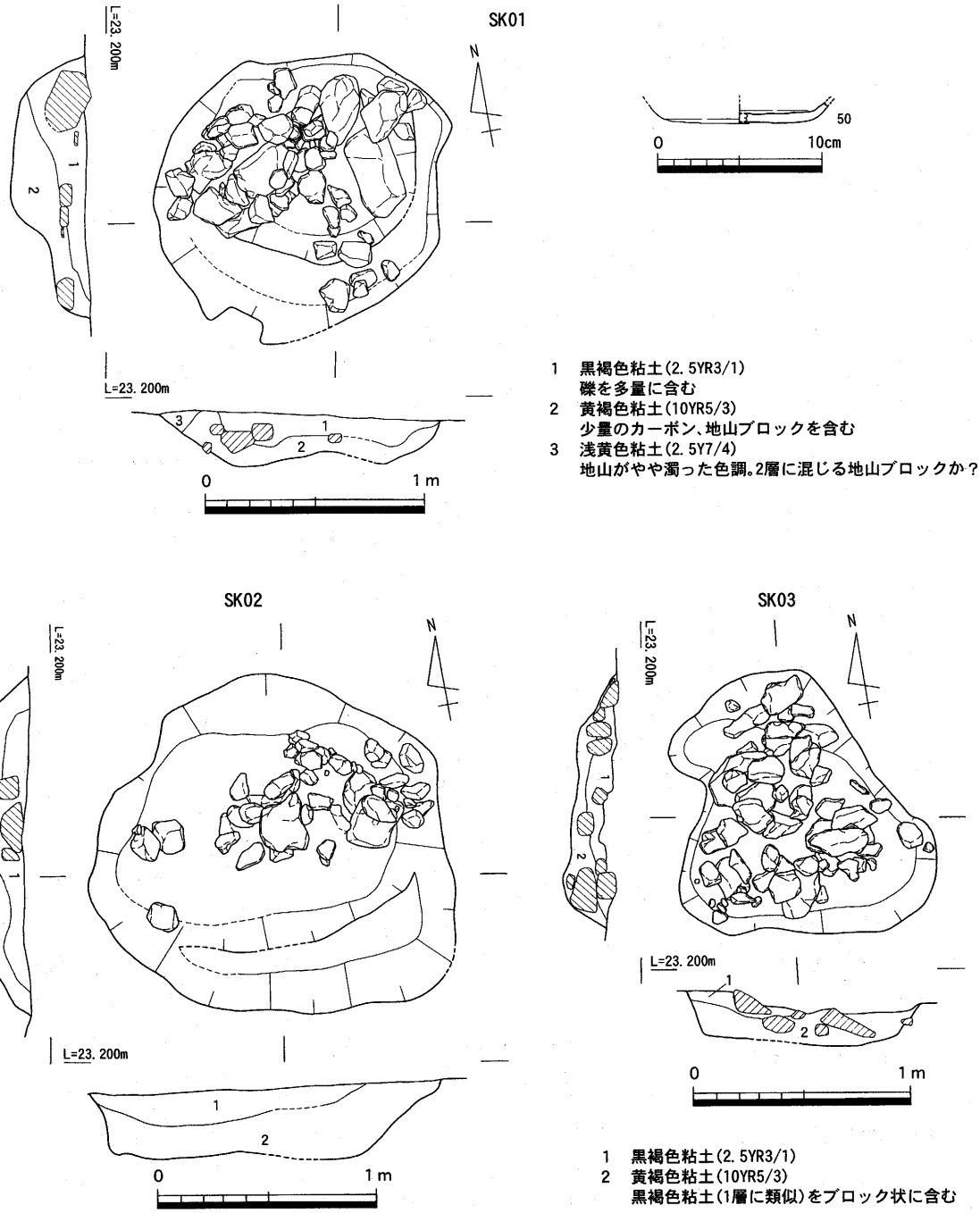
ＳＫ 04（第 32 図）

Ⅱ区ＳＫ 03 から 1､4 m西に位置する。平面形はほぼ円形であり、北東部に深さ 15cmのピット状の窪みがある。断面形は逆台形を呈する。規模は南北 1､42 m、東西 1､33 m、深さ 35cmを測る。埋土は 4 層に分けられるが、風化礫細片の有無、土質から上下 2 層に大別される。

土坑全面で拳大から 40cm大の礫が多量に出土している。礫は全て和泉系砂岩である。拳大のものは土坑中央から南側にかけて集中し、上層に含まれる。やや大振りのものは北側に密集し、下層に含まれる。下層内で北西部の礫は壁に沿って並び、2 、3 段組まれている部分がある。この部分では礫の上面がほぼ平坦で、礫同士が密着する。また北東部でも組まれているように見える部分がある。十分な記録を残せていないのが、遺憾であるが、本来土坑壁面に沿って組まれていた石組みが崩落した結果である可能性がある。

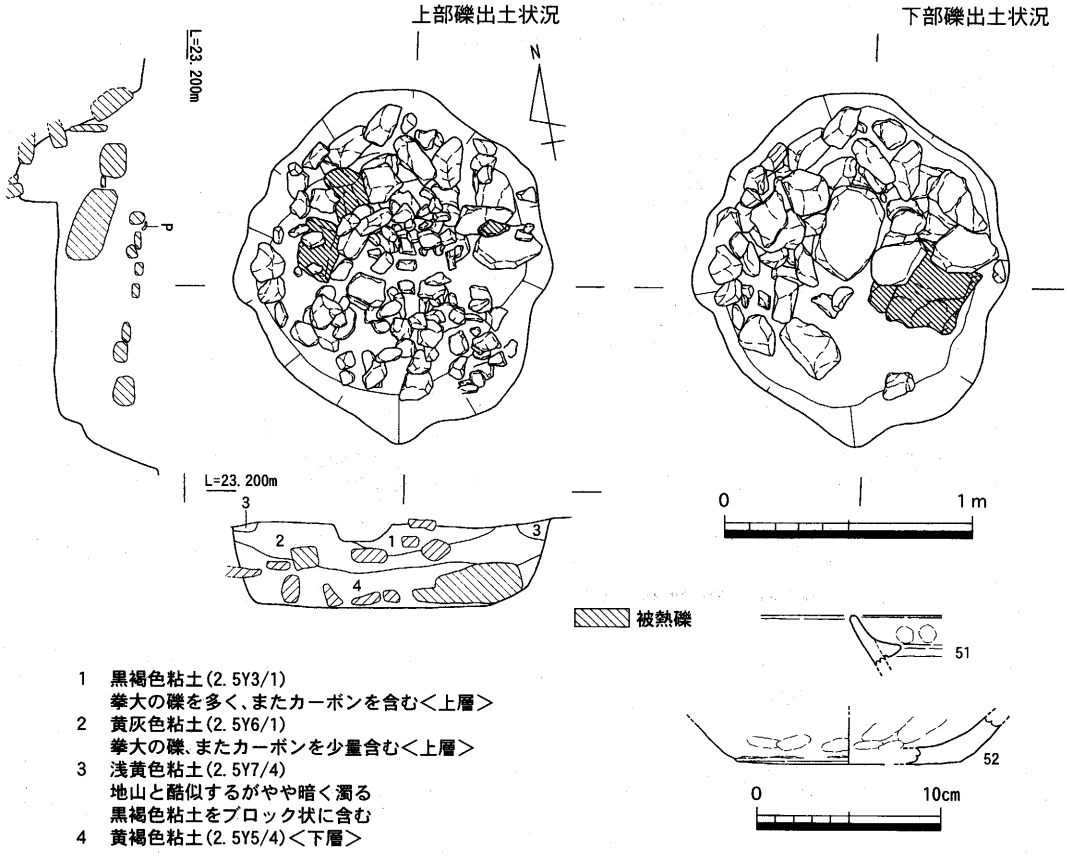
また下層内の礫には被熱したものが 5 点ある。これらは出土位置､レベルともに近接している。だが、埋土にはカーボンが少量含まれるのみで、焼土はなく、被熱礫に接する礫、土坑の壁、床面についても被熱は認められない。出土遺物はごく少量で、土師器の土釜（52)、鉢（53）などがある。ともに 4 層より出土している。52 は口縁部が長いが、鍔は短く、断面三角形である。14 世紀後半と考えられる。

Ⅱ区ＳＫ 01 ～ 04 は 40cm～ 1､3 mと近接した間隔を開けて直線的に位置し、埋土が類似する。このことから相互を意識した配置と考えられ、同時期に利用されたと考えられる。出土遺物がごく少量であるため個別遺構の時期を決定できないが、時期はＳＫ 04 の土釜（52）より 14 世紀後半と考えられる。土坑群がなす主軸方向はＷ－ 9 、5°－Ｎであり、当該期の建物主軸と一致することも遺構の同時性に



第31図　Ⅱ区ＳＫ01～ＳＫ03平・断面図(1/30)，出土遺物(1/4)

関わることと考えておきたい。具体的な機能については明らかにできなかったが、北側には遺構が広がらず、集落域の端部に位置すること、ＳＫ04では壁際に石組みが見られることは機能と何らかの関係を持つ可能性があろう。



第32図　Ⅱ区ＳＫ04平・断面図(1/30), 出土遺物(1/4)

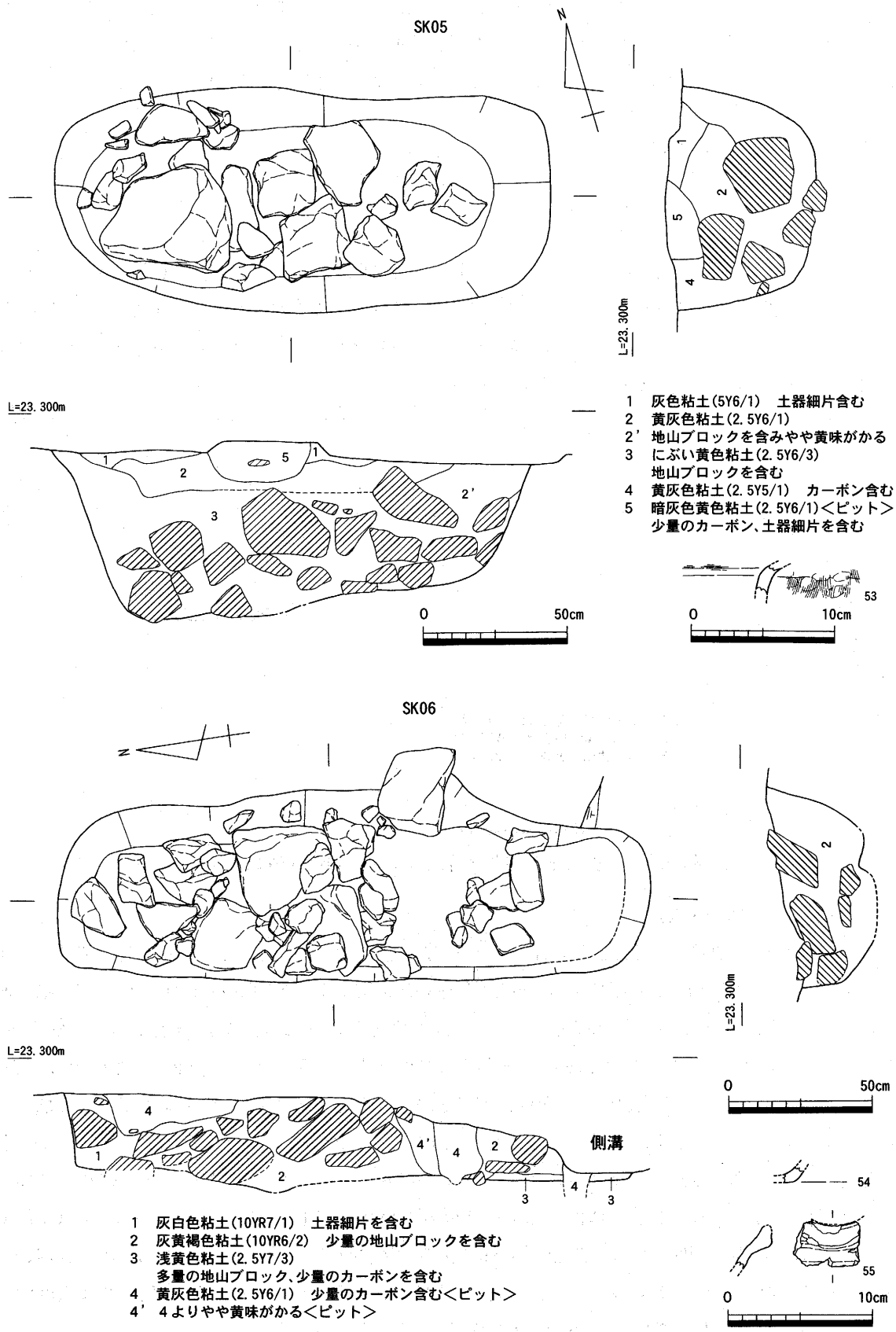
ＳＫ 05（第 33 図）

調査区南部で検出した土坑である。平面形は長方形であり、断面形は逆台形である。主軸方向はW－18°－Nである。規模は長軸 1.7 m、短軸 78cm、深さ 60cmを測る。床面はほぼ平らであるが、西に向かって下る。埋土は 4 層に分けられるが、2'、3 層には地山ブロックを含み、人為的な埋め戻しが行われた可能性がある。土坑全面で拳大から 40cm大の礫が出土している。礫は全て和泉系砂岩である。これらは人為的な配置を示さない。出土遺物は土師器の細片がある。土鍋（54）は頸部の屈曲が強く、内外面にハケを施す。小片であるため時期比定は困難であるが、中世前半に属するものと考えられる。土坑の時期はⅡ区ＳＫ 06 との配置が近接し、相互規制的であることから 14 世紀と考えられる。これは 13 世紀後半から 14 世紀代と考えられるⅡ区ＳＰ 28（第 35 図）に切られることとも矛盾しない。

ＳＫ 06（第 33 図）

調査区南部で検出した土坑である。Ⅰ区ＳＢ 02 を構成する柱穴を切る。Ⅱ区ＳＫ 05 から 1 m弱南にあり、直交する配置状況を示す。平面形は長方形であり、断面形は逆台形である。主軸方向はN－10、5°－Eである。規模は長軸 2.05 m、短軸 66cm、深さ 37cmを測る。床面はほぼ水平であるが、凹凸がある。埋土は 3 層に分けられるが、2、3 層には地山ブロックを含み、人為的な埋め戻しが行われた可能性がある。土坑北部で拳大から人頭大の礫が出土している。礫は全て和泉系砂岩である。出土遺物には土師器の細片が含まれるが、図化に耐えうるものは少ない。55 は土師器の杯である。底部をヘラ切りする。56 は東播系コネ鉢である。口縁端部が小さく肥厚する。時期は 14 世紀代と考えられる。

Ⅱ区ＳＫ 05、06 の性格は墓である可能性もある。これを示唆する要素として平面形が長方形、断面形



第33図 Ⅱ区ＳＫ05、ＳＫ06平・断面図(1/20), 出土遺物(1/4)

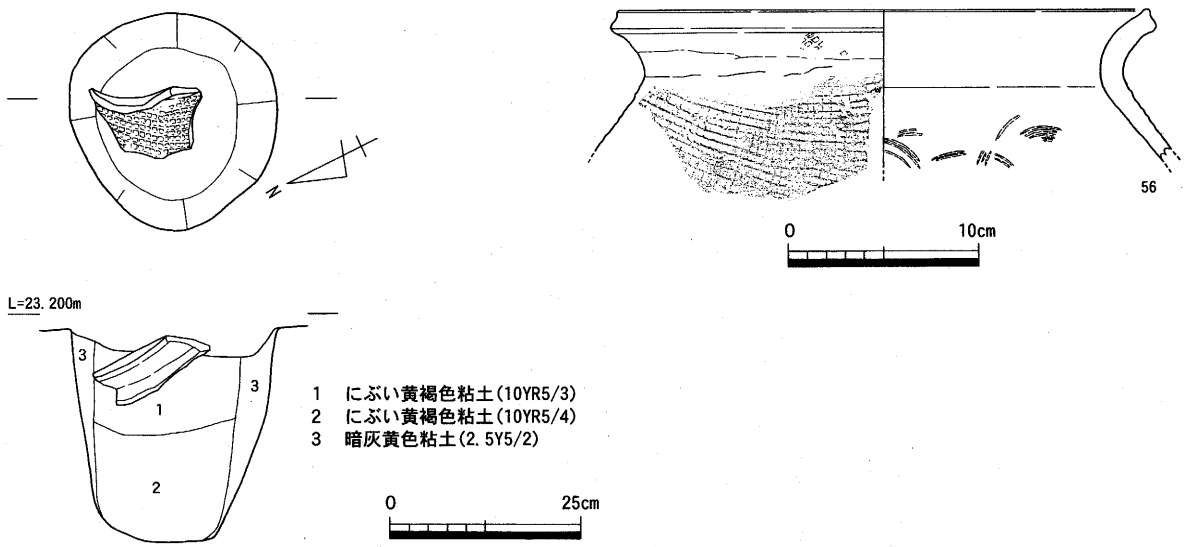
が逆台形で、床面が平坦という形状、2ｍ前後という規模、2基が近接、直交するという相互を意識した配置、埋土に地山ブロックを含み人為的な埋め戻しが推定できる、が挙げられる。だが、人骨、副葬品、木棺痕跡といった直接的に裏付ける要素がないため可能性の指摘に留める。

(2) Ⅰ、Ⅱ区柱穴

ａ．柱穴

Ⅰ区ＳＰ514（第34図）

調査区南部で検出した柱穴である。平面形は円形で、径30cm、深さ29cmを測る。出土遺物には亀山焼の甕（56）がある。頸部外面に横ナデを施すが、格子目叩きの痕跡がナデ消されず、部分的に残る。草戸千軒町遺跡編年（註19）のⅠ～Ⅱ期に該当し、13世紀後半から14世紀代と考えられる。23より柱穴の時期は13世紀後半～14世紀代と考えられる。

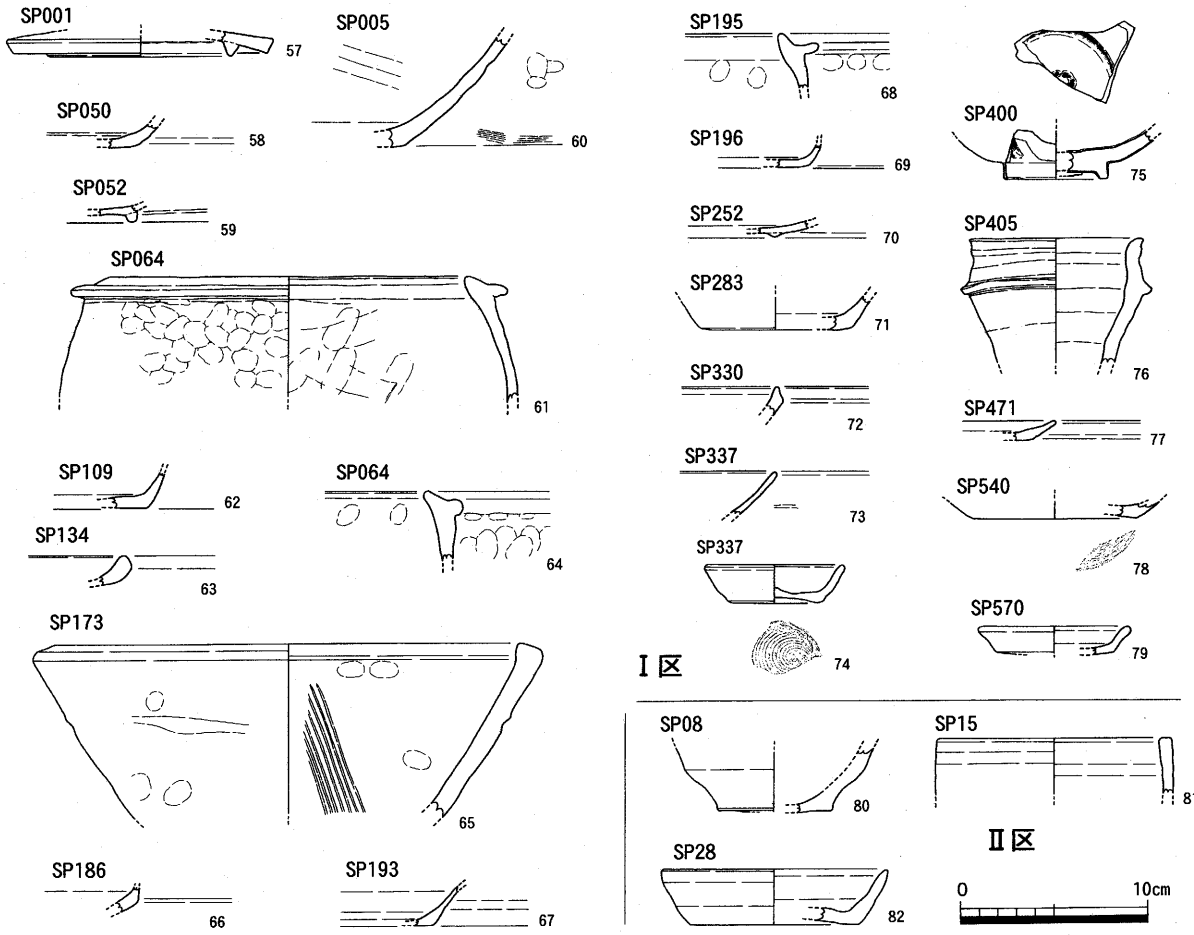


第34図　Ⅰ区ＳＰ514平・断面図(1/10), 出土遺物(1/4)

ｂ．柱穴出土遺物（第35図）

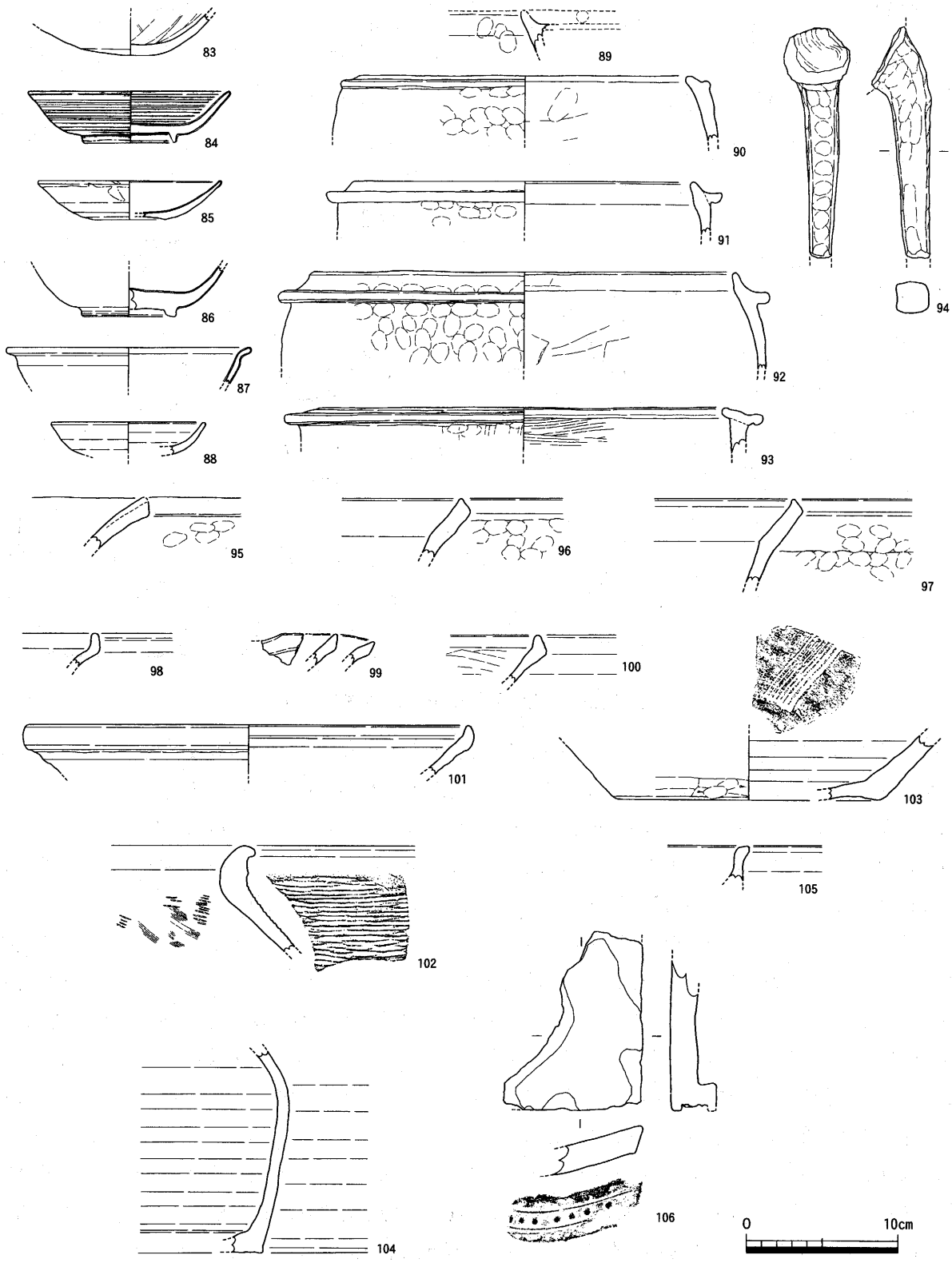
Ⅰ、Ⅱ区で検出した建物を構成しない柱穴出土遺物を図示した。57は 瓦質土器の蓋？である。上部外面を横ナデにより丁寧に仕上げている。58は土師器の杯である。底部をヘラ切りする。59は土師器の椀である。断面逆台形の小さい高台がつく。13世紀代と考えられる。60は東播系のコネ鉢である。底部外面端部があばた状に摩耗しており、使用の可能性がある。61、64は土師質土器の土釜である。口縁部、鍔ともに短く、15世紀後半～16世紀前半と考えられる。65は土師質土器のすり鉢である。口縁端部の肥厚が小さく、14世紀中葉～後半と考えられる。68は土師質土器の土釜である。15世紀前半と考えられる。72は東播系のコネ鉢である。口縁端部が細長く、上部にのびる。12世紀代と考えられる。73は西村産須恵器椀である。体部外面にヘラ磨きを施す。13世紀代と考えられる。74は東播系の小皿？である。底部を糸切りする。75は青磁椀である。体部外面に蓮弁文を施す。77は土師器の小皿である。外傾度がつよく、底部が厚い。78は土師器の杯である。底部を糸切りする。82は土師器の杯である。器壁が厚く、軟質である。13世紀後半から14世紀代と考えられる。

(3) Ⅰ、Ⅱ区包含層出土遺物（第36、37図）

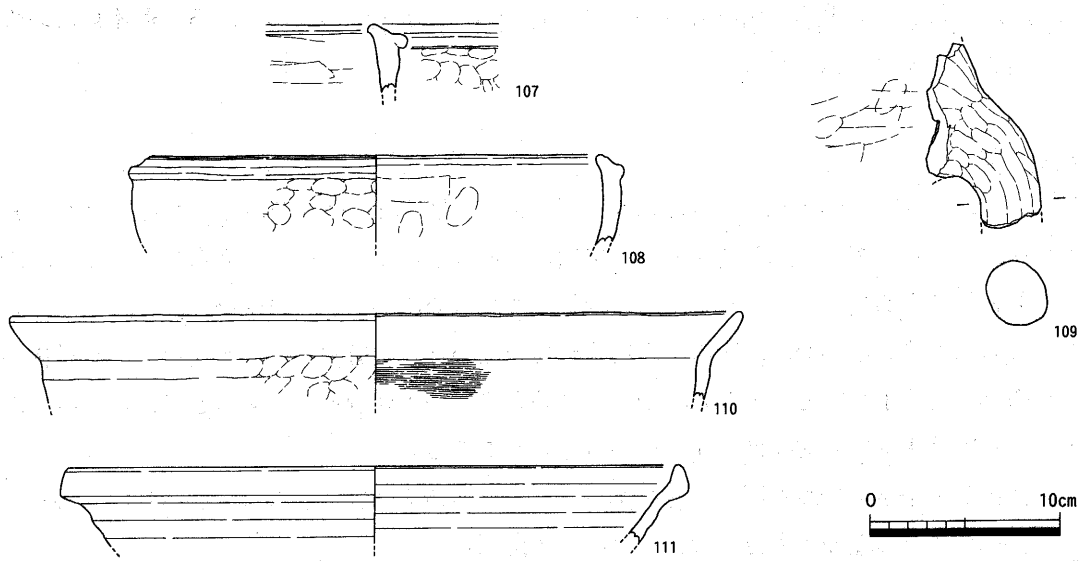


第35図　Ⅰ区・Ⅱ区ＳＰ出土遺物(1/4)

84～106はⅠ区の包含層から出土した遺物である。84は瀬戸美濃系の陶器端反皿である。瀬戸大窯編年1期（註20）に該当すると考えられ、16世紀初頭前後に位置づけられる。85は磁器皿である。近世と考えられる。86、87は青磁椀である。86は13世紀代と考えられる。87は口縁端部が外反し、上田分類のD類（註20）に該当する。14世紀後葉～15世紀前半と考えられる。88は備前焼皿である。18世紀代と考えられる。89～94は土師質土器の土釜である。90は鍔、口縁部が短く、ほぼ一体化している。16世紀代と考えられる。91、92は鍔が長めで、口縁部と明確に区別できる。14世紀後半と考えられる。94は土釜の脚である。体部との接合面に弧状に溝を刻んでいる。おそらく、接着力を高めるため施したものであろう。95～97は土鍋である。98～100は東播系のコネ鉢である。99は13世紀代、98は13世紀後半～14世紀前半、100、101は14世紀代と考えられる。102は湊焼の甕である。外面に叩きを施し、内面にその当て具痕跡らしいものが見られる。103は備前焼のすり鉢である。条溝は7条ある。104は備前焼の壺である。肩の張りはさほど強くない。106は軒平瓦である。瓦当は連珠文を施す。顎部後縁を面取りしている。14世紀後半頃と考えられる。同引田町の天王谷遺跡で検出された瓦窯で製作された軒平瓦と瓦当文様、形態、法量、胎土が酷似し、持ち込まれたものと考えられる。107～111はⅡ区の包含層から出土した遺物である。107～109は土師質土器の土釜である。107は15世紀後半～16世紀前半、108は16世紀代と考えられる。110は土鍋である。内面に横ハケを施す。111は東播系のコネ鉢である。14世紀代と考えられる。以上の出土遺物の中には一部近世の遺物を含んでいるが、これらは包含層より上位の堆積土中より出土している。よって包含層の時期は中世に限定される。



第36図　Ⅰ区包合層出土遺物(1/4)



第37図　Ⅱ区包含層出土遺物(1/4)

3．まとめ（第38図）

迯田石垣遺跡で確認した遺構、遺物はほとんどが中世集落を構成するものである。最後にこの中世集落について整理し、まとめに代えたい。

①集落域の範囲

Ⅰ、Ⅱ区の遺構分布を見ると調査対象地東部、Ⅱ区南西～北部は遺構の空白部となる。東部は遺跡東方にある丘陵斜面が延びている部分であり、本来遺構が掘削されていないと考えられる。Ⅱ区は遺構面が一部近年の耕作地造成に伴い、段状にカットされ、また包含層がほとんど残存しない。このため削平を受けているのは間違いないが、Ⅰ区の削平を受けていない部分の遺構面レベル、地形の傾斜状況を合わせて考えると程度は小さいと考えられ、遺構の希薄さは本来の状況を反映すると考えられる。よってⅡ区ＳＫ01～04は集落域の北端部に並んでいると想定できる。

なお、Ⅰ区西部、南部では調査区外に遺構が延びており、集落域はさらに広がる。ただ、両方面とも谷地形に面するのでその範囲はさほど大きくないと考えられる。

②遺構の変遷

中世の遺構は時期別に細分すると3小期に区分できる。以下、時期ごとの遺構について説明を行う。(註21)

なお説明の都合上、検出した掘立柱建物を床面積で4つに区分した。

極小型:～10㎡（3基）　小型:10～20㎡（6基）　中型:20～30㎡（7基）　大型:30㎡以上（3基）

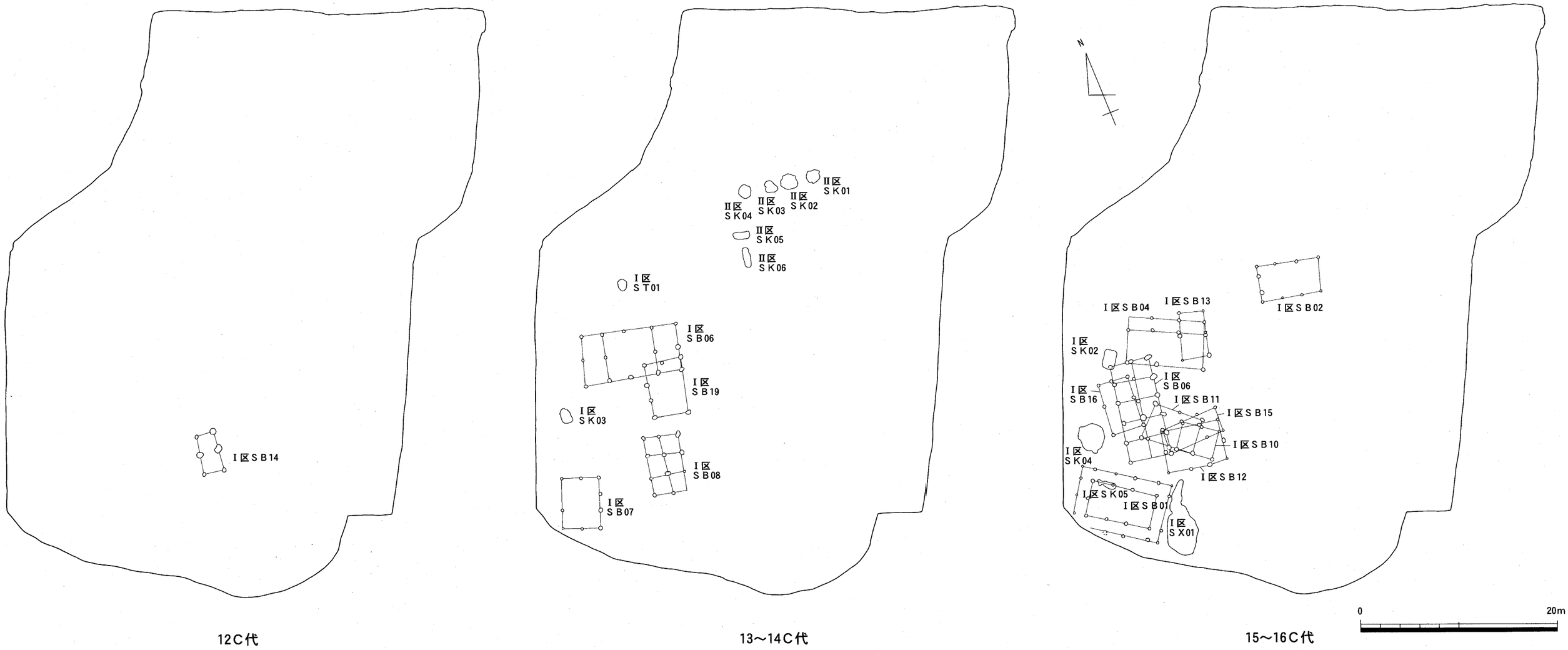
このように大部分の建物は小、中型に含まれる。

中世Ⅰ期（12世紀）

この時期に属する遺構は掘立柱建物1棟（ＳＢ14）がある。検出した掘立柱建物には出土遺物や遺構の切り合いがなく、時期決定できないものもあるが、12世紀代の遺物は数点しか出土していないことからこのように判断した。建物は調査区東部で検出され、東側にある丘陵斜面から10ｍほど西に位置する。主軸方向はＮ－11°－Ｅであるが、丘陵斜面の向きに規制されたものである。この主軸方向は後の時期にも見られる。規模は1間×2間であり、床面積は極小型である。性格については1棟しかないこと、規模が小さいこと、その割に大きな柱穴を持つことから物置を兼ねた作業小屋といった施設を考えておきたい。集落域を全掘していないが、Ⅰ期はおそらく集落が成立していない時期であると考えられる。

中世Ⅱ期（13～14世紀）

Ⅰ区ＳＢ06、07、08、19、Ⅰ区ＳＫ03、Ⅱ区ＳＫ01～06、Ⅰ区ＳＴ01がこの時期に比定される。Ⅰ期より遺構数が格段に増加する。Ⅰ区ＳＢ08は13世紀後半に位置づけられる。1間×3間の総柱建物であるが、床面積は小型（19､38㎡）に属する。小規模なため倉庫であると推定される。倉庫という機能から単独で存在したとは考えにくいこと、この時期以降に比定される遺物量が増加することから時期不詳の建物には同時併存の建物も含まれていると推定される。そのように捉えれば、13世紀後半には集落が成立したと考えられる。



第38図　迯田石垣遺跡　遺構変遷図（1/400）

14 世紀代の遺構としてⅠ区ＳＢ 19、Ⅱ区ＳＫ 01 ～ 06 がある。Ⅰ区ＳＢ 19 は床面積が中型（20、9 ㎡）の側柱建物である。細かい時期比定はできないが、Ⅱ期にはⅠ区ＳＢ 06 が存在する。束柱を持つ床張りの建物で、規模が 2 間×4 間、床面積は大型（49 ㎡）であり、遺跡内で最大である。県内の中世建物で 50 ㎡を越えるものはかなり大型であること、床張りの建物であるという構造から主屋であると考えられる。

以上からⅡ期には集落が成立しており、主屋、倉庫といった機能分化したものも見られる。これらがⅠ区ＳＢ 19 のような小、中型の建物とセットになり、数棟の建物により集落が形成されていると考えられる。また墓（Ⅰ区ＳＴ 01）が形成されている。同時期の建物と近接しており、屋敷墓であると考えられる。Ⅱ区ＳＫ 05、06 についても墓の可能性がある。そうであれば、同様に屋敷墓であろう。

中世Ⅲ期（15 世紀～ 16 世紀）

この時期の遺構としてⅠ区ＳＢ 01 、02 、03 、04 、10 、11 、12 、13 、15 、16 、ＳＫ 02 、04 、05 、ＳＢ 01 がある。14 世紀後半～ 15 世紀前半のⅠ区ＳＢ 03 はⅡ期のⅠ区ＳＢ 06 を切る総柱建物である。規模は 2 間×5 間、床面積が大型（42 ㎡）であり、Ⅰ区ＳＢ 06 と構造、規模ともに類似し、位置的にも近接する。出土遺物による時期比定でも建て替えによる連続した建物と考えることも可能である。だが、細かい時期比定ができないため積極的な根拠に欠く。同時期に存在する遺構としてＳＸ 01 がある。

15 世紀後半～ 16 世紀代は上記の 2 遺構以外の遺構が属し、最も遺構数が多い時期である。この時期に属すると判断した遺構にはそれまでの建物主軸と異なる主軸（Ｅ－ 27、5°～ 39°－Ｎ）がＳＢ 01 、04 、10 、11 、ＳＫ 02 で見られる。ただ、従来の主軸方向を持つＳＢ 13 はＳＢ 04 を切り、ＳＢ 02 も 16 世紀代に比定される。こうした遺構の切り合いやＳＢ 02 の存続期間が 16 世紀代と考えられる集落の廃絶期と接近する可能性を考えると、12 世紀代からの主軸方向が変化し、新しい主軸方向に統一されたとするよりある時点以降は両方が併存したと考える方が妥当であろう。問題はある時点がいつかであるが、遺物が出土したＳＢ 15 が 15 世紀後半以降、ＳＢ 01 、04 が 16 世紀に位置づけられるため 15 世紀後半以降と考えられる。

集落構成についてはⅢ期にも主屋と考え得るＳＢ 01 がある。2 間×3 間の四面庇建物で床面積は大型（33 ㎡）である。同じ 16 世紀代に限定できる建物はＳＢ 02 、04（床面積は中型）だけであるが、遺構の切り合い、重複、遺跡の廃絶時期を考えると 15 世紀後半以降に比定されるＳＢ 10 、11 、12（床面積は 10 、11 は小型、12 は中型）のいずれかは伴うものと考えられる。以上からⅢ期についても主屋に小、中型の建物が伴う構成が想定できる。

以上の変遷をまとめると、12 世紀代から建物は検出されているものの仮小屋的なものと考えられる。

このため中、小規模の建物群からなる集落の形成は 13 世紀後半に求められ、遅くとも 14 世紀代には規模、構造ともに格差を持つ主屋が出現している。また屋敷墓もこの時期に見られる。おそらく集落ないし主屋の出現を背景に生じたものであろう。その後 15 、16 世紀と集落は継続して行くが、主屋を中心とした建物構成はさほど変化していない。ただ、16 世紀代になるとそれまで継続してきた建物の主軸方向に新しいものが加わる。そして 16 世紀代の内に集落が廃絶すると考えられる。

最後に町内の中世集落の状況について触れておく。鹿庭、川北、庵の谷遺跡では主屋となる中心的な建物は見られない。調査面積に制約があり、遺跡数も少ないものの、遺跡の存続期間、建物の棟数、屋

敷墓の有無、輸入陶磁の出土量にも差があり、何らかの格差を反映したものと考えられる。具体的な内容については他遺跡の報告書作成を待って、今後の課題としたい。なお、遺構の時期決定についても個別遺構間の関係を把握するのに充分な編年が現状では組まれていない。東讃地域の土師器杯、小皿を中心とした編年作業を進める必要があろう。

(註 1)『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報　平成 11 年度』「迯田石垣遺跡」香川県教育委員会他　2000

(註 2)『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第十四冊　川津中塚遺跡　』香川県教育委員会他　1994

(註 3)『四国工業技術研究所増築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　空港跡地遺跡（Ｊ区)』香川県教育委員会他　1997

(註 4) 上田秀夫「14 ～ 16 世紀の青磁椀の分類について」『貿易陶磁研究Ｎｏ．2』 日本貿易陶磁研究会　1982

(註 5) (註 4) に同じ。

(註 6) (註１) に同じ。「三殿出口遺跡」

(註７)『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報　平成８年度』「大山遺跡」香川県教育委員会他　1997

(註 8)『西打遺跡Ⅱ』香川県教育委員会他　2002

(註 9)『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第３冊』香川県教育委員会他　1995

(註 10) (註２) に同じ。

(註 11)『国道バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報　平成 11 年度』「池下遺跡」香川県教育委員会他　2000

(註 12)『国道 32 号綾南バイパス建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査　西村遺跡Ⅱ』 香川県教育委員会　1981

『国道 32 号綾南バイパス建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査　西村遺跡Ⅲ』 香川県教育委員会　1982

(註 13)『県道関係埋蔵文化財発掘調査概報　平成 12 年度　本村中遺跡』香川県教育委員会他　2001

(註 14)『四国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告８　古城遺跡　』徳島県埋蔵文化財研究会　1994

(註 15) (註 12)『西村遺跡Ⅲ』に同じ。

(註 16)『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第４冊　空港跡地遺跡Ⅳ』香川県教育委員会他　2000

(註 17) 間壁忠彦『考古学ライブラリー 60　備前焼』ニューサイエンス社　1991

(註 18) (註 17) に同じ。

(註 19) 篠原芳秀「草戸千軒町遺跡出土の亀山焼」『中近世土器の基礎研究Ⅲ』日本中世土器研究会　1987

(註 20) 藤沢良祐「瀬戸大窯発掘調査報告」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ｖ』瀬戸市歴史民俗資料館　1986

『企画展　瀬戸・美濃系大窯とその周辺』(財) 瀬戸市埋蔵文化財センター　1997

(註 21) 遺構変遷を考えるにあたっては主屋、倉庫は建物の機能上、単独で存在することは少なく、中、小型の建物が付随するという推測を前提としている。同時期に属する遺構群を充分に抽出できていないことが理由であるが、こうしたセットは県下の中世集落で一般的に見られる。(註 22)

(註 22) 森格也「瀬戸内地方の中世集落の展開ー讃岐を中心としてー」『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要Ｉ』1993

第３章　迯田谷川下池遺跡の調査

第１節　立地と環境

１．地理的環境（第２、３図）

迯田谷川下池遺跡は阿讃山脈に連なる鳴嶽から北に派生する２つの丘陵に挟まれた谷筋の奥部に位置する。平野に面した谷筋の入口からは約1､2km奥に入る。谷地形を形成する２つの丘陵の内、北東の丘陵から延びる緩斜面に広がる。遺跡の現地表面は標高39､4～41､6ｍで谷の中央へ向かう東から西へ、また出口に向かう南から北へ下っている。遺跡のすぐ東には足谷川があり、東流する。川沿いの谷地形を東に下ると鹿庭遺跡がある。前記の迯田石垣遺跡は約300ｍ北にある。

２．歴史的環境

第２章第１節で記載したとおり。

第２節　予備調査

第２章第２節で記載したとおり

第３節　調査の方法

平面図、断面図、コンター図の作成は手書きで行った。

第４節　調査の成果

１．土層序（第39図）

基本層序は上から新旧の耕作土、床土、耕作地造成のための造成土があり、２層の遺物包含層（暗灰黄色カーボン混粘土、にぶい黄色粘土）を経て、地山である明黄褐色粘土粘土に至る。包含層からはごく少量のサヌカイト剥片が出土しており、両層合わせた層厚は最大30cmを測る。ただし、調査地は調査前には階段状の水田になっていたため旧地形の傾斜地の奥方向では包含層が残存せず、耕作土直下で地山が現れる。地山層上面の標高は南東端で41､5ｍ、北東端で40ｍであり、南北約50ｍで1､5ｍの比高差を持って検出された。

2．遺構、遺物

調査の概要

本遺跡においては中世の土坑２基、柱穴約200基を検出した。柱穴は比較的密に分布する部分もあるが、掘立柱建物は復元できなかった。遺跡からの出土遺物は弥生土器、中世土師器の細片が10点、サヌカイト製石鏃１点、同未製品２点、チップ約50点のみである。遺構からの出土遺物には弥生土器、サヌカイト製品しかないが、遺構埋土は灰色系、褐色系粘土である。これは中世に比定される迯田石垣遺跡の埋土と酷似するため中世に属すると考えられる。

中世の遺構、遺物

土坑

ＳＫ01（第41図）

調査区南東部で検出した土坑である。平面形はＬ字形、断面形は逆台形を呈する。規模は長径１ｍ以上、短径88cm、深さ17cmを測る。土坑中央部で径約10cmのピットが掘り込まれている。埋土が酷似し、伴う可能性が高い。出土遺物はないが、埋土から中世に属すると考えられる。

ＳＫ02（第41図）

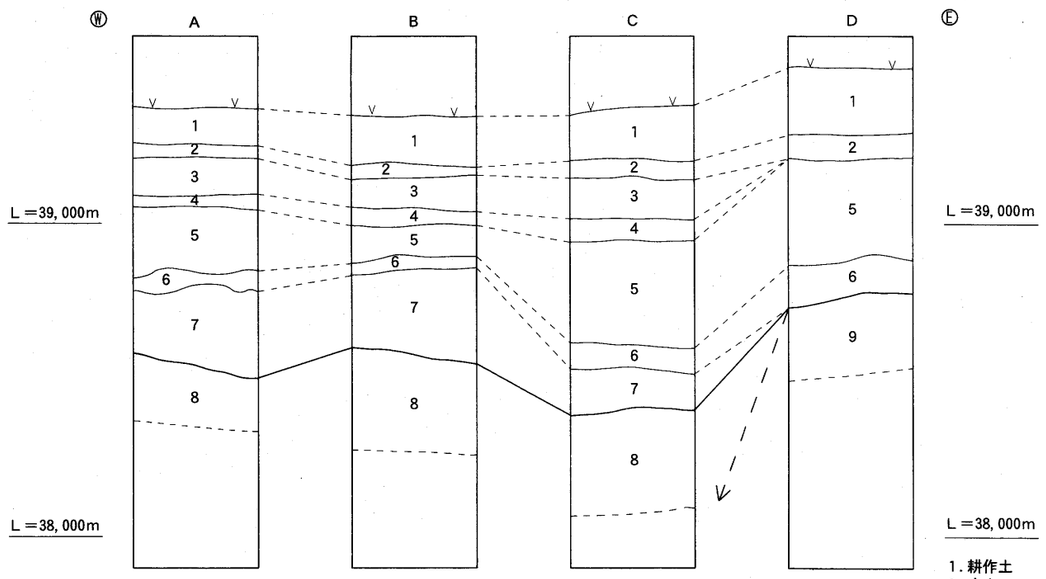
調査区南西部で検出した土坑である。平面形はややいびつな長方形、断面形は浅い皿形を呈する。規模は長径1､03ｍ、短径44cm、深さ17cmを測る。土坑中央部で拳大の礫がかたまって出土しており、内２点は被熱している。被熱は礫の裏面にも及ぶ。埋土は３層に分けられるが、１層の暗赤褐色粘土中には礫、焼土、炭片、焼粘土塊を含む。３層のにぶい黄色粘土は周囲の遺構埋土と類似し、自然堆積土である。１層には焼成に伴う遺物が含まれるが、床面、壁面に被熱の痕跡はなく、炭層も形成されていない。また層全体に被熱礫の細片を多量に含むため土坑内で焼成が行われたのでなく、別の場所で焼成を行った際、生じた焼土を廃棄した土坑であると考えられる。調査区内では炉跡などは確認されなかった。出土土器はないが、埋土より中世と考えられる。

柱穴出土遺物（第42図）

１、２はサヌカイト製の石鏃である。１は鋸歯状の凹基式石鏃である。２は右図側に調整がほとんど見られず、未製品である。

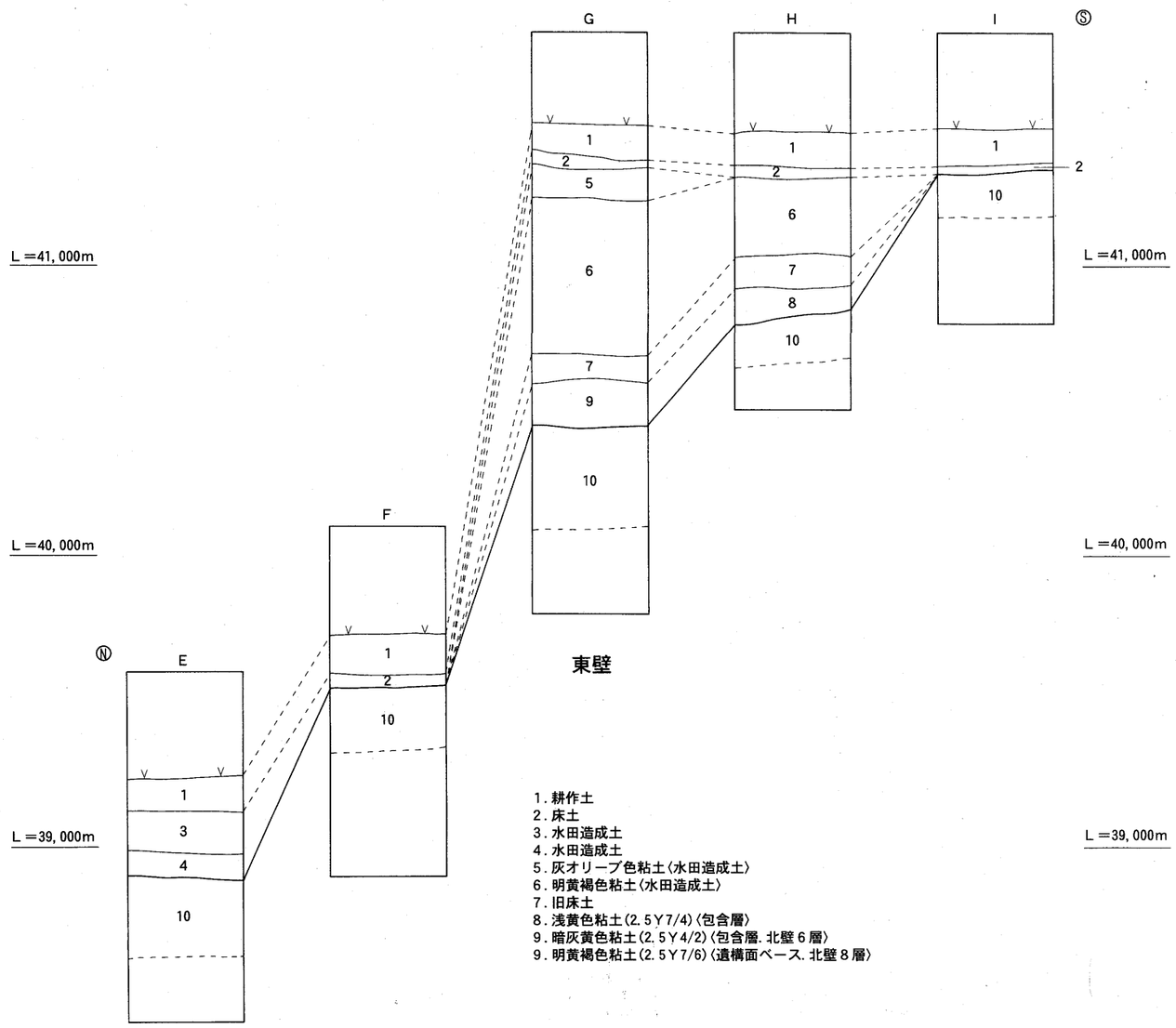
包含層出土遺物（第43図）

３は吉備系の甕？である。口縁部が水平に外方に延びる。４は管状土錘である。５は須恵器の甕である。外面に叩き、内面にこれに伴う青海波文が見られる。６は弥生土器の壺の口縁部である。端部に強い横ナデを施す。



北壁

1．耕作土
2．床土
3．旧耕作土
4．旧床土
5．明黄褐色粘土〈旧水田造成土〉
6．暗灰黄色粘土(2.5Y4/2)〈包含層〉
7．にぶい黄色粘土(2.5Y6/3)〈包含層〉
8．明黄褐色粘土(2.5Y7/6)〈遺構面ベース〉
9．明黄褐色粘土(10Y6/8)〈　　〃　　〉

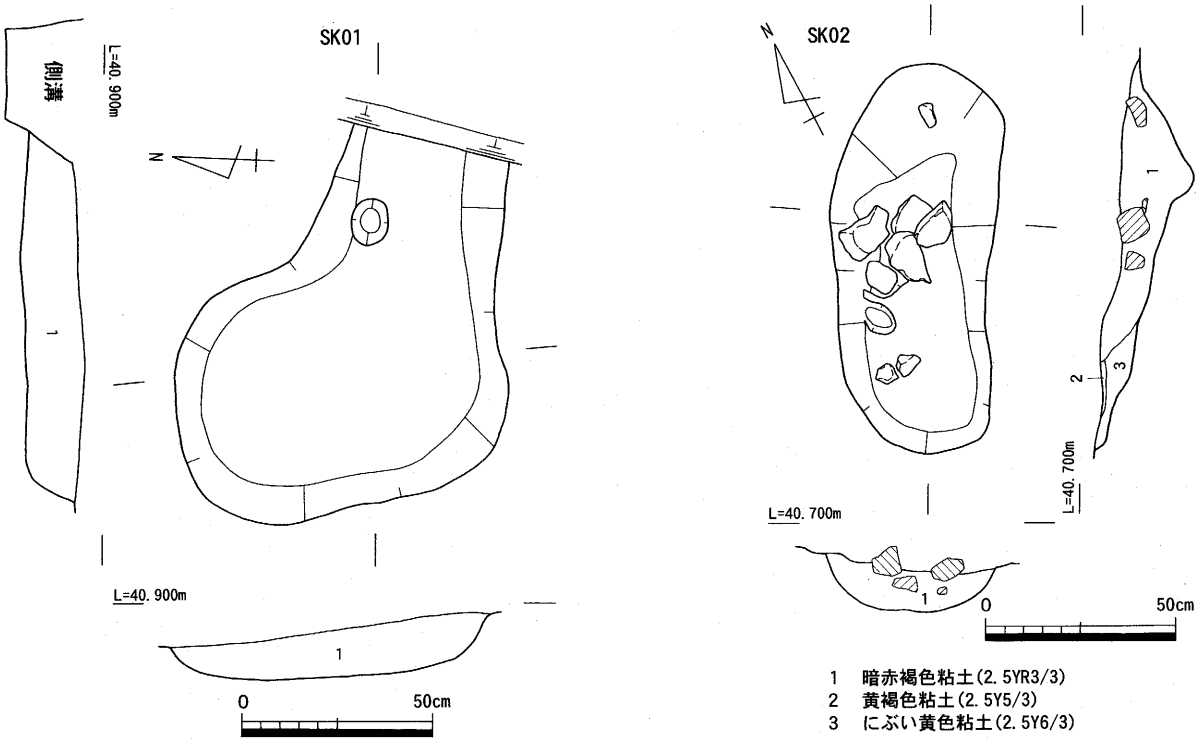


東壁

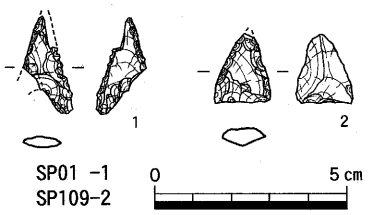
1．耕作土
2．床土
3．水田造成土
4．水田造成土
5．灰オリーブ色粘土〈水田造成土〉
6．明黄褐色粘土〈水田造成土〉
7．旧床土
8．浅黄色粘土(2.5Y7/4)〈包含層〉
9．暗灰黄色粘土(2.5Y4/2)〈包含層．北壁6層〉
9．明黄褐色粘土(2.5Y7/6)〈遺構面ベース．北壁8層〉

第39図　土層柱状図

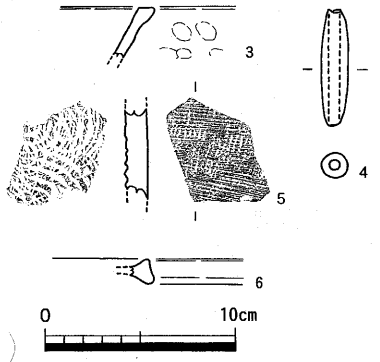
第40図　遺構配置図（1/200）



第41図　ＳＫ01、ＳＫ02平・断面図(1/20)



第42図　ＳＰ出土遺物(1/2)



第43図　包含層出土遺物(1/4)

3．まとめ

本遺跡では弥生時代と中世の遺構、遺物を確認した。弥生時代では弥生土器、サヌカイト製石鏃、未製品、フレイク、チップが出土しているが、遺構は検出されていない。中世では土坑２基、200基ほどの柱穴が検出されている。だが、掘立柱建物は復元できない。

概報（註１）では円形に巡る柱穴群２ヶ所について中央土坑、壁溝が見られないため不確定であるとしながら、削平を受けた竪穴住居である可能性を指摘した。また時期についてはごく少量ながら弥生土器片、サヌカイト製石鏃などが出土していることから弥生時代に属するとした。だが、先述の通り迯田石垣遺跡の遺構埋土と本遺跡のそれが酷似することから柱穴群の時期は中世と考えられる。訂正したい。

(註１)「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報　平成10年度」(財) 香川県埋蔵文化財調査センター他　1999

第４章　鹿庭遺跡の調査

第１節　立地と環境

１．地理的環境（第２、44、45 図）

鹿庭遺跡は大川郡引田町吉田に所在する。鳴嶽から北に派生する丘陵の緩傾斜面に位置する。現地表面は標高 24､9 ～ 25､3 ｍで南から北に向かって緩やかに下っている。丘陵の西には北へ大きく突出する別の丘陵があり、両丘陵の間には細長い谷地形が存在する。遺跡から 150 ｍほど東には馬宿川があり、遺跡の方へ向かって扇状地が広がる。調査の結果、遺跡東部に当たるＢ区では馬宿川に平行する、丘陵と扇状地の境界をなす斜面を検出した。比高差は約 80cmを測る。これは馬宿川により形成された河岸段丘であると考えられる。本調査ではプランを明確にできなかったが、予備調査で丘陵裾部を北流する旧河道が灰色砂礫層上に存在したと推定されていることもこれを示唆する。（第 51 図）〔予備調査により灰色砂礫層が部分的に窪む部分が南北方向へ連続する状況および場所によっては窪み内の埋土がグライ化し、ラミナ状堆積を示すことが確認されている。〕

２．歴史的環境

第２章第１節で記載。

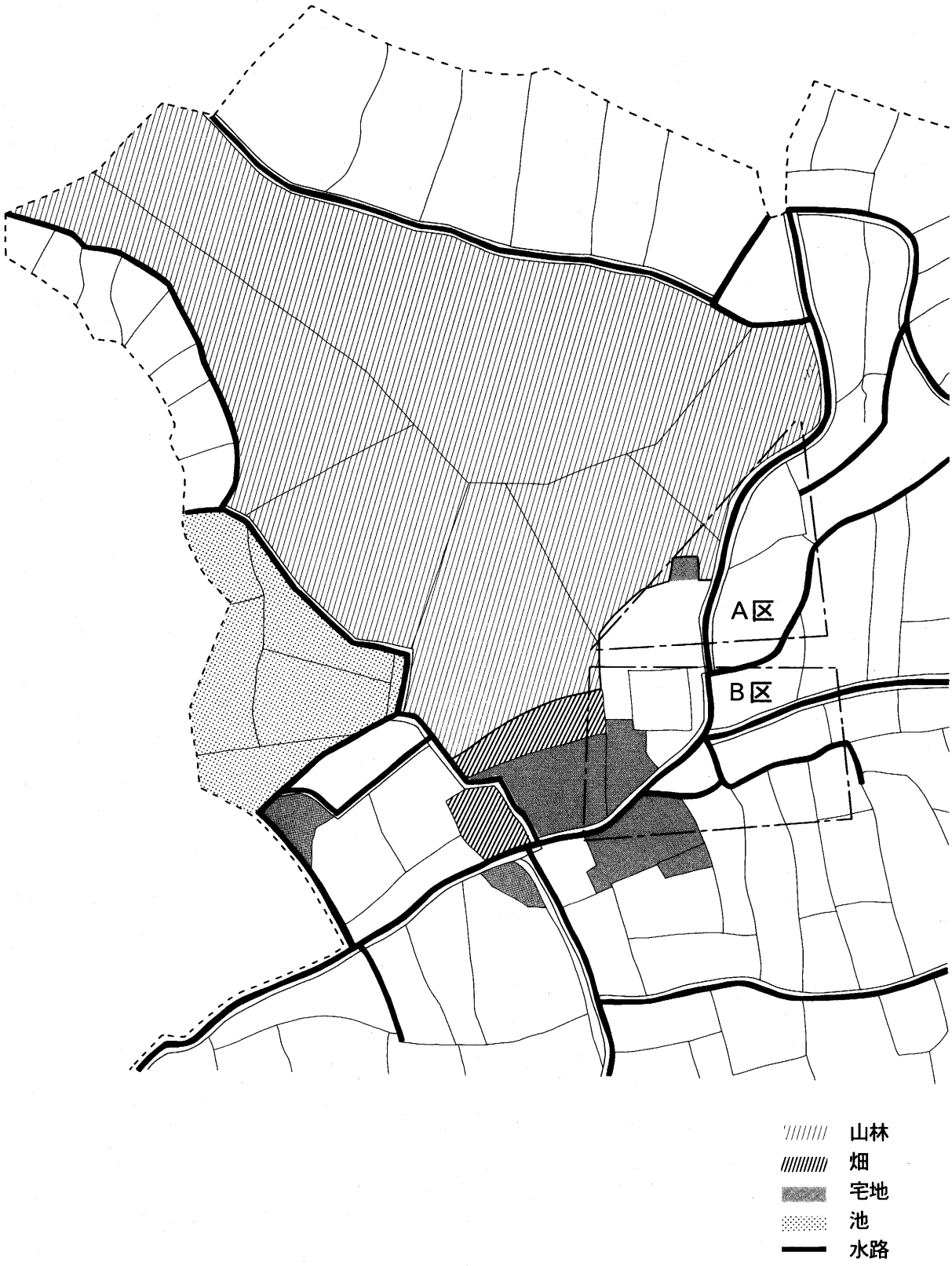
第２節　予備調査（第 46 ～ 51 図）

鹿庭遺跡では平成９年の２回の予備調査により本調査の範囲が決定した。ここでは鹿庭地区の予備調査の概要を報告する。地区内の地形は西の開析谷（1，2 トレンチ）、東の馬宿川により形成された扇状地（6 － 3，15 トレンチ東半部以東および７－２，９－３トレンチ以東）、中央の丘陵（上記のトレンチ部分以外）に区分される。本調査の対象地については開析谷内部ではグライ化した粘土、砂層が見られるのみで遺構、遺物が確認されなかったため含めなかった。扇状地部分でも灰色砂礫層上で時期不詳の旧河道痕跡が数本見られるのみで遺構は確認されなかったため丘陵付近しか含めなかった。中央の丘陵では遺構、遺物が確認され、調査対象とした。ただし、南部の３、10 トレンチでは遺構、遺物が確認されず､削平も著しいため本調査対象としなかった。

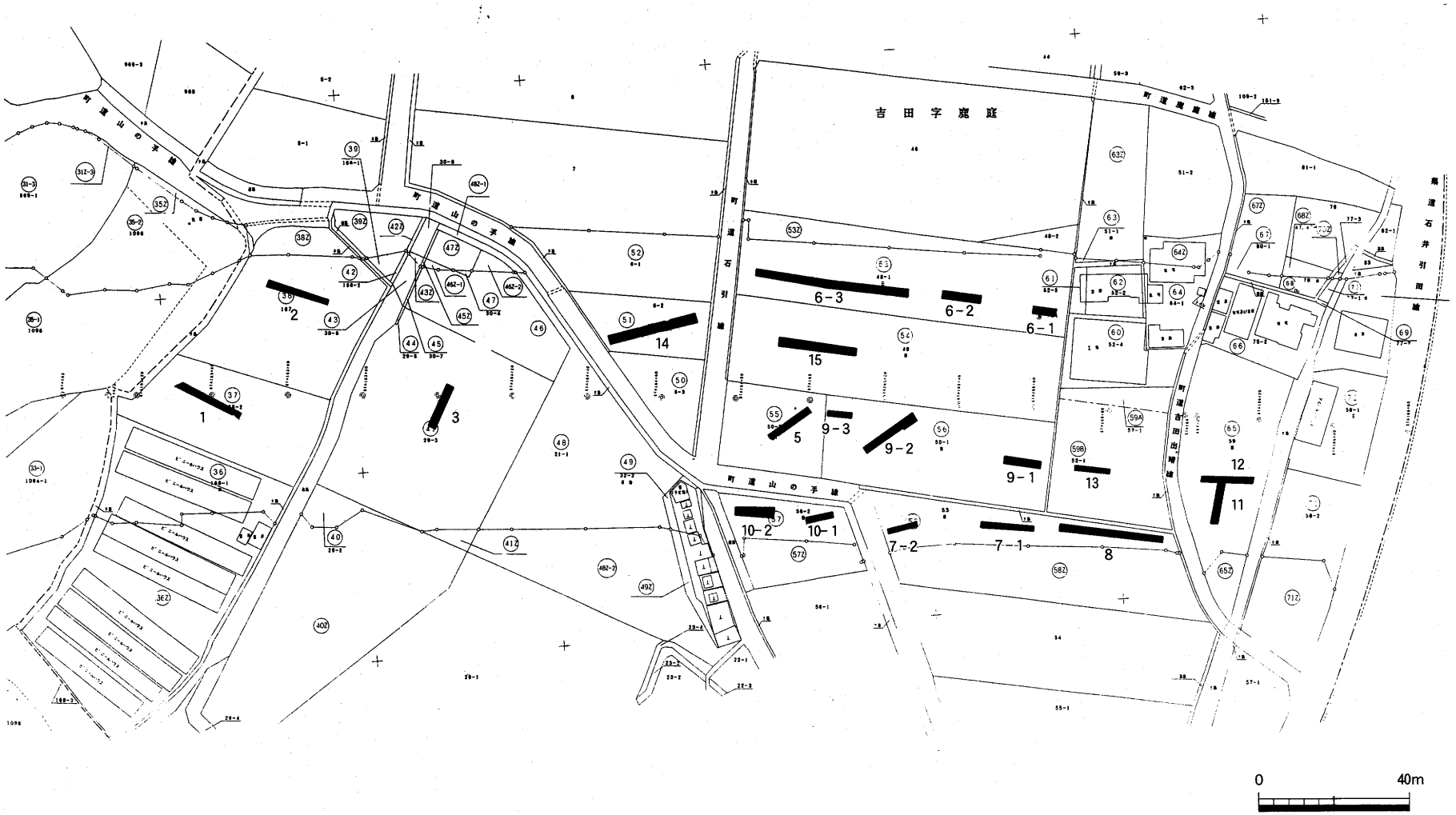
第３節　調査の方法

調査地は南北に走る町道を境にＡ、Ｂという２つの調査区に区分した。各調査区名にはさらに１、２という小区画名を併用して調査を実施したが､本報告では柱穴の報告以外にこの小区画名は使用しない。

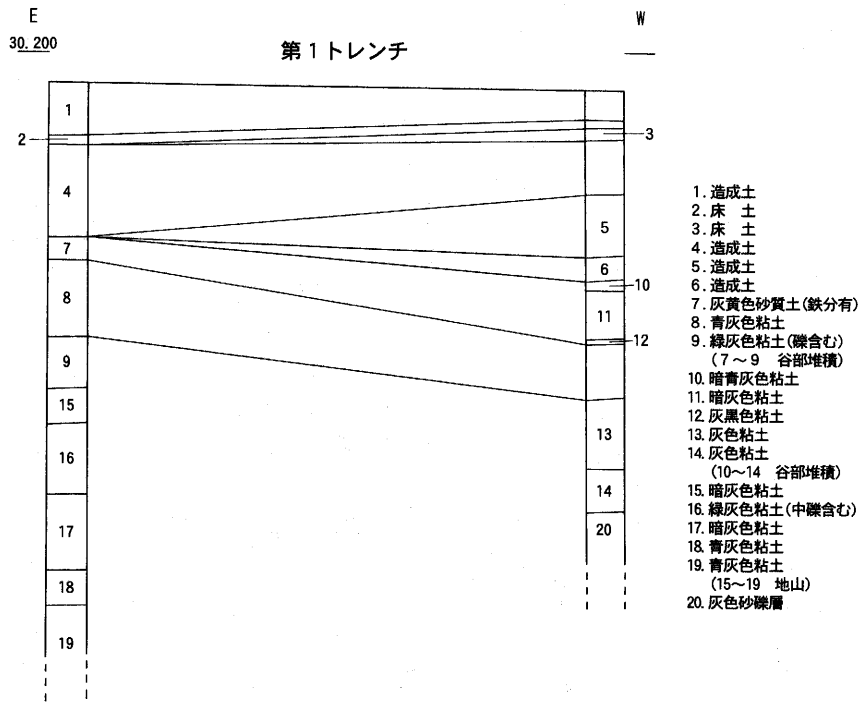
第44図　鹿庭遺跡位置図(1/3000)

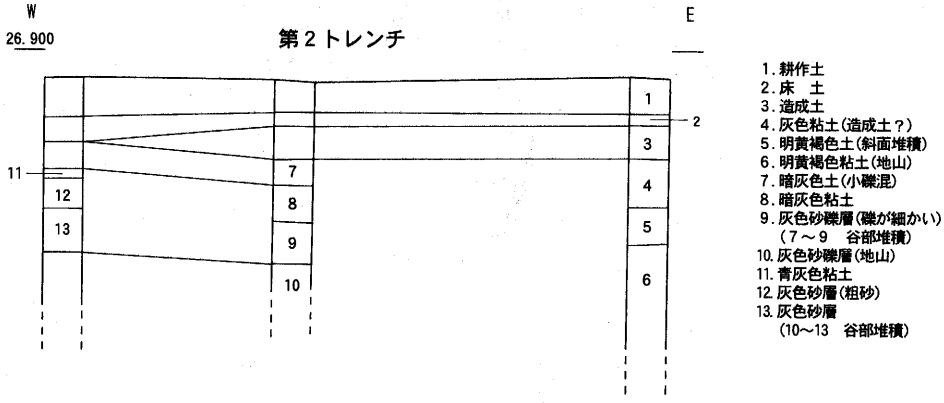


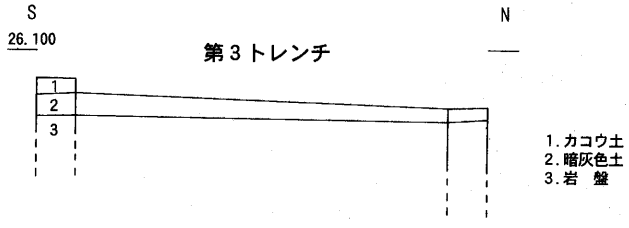
第45図　遺跡周辺地形図（明治22年の地籍図を改変）



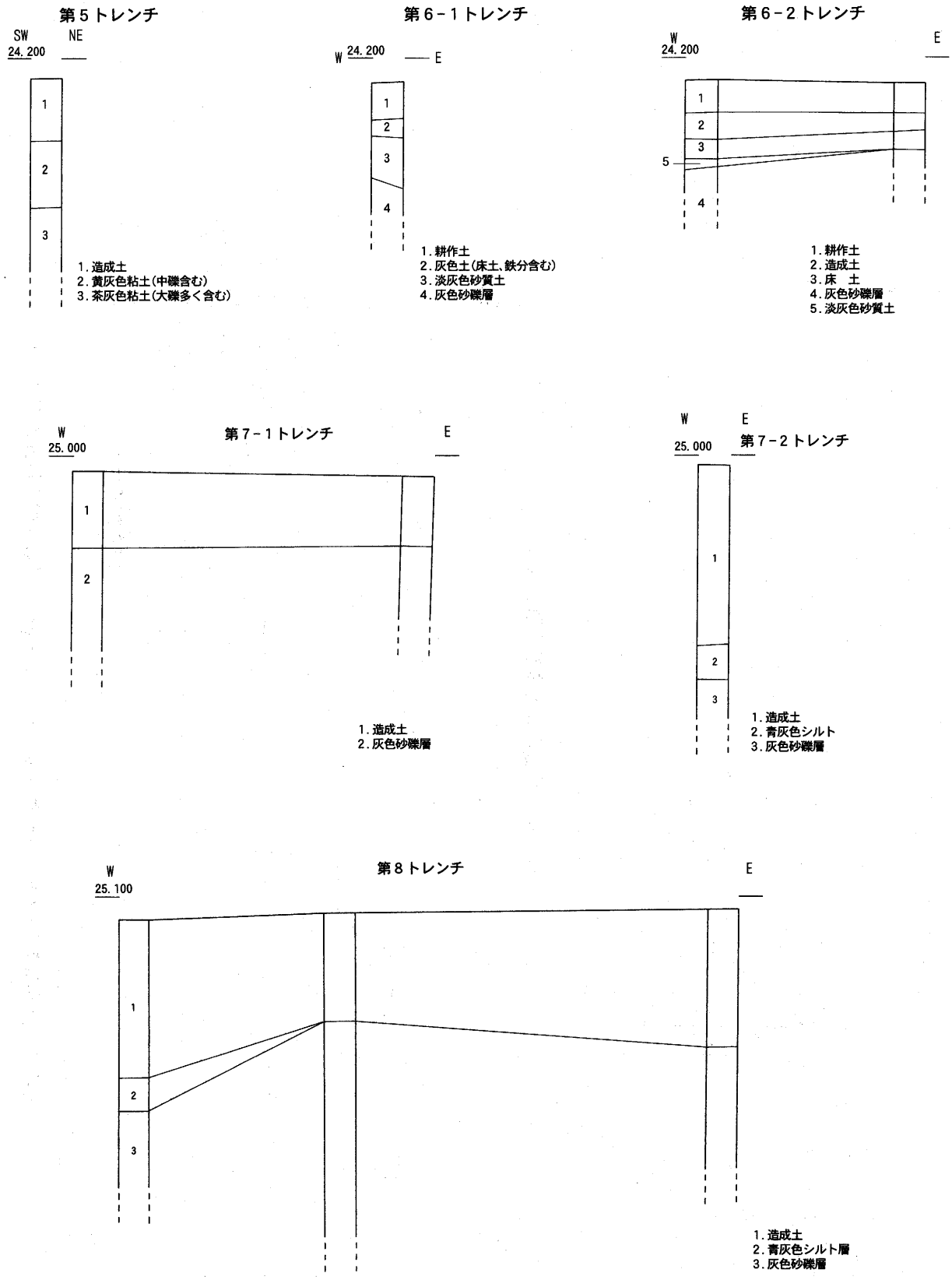
第46図　鹿庭遺跡予備調査トレンチ配置図(1/1500)





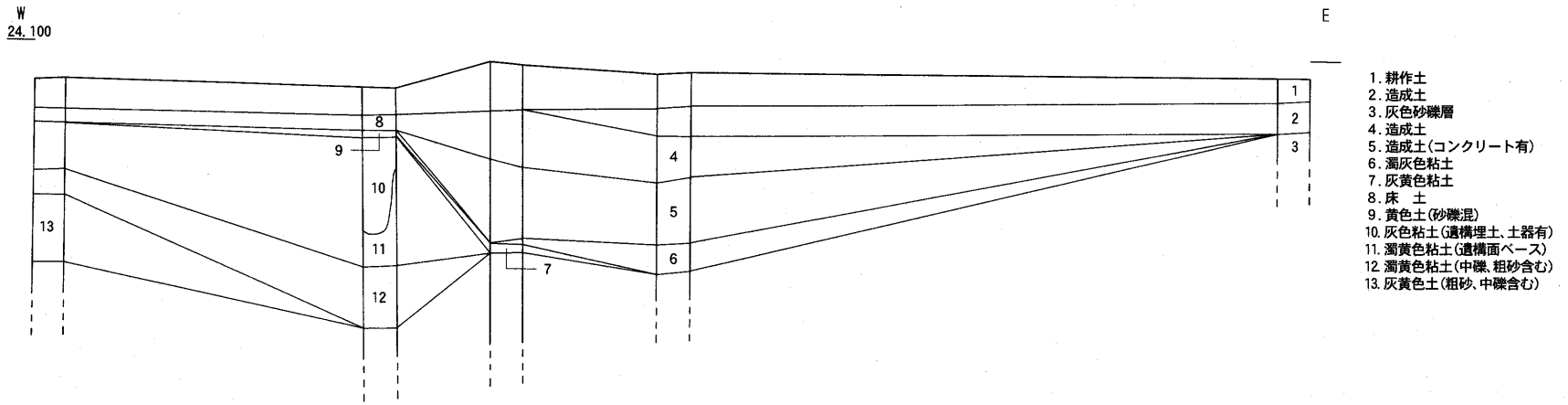


第47図　予備調査トレンチ柱状図(1/40)

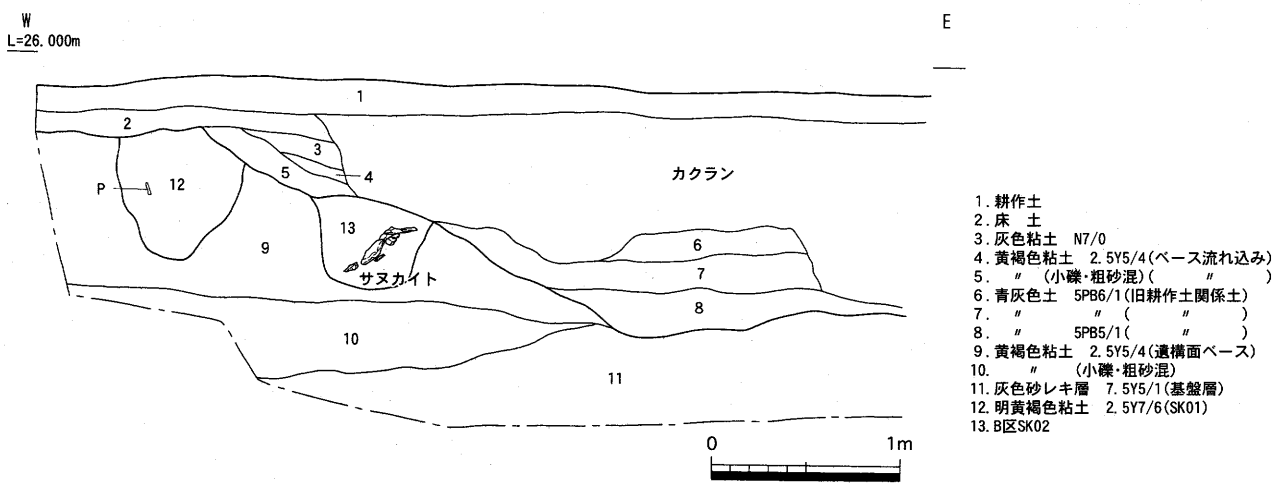


第48図　予備調査トレンチ柱状図(1/40)

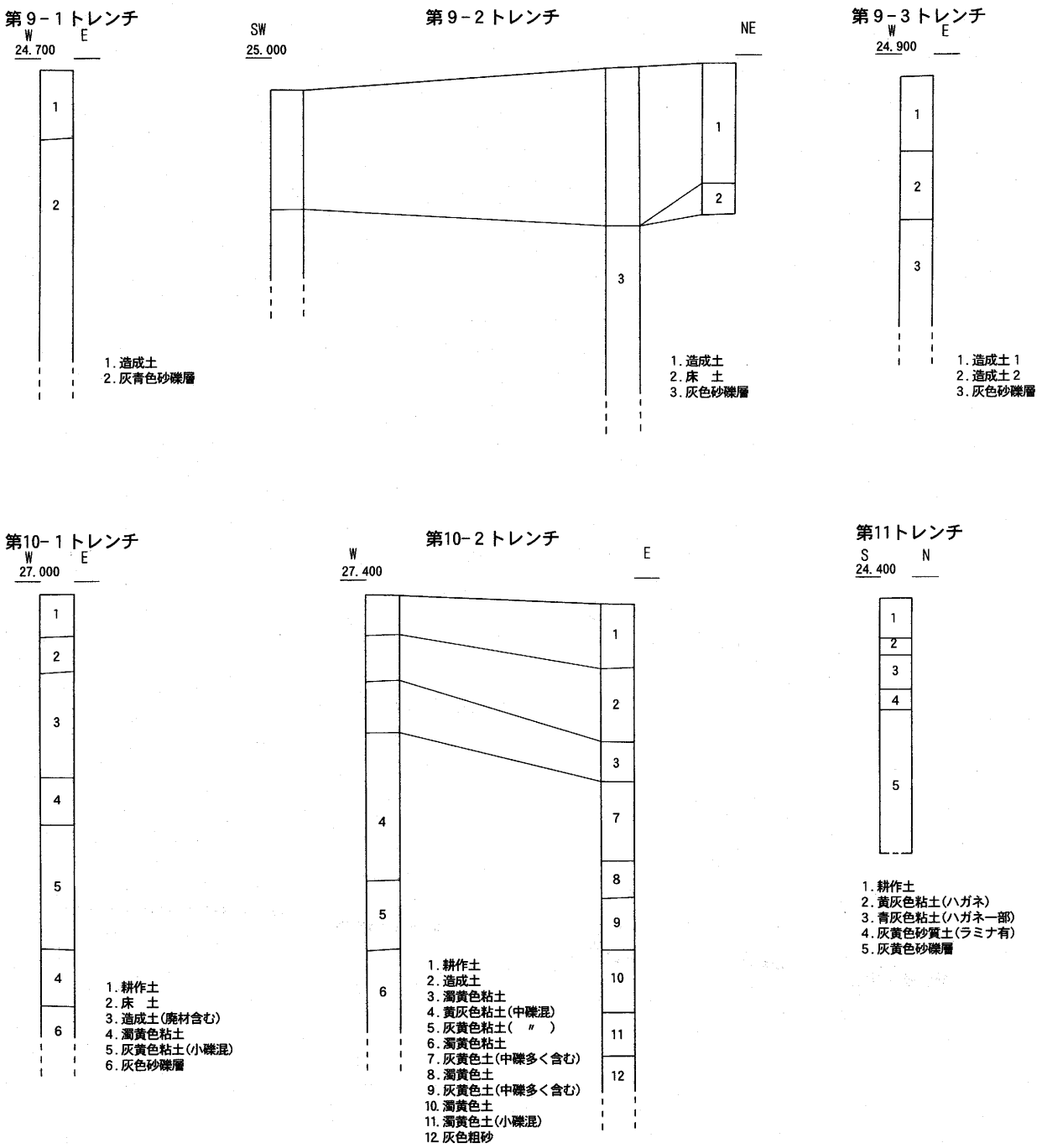
柱状図



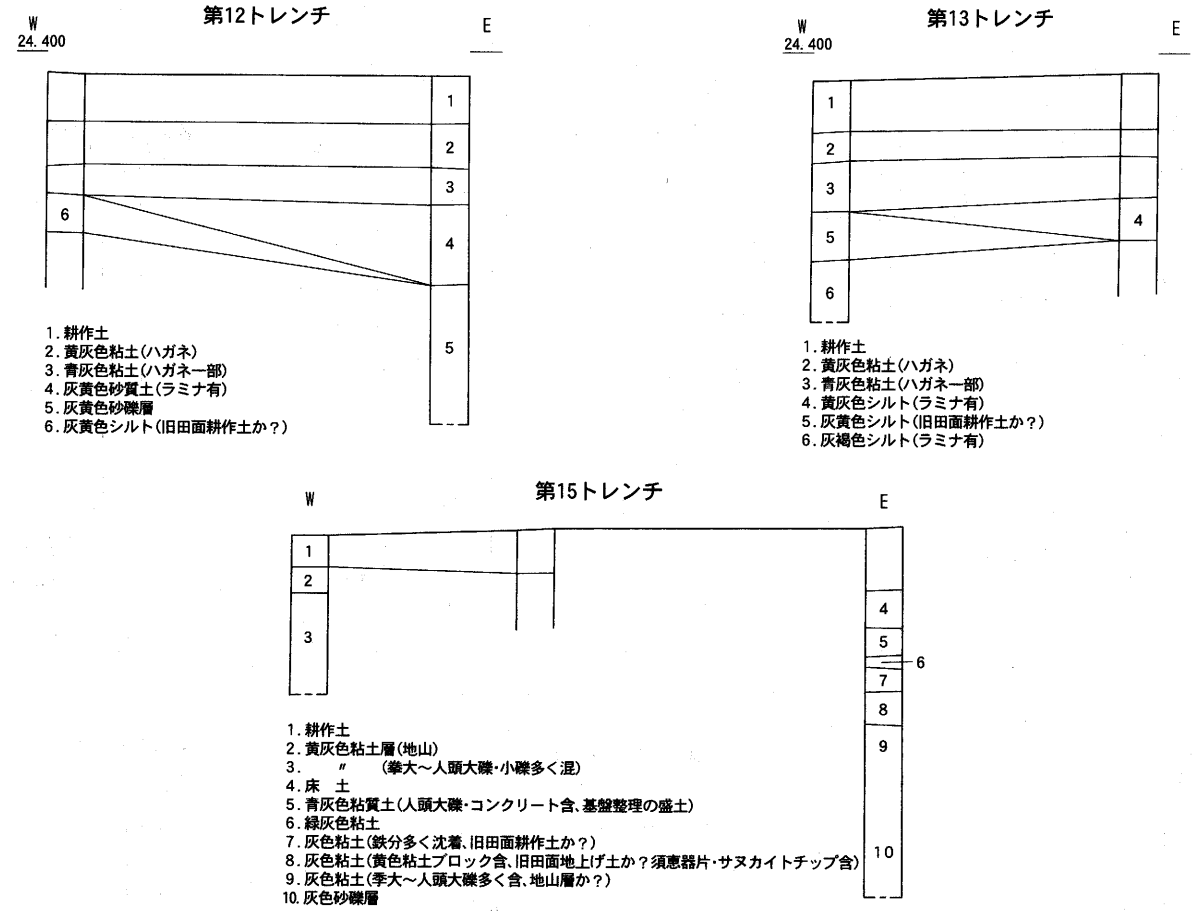
ＳＫ01、02付近北壁土層断面図(1/20)



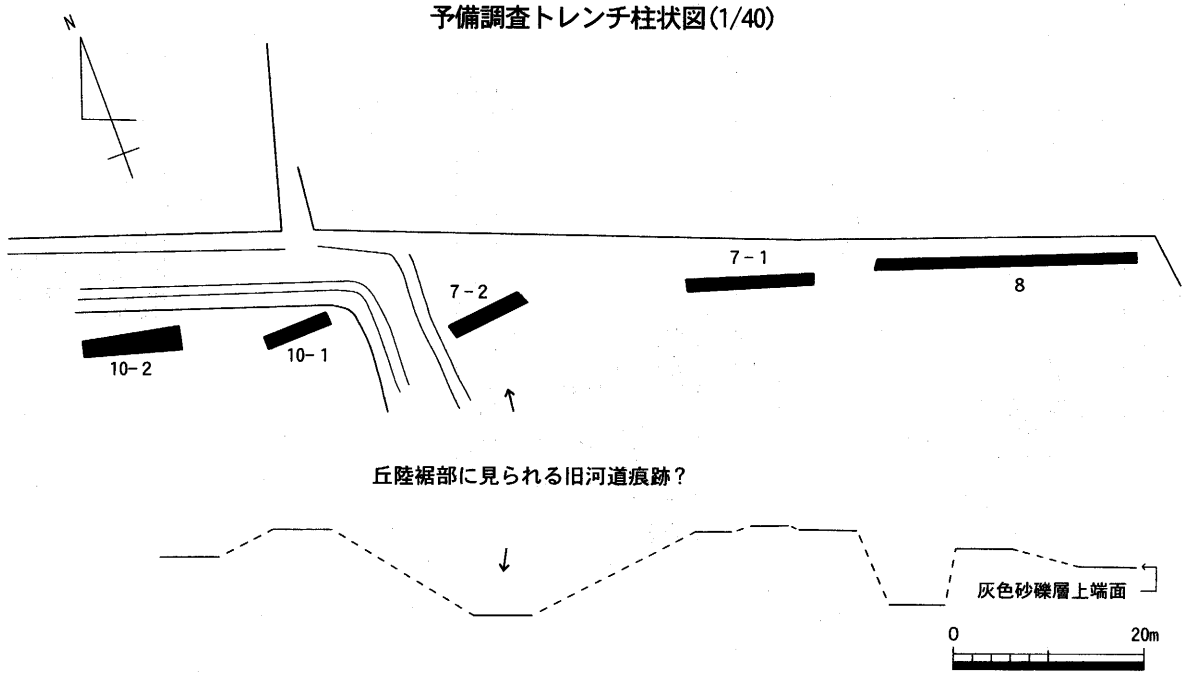
第49図　予備調査６－３トレンチ柱状図(1/40)，ＳＫ01、02付近北壁土層断面図(1/20)



第50図　予備調査トレンチ柱状図(1/40)



予備調査トレンチ柱状図(1/40)



予備調査トレンチ柱状図(1/40)
第51図　トレンチ・灰色砂礫層対応図(1/800)

調査時の遺構番号は調査区および遺構面ごとに1から始まる連番を使用しており、A区ＳＫ01、B区ＳＫ01というように遺構名を付けている。本報告でもこれを踏襲する。また、遺構面が2面になるA区では所属遺構面を遺構説明の記述の中で記載している。

遺構の測量については平面図の作成は主にラジコンヘリによる航空測量で行い、その他は担当者の手書きで実施した。

第4節　調査の成果

1．土層序（第52図）

調査区の大部分では新旧の耕作土および床土、造成土直下で遺構面が確認されるが、このような条件にない部分が2ヶ所ある。A区北東部とB区東部である。まずA区北東部であるが、遺構面が2面ある。基本層序は上から新旧の耕作関係土（A区東壁土層柱状図1～7層）、黒褐色粘土の第1面包含層（同8層）があり、第1面ベース土である黄褐色系粘土（同9～12層）に至る。この下には、にぶい黄褐色粘土の第2面包含層（同11層）が堆積し、第2面ベース土である明黄褐色系粘土（同14～17層。A、B区の大部分における遺構面。）に至る。

遺構面の時期であるが、第1面に属する遺構からは中世土器を中心とした遺物が出土しており、中世と考えられる。なお、第1面包含層（同8層）は中世土器の小片と共に多量のサヌカイト製石器、剥片、チップが含んでおり、最大40cmの層厚で堆積している。第2面については、にぶい黄褐色粘土の第2面包含層（同11層）と第1面ベース土からはサヌカイト製石器が出土しており、第2面の遺構には弥生土器が出土しているものがある。ただ、土器が出土していない遺構が多数を占め、埋土も弥生時代の遺構埋土をその他と区別できないため下限は第1面の時期（中世）以前としかいえない。

次にB区東部であるが、具体的には河岸段丘の斜面以東を指す。斜面部の基本層序（第49図）は上から近年の耕作関係土、灰色粘土、ベース流土である黄褐色粘土があり、遺構面（黄褐色粘土。A区東壁土層柱状図17層と類似。）に至る。この下には扇状地性堆積物である灰色砂礫層が東の馬宿川方面より広がる。また扇状地内では新旧の耕作関係土（2、4～7層）直下で灰色砂礫層が見られる。6－3トレンチ北壁土層断面図（第49図）では攪乱によりベース流土である黄褐色粘土と旧耕作土は重複せず、前後関係は確認できない。だが、土質から考えて前者が古いことが想定される。よって、河岸段丘の斜面は耕作地造成に伴う攪乱がある程度およんでいるものの、旧状を反映していると考えられる。

最後に弥生時代と中世の旧地形について地籍図（第45図）とコンター図（付図。「鹿庭遺跡A区第2遺構面遺構配置図」）、A区壁土層において確認できた包含層残存部での遺構面レベルを基に考えておきたい。まず、地籍図についてであるが、遺跡の南部から西部にかけて「山林」（丘陵）が北へ延びており、遺跡はその先端部に位置することがわかる。調査区内でもA区南端～西端にかけての部分は「山林」となっている。「山林」端部の具体的な状況は不明ながら、周囲が耕地、宅地化されている状況を考えれば、丘陵傾斜面であることが推定される。（註1）以下ではA区西部、A区南部に位置する丘陵の部位をそれぞれ丘陵西部、丘陵北部と仮称する。

次に各時期の地形をコンター図、土層柱状図より考える。弥生時代の遺構面（第2面）では形状を明

確に捉えられていないが、A区東部で浅い谷地形がある。A区東西ライン土層柱状図のB地点、東壁柱状図のH地点で第2面がくぼんでいるのは、これを反映する。東西方向の地形は谷地形より西側にあるC地点付近から斜面となる。これは丘陵西部に近づき、傾斜がきつくなるためと推定される。ただし、D地点以西はほぼ平坦であり、削平を強く受けている。なお、A区東西ラインを東側のB区へ延長した部分の遺構面レベルはA区とほぼ同じ標高24mである。B区は耕作土直下が遺構面であるため旧状をどの程度反映しているか不明であるが、東に向かって下らないとだけ言える。南北方向についてはA区東壁土層柱状図でG～L地点（調査区北端から南に35m）で比高差が約1m（勾配15°）と谷地形も含んでいるが、緩斜面である。これより南側は遺構面が大きく削平されているため旧状が不明であるが、ある部分からは丘陵北部に向かって傾斜がきつくなると考えられる。

よってA区北東部には浅い谷地形、緩斜面があり、A区西部はC地点以西が斜面、A、B区南部はL地点以南のある部分から丘陵斜面になると考えられる。B区北部は不明だが、A区から緩斜面が延びると推測される。

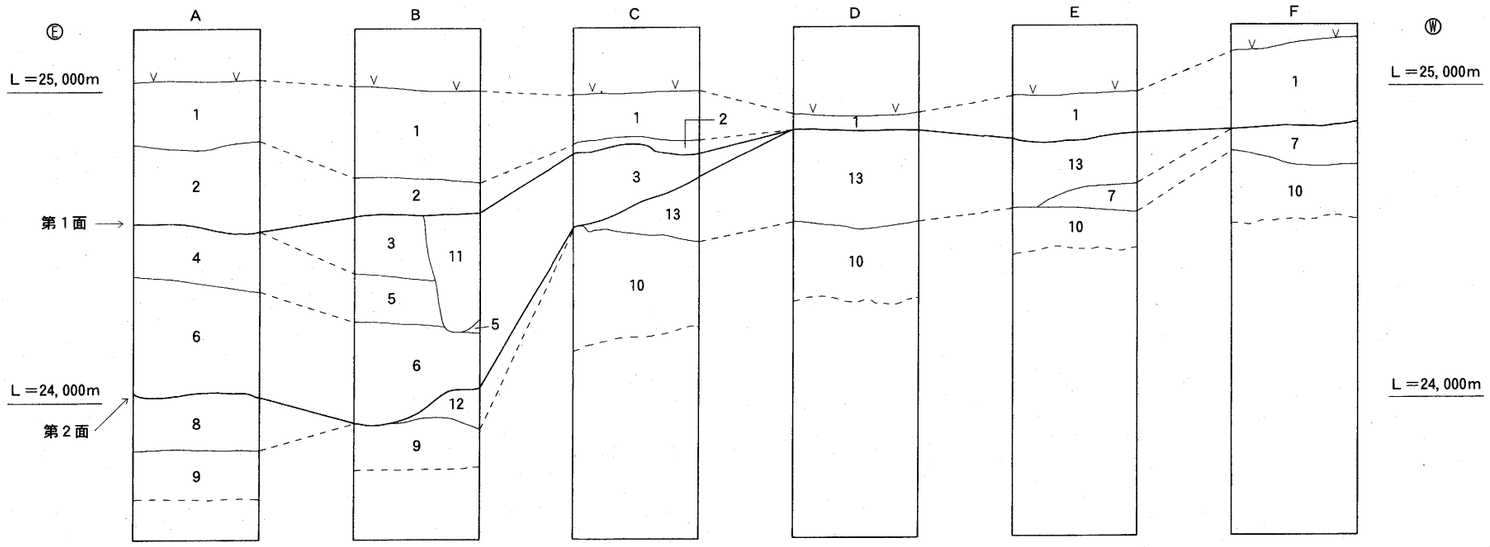
中世の遺構面（第1面）について東西方向は東西ラインA～C地点付近（調査区東端から西へ約12m）で比高差20cmとほぼ平坦である。南北方向はA区東壁土層柱状図でH地点付近からK地点付近にかけて（調査区南端より北へ7mの地点から南へ約16m）比高差が約50cm（勾配17.5°）と第2面と大差ない。だが、第1面と2面の間には30～40cmの土砂が堆積しており、弥生時代の谷地形（東西ライン柱状図B地点）、斜面（東西ライン柱状図C地点）が中世には平坦地化している。削平のため具体的な範囲は不明であるもののこのことから緩斜面の範囲が拡大していると考えられる。

（註1）調査対象地をより厳密に地籍図に対応させるに当たってはA区中央部で東西方向に走る撹乱が有効である。これは図の水路と位置、方向がほぼ一致する。撹乱の埋土はグライ化しており、滞水状況での堆積が想定されることからも水路痕跡であると考えられる。この水路はA区西部に相当する位置で「山林」と緩斜面の境界となっていることから弥生時代、中世期でも撹乱以南が丘陵斜面であったことが想定できる。

2．遺構、遺物

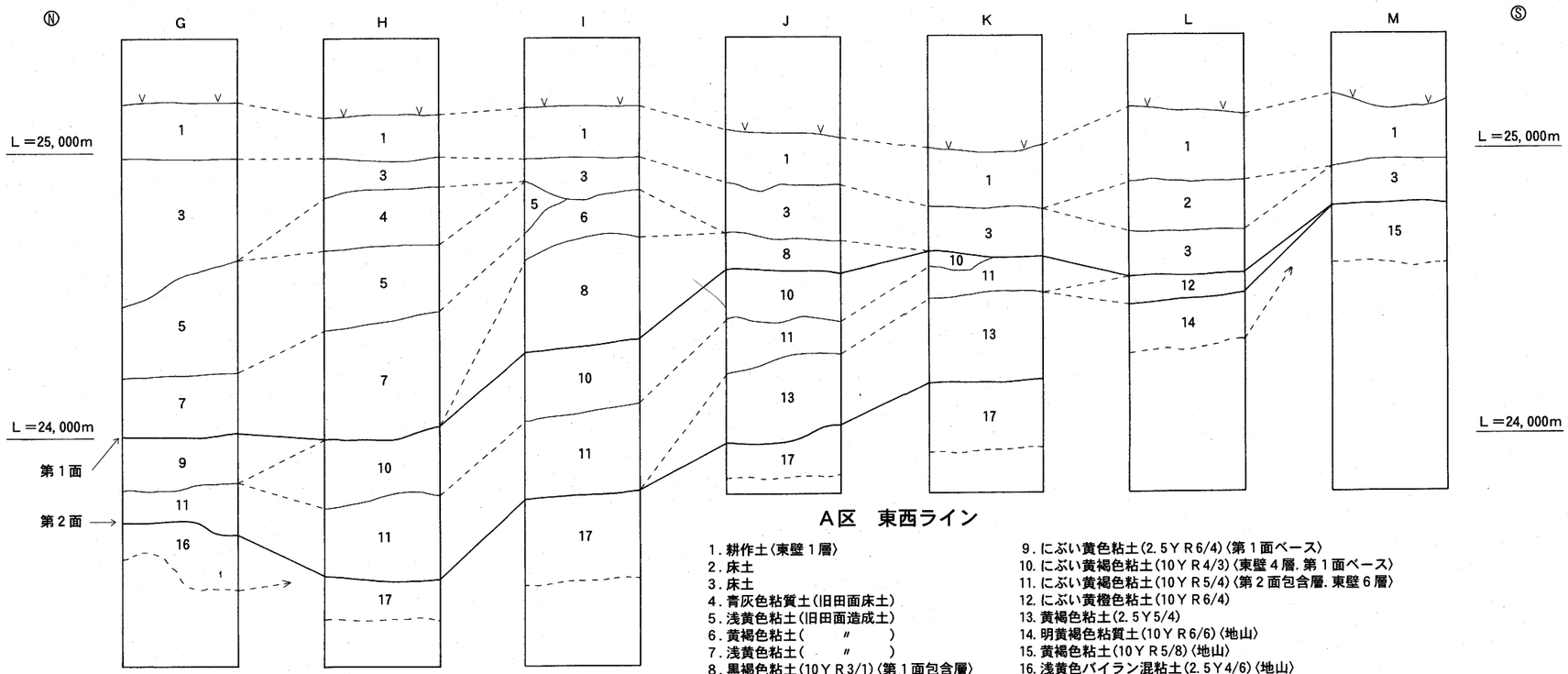
（1）A区の調査

本調査区は調査対象地中央を走る町道の西側に位置する。地形的には南にある丘陵から北へ延びる斜面および緩斜面である。調査区北東部では遺構面が2面確認された。第1面は中世、第2面が弥生時代～中世以前である。北東部以外では遺構面は1面であり、これらの時期の遺構が混在して検出された。以下では遺構面を区分できた北東部以外の遺構は全て第1面に属する遺構として報告する。遺構は第1面では掘立柱建物が北東部に、土坑が北西部から東部にかけて偏って検出された。第2面では土坑、柱穴、溝などがまばらに分布している。掘立柱建物は復元できなかった。なお、南部では遺構が極めて希薄であるが、これは土層序で述べたとおり南部が著しい削平を受けていること、ある部分からは本来丘陵斜面であったことによる。



1. 耕作土
2. 黒褐色粘土（10Ｙ Ｒ 3/1）〈第１面包含層〉
3. にぶい黄色粘土（2.5Ｙ 6/4）〈第１面ベース〉
4. にぶい黄褐色粘土（10Ｙ Ｒ 4/3）〈第１面ベース〉
5. にぶい黄色混砂粘土（2.5Ｙ 6/4）
6. にぶい黄褐色粘土（10Ｙ Ｒ 5/4）
7. 明黄褐色粘土（10Ｙ Ｒ 6/6）〈地山〉
8. 黄褐色粘土（10Ｙ Ｒ 5/6）〈地山。Ｂ区遺構面ベース土と酷似〉
9. にぶい黄褐色混砂利粘土（10Ｙ Ｒ 5/4）〈地山〉
10. 明黄褐色粘土（10Ｙ Ｒ 6/6）
11. 黒褐色粘土（10Ｙ Ｒ 3/2）〈柱穴〉
12. 黄褐色混砂粘土（2.5Ｙ 5/4）〈土坑〉

Ａ区　東壁



Ａ区　東西ライン

1. 耕作土〈東壁１層〉
2. 床土
3. 床土
4. 青灰色粘質土（旧田面床土）
5. 浅黄色粘土（旧田面造成土）
6. 黄褐色粘土（　〃　）
7. 浅黄色粘土（　〃　）
8. 黒褐色粘土（10Ｙ Ｒ 3/1）〈第１面包含層〉〈東壁２層〉
9. にぶい黄色粘土（2.5Ｙ Ｒ 6/4）〈第１面ベース〉
10. にぶい黄褐色粘土（10Ｙ Ｒ 4/3）〈東壁４層．第１面ベース〉
11. にぶい黄褐色粘土（10Ｙ Ｒ 5/4）〈第２面包含層．東壁６層〉
12. にぶい黄橙色粘土（10Ｙ Ｒ 6/4）
13. 黄褐色粘土（2.5Ｙ 5/4）
14. 明黄褐色粘質土（10Ｙ Ｒ 6/6）〈地山〉
15. 黄褐色粘土（10Ｙ Ｒ 5/8）〈地山〉
16. 浅黄色パイラン混粘土（2.5Ｙ 4/6）〈地山〉
17. 黄褐色粘土（10Ｙ Ｒ 5/6）〈地山〉〈東壁８層〉

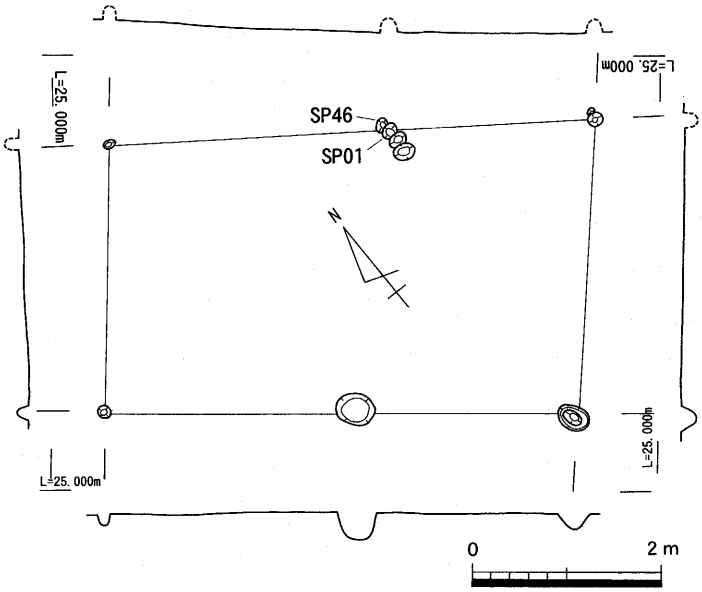
第52図　土層柱状図

第１面の遺構、遺物

（１）建物

ＳＢ 01（第 53 図）

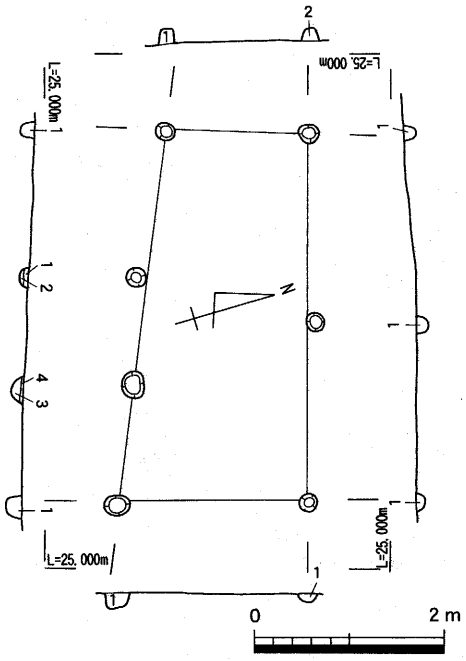
調査区の東部で検出した側柱建物である。北に約１ｍ離れて、主軸方向が類似するＳＢ 08 が位置する。規模は梁間１間×桁行２間（2、98×5、06 ｍ。床面積 15、08 ㎡。）である。主軸方向はＮ－ 49、5°－Ｗである。柱穴の平面形は円形であり、径 15 ～ 40ｃｍ、深さ 12 ～ 28ｃｍを測る。出土遺物はないが、中世の土師器細片が出土したＳＰ 46 をＳＰ 01 が切るため建物の時期は中世と考えられる。



第53図　Ａ区第１面ＳＢ01平・断面図(1/80)

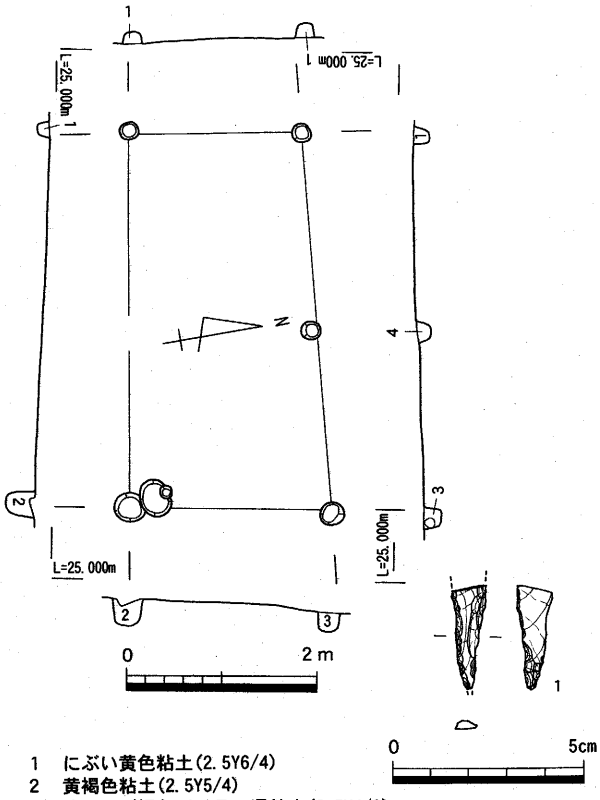
ＳＢ 02（第 54 図）

調査区の北東部で検出した側柱建物である。規模は梁間１間×桁行２間（2×4 ｍ。床面積 8 ㎡。）である。南側桁行は４基の柱穴からなり、柱間は 1､08 ～ 1､52 ｍとばらつく。主軸方向はＷ－ 23、5°－Ｎである。柱穴の平面形は円形であり、径 20 ～ 28cm、深さ 10 ～ 18cmを測る。出土遺物はないが、検出遺構面より中世と考えられる。



1　灰黄色粘土(2.5YR6/2)
2　灰色粘土(7.5Y5/1)
3　灰オリーブ色粘土(5Y6/2)
4　にぶい黄色バイラン混粘土(2.5YR6/4)

第54図　Ａ区第１面ＳＢ02平・断面図(1/80)



1　にぶい黄色粘土(2.5Y6/4)
2　黄褐色粘土(2.5Y5/4)
3　オリーブ褐色バイラン混粘土(2.5Y4/6)
4　にぶい黄橙色粘土(10YR6/4)

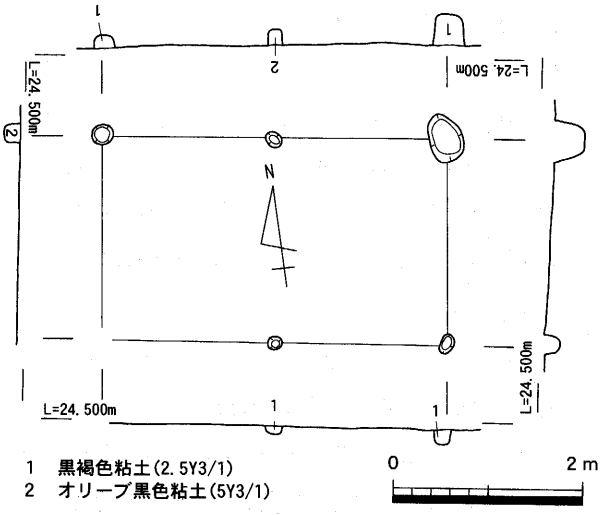
第55図　Ａ区第１面ＳＢ03平・断面図(1/80)，出土遺物(1/2)

ＳＢ 03（第 55 図）

調査区の北東部で検出した側柱建物である。規模は梁間１間×桁行２間(1、8×4、2 m。床面積 7、56 ㎡。)である。南側桁行は中央の柱穴を欠く。主軸方向はW－９、5°－Nである。柱穴の平面形は円形であり、径 20 ～ 35cm、深さ 12 ～ 35cmを測る。出土遺物は石錐（１）がある。１は先端部に丁寧な細部調整を行う。建物の時期は検出遺構面より中世と考えられる。

ＳＢ 04（第 56 図）

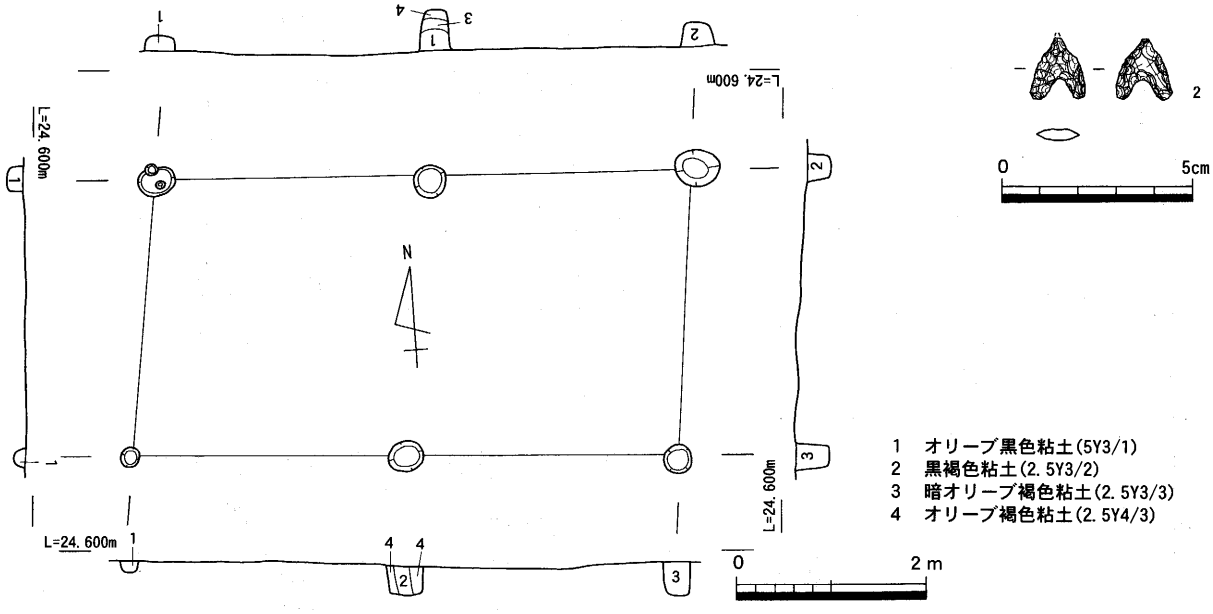
調査区の北東部で検出した側柱建物である。規模は梁間１間×桁行２間（2、18×3、62 m。床面積 7、89 ㎡。）である。主軸方向はW－９、5°－Nである。柱穴の平面形は円形であり、径 15 ～ 50cm、深さ 10 ～ 32cmを測る。出土遺物はないが、埋土より中世と考えられる。



第56図　Ａ区第１面ＳＢ04平・断面図(1/80)

ＳＢ 05（第 57 図）

調査区の北東部で検出した側柱建物である。規模は梁間１間×桁行２間(3、02×5、78 m。床面積 17、46 ㎡。）である。主軸方向はW－ 4°－Nである。柱穴の平面形は円形であり、径 20 ～ 48cm、深さ 12 ～ 44cmを測る。出土遺物は石鏃（2）がある。２は深い抉りを持つ鍬形鏃である。縄文時代前期と考えられる。建物の時期は埋土より中世と考えられる。



第57図　Ａ区第１面ＳＢ05平・断面図(1/80)，出土遺物(1/2)

ＳＢ 06（第 58 図）

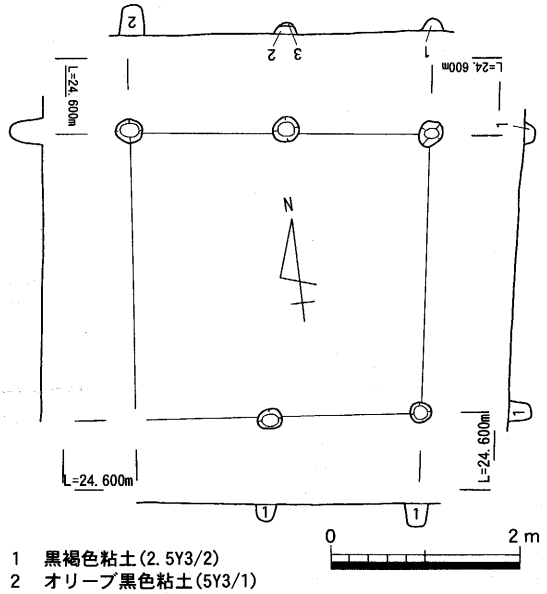
調査区の北東部で検出した側柱建物である。規模は梁間１間×桁行２間(3×3、18 m。床面積 9、54 ㎡。)である。主軸方向はW－８、5°－Nである。柱穴の平面形は円形であり、径約 25 cm、深さ 12 ～ 32 cmを測る。出土遺物はないが、埋土より中世と考えられる。

ＳＢ07（第59図）

調査区の北東部で検出した側柱建物である。規模は梁間１間×桁行２間（1、9×3、3ｍ。床面積６、27㎡。）である。主軸方向はW－23、5°－Nである。柱穴の平面形は円形であり、径20～30cm、深さ8～32cmを測る。出土遺物は土師器杯（3）、亀山焼甕（4）がある。3は底部を糸切りする。4は外面に格子目叩きを施す。3より13世紀後半～14世紀代と考えられる。

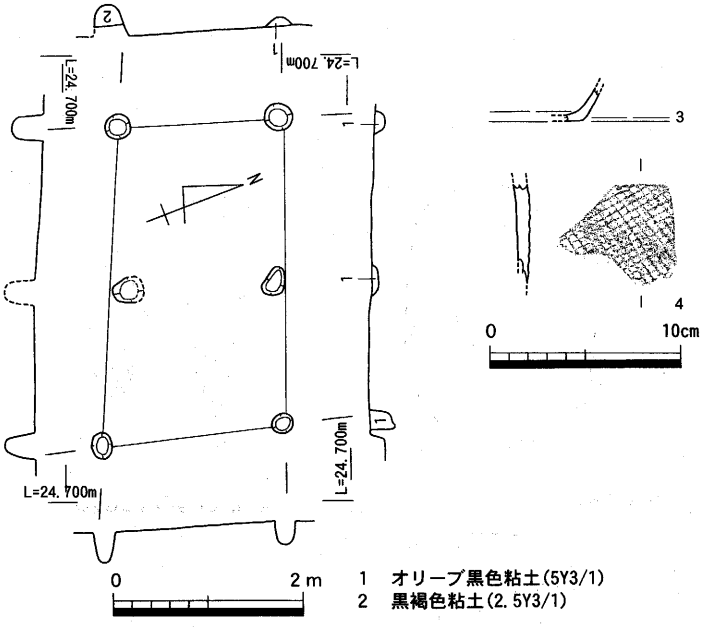
ＳＢ08（第60図）

調査区の東部で検出した側柱建物である。規模は梁間１間×桁行２間（2、4×4、3ｍ。床面積10、32㎡。）である。主軸方向はW－、5°－Nである。柱穴の平面形は円形であり、径15～36cm、深さ8～32cmを測る。出土遺物はないが、検出遺構面より中世と考えられる。



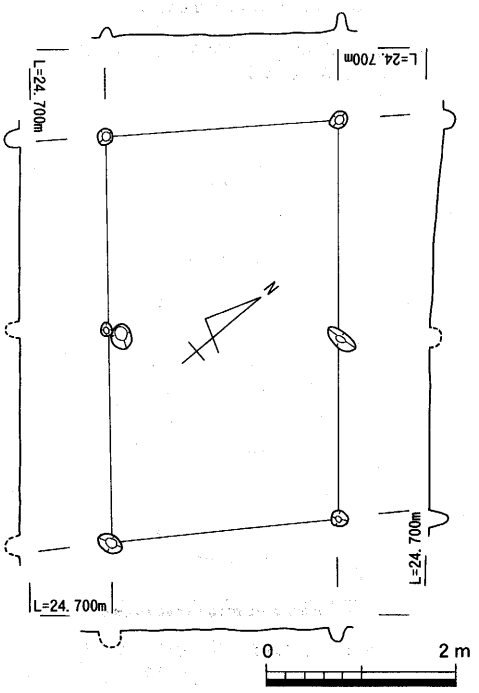
1　黒褐色粘土(2.5Y3/2)
2　オリーブ黒色粘土(5Y3/1)
3　暗灰黄色粘土(2.5Y4/2)

第58図　Ａ区第１面ＳＢ06平・断面図(1/80)



1　オリーブ黒色粘土(5Y3/1)
2　黒褐色粘土(2.5Y3/1)

第59図　Ａ区第１面ＳＢ07平・断面図(1/80)，出土遺物(1/4)

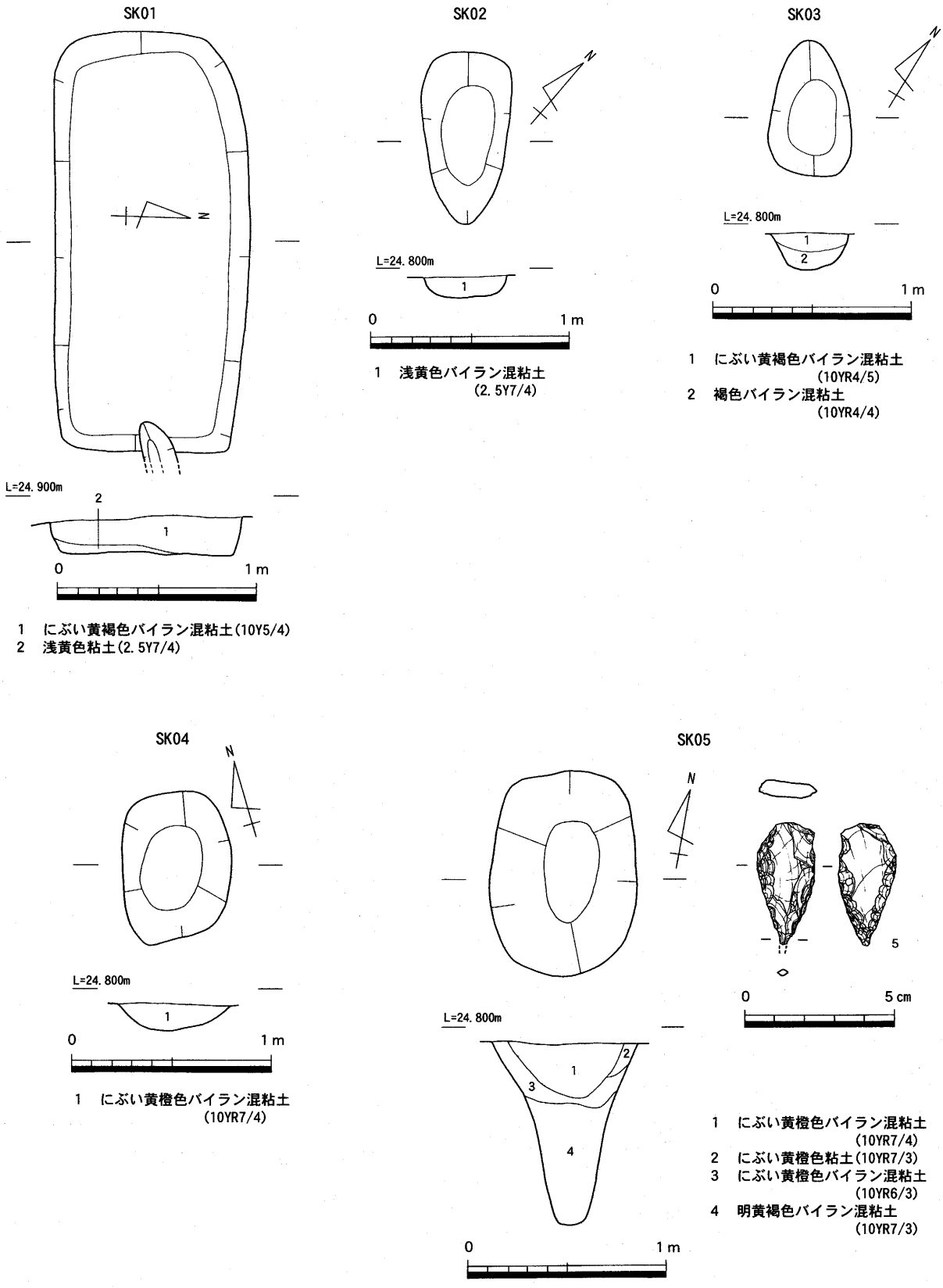


第60図　Ａ区第１面ＳＢ08平・断面図(1/80)

(2) 土坑

ＳＫ01（第61図）

調査区西部で検出した土坑である。他の土坑が相互に近接する中でやや離れて位置する。平面形は長方形、断面形は箱形であり、壁面はほぼ直に落ちる。床面は平坦である。規模は長径2、15ｍ、短径１ｍ、深さ20cmを測る。主軸方向はＥ－2°－Ｎである。出土遺物はない。土坑の規模、平・断面形態、床面が平らなことを考えれば、墓である可能性もある。だが、人骨、木棺、鉄釘、副葬品といった墓であることを示す直接的な痕跡は見いだせなかった。



第61図　A区第1面SK01～SK05平・断面図(1/30), 出土遺物(1/2)

ＳＫ 02（第 61 図）

調査区北西部で検出した土坑である。南東に 40cm離れてＳＫ 03 が検出されている他、半径 2､5 m の円内にＳＫ 03 ～ 05 が位置する。平面形は三角形に近く、南東部では細くなる。断面形は逆台形を呈する。規模は長径 89cm、短径 42cm、深さ 11cmを測る。主軸方向はＮ－ 40 、3°－Ｗである。出土遺物はない。

ＳＫ 03（第 61 図）

調査区北西部で検出した土坑である。平面形は三角形に近く、北部では細くなる。断面形は逆台形を呈する。規模は長径 71cm、短径 42cm、深さ 19cmを測る。主軸方向はＮ－ 33 、5°－Ｗである。出土遺物はない。

ＳＫ 04（第 61 図）

調査区北西部で検出した土坑である。平面形は長方形であり、断面形は浅い皿状を呈する。規模は長径 75cm、短径 56cm、深さ 14cmを測る。主軸方向はＮ－ 14°－Ｅである。出土遺物はない。

ＳＫ 05（第 61 図）

調査区北西部で検出した土坑である。平面形は長方形であり、断面形はすり鉢状を呈し、上部は傾斜が緩いが、下部はほぼ直に落ちる。規模は長径 1､05 m、短径 77cm、深さ 90cmを測る。主軸方向はＮ－ 9 、7°－Ｗである。出土遺物は石錐（5)、少量のチップ、チャートの小片がある。5 は平面形が細い逆三角形になっており、先端部に小さな錐部を作り出している。チャートは遺跡内でこの 1 点のみ出土している。

ＳＫ 06（第 62 図）

調査区北西部で検出した土坑である。東側に 50cmも開けずに、主軸方向が類似するＳＫ 15 、16 が位置する。平面形は溝状を呈する細長い長方形で、中央で東に折れる。断面形は浅い皿状を呈する。規模は長径 2､1 m、短径 59cm、深さ 7cmを測る。主軸方向はＮ－ 18°－Ｅである。出土遺物はない。

ＳＫ 07（第 62 図）

調査区北西部で検出した土坑である。東側をＳＫ 08 に切られる。半径 2 mの円内に他にＳＫ 09 ～ 11 、14 が位置する。平面形は長方形で、断面形は浅い皿状を呈する。規模は長径 1､17 m、短径 56cm、深さ 7cmを測る。主軸方向はＷ－ 39°－Ｎである。出土遺物はない。

ＳＫ 08（第 62 図）

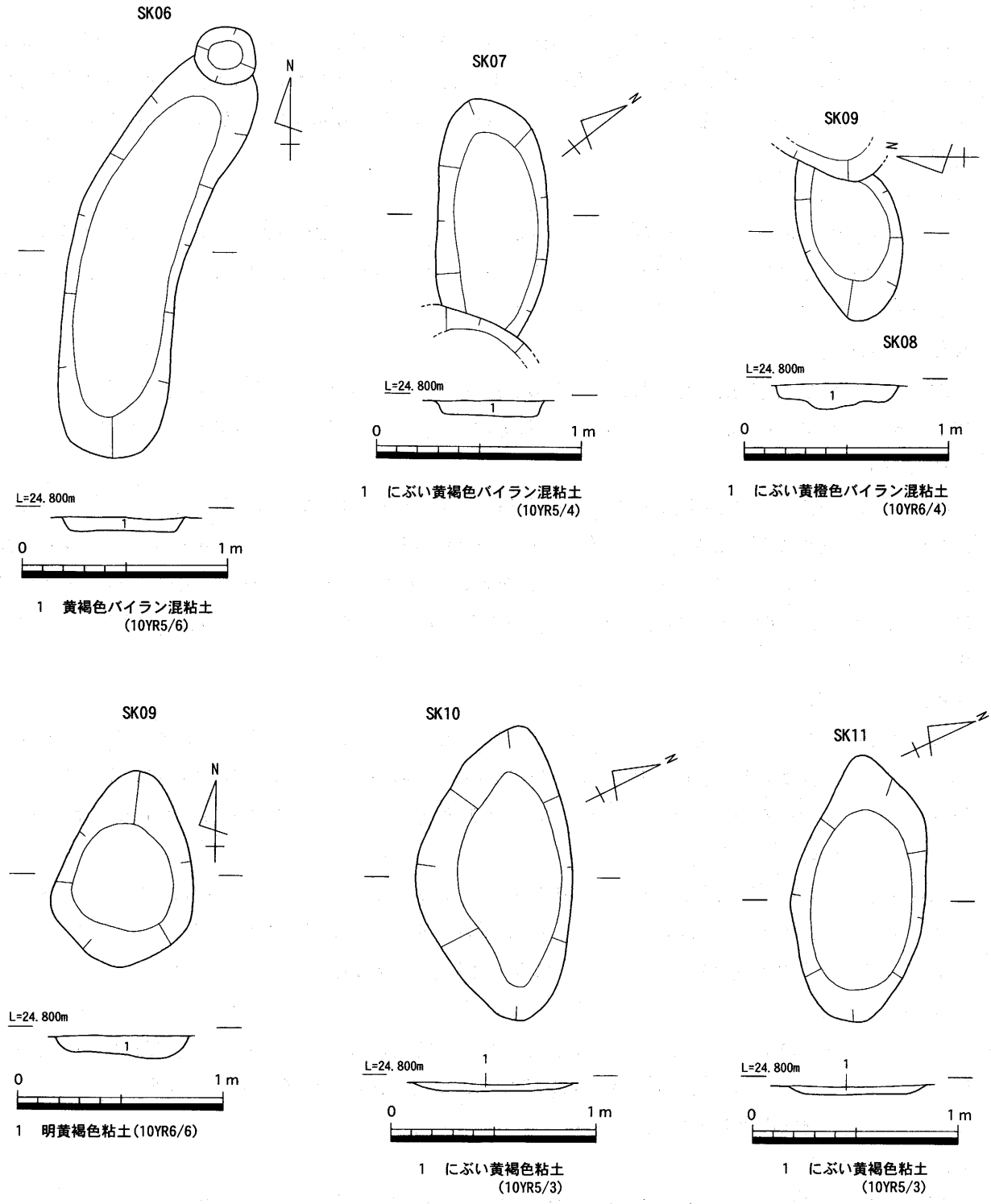
調査区北西部で検出した土坑である。東側をＳＫ 09 に切られる。平面形は楕円形であり、断面形は浅い皿状を呈する。規模は長径 81cm、短径 53cm、深さ 14cmを測る。主軸方向はＥ－ 9 、5°－Ｎである。出土遺物は時期不詳の土器片が 1 片、チップが 2 点ある。

ＳＫ 09（第 62 図）

調査区北西部で検出した土坑である。平面形はいびつな方形であり、北、南側に向かって細くなる。断面形は浅い皿状を呈する。規模は長径 96cm、短径 66cm、深さ 9cmを測る。主軸方向はＮ－ 6°－Ｅである。出土遺物はない。

ＳＫ 10（第 62 図）

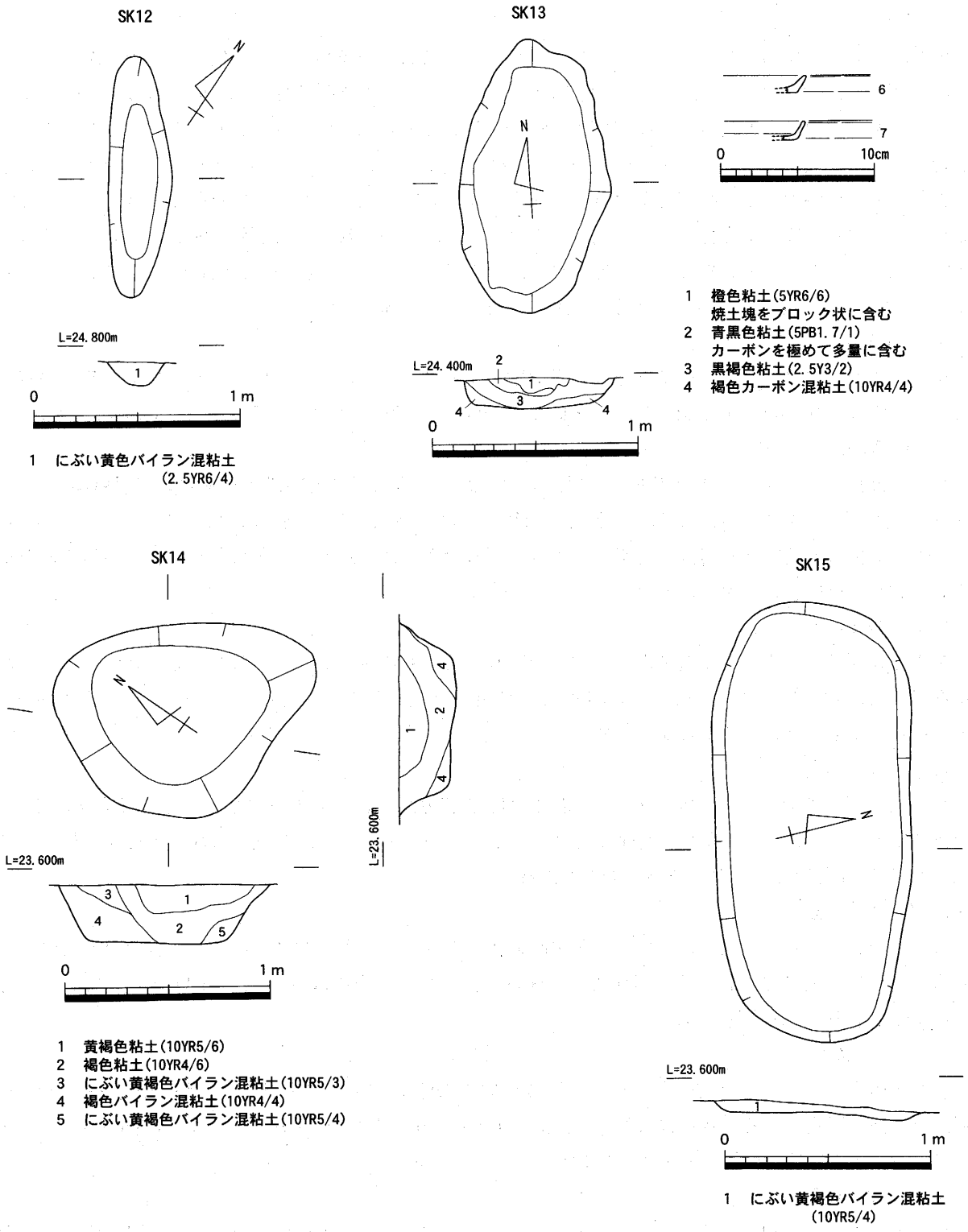
調査区北西部で検出した土坑である。平面形は北辺が長い台形状を呈する。断面形はきわめて浅い皿状である。規模は長径 1､47 m、短径 78cm、深さ 4cmを測る。主軸方向はＮ－ 25 、5°－Ｗである。出土遺物はない。



第62図　A区第1面SK06～SK11平・断面図(1/30)

SK11（第62図）

調査区北西部で検出した土坑である。平面形は楕円形、断面形はきわめて浅い皿状を呈する。規模は長径1、34m、短径68cm、深さ5cmを測る。主軸方向はN－24、5°－Wである。出土遺物はない。



第63図　A区第1面SK12～SK15平・断面図(1/30), 出土遺物(1/4)

SK 12 (第 63 図)

調査区北西隅で検出した土坑である。南東に約2、2 m離れて主軸方向がほぼ直交するSK 17 がある。平面形は細長い楕円形、断面形は逆台形を呈する。規模は長径 1、22 m、短径 32cm、深さ 12cmを測る。主軸方向はE－32、5°－Nである。出土遺物はない。

ＳＫ 13（第 63 図）

調査区北東部で検出した土坑である。検出面は第１遺構面上に堆積した中世包含層上面である。他にもこの面から掘削された遺構がないか精査を行ったが、ＳＫ 13 のみであった。平面形はややいびつな楕円形、断面形は逆台形を呈する。規模は長径 1､35 m、短径 66cm、深さ 17cmを測る。１層で焼土と焼土塊、２、３層で多量の炭が出土している。検出時に中央で焼土が、外縁部で炭が区分されて確認できたため何らかの焼成施設である可能性を考えて調査を行った。だが、土層断面の観察で１層は純粋な焼土層でなく、焼土塊を含むこと、焼土層下位で被熱が認められないことが判明した。よって他の場所で焼成を行った際に生じた焼土、炭を廃棄した土坑であると考えられる。出土遺物は土師器杯、小皿（6、7）などがある。6、7 は 2 層より出土している。6 は底部を糸切りする。

ＳＫ 14（第 63 図）

調査区北西部で検出した土坑である。平面形はややいびつな台形、断面形は逆台形を呈する。規模は長径１、19 m、短径 99cm、深さ 30cmを測る。主軸方向はＮ－ 34、2°－Ｅである。出土遺物はない。

ＳＫ 15（第 63 図）

調査区北西部で検出した土坑である。平面形は長方形、断面形は浅い皿形を呈する。規模は長径２、19 m、短径１m、深さ 6cmを測る。主軸方向はＷ－ 13°－Ｎである。出土遺物はフレイクが１点ある。平面形、規模より墓である可能性を考えて調査を行ったが、残りが悪いこともあり、墓であることを示す直接的な痕跡は見いだせなかった。

ＳＫ 16（第 64 図）

調査区北西部で検出した土坑である。平面形は長方形であるが、北辺で少し抉れる。断面形は浅い皿状を呈する。規模は長径 1､05 m、短径 84cm、深さ 7cmを測る。主軸方向はＷ－ 5、5°－Ｎである。出土遺物は時期不詳の土器細片が１点ある。

ＳＫ 17（第 64 図）

調査区北西部で検出した土坑である。平面形は長方形､断面形は逆台形を呈する。規模は長径 1､67 m、短径 92cm、深さ 22cmを測る。主軸方向はＷ－ 37､5°－Ｎである。出土遺物はない。形態、規模で類似するＳＫ 15 と近接し、墓である可能性もある。

ＳＫ 18（第 64 図）

調査区中央部で検出した土坑である。調査時の排水トレンチにより北端部を確認できなかったが、平面形は円形、断面形は浅い皿状を呈する。床面は凹凸がある。規模は南北 1､19 m以上、東西１、41 m、深さ 12cmを測る。出土遺物はない。

ＳＫ 19（第 64 図）

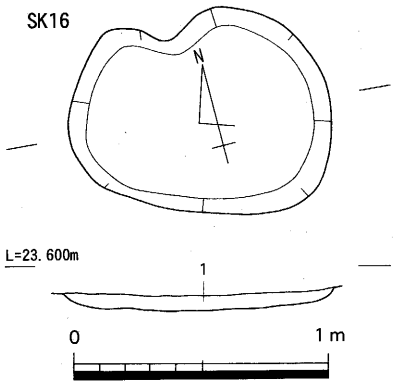
調査区中央部で検出した土坑である。ＳＫ 20、21 を切る。平面形は方形であるが、南辺がやや長い。断面形は逆台形を呈する。規模は長径 1､25 m、短径 98cm、深さ 28cmを測る。主軸方向はＮ－ 9°－Ｅである。出土遺物は時期不詳の土器細片が１点ある。

ＳＫ 20（第 64 図）

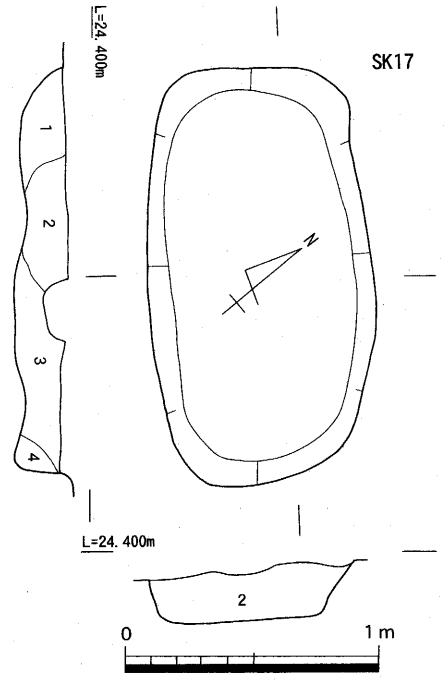
調査区中央部で検出した土坑である。平面形は長方形であるが、西半分をＳＫ 19 に切られる。断面形は逆台形を呈する。規模は長径 75cm、短径 26cm、深さ 36cmを測る。主軸方向はＮ－ 2、5°－Ｅである。出土遺物はない。

ＳＫ 21（第 64 図）

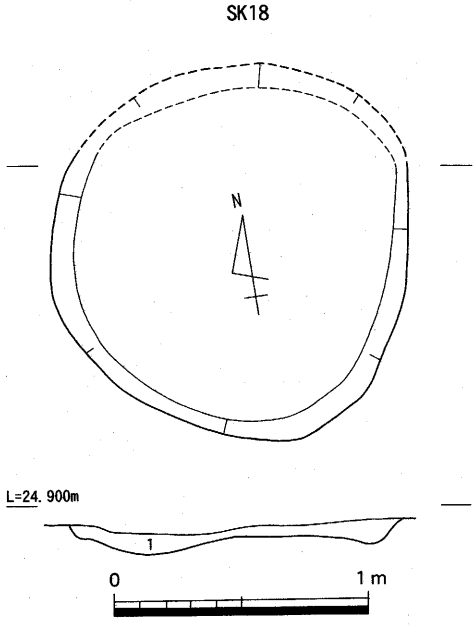
調査区中央部で検出した土坑である。平面形は細長い長方形であり、南東部をＳＫ 19 に切られる。断面形は逆台形を呈する。規模は長径 1､17 m、短径 41 cm、深さ 31 cmを測る。主軸方向はＮ－ 11、5°－Ｅである。出土遺物はない。



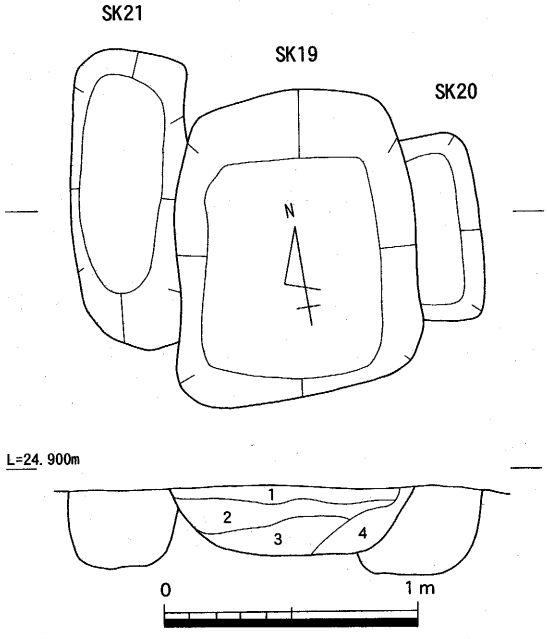
1　にぶい黄褐色バイラン混粘土
(10YR5/4)



1　にぶい黄褐色バイラン混粘土(2.5YR6/4)
2　明黄褐色バイラン混粘土(10YR6/6)
3　浅黄色バイラン混粘土(2.5YR7/4)
4　灰黄色バイラン混粘土(2.5YR6/2)



1　にぶい黄橙色バイラン混粘土
(10YR6/4)



1　にぶい黄橙色バイラン混粘土(10YR6/4)
2　にぶい黄褐色バイラン混粘土(10YR5/3)
3　にぶい黄褐色粘土(10YR5/4)
4　黄褐色粘土(2.5YR5/3)

第64図　A区第1面SK16～SK21平・断面図(1/30)

ＳＫ 22（第 65 図）

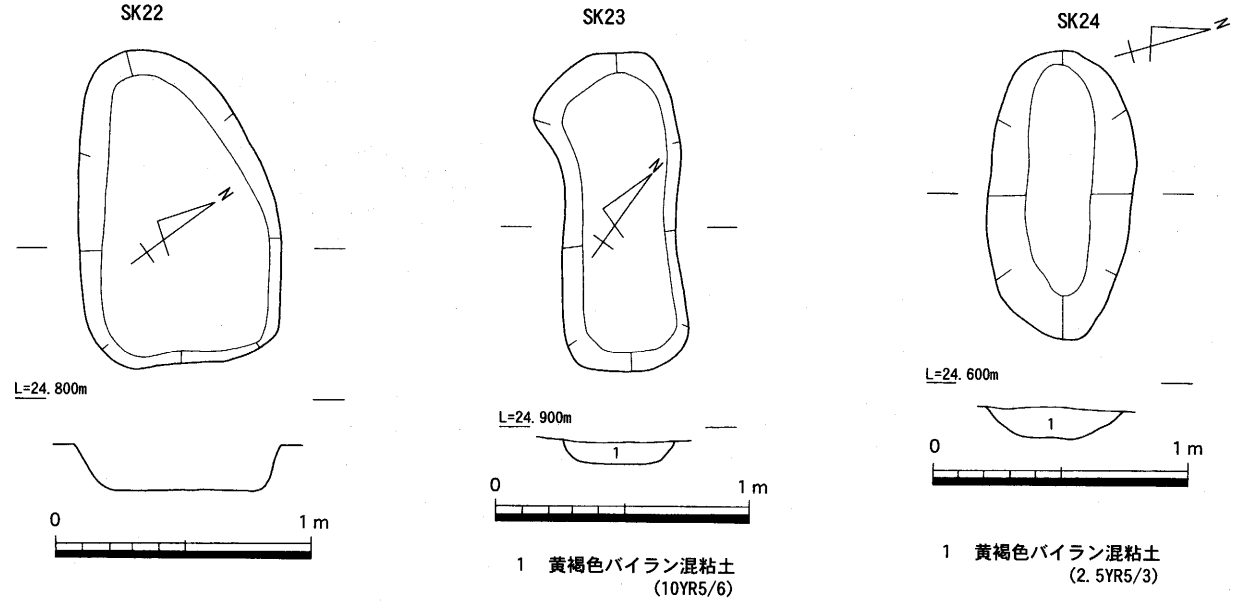
調査区中央部で検出した土坑である。北西に近接して主軸方向が類似する土坑（ＳＫ 23、24）が列状に並ぶ。平面形は西側が細い台形であり、断面形は逆台形を呈する。規模は長径 1、26 m、短径 80cm、深さ 7cmを測る。主軸方向はW－ 36、5°－Nである。出土遺物はない。

ＳＫ 23（第 65 図）

調査区中央部で検出した土坑である。平面形は細長い長方形であり、西側でやや膨らむ。断面形は逆台形を呈する。規模は長径 1、26 m、短径 56cm、深さ 10cmを測る。主軸方向はW－ 34、5°－Nである。出土遺物はない。

ＳＫ 24（第 65 図）

調査区中央部で検出した土坑である。平面形は楕円形であり、西側でやや膨らむ。断面形は浅い皿形を呈する。規模は長径 1、14 m、短径 56cm、深さ 12cmを測る。主軸方向はW－ 17、3°－Nである。出土遺物はない。



第65図　Ａ区第１面ＳＫ22～ＳＫ24平・断面図(1/30)

Ａ区第１面では多数の土坑が検出されており、これらについてまとめておく。ただし、ＳＫ 13 は検出面、遺構の性格（焼成関連遺物廃棄土坑）ともに異なるためこれ以外の 23 基（註）に関して行う。

（註）23 基についても平面形が円形であるもの、深さが 90cmと極端に深いもの、土坑墓である可能性を持つものを含む。これらは他の多くの土坑と異なる性格をもつ可能性があるが、土坑群の性格が不明であるため区分していない。なお、これらを除外しても以下の内容に大きな差はない。

分布：Ａ区北西部から中央部にかけて遺跡周辺地形図（第 45 図）の水路北部に近接して帯状に並ぶ。中世の建物群とは分布範囲を違えている。

配置：主軸方向の類似性、近接度より 8 グループに分けられる。（①ＳＫ 01 ②ＳＫ 02 ～ 05 ③ＳＫ 06、16、17 ④ＳＫ 07 ～ 11 ⑤ＳＫ 12、17 ⑥ＳＫ 18 ⑦ＳＫ 19 ～ 21 ⑧ＳＫ 22 ～ 24）各グループは 2 ～ 4 mほど開けて分布し、1 ～ 5 基で構成される。各グループにおいて土坑は近接しながらも概ね切り合う

ことなく分布する。また基本的に類似した主軸方向をもち、中には主軸を揃えて列をなす部分（ＳＫ02、03，ＳＫ07、11，ＳＫ22、23、24）がある。

形状：平面形は長方形を基調とするものが多いが、これらについても楕円形、台形、細長く溝状を呈するものなどさまざまある。壁面は直に落ちず、緩い傾斜を持つものが多い。また、底面は平らなものがほとんどで、凹凸や段を持つものはほとんどない。

規模：土坑は長径71cm～2、19ｍの幅を持つ。長径は1、1～1、3ｍの範囲に9基（39、1%）が含まれるものの、他は10cm単位で1、2基しかなく、分布はばらつく。

出土遺物：中世土器細片1点がＳＫ10より出土している他は時期不詳の土器細片がごく少量あるのみである。土器以外の遺物もない。

埋土：多くが黄褐色系粘土であり、多量のバイランを含むものである。この埋土は第2遺構面に属する遺構でも見られる埋土（黄褐色系バイラン混粘土）と酷似する。このため所属遺構面を区分できなかった大部分の土坑は掘削時期が中世か、それ以前かを埋土より判断することはできない。なお、人為的な埋め戻しを示唆する地山ブロックなどは観察されなかった。

時期：①土坑からの出土遺物は極めて乏しいが、ＳＫ10より中世土器細片が出土しており、中世以降に掘削されたものが含まれていると言える。ただ、近世については10点弱の遺物が出土しているものの、遺構は検出されず、この時期に属する可能性は低い。

②土坑群の検出面はほとんどが弥生～中世の遺構混在面であるが、4基（ＳＫ19、20、21、24）は中世面から掘り込まれている。

③検出遺構面から判断すると弥生時代以降に掘削されたものを含む可能性はある。だが、遺跡内から出土した土器の大部分は中世の所産であり、中、近世土器以外に出土した土器は弥生土器が10個体分程度しかない。また弥生時代に属すると考えられる遺構は第2遺構面で検出された数基の土坑などごく少数である。

④土坑の列状分布、あるいは主軸方向を揃えた状況については丘陵に規制された結果であり、時期差をもつと判断することも可能である。だが、これに加えて基本的に各土坑は一定間隔を保って分布し、切り合いが少ない。よって土坑は相互の存在を意識して掘削されたと考えられる。なお、総数と切り合いが少ないことから掘削期間が長期におよぶことも考えにくい。

以上の4点から考えて中世に比較的短期間で形成された土坑群と考えておきたい。

性格：中世期の緩斜面が調査区内のどこまで広がっていたかは不明であるが、明治22年の丘陵斜面、緩斜面の境界に位置する水路に近接することから立地は斜面際であったと考えられる。これに関して土坑群の主軸方向が類似するのは丘陵に規制されたためであることが推定される。建物群と一定距離を開け、こうした場所に掘削された土坑群の性格として廃棄土坑、墓、粘土採掘坑なども考えられるが、具体的には明らかにできなかった。廃棄土坑とするには廃棄物が出土しておらず、積極的な根拠がない。

またこのように整った配置を持つことも意味を見いだしがたい。墓については比較的整然とした配置で切り合いが少ないこと、丘陵に規制されたことが一因であるとしても主軸方向を揃えることはその可能性も考えさせる。だが、埋葬を裏付けるデータは得られなかった。確認できた属性から言っても、平面形が円形、細い溝状のもの、断面形がすり鉢状で深いものは論外としていびつな平面形を持つものが多く、削平の影響もあるが、小規模であることは否定的な要素である。これは屈葬が行われた際、長軸が1m前後であるのに対し、短軸も80cm程度の規模は有することから言える。粘土採掘坑については遺構検出面ベース土が和泉系砂岩やその風化細片を多く含む粘土であること、すなわち陶土として利用されるきめが細かく、均質な粘土とは異質なものであることから考えがたい。また平面形が整っていること、規模が小さいこと、配置に規則性が見られること、断面形にオーバーハングが見られないことも採掘坑の可能性を否定する。

(3) 溝

ＳＤ01（第66図）

調査区北西隅で検出した溝である。Ａ区土坑群と同様に丘陵に規制された主軸方向をもつ。幅60cm、深さ10cmを測る。断面形は浅い皿状を呈する。埋土はにぶい黄色粘土であり、土坑群のものと類似する。出土遺物は石鏃(8)がある。8は側縁に細部調整をあまり施さず、粗い作りである。溝の時期については埋土で弥生時代、中世の区分はできないため8より弥生時代と考えておく。

ＳＤ02（第66図）

調査区東部で検出した東西方向の溝である。西側で南に屈曲し、ＳＢ08に切られる。幅32cm、深さ15cmを測る。断面形はＵ字状を呈する。埋土は褐色粘土であり、遺構面上に堆積する包含層と類似する。出土遺物はないが、埋土より中世と考えられる。

ＳＤ03（第66図）

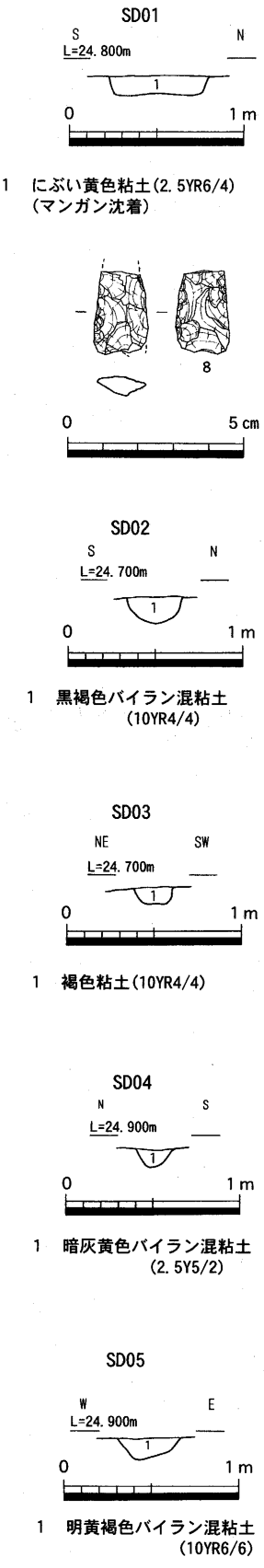
調査区東部で検出した溝である。幅22cm、深さ10cmを測る。断面形は逆台形を呈する。出土遺物はないが、埋土より中世と考えられる。

ＳＤ04（第66図）

調査区中央部で検出した溝である。ＳＫ19に切られる。幅21cm、深さ10cmを測る。断面形はＵ字状を呈する。出土遺物はないが、検出遺構面より中世と考えられる。

ＳＤ05（第66図）

調査区中央部で検出した溝である。列状に並ぶ土坑群（ＳＫ22～24）

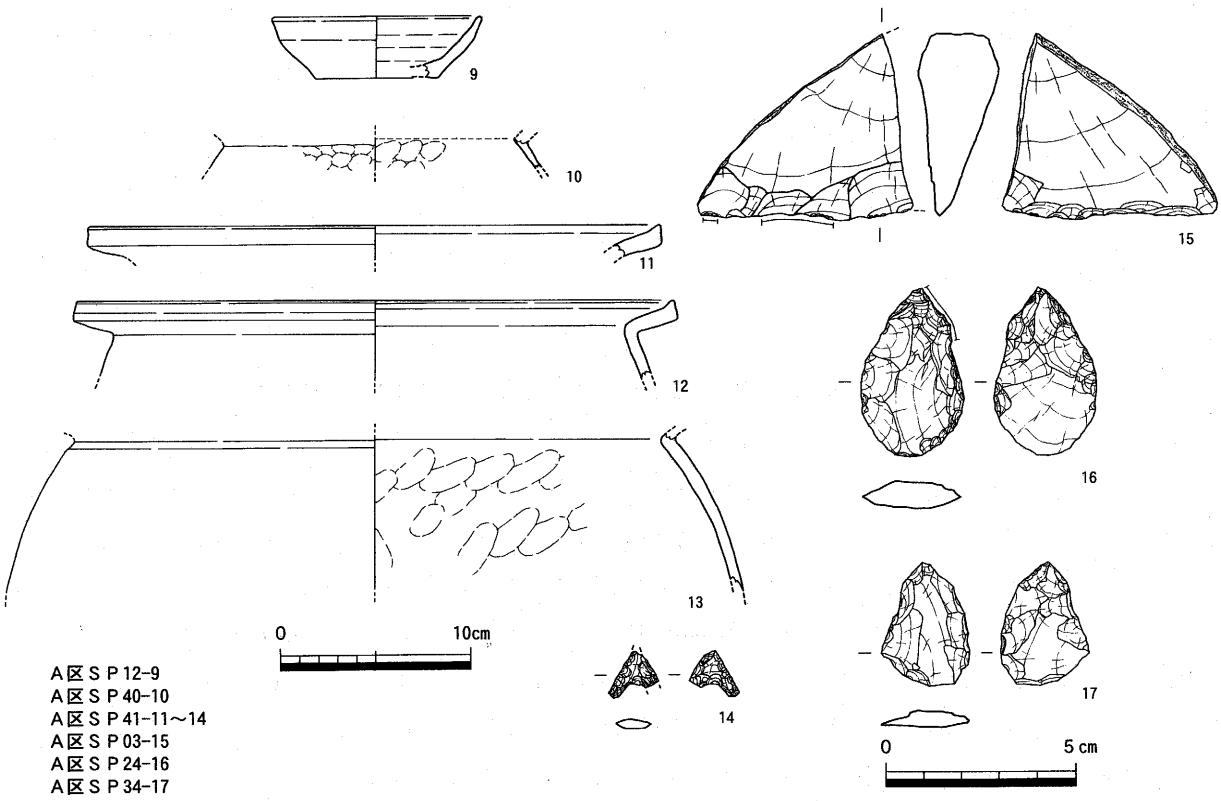


第66図　Ａ区第１面ＳＤ01～ＳＤ05
断面図(1/40)，出土遺物(1/2)

がなす列上に位置し、主軸方向も類似する。埋土は明黄褐色粘土であり、土坑群の埋土と類似する。幅36cm、深さ12cmを測る。断面形は逆台形を呈する。出土遺物はない。

(4) 柱穴出土遺物（第67図）

9は土師器の杯である。体部は厚みがあり、やや軟質である。底部を糸切りする。13世紀後半～14世紀代と考えられる。10～13は弥生時代後期前半の甕である。11、12は口縁端部を短く上方につまみ上げる。14～17はサヌカイト製石器である。14はスクレイパー？である。粗い作りの刃部をもつが、つぶれが見られることも合わせて考えると、くさびとした方がよいかもしれない。15は円基式の石鏃未製品である。中央部に剥離面を残し、側縁部に加工を施す。16は石鏃未製品である。側縁部に粗い調整を加えているが、先端、基部はほとんど未調整である。17は石鏃未製品である。

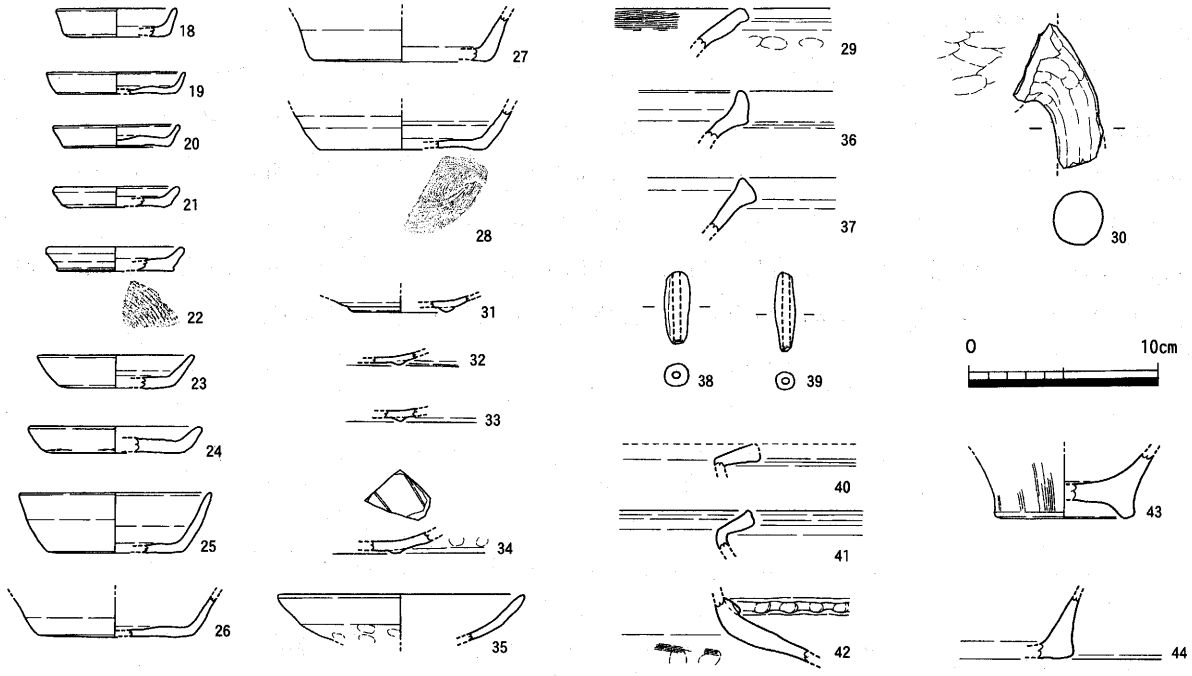


第67図　A区第1面ＳＰ出土遺物(1/4, 1/2)

(5) 包含層出土遺物（第68～70図）

18～78は第1遺構面上に堆積した中世包含層から出土した遺物である。中世土器以外に多量のサヌカイト製石器、フレイクなどを含む。18～24は土師器の小皿である。底部を19、22は糸切り、20、24はヘラ切りする。25～28は土師器の杯である。いずれも体部と底部の境界が屈曲し、箱形の器形を呈する。25、26、28は底部をヘラ切り、27は糸切りする。29は土師質土器の土鍋である。口縁部内面に横ハケを施す。16世紀代と考えられる。30は土師質土器の土釜の脚である。31～34は瓦器椀の底部である。断面三角形の小さな高台が付く。34は底部内面に平行してヘラ磨きが施される。31～33は13世紀前半、34は13世紀代と考えられる。35は瓦器椀？である。体部外面に横ナデと指押さえが見られる。36、37は東播系のコネ鉢である。36は上方に大きくつまみ上げる口縁部をもつ。14世紀と考

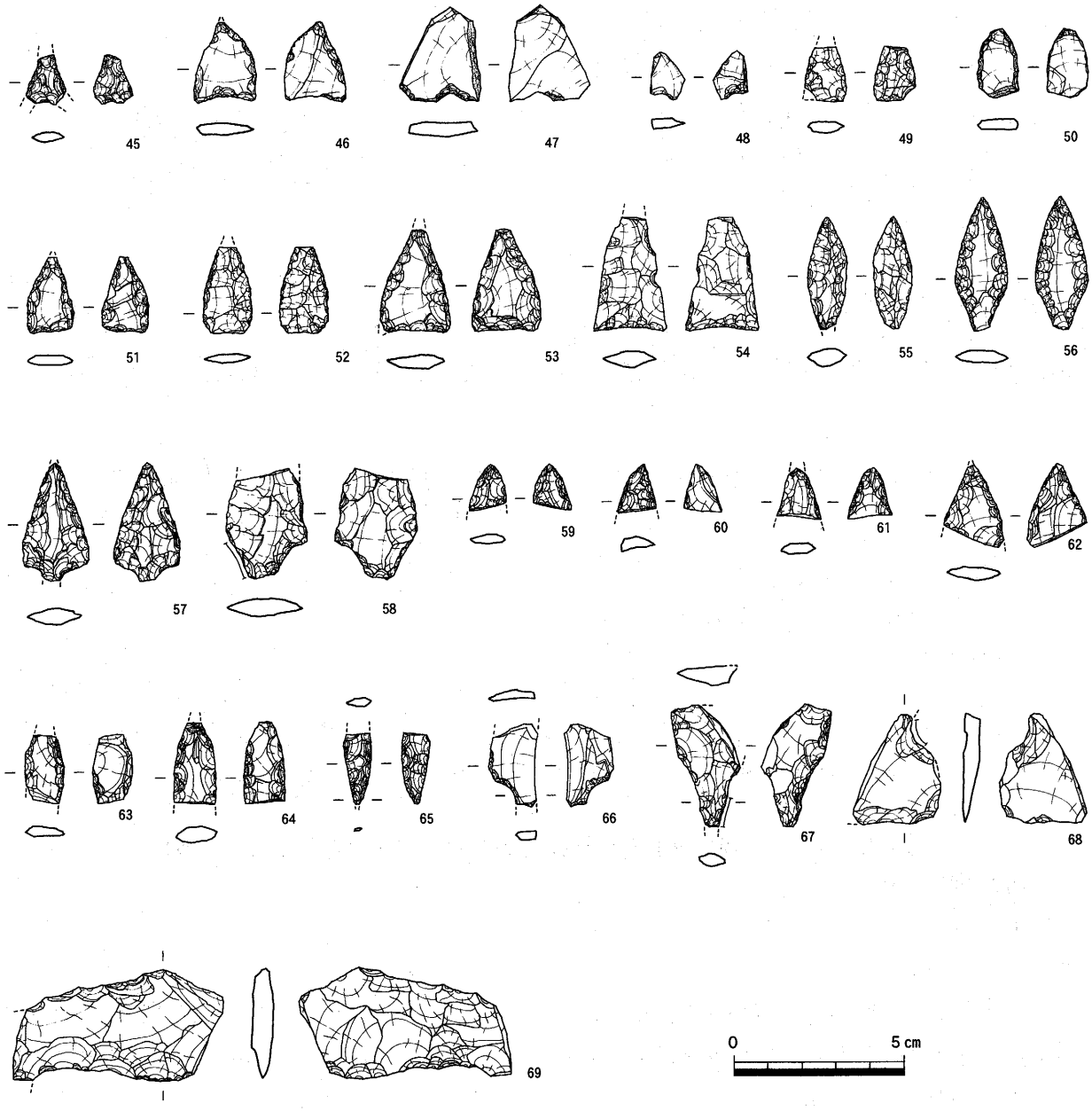
えられる。37は器壁に直交し、上下への肥厚が小さい口縁部をもつ。13世紀後半と考えられる。40～44は弥生土器である。40、41は甕の口縁部である。41は口縁端部を小さく上方につまみ上げる。42は壺である。頸部に貼り付け突帯をもつ。43、44は底部である。43は外面に縦ハケを施す。



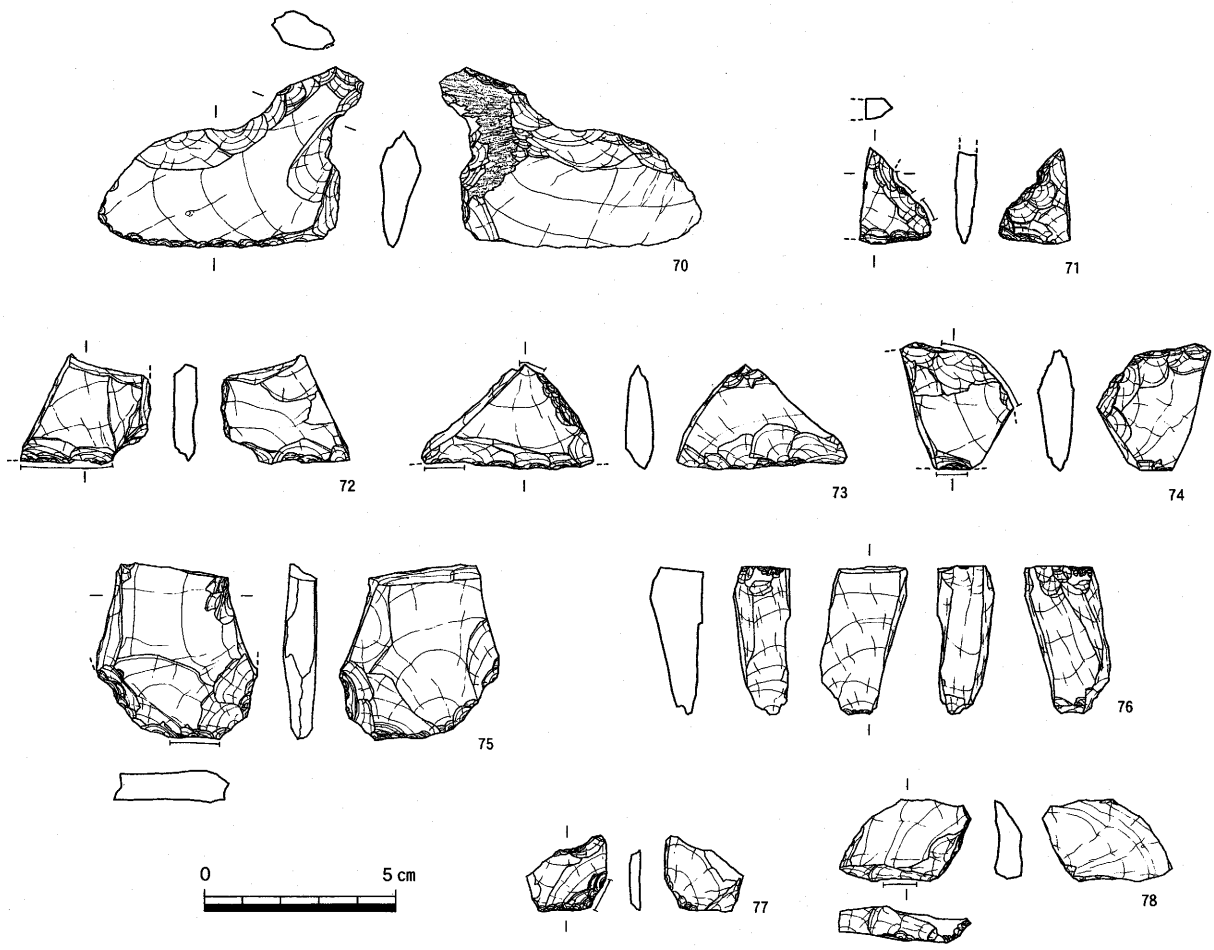
第68図　A区第1面包含層出土遺物(1/4)(ただし43は第2面包含層出土遺物)

45～78はサヌカイト製石器である。45～48は凹基式の石鏃である。45は片面にだけ細部調整を加える。46は片面の側縁部に偏って調整を加える。47は先端部が加工されていない未製品である。48は抉り部の形成を意図したと考えられる細部調整から石鏃未製品と判断した。49～54は平基式の石鏃である。50は両面とも打点位置が基部側で打面幅の中央にあり、ほぼ同じ方向で打撃が加えられている。52は縁辺部に微細な調整を加える。53は両面の中央部に剥離面を残す。54は基部を丁寧に作るが、側縁部は粗い調整しか施していない。55～58は有茎式の石鏃である。56は中央部を剥離面のまま残すが、先端部と茎部は微細な調整を施す。57は整った三角形であるが、調整は粗い。59～64は基部を欠損する石鏃である。60は片面しか調整が加えられていない。

65～67は石錐である。65は錐部と頭部の境界が不明瞭であるが、錐部にかけて徐々に細くなる。66は錐部から頭部にかけての側縁に丁寧な調整を施す。68は打製石包丁である。刃部の調整は粗く、片面だけだが、抉り部がありエッジがつぶれているためこのように判断した。69は打製石鎌の未製品？である。刃部、背部ともに粗い調整を施す。70、71は石匙である。70は片刃であり、丁寧に刃部を作っている。背部、つまみの作りは粗い。71は片面に剥離面を大きく残す。72～74はスクレイパー？である。72は刃部に、74は背部につぶれが見られ、くさびと考えた方がよいかもしれない。73は作りが粗いものの連続した細部調整を刃部に施す。75は打製石斧である。形状と法量よりこのように判断したが、摩耗、線条痕などの使用痕は全く観察できず、他の石器である可能性もある。76はくさびである。上下縁辺に微細な小剥離が集中する。77は2次加工のある剥片である。片面に細部調整を施し、刃部を形成する。つまみ部と考えられる部分にも調整を加え、背つぶしを行う。78は火打ち石である。側縁のエッジのつぶれや微細な小剥離の連続が見られる。時期は中世のものか。



第69図　A区第１面包含層出土遺物(1/2)



第70図　A区第１面包含層出土遺物(1/2)(ただし75は第2面包含層出土遺物)

第２面の遺構、遺物

(1) 土坑

ＳＫ 01（第 71 図）

調査区北東部で検出した土坑である。平面形は楕円形であるが、北半分は未調査部に延びる。断面形は逆台形を呈する。規模は南北 60cm以上、東西 77cm、深さ 21cmを測る。遺物は時期不詳の土器細片がごく少量出土している。

ＳＫ 02（第 71 図）

調査区北東部で検出した土坑である。北部がごく一部調査区外に延びる。平面形は長楕円形である。断面形は逆台形を呈する。規模は長径約 1､3 m、短径 66cm、深さ 22cmを測る。出土遺物はない。

ＳＫ 03（第 71 図）

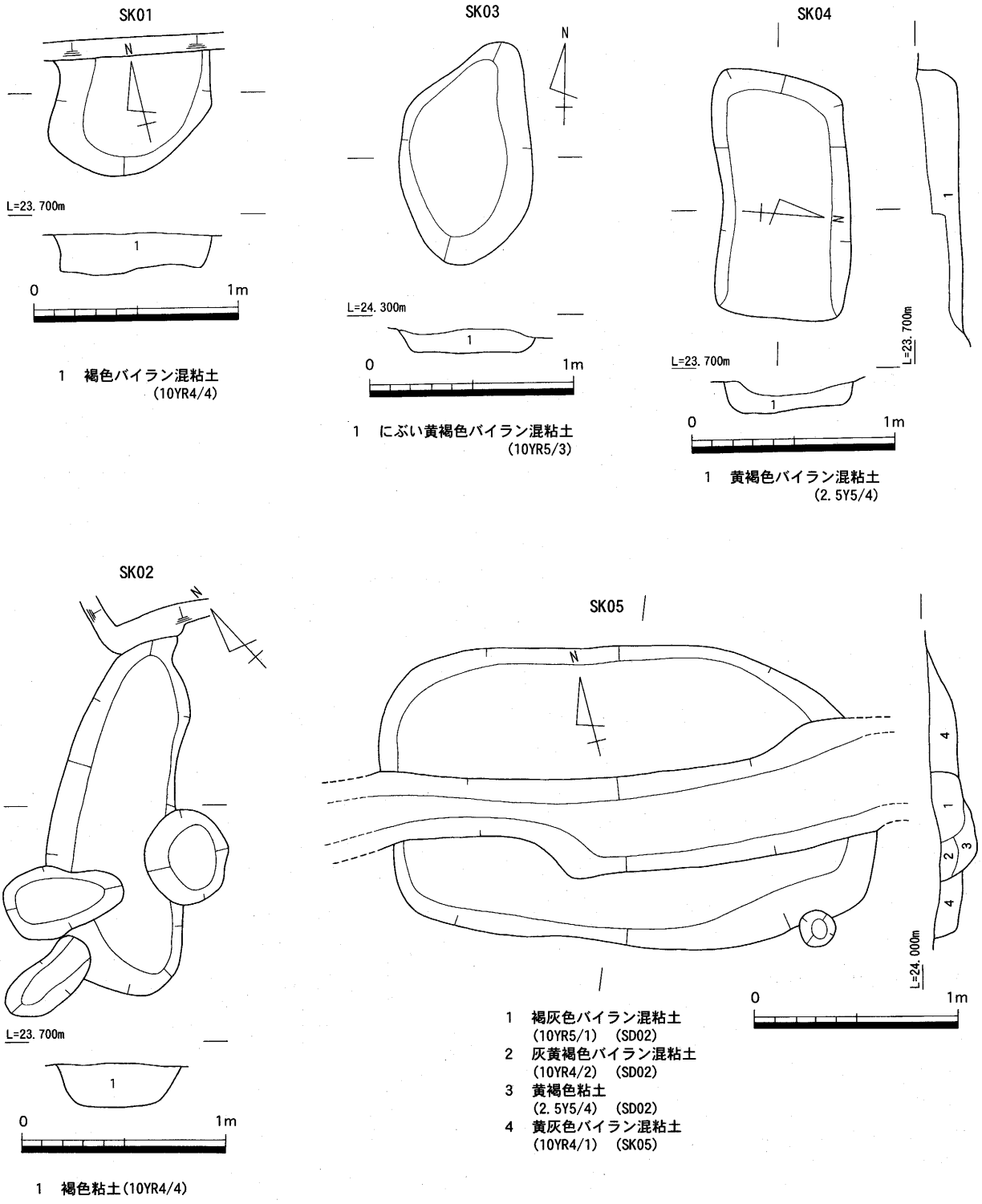
調査区北東部で検出した土坑である。平面形はややいびつな楕円形であるが、北側で細くなる。断面形は浅い皿状を呈する。規模は長径 1､76 m、短径 60cm、深さ 12cmを測る。出土遺物はない。

ＳＫ 04（第 71 図）

調査区北部で検出した土坑である。平面形は長方形である。断面形は逆台形を呈し、壁面は直に落ちる。規模は長径 1､14 m以上、短径 68cm、深さ 22cmを測る。出土遺物はない。

ＳＫ 05（第 71 図）

調査区北部で検出した土坑である。中央部を東西方向に延びるＳＤ 02 に切られる。平面形は長方形で、

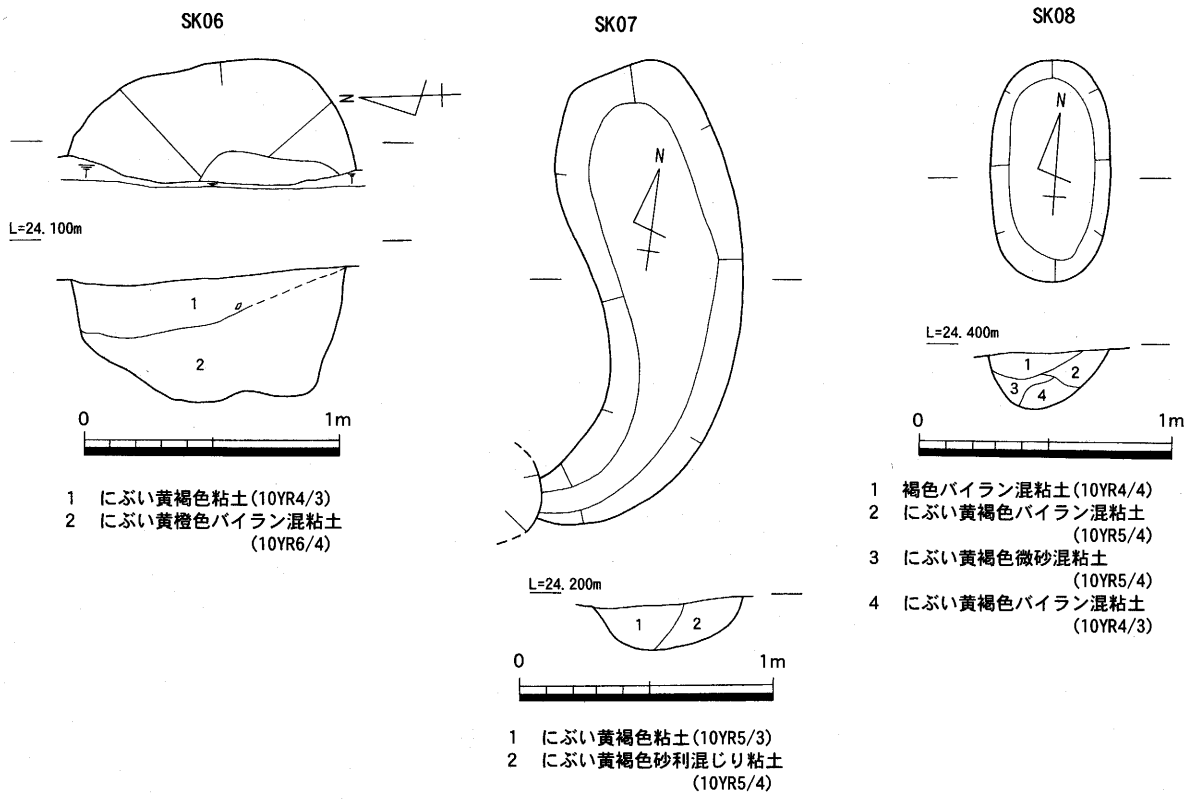


第71図　A区第2面SK01～SK05平・断面図(1/30)

東でややすぼまる。断面形は浅い皿状を呈する。規模は長径2.39 m、短径1.52 m、深さ17cmを測る。出土遺物はない。

SK 06（第72図）

調査区東部で検出した土坑である。調査終了時の断ち割りトレンチで確認したため西半分を損壊した。平面形は不明だが、円形であると推定される。断面形は逆台形を呈し、南側では直気味に落ちるが、他の部分では緩やかに下る。規模は南北1.1 m、東西50cm以上、深さ54cmを測る。遺物は弥生土器が



第72図　A区第2面SK06～SK08平・断面図(1/30)

ごく少量出土している。土坑の時期は弥生時代と考えられる。

SK 07（第72図）

調査区東部で検出した土坑である。南端部を柱穴に切られる。平面形は長楕円形で、南部で西に屈曲する。断面形は皿状を呈する。規模は長径1、88 m、短径69cm、深さ21cmを測る。遺物は弥生土器がごく少量出土している。土坑の時期は弥生時代と考えられる。

SK 08（第72図）

調査区東部で検出した土坑である。平面形は隅丸長方形で、断面形はU字状を呈する。規模は長径89cm、短径48cm、深さ24cmを測る。出土遺物はない。

(2) 溝

SD 01（第74図）

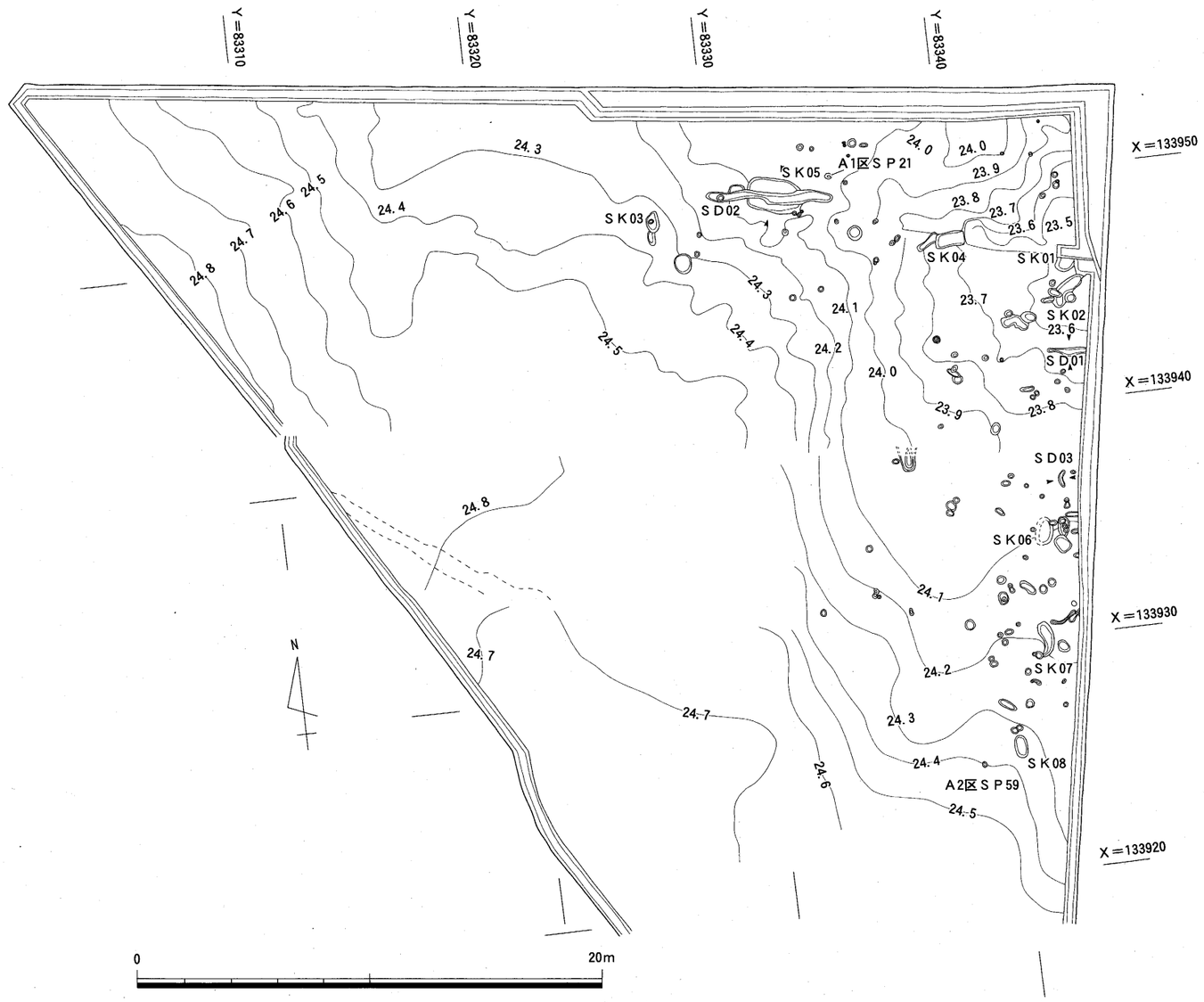
調査区北東部で検出した溝である。東部は調査区外に延びる。断面形はU字状を呈する。深さ20 cmを測る。出土遺物はない。

SD 02（第74図）

調査区北部で検出した溝である。SK 05を切る。断面形は逆台形を呈する。深さ22cmを測る。溝の底面レベルは周囲の傾斜と同じく東に下る。出土遺物はない。

SD 03（第74図）

調査区東部で検出した溝である。断面形はU字状を呈する。深さ22cmを測る。埋土は褐色粘土である。出土遺物は1点（79）あるが、器種は不明である。実測図は小さく突出した部分を下にして提示したが、高台ではない。



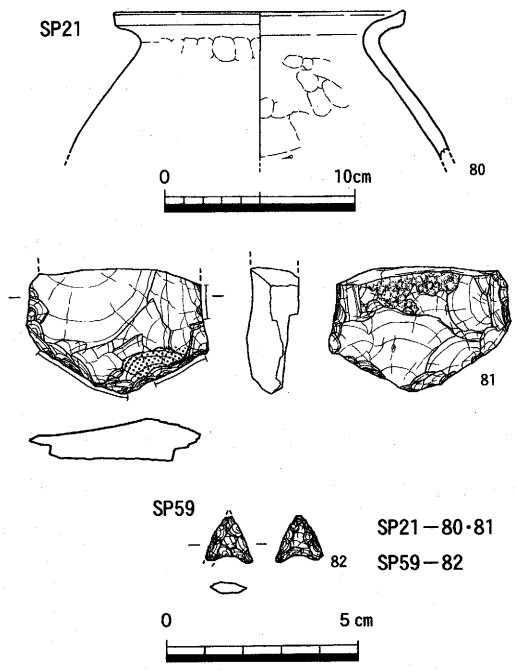
第73図　A区第２面遺構配置図（1/200）

(3) 柱穴出土遺物（第75図）

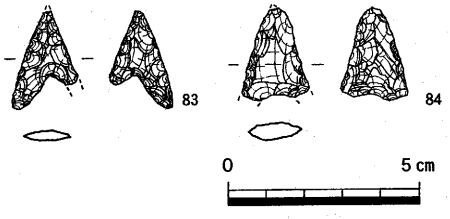
80は弥生後期中葉の甕である。口縁端部をわずかにつまみ上げ、肩の張りは弱い。81、82はサヌカイト製の石器である。81は打製石斧である。片面に弱く摩耗した部分が残存している。両側縁のつぶれはくさびに転用された可能性を示す。82は小型の凹基式石鏃である。両面とも剥離面はほとんど残っていない。

(4) 包含層出土遺物（第76図）

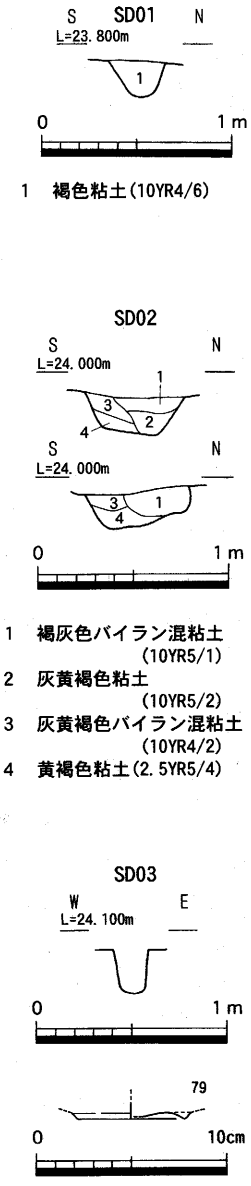
83、84は遺構面上から出土したサヌカイト製の凹基式石鏃である。83は先端部、脚部ともに丁寧な作りである。84は両方の脚を欠損する。



第75図　A区第2面SP出土遺物(1/4, 1/2)



第76図　A区第2面出土遺物(1/2)



第74図　A区第2面
SD01～SD03断面図(1/40),
出土遺物(1/4)

（2）Ｂ区の調査

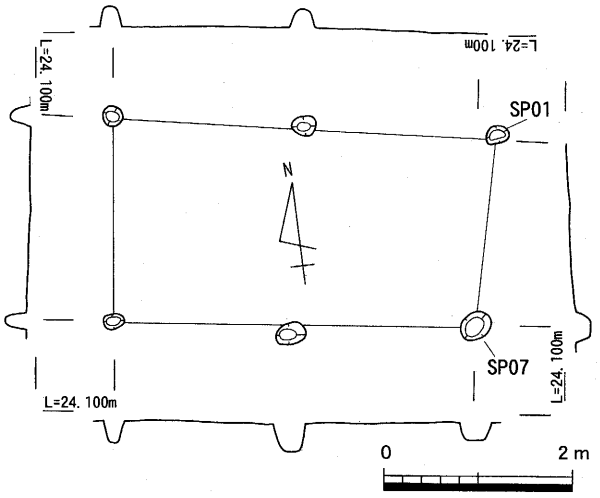
本調査区は調査対象地中央を走る町道の東側に位置する。地形的には南にある丘陵から北へ延びる斜面および緩斜面、馬宿川により形成された扇状地を含む。丘陵部で遺構面が１面確認された。遺構は中世の掘立柱建物が西部に１棟、土坑が丘陵と扇状地の境界部付近でややまとまって検出された。

遺構、遺物

（1）建物

ＳＢ01（第77図）

調査区の西部で検出した側柱建物である。規模は梁間１間×桁行２間（2.1×3.8ｍ。床面積、7.98㎡。）である。主軸方向W－8°－Nである。柱穴の平面形は楕円形であり、径20～35cm、深さ20～30cmを測る。出土遺物はないが、土師器の杯小片が出土したＳＰ06をＳＰ01が切るため建物の時期は中世と考えられる。



第77図　Ｂ区ＳＢ01平・断面図(1/80)

(2) 土坑

ＳＫ01（第78図）

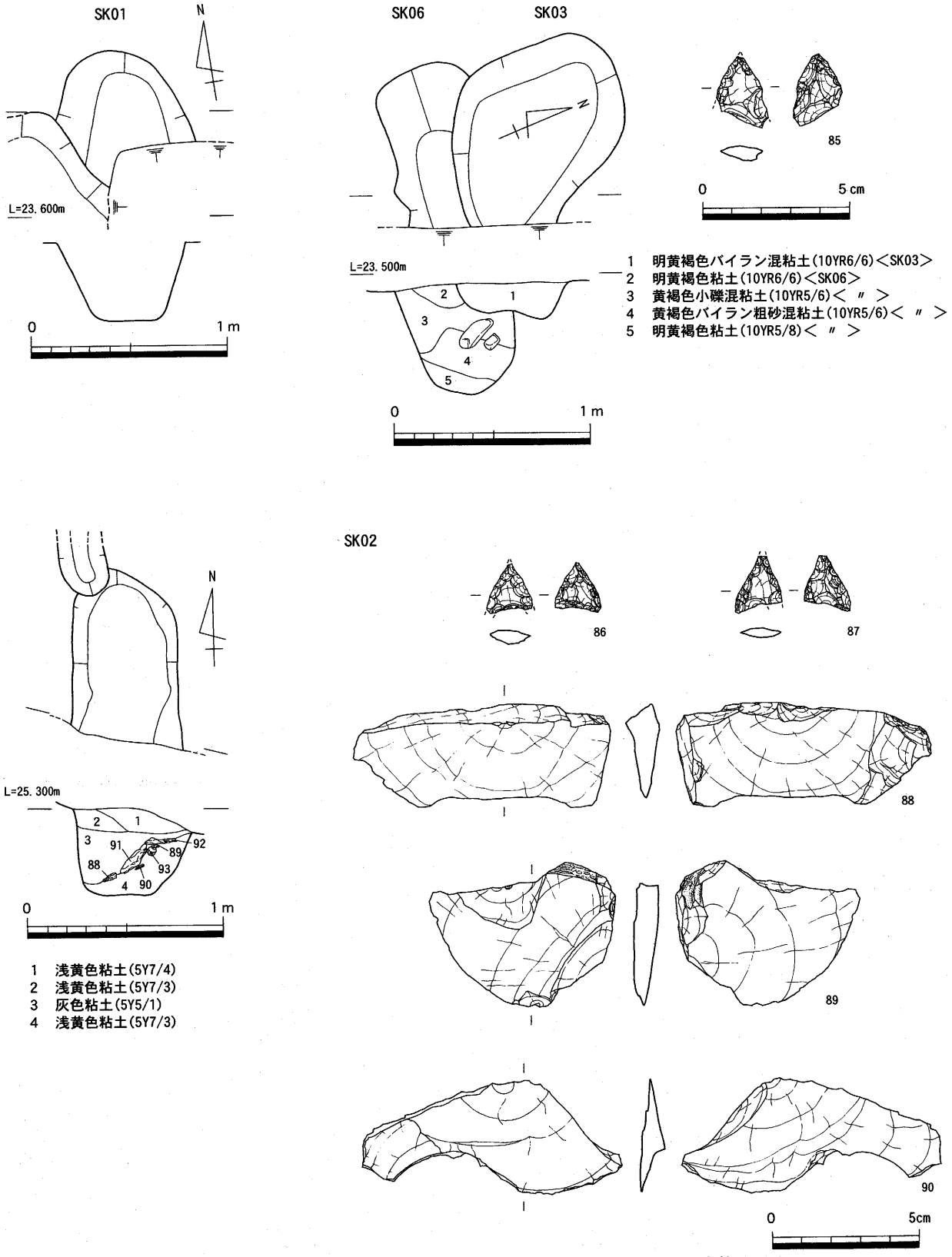
丘陵と扇状地の境界の斜面部で検出した土坑である。調査区北部にあり、南東部を予備調査トレンチで壊され、南西部をＳＫ06に切られる。平面形は楕円形と推定され、断面形は逆台形を呈する。規模は南北71cm以上、東西65cm以上、深さ42cmを測る。出土遺物は時期不詳の土器細片がごく少量ある。

ＳＫ02（第78、79図）

調査区北部で検出した土坑である。丘陵と扇状地の境界にあたる斜面部に位置し、上面は撹乱により削平を受けている。北部をＳＤ01に切られ、南東部を予備調査トレンチで失われる。平面形は楕円形であり、断面形は逆台形を呈する。規模は南北90cm以上、東西54cm以上、深さ45cmを測る。埋土は４層に分けられるが、４層の最上面で大型剥片３点、剥片３点が重なった状態で出土している。他に弥生土器と思われる細片がごく少量、石鏃が２点、チップが９点出土した。石鏃は２層と３層から、チップはどの層からも出土しており、平面的にも散在している。土坑の時期は出土した土器細片から弥生時代と考えておきたい。

なお、土坑から東に約１ｍ離れた遺構面（斜面）上、東に約３ｍ離れた扇状地上で片面に自然面を残す大型剥片（110、112）が出土している。出土地点が斜面と、直上に近年の耕作土が堆積した扇状地であることを考えれば、２次的な移動を受けているのは間違いない。ただ、土坑内外にある89と112が接合し、他の剥片も同一母岩に属する可能性が高いものが見られる。また大型剥片の出土はこの地点に限定されることから関連を持つものであると考えられる。（遺構の性格は「３．まとめ」で再論する。）

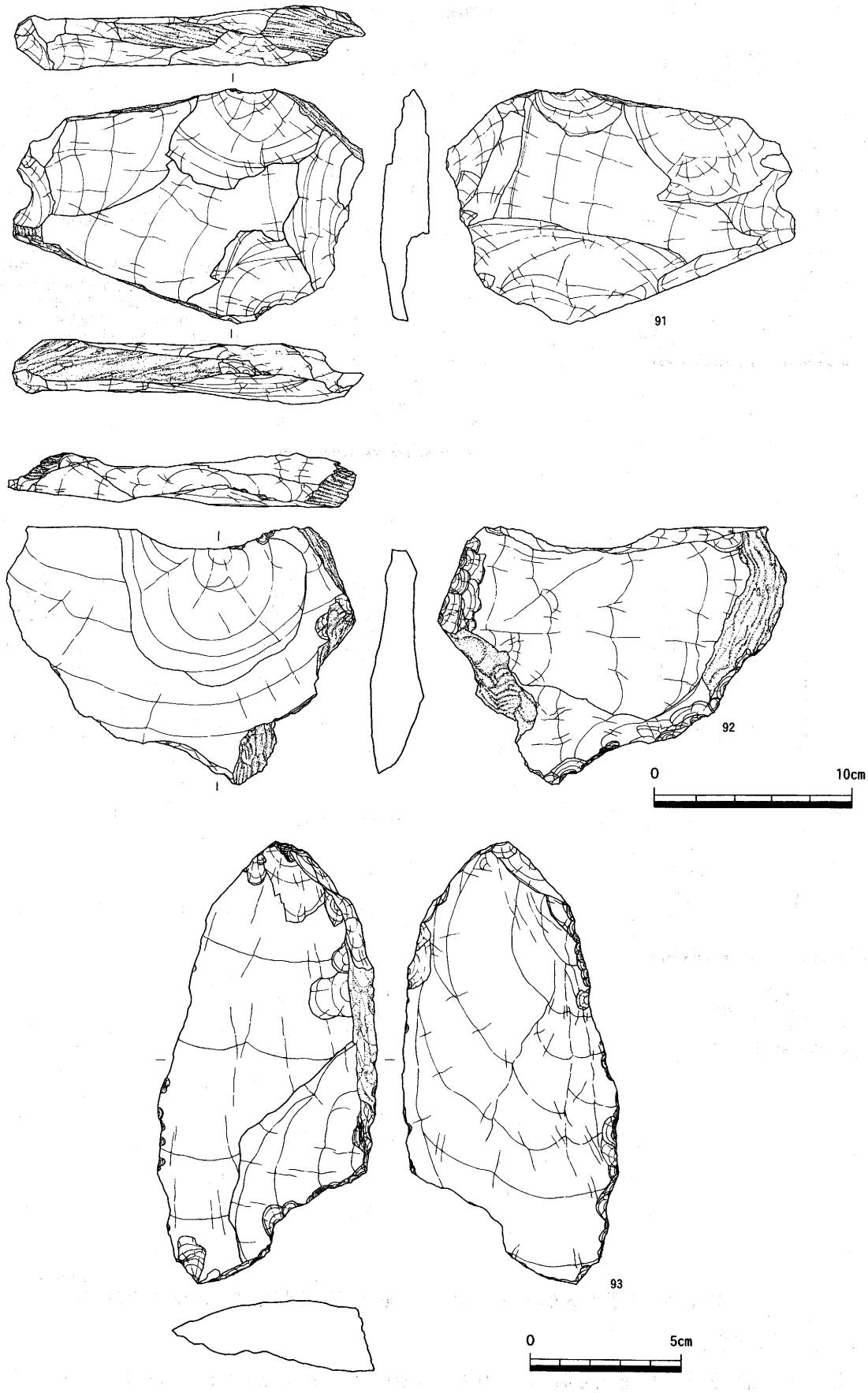
86、87はほぼ同形態、同サイズの石鏃である。86は両面に丁寧な調整を施す。88～90は剥片である。いずれも両面に同方向から打撃が加えられている。91～93は大型剥片である。91は表裏面とも複数枚の剥離が見られる。石核の剥片剥離を含むかもしれないが、明瞭でない。92は側縁につぶれと小剥離の密集が見られる。93は左図の下側縁に細かい調整を施す。



第78図　B区SK01～SK03、SK06平・断面図(1/30), 出土遺物(1/2)

SK 03（第 78 図）

調査区北部で検出した土坑である。東側を予備調査トレンチで壊され、SK 01、06 を切る。平面形は楕円形と推定され、断面形は皿状を呈する。規模は南北 87cm、東西 1､08 m以上、深さ 20cmを測る。



第79図　Ｂ区ＳＫ02出土遺物(1/2, 1/3)

出土遺物はない。

ＳＫ 04（第 80 図）

調査区中央部で検出した土坑である。平面形は不整な長方形であり、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸 1､43 m、短軸 1､14 m、深さ 21cmを測る。主軸方向はW－ 12°－Nである。出土遺物はない。

ＳＫ 05（第 80 図）

調査区中央部で検出した土坑である。平面形は不整な長方形であり、断面形はU字状を呈する。規模は長軸 2､67 m、短軸 1､08 m、深さ 86 ｃｍを測る。主軸方向はN－３、5°－Eである。出土遺物はスクレイパー（94）がある。左図右側縁につぶれが見られ、破損後くさびに転用されたと考えられる。

ＳＫ 06（第 78 図）

調査区北部で検出した土坑である。北側をＳＫ 03 に切られる。平面形は楕円形と推定され、断面形はU字状を呈する。規模は南北 41cm以上、東西 86cm以上、深さ 57cmを測る。出土遺物は時期不詳の土器細片がごく少量、石鏃（86）がある。86 は両面に粗い調整を加える。土坑の時期は出土遺物より弥生時代と考えられる。

ＳＫ 07（第 81 図）

調査区中央部で検出した土坑である。平面形は長方形であり、断面形は浅い皿状を呈する。規模は長軸 1､19 m、短軸 87cm、深さ 22cmを測る。主軸方向はE－２、5°－Nである。出土遺物はない。

ＳＫ 08（第 81 図）

調査区中央部で検出した土坑である。平面形は南に大きくなる長方形であり、断面形は浅い皿状を呈する。規模は長軸 2､06 m、短軸 1､29 m、深さ 28cmを測る。主軸方向はN－３、5°－Wである。出土遺物は弥生土器の細片がごく少量出土している。土坑の時期は出土遺物より弥生時代と考えられる。

ＳＫ 09（第 81 図）

調査区北端部で検出した土坑である。北部が調査区外に延びる。平面形は長方形であると推定され、断面形は皿状を呈する。規模は南北 53cm以上、東西 1､08 m、深さ 30cmを測る。出土遺物はない。

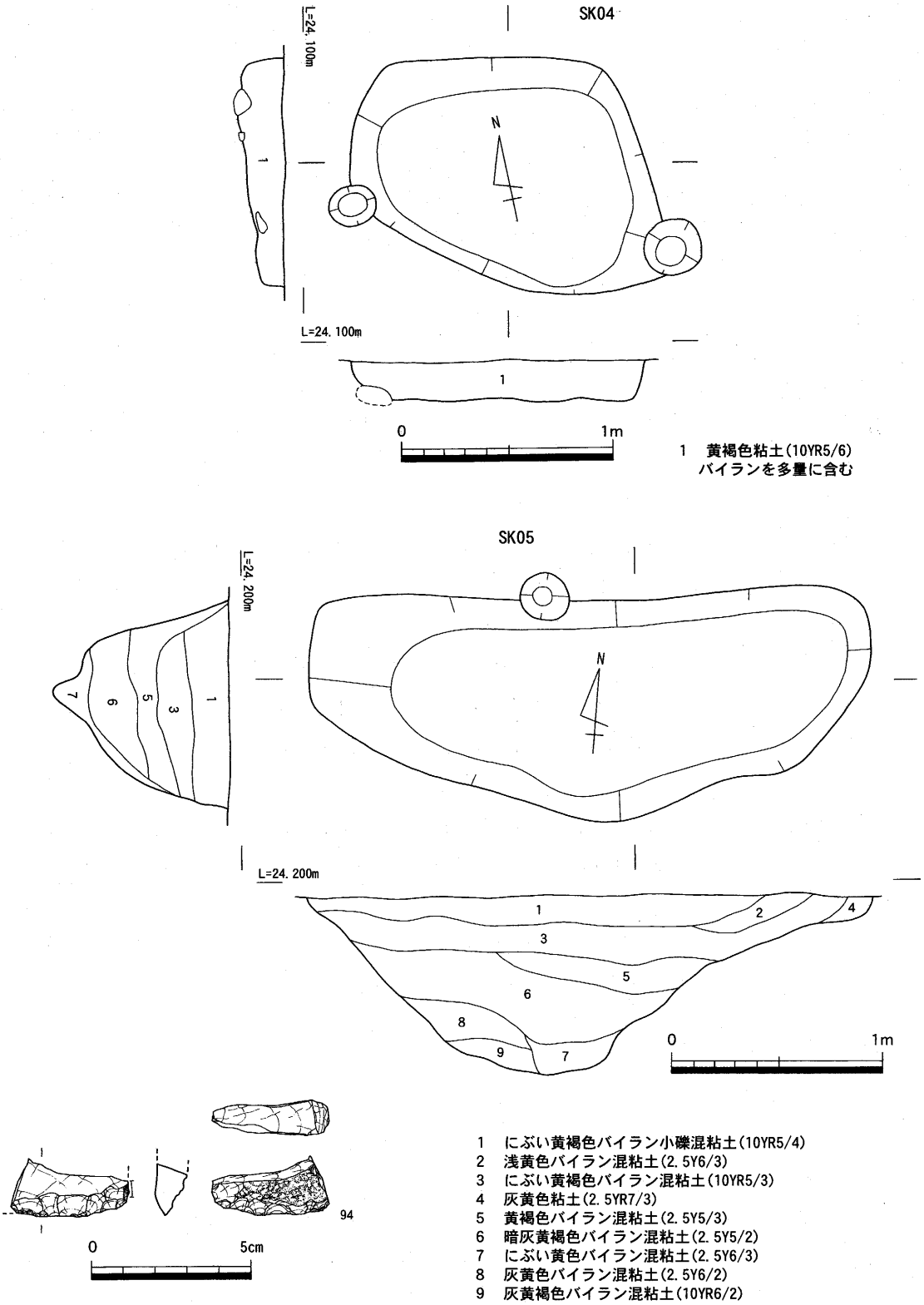
ＳＫ 10（第 81 図）

調査区北端部で検出した土坑である。北部が調査区外に延びる。平面形は楕円形であると推定され、断面形は逆台形を呈する。規模は南北 78cm以上、東西 1､02 m、深さ 27cmを測る。出土遺物はない。

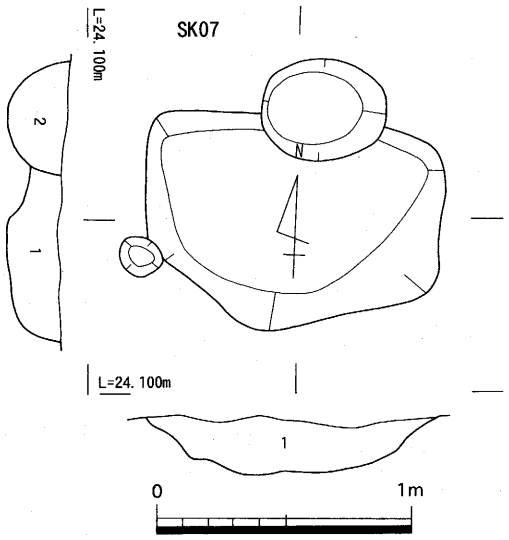
(3) 溝

ＳＤ 01（第 81 図）

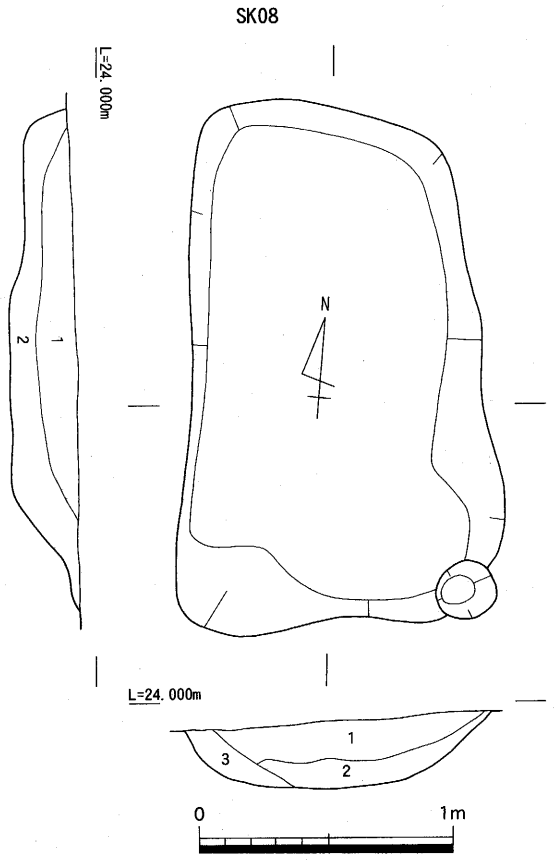
調査区北部で検出した溝である。南部では丘陵と扇状地の境界の斜面部に、北部では丘陵上に位置する。南端部でＳＫ 02 を切り、北部は調査区外に延びる。断面形はU字状を呈する。幅 20 ～ 30cm、深さ 20 ｃｍを測る。底面は北に下がっており、北流する。出土遺物は時期不詳の土器細片がごく少量ある。溝の時期はＳＫ 02 を切ることから弥生時代以降と考えられる。



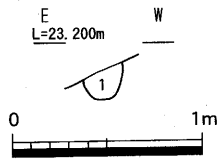
第80図　Ｂ区ＳＫ04、ＳＫ05平・断面図(1/30)，出土遺物(1/2)



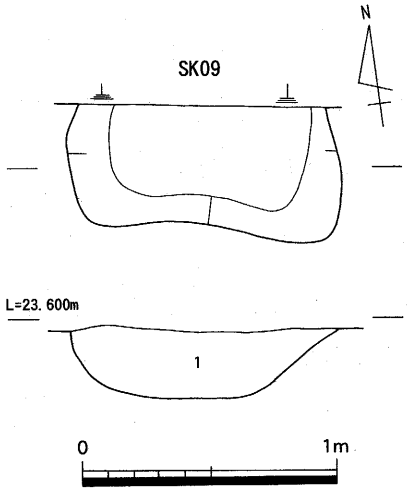
1　にぶい黄色粘土(2.5Y6/4)
2　明黄褐色粘土(2.5Y6/6)



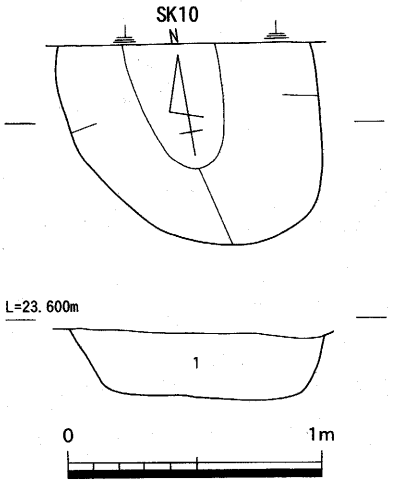
1　にぶい黄褐色バイラン混粘土(10YR5/4)
2　黄褐色バイラン混粘土(10YR5/6)
3　にぶい黄褐色粘土(10YR5/4)



1　褐色粘土(10YR4/6)



1　明黄褐色バイラン混粘土(10YR6/6)



1　明黄褐色バイラン混粘土(10YR6/6)

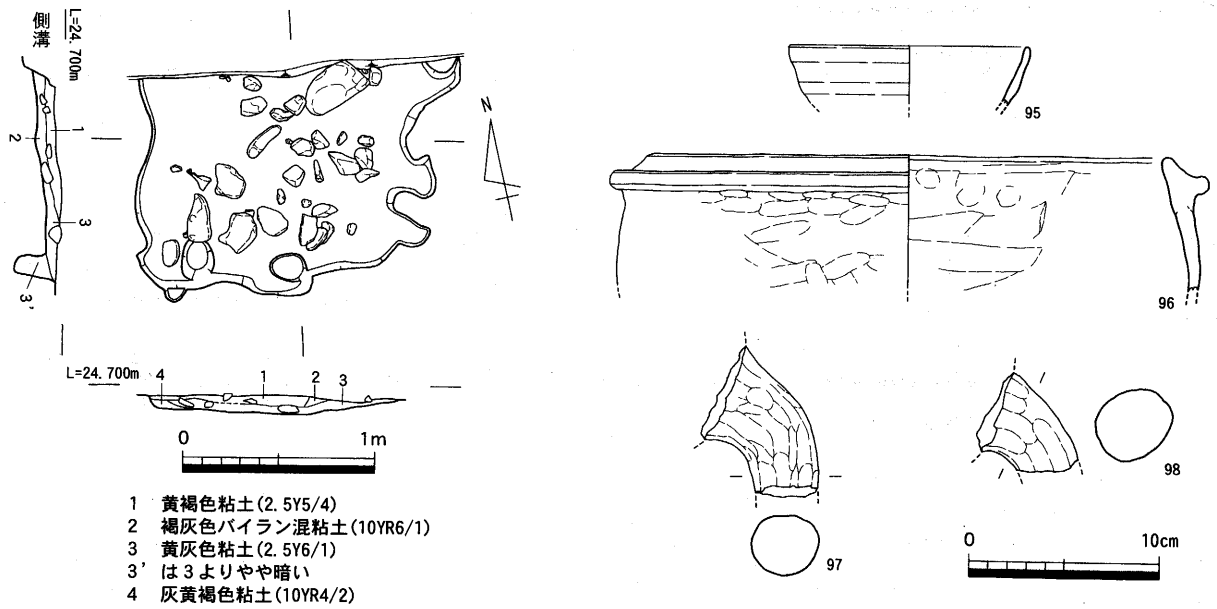
第81図　B区SK07～SK10平・断面図(1/30)・SD01断面図(1/40)

(4) その他

ＳＸ 01（第 82 図）

調査区西端部で検出した遺構である。北端部は調査時の排水トレンチにより壊しており、不明である。平面形は不整な方形で小さな張り出しを東側に３ヶ所もつ。断面形は浅い皿状を呈する。規模は南北１、２ｍ以上、東西 1､34 ｍ、深さ 20cmを測る。遺構内より拳大～ 50cm程度の礫が 40 点ほど出土した。全て床面から浮いている。礫は付近の地山内に含まれる和泉系砂岩が多く見られ、他の砂岩なども含む。小振りなものが中央に偏る傾向はあるものの、人為的な配置は見られない。また被熱礫が６点あるが、床面、壁の被熱、埋土内への焼土、炭の含有は認められず、２次的に移動していると考えられる。

出土遺物には土師器杯（95）、小皿、土師質土器の土釜（96 ～ 98）がある。95 は体部が直立気味で箱形の器形をもつ。96 はほぼ床直から出土している。鍔の先端が太く、しっかりしている。13 世紀後半～ 14 世紀前半と考えられる。97 、98 は土釜の脚である。遺構の時期は 96 より 13 世紀後半から 14 世紀前半と考えられる。



第82図　Ｂ区ＳＸ01平・断面図(1/60), 出土遺物(1/4)

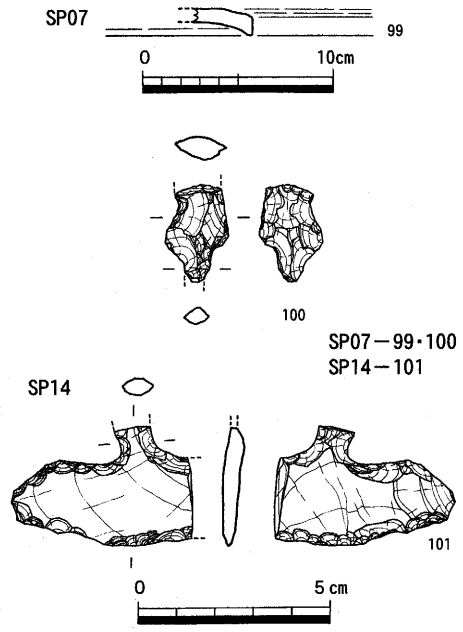
(5) 柱穴出土遺物（第 83 図）

99 は須恵器の蓋？である。100 、101 はサヌカイト製の石器である。100 は石鏃である。粗い調整を施し、左図左側縁が抉れる。101 は石匙である。やや斜行するつまみをもつ。

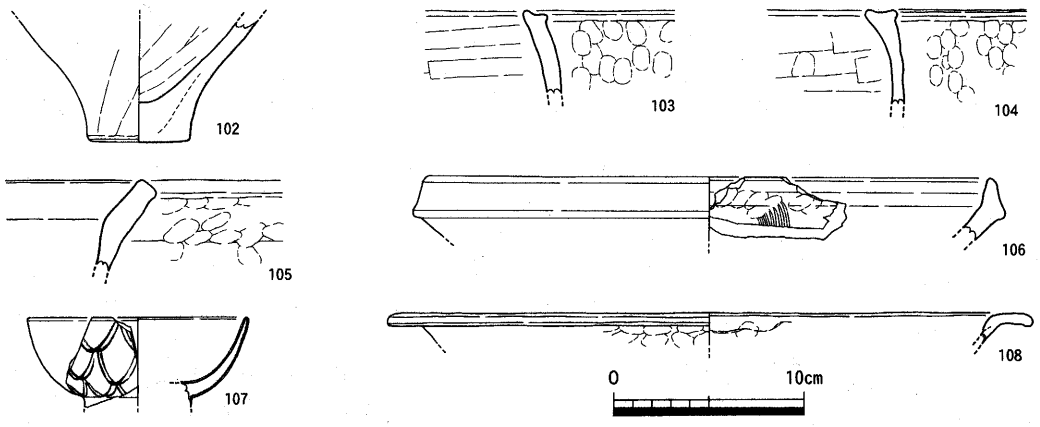
(6) 包含層出土遺物（第 84 、85 、86 図）

102 は弥生土器の底部である。103 、104 は土師質土器の土釜である。ごく小さい口縁部と鍔を持ち、内面に板ナデを施す。16 世紀代と考えられる。105 は土鍋である。内面の屈曲が弱く、16 世紀代と考えられる。106 は備前焼のすり鉢である。口縁部が上方に大きく立ち上がる。備前焼Ⅳ期後半（註 1）に該当し、15 世紀後半と考えられる。107 は磁器椀である。二重網目文を施す。18 世紀代と考えられる。108 は瓦質土器のほうろくである。口縁部が弱く外反する。18 世紀代と考えられる。109 ～ 112 は

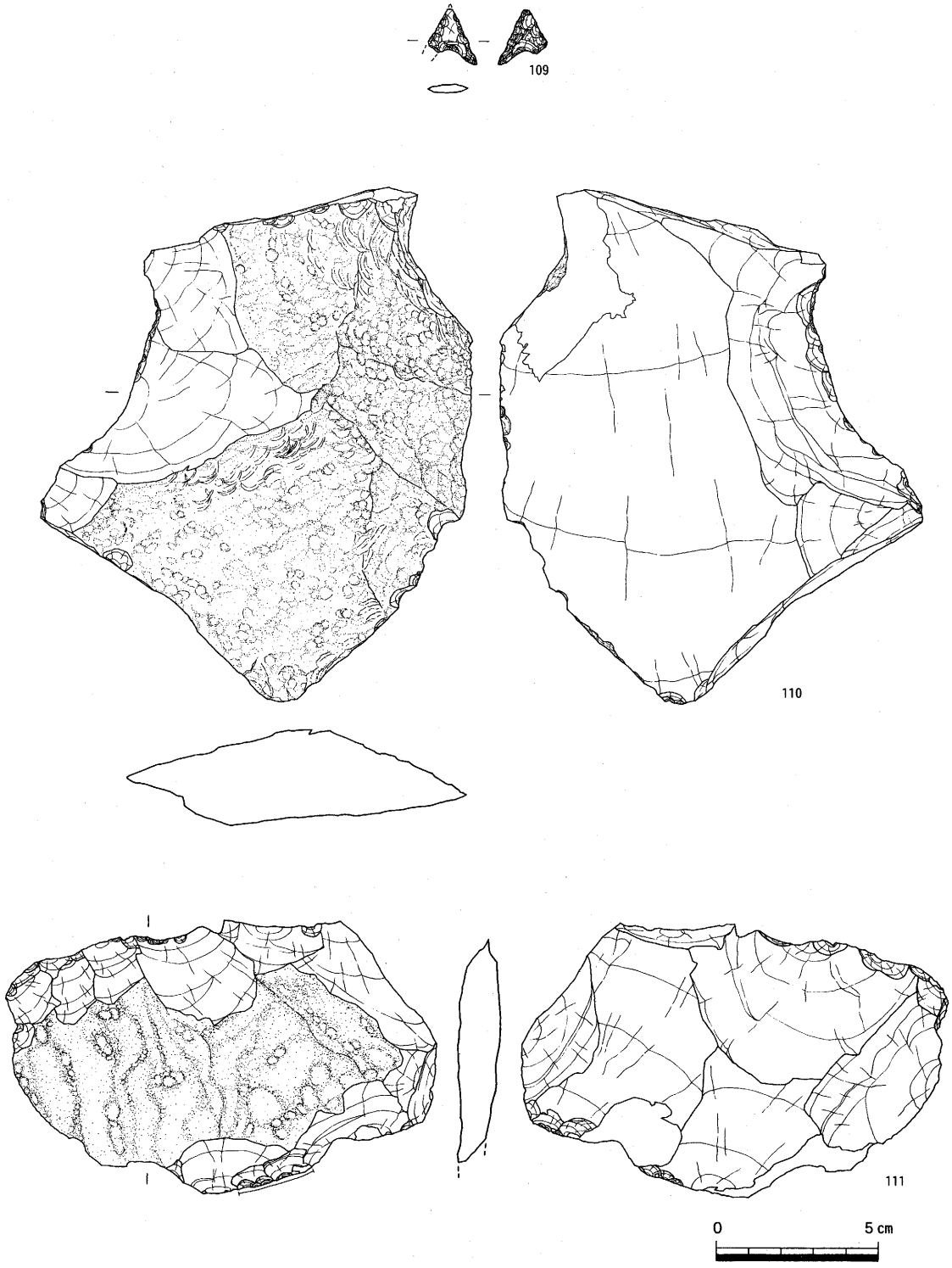
サヌカイト製の石器である。109は石鏃である。110～112は背面に自然面を大きく残した大型剥片である。これらの剥片は全てB区SK02に近接した位置から出土している。



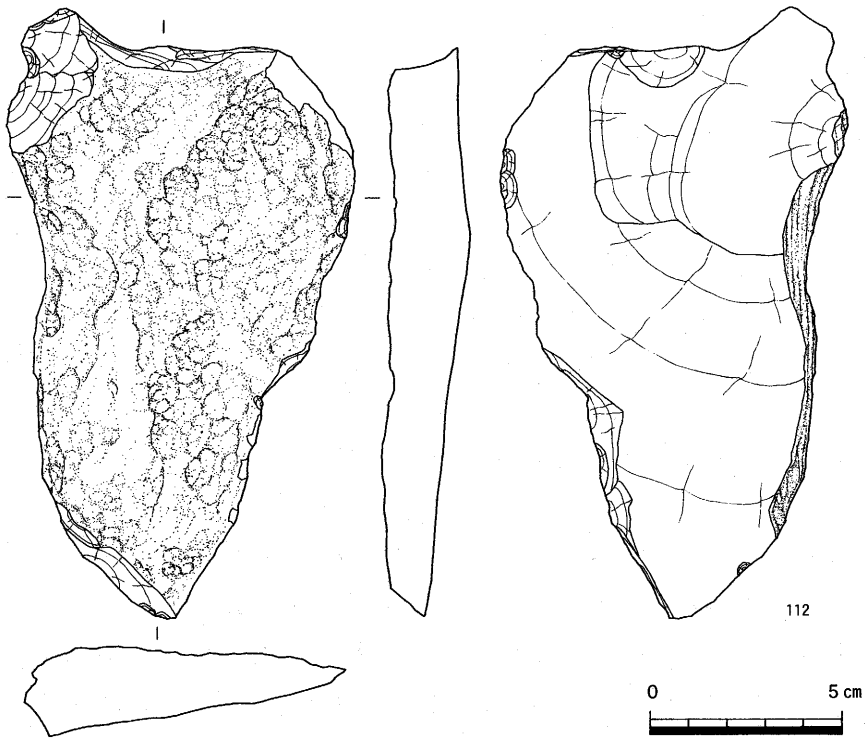
第83図　B区SP出土遺物(1/4, 1/2)



第84図　B区包含層出土遺物(1)(1/4)



第85図　B区包含層出土遺物(2)(1/2)



第86図　B区包含層出土遺物(3)(1/2)

3．まとめ（第87図）

1．遺構の変遷

鹿庭遺跡では弥生時代と中世の遺構、遺物および縄文時代、近世の遺物を確認した。以下では各時期の遺構、遺物を時期ごとに説明する。

①縄文時代　この時期に属する遺構は検出されていない。遺物はA区第1遺構面包含層（中世）などに混入して前期の鍬形鏃が少量見られる。また小型で正三角形に近い凹基式石鏃（82）は国分寺六つ目遺跡（註2）などで見られる縄文後期の石鏃と形態的に類似する。ただ、点数が少なく可能性を指摘できるにすぎない。このように当該期に比定しうる資料は極めて乏しい。ただ、A区中世包含層からはサヌカイト製石器、未製品とともに剥片、チップが多量に出土しており、遺跡内での石器製作を示す。縄文期の遺物より石器製作がこの時期にも行われた可能性がある。

②弥生時代　この時期の地形はA区北東部、B区北西部が緩斜面であり、A区西部、南部、B区南部が丘陵斜面である。遺構は数基の土坑があるのみで居住遺構は見られない。また、土器も10個体分程度しか出土していない。だが、サヌカイト集積土坑（B区ＳＫ02）があり、混入ながらA区中世包含層からは弥生時代に比定される有茎式石鏃を含めた前記の石器資料が出土しており、石器製作が行われたと考えられる。詳細は後述する。

③中世　この時期には弥生時代の緩斜面上に土砂の堆積が進む。結果、緩斜面はレベル高が上がり、範囲が広がったと推定されるが、勾配は変わっていない。よって基本的な地形はさほど変化していないと思われる。遺構は8棟の掘立柱建物と20基ほどの土坑群がある。いずれからも詳細な時期がわかるような遺物が出土しておらず、遺構群の変遷は把握できないが、出土遺物の多くが13～14世紀代に位置づけられるためこの時期を中心としていると考えられる。（15世紀後半以降の土器もごく少量見られるが、この時期まで下る遺構があるとしてもきわめて少ないと考えられる。）

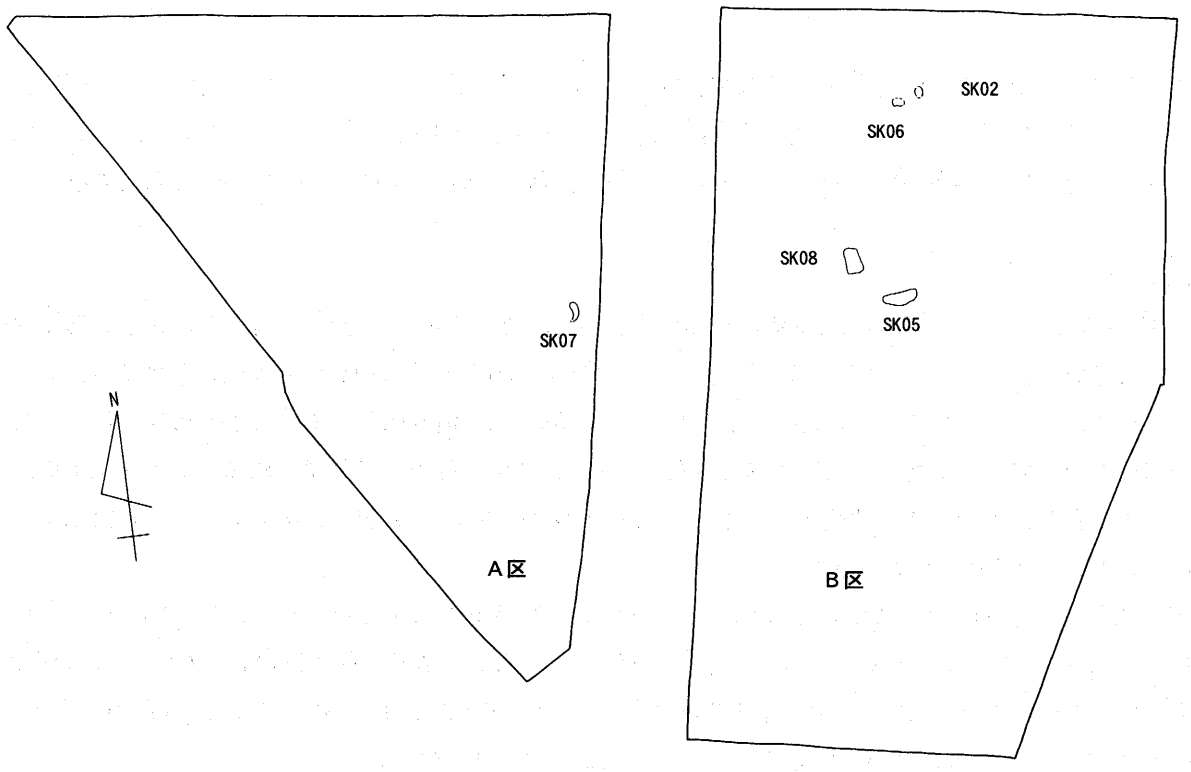
建物はA区北東部の緩斜面に、土坑群は緩斜面と斜面の境界からやや斜面になった部分付近に集中する。建物の床面積はいずれも20㎡に満たないものであり、集落規模同様小規模なものである。建物群は丘陵斜面に近接して分布する。検出した河岸段丘がこの時期に形成されていたかどうかは不明であるが、おそらく東側の馬宿川に規制された結果なのであろう。馬宿川は激しい暴れ川で近世以降に流域の開発が進んだとされている（註3）ことはこれを傍証する。

④近世　少量の土器が出土しているのみで、遺構は見られない。

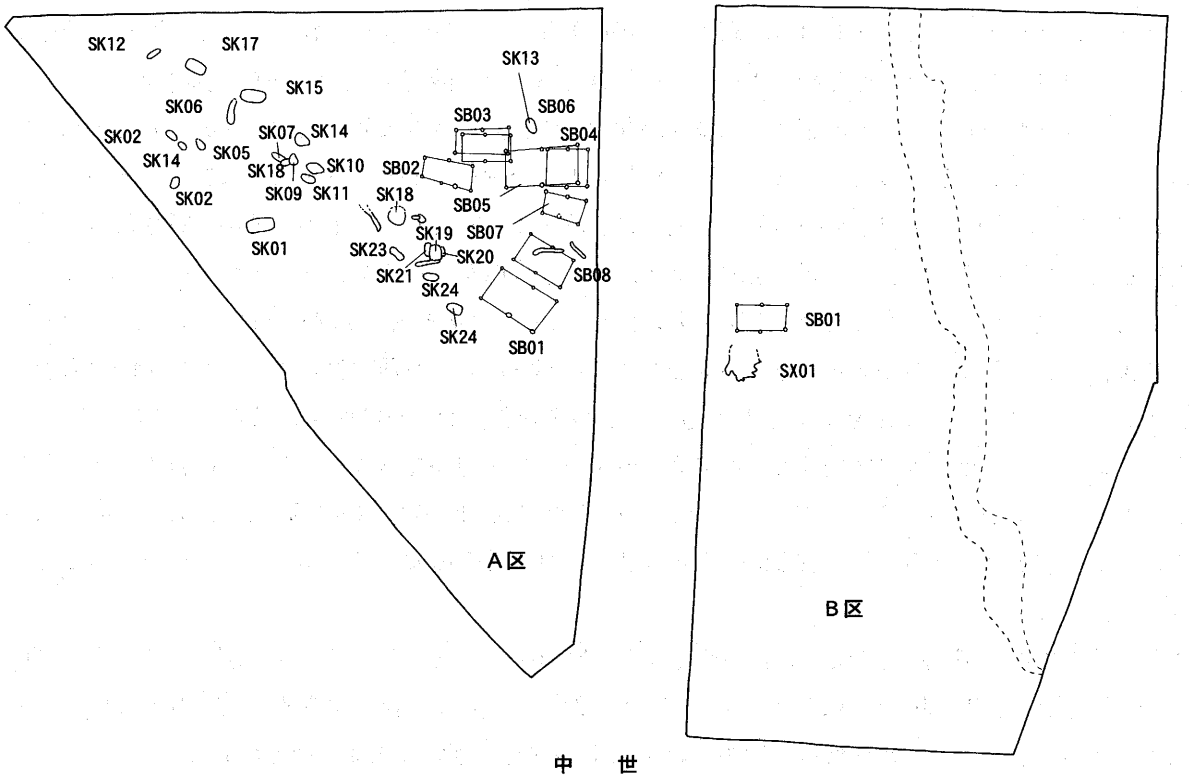
（註1）間壁忠彦『考古学ライブラリー60　備前焼』ニューサイエンス社　1991

（註2）『国分寺六つ目遺跡』香川県教育委員会他　1999

（註3）『川北1号墳』引田町教育委員会　1985



弥生時代



中　世

0　20m

第87図　鹿庭遺跡遺構変遷図(1/600)

2．サヌカイト剥片集積土坑（Ｂ区ＳＫ 02）と遺跡出土石器について

Ｂ区ＳＫ 02 では 6 枚のサヌカイト大形剥片が重なった状態で出土している。また遺跡からは中世包含層出土資料が中心ではあるが、石器とともに多量のサヌカイト剥片、砕片が出土している。ここではこれらの石器群と石器製作の関係について若干の検討を行い、遺跡の機能、生業について考察する。

①Ｂ区ＳＫ 02 について

Ｐ 90 で行った土坑、出土遺物に関する事実報告を基に改めてＳＫ 02 について論じる。まず大形剥片の重複状況であるが、写真（図版 25)、図面（第 78 図）をみると土坑の中央から東側にかけてかたまって出土している。そして東側の 3 枚（上から 92 、89 、93）は横積みになっているように見える。これらの剥片について写真を基に実際に並べてみたが、3 枚とも南にむかってわずかに傾くものの上下面はほぼ水平であり、平行した位置関係にある。また相互の隙間も 1cmもなく近接する。こうした出土状況から意図的に据え置かれた可能性が高い。

西側にある 88 、90 、91 については 91 と 92 のごく一部が上下に重なっている。91 が下位にあり、さらに下に 90 があるので 6 枚を一連の人為的な配置と捉えることも不可能ではない。だが、92 は西側にやや傾いていることから本来 6 枚が横積みになっていたのが、88 、90 、91 が崩落した後、92 が西に動いて 91 の上に重なったという可能性もあるため人為性は立証できない。

次に剥片集積と土層堆積状況との関係についてであるが、埋土の 4 層最上面で剥片が出土し、底から浮いている。(註 1) 堆積土内には地山ブロックなど人為的な埋め戻しの痕跡は見られず、剥片を埋め戻したとは言えない。よってＳＫ 02 は剥片の集積を目的として掘削されたものでなく、埋没しかけた廃絶土坑を利用していると考えられ、オープンな状態であった可能性がある。廃絶土坑の利用という点については本調査で検出した土坑北部では剥片が存在せず、出土状況より人為的な配置と考えられない石鏃 2 点、砕片が出土したのみであること、すなわち土坑が剥片集積部よりかなり大きいことが示唆する。また 3 層は灰色味を帯びるものの他の埋土との差はごく微妙であり、土層堆積が中断されることなく進行したと推測される。よって剥片を取りだすために再掘削が行われたとも考えがたい。

続いて出土剥片についてであるが、15cm大の大形、10cm弱のやや小形が 3 枚ずつある。大形は板状石核素材となりうるものであり、やや小形なスクレイパーなどの石器素材とすることも可能なものを含む。これらは同一母岩に由来すると考えられるものを含む。88 、93 は他より風化が強く、リング、フィッシャーが溶けたようにぼやける。他に 0､5 ～ 1 mmの気泡が見られること、石の目の方向に不純物が黒い筋として認められることでも共通する。91 、92 は色調、質感以外に石の目に沿って面上に白い 5 mm幅の縞が見られること、礫表面にある筋状に抉れた部分の幅、深さが 3 ～ 5 mmであることで類似する。

また土坑外であるが、付近で礫表面を大きく残す大形剥片が 3 点出土している。(註 2) このうち 89 、112 は接合関係（第 88 図の 1）にある。よってＳＫ 02 から出土した剥片は遺跡内での石器製作のため一括して持ち込まれたと考えられる。1 は側面図上部に 89 を剥ぎ取った際の打点が見られる。

②ＳＫ 02 の性格

遺構の性格を考えるに当たって石器集積遺構について県内、近県で管見に触れた事例を紹介し、比較を行う。

国分寺六つ目遺跡（註 3）（香川県綾歌郡国分寺町）

遺跡は堂山から六つ目山に続く山塊と伽藍山に囲まれた谷地形の付け根に位置する。縄文時代のサヌカイト石器集積遺構が検出されており、付近の包含層からは 2000 点以上の石器、剥片類が出土している。時期については出土土器がなく、詳細は不明である。だが、報告者により出土した石鏃の形態、石匙の多さから縄文時代に位置づけられること、剥片の風化度から概ね同時期の石器が多いことが指摘されている。放射性炭素年代測定法を参考にすれば、縄文時代後期頃となる。多量の石器が出土している一方で、土器が見られないことから集落外にあって石器製作を中心に行う場であったと考えられる。

集積遺構（註 4）では板状剥片を中心に 112 点の石器が集中した状況で出土しており、横方向に水平に近い状態で重なったり、数枚が立って並んだりしている。製品は石匙 1 点のみである。剥片には長さ、幅とも 2cm大であり、小形石器の素材となるものから長さが 15cmほどあり、板状石核素材となりうるものまでが含まれる。また、遺跡全体では 18 点の接合資料が得られている。4 は集積遺構から出土した石匙である。片面にのみ刃部を形成する。5、6 は集積遺構から出土した剥片である。7 は 5、6 の接合資料である。2、3 は包含層より出土した凹基式の石鏃である。2cmほどの小形品であるが、遺跡内から出土した石鏃には 3cm以下の凹基式石鏃が多い。

川津六反地遺跡（註 5）（香川県坂出市）

遺跡は丸亀平野の北東隅に位置し、約 1 km離れた所に常山、飯野山などがある。包含層より縄文時代のサヌカイト石器集積遺構、3 ヶ所の石器ブロックが検出されている。集積遺構は 2 ヶ所の石器ブロックと特に近接している。報告者は一連の石器群の時期について石鏃の形態、遺構の切り合い、地理学的な指摘などから縄文時代後期である可能性を示唆する一方で、包含層からの出土土器が皆無であること、概報段階であり、理科学的な分析も結果が出ていないことから慎重な態度をとっている。六つ目遺跡と同様に多量の石器が出土しているものの土器は認められない。報告者は遺跡の性格を概報段階の「現状では」としながら、「集約的な石器製作の作業場」と捉えている。

集積遺構は 2 点のスクレイパー、2 点の石核を含む 24 点の剥片を中心とした石器からなる。これらは 50 ｃｍほどの範囲にかたまっており、幾重にも折り重なった部分もある。石器ブロックは径 10 ｍ前後が 2 ヶ所、長径約 4、5 ｍが 1 ヶ所あり、約 1600 点の石器が出土している。このうち定型石器は石鏃 3 点、同未製品 3 点、スクレイパー 6 点、石核 5 点に過ぎず、残りは剥片、チップ、加工のない原石である。10 は剥片である。剥片採取の可能性を持つ剥離が見られる。集積遺構から出土している。8、9 は凹基式、平基式の石鏃である。石器ブロックから出土している。

平池南遺跡（註 6）（香川県丸亀市）

遺跡は丸亀平野の北西部に位置する。縄文時代晩期の石器集積遺構が検出されている。付近の包含層からは 40 点ほどの石器、剥片が出土している。集積遺構では遺構面に接して 3 点のサヌカイト製打製石斧と 2 点の砂岩製叩き石が主軸をほぼ東西に揃えた状態で折り重なって出土している。また石器下位にはサヌカイト小剥片も 1 点出土した。出土状況から袋状の有機質のものに納められていた可能性が指摘されているが、痕跡は確認されていない。

百間川沢田遺跡高縄手Ｂ調査区（註 7、8）（岡山県岡山市）

遺跡は旭川東岸の平野部に位置し、すぐ南側には操山丘陵が東西に延びる。微高地上に縄文時代晩期のサヌカイト石器集積土坑 1 基（報告書での「集積土坑 1」）、集積遺構 1 基（報告書での「集積土坑 2」（註 9））を検出している。2 基の遺構は 5 ｍほどの間隔を開けて検出された。調査区内で当該期の遺構は

希薄であるが、付近では同時期の炉跡１基と数基の土坑がかたまって検出されている。また50ｍほど西にある旧河道では一定量の縄文晩期土器が出土している。よって集落域の外れに位置すると考えられる。

集積土坑１は平面形が楕円形で長径60cm、短径47cm、深さ14cmを測る。石器は土坑の底から浮いた状態で４点出土している。南側の２点はやや傾いた状態ながら接して重なっており、長軸を揃える。11、13は剥片である。11は石核素材となりうるサイズであるが、素材剥片の採取は行われていない。12は「大形直縁刃石器」（註10）である。刃部に連続した小剥離が見られる。もう１点石庖丁状石器が出土しているが、図化されていない。長方形状を呈し、刃部には珪酸の付着によると推定される光沢が一部に認められるという。

集積遺構は30cmほどの範囲に６点の石器が横積みに重なった状態で出土している。14は打製石斧である。使用痕はなく、未使用かそれに近い状態である。15、16は剥片である。他に15の半分ほどの大きさをもつ剥片が１点、石核が２点出土している。

百間川原尾島遺跡三の坪、横田調査区（註11）（岡山県岡山市）

遺跡は百間川沢田遺跡の北西部に位置する。弥生時代前期後半の集落域内部で該期のサヌカイト石器集積土坑（土坑61）を検出している。南東部に20ｍほど離れて３棟の竪穴住居跡が復元されている。土坑61は平面形がいびつな楕円形であり、長径170cm、短径115cmを測る。石器は３点出土しており、うち２点が重なっている。出土位置は底から浮いている。（註12）17は大形のスクレイパーである。下部に粗い作りの刃部を形成する。18は石核素材となりうる剥片である。19は小型の柱状片刃石斧である。

以上の県内外の７例と鹿庭遺跡Ｂ区ＳＫ02を比較すると相互に類似、相違する要素を見いだすことができる。

ａ．集積場所は土坑内か、遺構面上である。鹿庭遺跡と同様な廃絶土坑内への集積は百間川沢田遺跡石器集積土坑１、百間川原尾島土坑61でも見られる。この場合、土坑は集積範囲よりかなり面積が大きい。

ｂ．遺構内に集積された剥片、製品は複数が横方向にほぼ水平に積み重なった部分、あるいは複数が直立気味に立って並んだ部分が見られる。これは鹿庭をはじめどの事例でも見られ、出土状況から人為的に置かれたと考えられる。

ｃ．集積された剥片、製品は利用可能なものが主体となる。

ｄ．集積された剥片、製品は遺構ごとに量的な多寡があり、また剥片、製品が混在する。

このうちｂ、ｃは広島県福山市にある洗谷貝塚（註13）で検出された縄文時代後期に属する２基のサヌカイト剥片集積土坑でも見られる要素である。このように石器集積遺構では素材剥片の採取が可能な剥片、石核や、まだ使える石器を人為的に据え置いていると言える。よって廃棄とは考えられず、目的は保管であると想定される。そのように捉えれば、a.の保管場所、d.の保管量、器種組成は保管者の石器製作、使用状況に伴う様々な都合により生じた個別事象であり、保管という点では本質的な問題でないと考えられる。

③遺跡内での石器製作

遺跡内で確認された石器製作の痕跡としてＳＫ02以外では石器未製品（石鏃６点、石鎌状石器１点）、サヌカイト小剥片、砕片（第４、５表）が見られる。小剥片は5cm以下のものが大半であり、縁辺につぶれ、小剥離の密集が見られる楔形石器と思われるものやスポールを一定量含んでいる。楔形石器は小型石器の石核として使用されたものも含まれていると考えられる。こうした石器製作に伴う石器群は

多くが中世包含層から出土しており、縄文時代前期、後期の石鏃と弥生時代の大形有茎式石鏃が含まれる。その他の場所から出土した石器も時期がわかる土器と共伴した例がほとんどなく、石器群の時期を限定することはできない。このため石器の製作形態に関し、製作期間の長短、あるいは時期ごとの製作量の多寡などは全く不明である。ただし、遺跡内で素材剥片の剥離が行われている（89、112の接合資料）ことからＳＫ02で出土した剥片は上の石器群で窺える石器製作と関連するものと考えられる。

なお、鹿庭遺跡からの石器出土量は弥生時代の石器製作を行った集落と比較すれば明らかに少ない（第4表）。だが、出土した石器の総重量は約2、7kｇある。製品が使用のため持ち出されたと考えられること以外に調査面積の制約、後世の削平といった条件もあり、本来これ以上のサヌカイトが存在したことは間違いない。時期幅が広い可能性があるとは言え、この総重量は偶発的な石器製作のため持ち込まれたとするには多すぎると考える。これは保管を目的としたサヌカイト剥片集積遺構が設けられ、遺跡内で再び石器製作を行おうとした意図を見いだせることからも窺える。

④遺跡の機能

ここまでの検討で鹿庭遺跡においてある程度継続的な石器製作が行われたことを推定できた。これを踏まえて遺跡の機能と生業についてまとめておきたい。まず遺跡付近の旧地形についてであるが、「1．土層序」で述べたとおり、調査区南部、西部に近接して丘陵があり、調査対象地はその緩斜面となっている。出土遺物は石器ばかりであり、弥生土器は少ない。〔中世の柱穴（Ａ２区第１面ＳＰ41）に混入した甕が１個体弱で一番まとまった量である。他の遺構からは細片がごく少量出土しているのみである。〕遺構についても居住遺構はなく、少数の土坑があるのみである。よって調査区内で集落が営まれたとは考えられず、石器製作の場として利用されたと考えられる。続いて石器組成を見ると、石鏃とその未製品が半数以上あり、植物質食料採集具である打製石斧、打製石庖丁・石鎌、加工具である石匙、スクレイパーなども含まれる。時期幅が大きい資料であり、出土量も少ないためどの程度遺跡内での生業を反映するか、不安はあるが、狩猟も行われていたことは推測できよう。このように鹿庭遺跡は集落域から外れており、立地、石器組成から狩猟を含めた生業活動の場として利用された可能性を指摘できる。

他の遺跡とも比較すると石器集積遺構を検討するために挙げた７遺跡の内、六つ目遺跡、六反地遺跡では鹿庭遺跡同様土器の出土がない。２遺跡のサヌカイト石器集積遺構は縄文時代に属し、弥生時代に比定される鹿庭遺跡ＳＫ02とは時期差があるが、同様に集落外で石器製作を行った場であることが想定される。立地的にも丘陵、山塊に近接しており、出土石器に石鏃とその未製品が含まれる。また六つ目遺跡では石核からの採取剥片の大きさが１～4cmのものが多く、石鏃製作を意図した可能性が指摘されており、石匙も多く出土している。よって２遺跡でも鹿庭遺跡と同様、集落外で狩猟を含めた生業活動が営まれたことが推定できる。このように集落外で石器製作を行う理由として想像をたくましくすれば、狩猟の場と集落が離れている、剥片入手地が狩猟の場と近接する、などを考えられるかもしれない。だが、地域という広い範囲を視野に置いて石器組成、集落単位の生活圏、石材の流通状況などについて検討した上で解釈可能な問題であり、ここでは具体的に論じることができない。後考に期待したい。

(註 1)　ＳＫ 02 は東に下る斜面上で検出されたが、３，４層間の分層ラインは西に下り、東側からの土壌堆積が想定される。ただし、「(註１)」下記の通り、人為的埋め戻し、再掘削は考えがたいことからＳＫ 02 の埋没途上には斜面でないこと、すなわち「１．地理的環境」で述べた河岸段丘はまだ形成されていなかったと考えられる。

(註 2)　①３点にはＳＫ 02 出土剥片と接合関係にあるものを含む、②大形剥片の出土はこの３点とＳＫ 02 出土資料に限定される、という状況から両者は密接な関係にあると考えられる。こうした石器群が土坑内の集積と外部への散逸という異なる出土状況を示す理由については明らかでないが、仮に全てが土坑内にあったとすれば、オープンな状態での集積が推測されること、河岸段丘の形成により削平を受けていることなどが関係しているのかもしれない。

(註 3)　『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 34 冊　国分寺六つ目遺跡』　香川県教育委員会他　1999

(註 4)　集積遺構の下部には「埋土が把握しがたい土坑状の落ち込み」が検出されている。だが、報告書では剥片の出土レベルと落ち込み検出レベルを比べると剥片が浮いており、集積下の土坑の存在は確証がないとされているためここでは取り上げなかった。

(註 5)　『県道関係埋蔵文化財発掘調査概報　平成 12 年度』「川津六反地遺跡」　香川県教育委員会他　2001

(註 6)　『陸上競技場建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報　平成７年度　平池南遺跡』　香川県教育委員会他　1996

(註 7)　『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 84　百間川沢田遺跡 3』　岡山県教育委員会他　1993

(註 8)　平井勝「石製収穫具埋納の意義」『古代吉備第 20 集』　古代吉備研究会　1998

ここで扱った岡山県の３事例について平井氏は石製収穫具「埋納」遺構としている。(「」は執筆者による。) 氏は岡山県内の溝、土坑、竪穴住居に一括埋納された弥生時代の石器を集成する中で、その器種が穂積み具を中心としたものであることを指摘し、意義を単なる保管でなく、農耕儀礼の一部としている。氏が集成した 11 例中 10 例では確かに穂積み具を含み、収穫具が高頻度で含まれることは事実である。だがその器種組成を見ると穂積み具が３点以上、比率にして 75％以上を占める場合は石核を伴わない。一方穂積み具が２点以下、比率にして 50％以下では石核を伴う。このように石核と穂積み具の「埋納」では排他性が認められる。平井氏は石核と穂積み具が素材と製品という関係を持ち、有機的であると説明しているが、石核は穂積み具だけの素材でなく、肯定できない。よって平井氏が指摘した石製収穫具「埋納」は穂積み具が 75％以上、点数も３点以上とまとまる事例については成立するかもしれないが、本稿で取り上げた３遺跡については性格が異なると考える。

(註 9)　「集積土坑 2」は土坑としているが、掘り形が確認されていないため本文では「集積遺構」とした。

(註 10)　斎野裕彦「弥生時代の大型直縁刃石器（上)」『弥生文化博物館研究報告第２集』　1993

斎野裕彦「弥生時代の大型直縁刃石器（下)」『弥生文化博物館研究報告第３集』　1994

斎野氏は大型直縁刃石器を主にイネ科植物の切断を機能とする「鎌」のような用途をもつ石製農具と考えている。

(註 11)　『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 106　百間川原尾島遺跡 5』　岡山県教育委員会他　1996

(註 12)　(註 8) 文献内で平井氏は 17、18 が底面近くから出土していること、19 の柱状片刃石斧はこれに伴わないことを述べている。

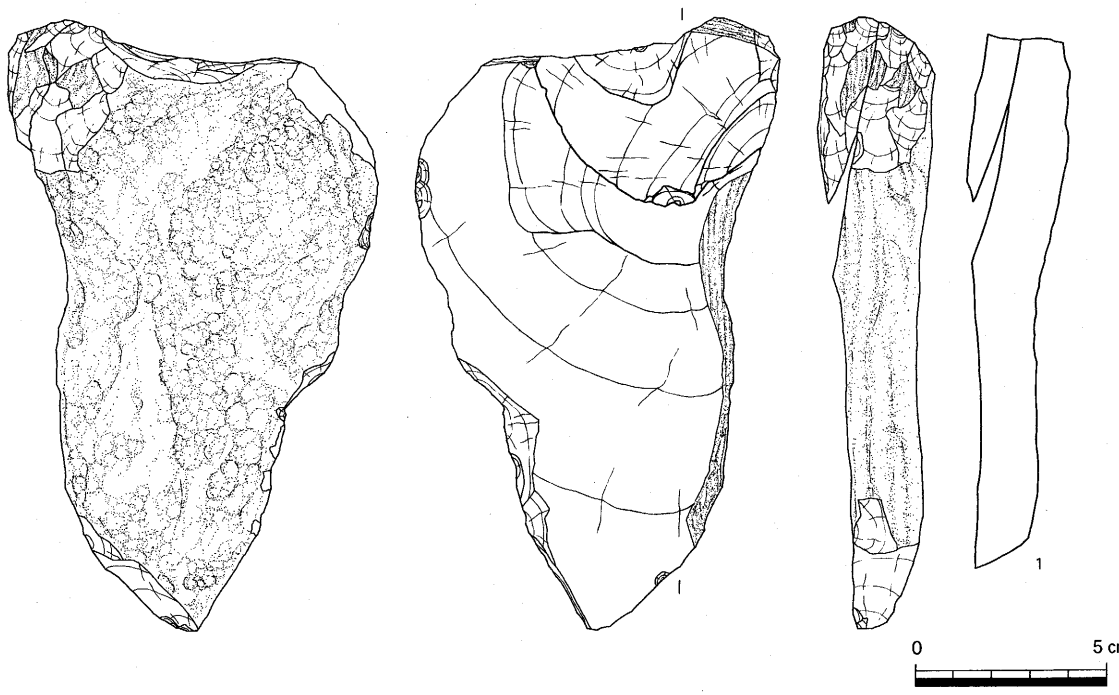
(註 13)　『洗谷貝塚』福山市教育委員会他　1976

(註 14)　『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第36　禔@金比羅山遺跡　塔の山南遺跡　庵の谷遺跡』香川県教育委員会他　2000

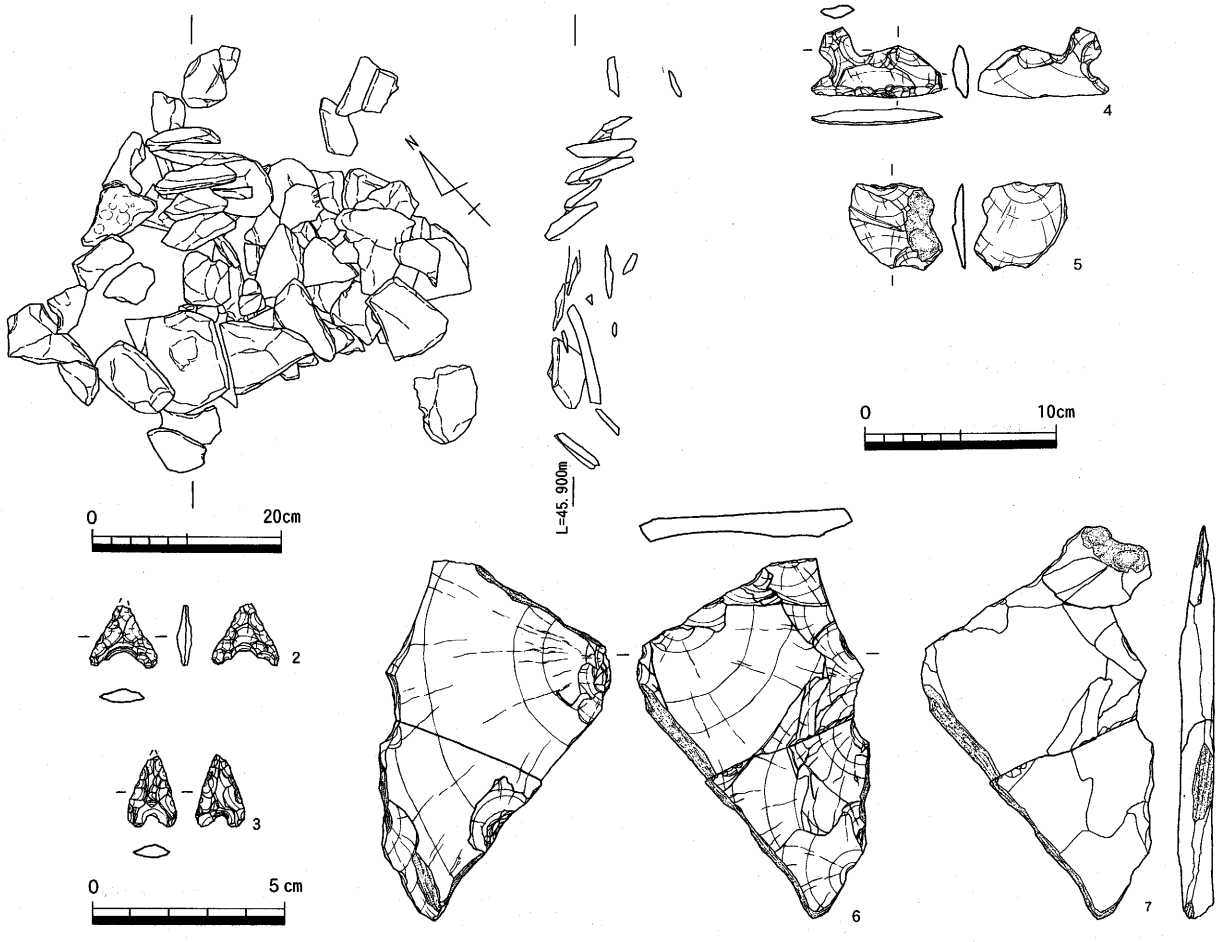
庵の谷遺跡は大川郡引田町に所在する弥生時代中期末～後期初頭の集落跡である。石器製作を行った竪穴住居跡をはじめ、多量のサヌカイト製石器が出土している。

(註 15)　『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第７冊　鴨部・川田遺跡Ｉ』　香川県教育委員会他　1997

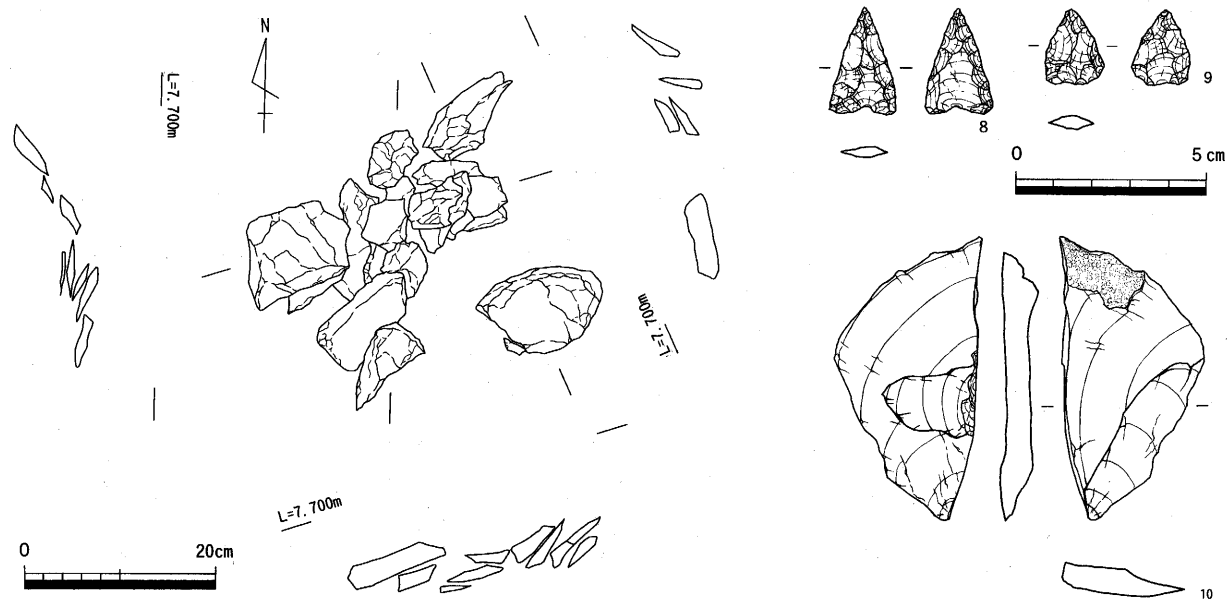
鴨部・川田遺跡は弥生時代前期後半～中期初頭の集落跡である。大陸系磨製石器、大形素材剥片を含め多量の石器類が出土しており、サヌカイトも多く見られる。



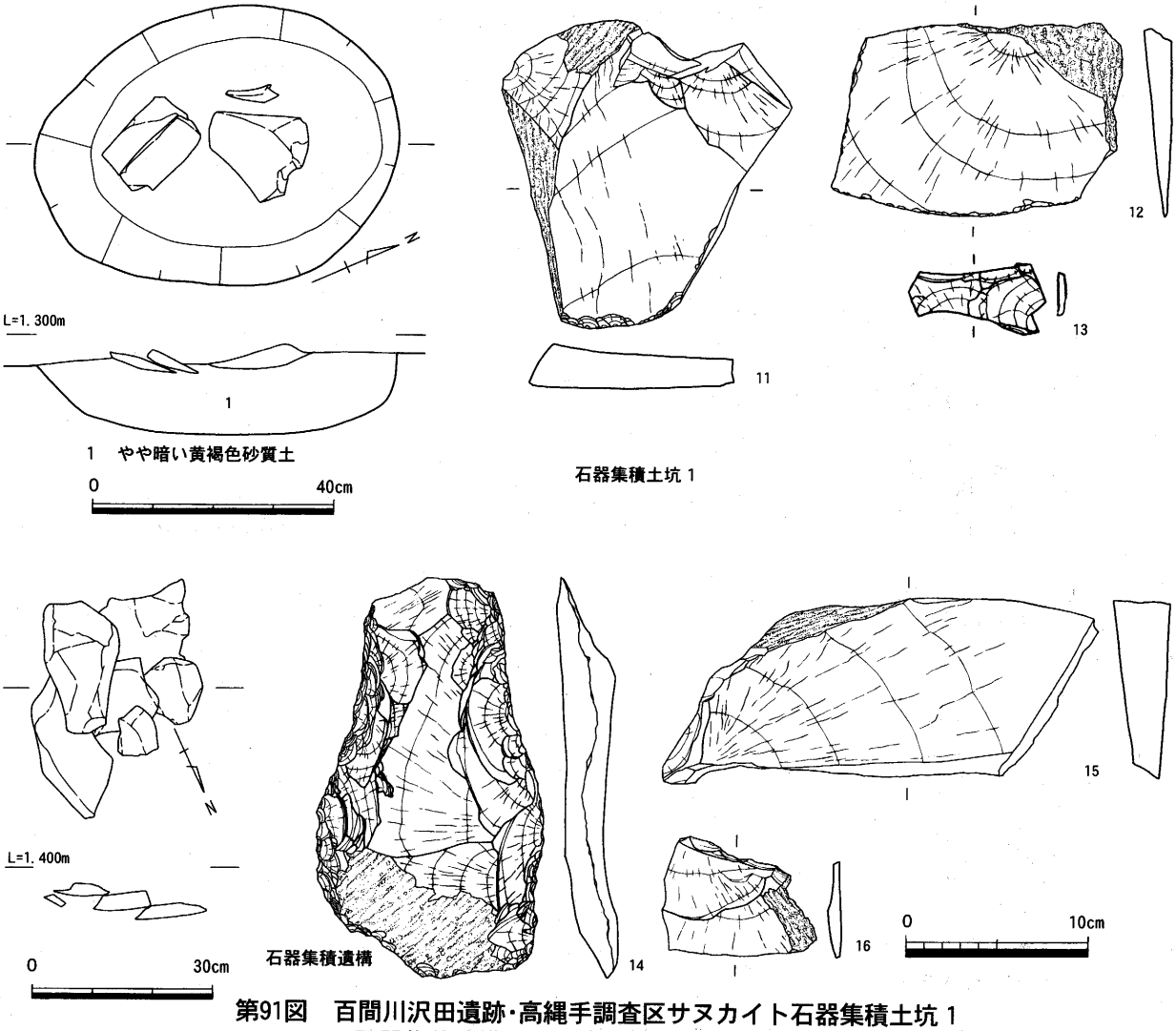
第88図　鹿庭遺跡接合資料(1/2)



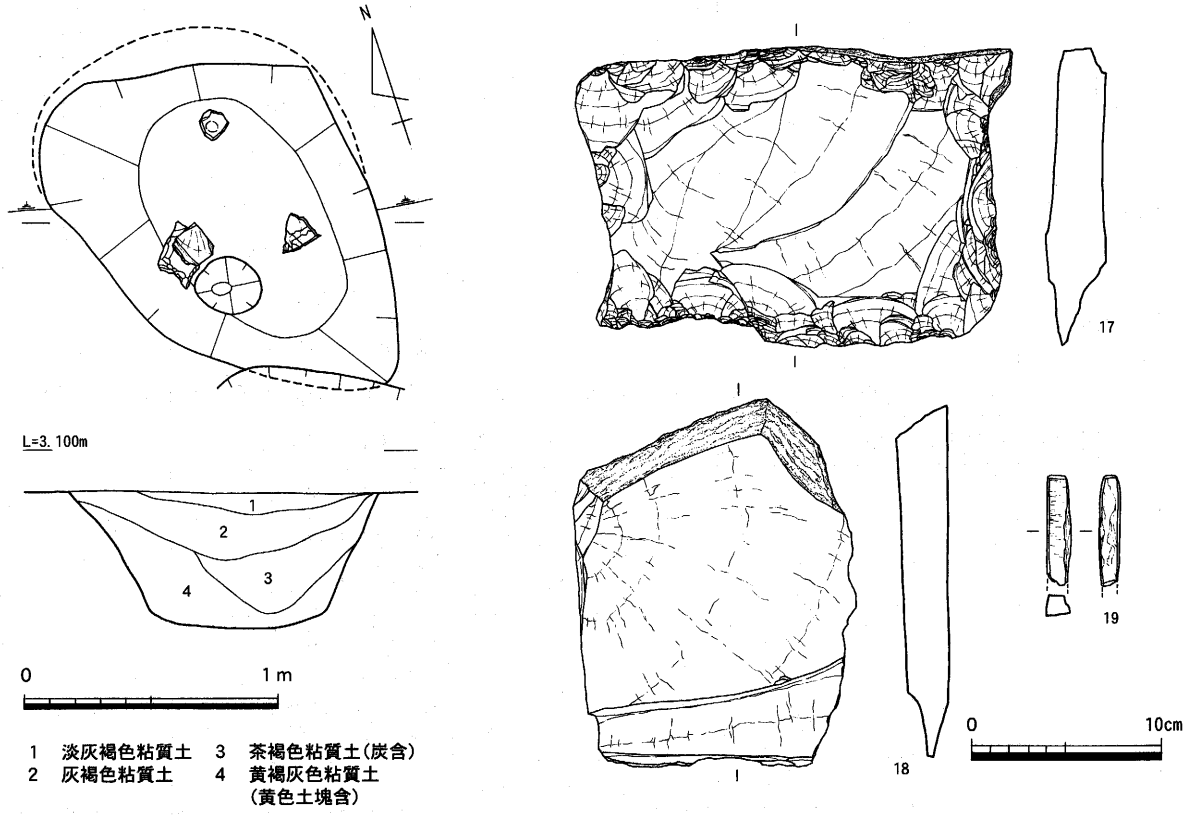
第89図　国分寺六つ目遺跡サヌカイト石器集積遺構平・断面図(1/8)、出土遺物(2・3は1/2, その他1/4)



第90図　川津六反地遺跡サヌカイト石器集積遺構平・断面図(1/8)、出土遺物(1/2, 1/4)



第91図　百間川沢田遺跡・高縄手調査区サヌカイト石器集積土坑 1
石器集積遺構平・断面図(1/2)、出土遺物(1/4)



第92図　百間川原尾島遺跡三ノ坪・横田調査区土坑61平・断面図(1/30)、出土遺物(1/4)

	製品重量(g)	製品以外の重量(g)	総重量(g)
庵の谷(註14)	8234.2	15119.04	23353.2
鴨部川田(註15)	4606.1	33865.6	38471.7
鹿庭	253.9	2482.85	2736.75

第4表　庵の谷、鴨部・川田、鹿庭遺跡出土石器重量表

狩猟具	石鏃	35(内、未製品が6)
土掘り具	打製石斧	2
収穫具	打製石庖丁	1
	打製石鎌	1
加工具	石匙	3
	スクレイパー	5
工具	石錐	5
計		52

第5表　鹿庭遺跡出土石器組成表

		掘立柱建物（SB）		柱穴（SP）		土坑（SK）		溝状遺構（SD）	
		新	旧	新	旧	新	旧	新	旧
A区	第１面			A1区SP201	A１区SB07-SP05	取り消し	A1区SK13	A区SD01	A1区SK01
						A区SK13	A1区SK14		
						A区SK14	A1区SK23		
						A区SK15	A1区SK21		
						A区SK16	A1区SK22		
						A区SK17	A1区SK25		
		A区SB08	A2区SB11	A区SB08-SP04	A2区SB11-SP04	A区SK01	A2区第2面SK12	A区SD03	A2区SD01
		A区SB01	A2区SB12	A2区SP06	A2区SB08-SP02	A区SK18	A2区SK01		
				A2区SP09	A2区SB08-SP01	A区SK19	A2区SK02		
				A2区SP10	A2区SB13-SP01	A区SK20	A2区SK05		
				A2区SP12	A2区SB08-SP03	A区SK21	A2区SK06		
				A2区SP32	A2区SB09-SP02	A区SK22	A2区SK03		
				A2区SP41	A2区SB09-SP01	A区SK23	A2区SK04		
				A2区SP112	A2区SB13-SP02	A区SK24	A2区第2面SK11		
				A2区SP13	A2区SB10-SP03				
	第２面					A区SK01	A1区SK16	A区SD03	A2区SD06
						A区SK02	A1区SK17		
						A区SK03	A1区SK18		
						A区SK04	A1区SK20		
						A区SK05	A1区SK24		
						A区SK06	A2区SK13		
B区						B区SK06	B1区SK11		

第６表　鹿庭遺跡　遺構番号変更一覧表

報文番号	実測番号	挿図番号	図版番号	出土位置	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	外面	内面	焼成	色調	胎土	遺存度	備考
1	24	7		Ⅰ区SB01 SP292	土師器 小皿	(8.3)	-	-	横ナデ	横ナデ	普通	にぶい橙5YR6/4	密 0.1～1㎜の砂粒を含む	口縁1/8	
2	23	7		Ⅰ区SB01 SP292	土師器 杯	-	-	(8.1)	横ナデ・底部 ヘラ切り後指ナデ	剥離	普通	にぶい橙7.5YR7/4	密 0.1～1㎜の砂粒を含む	底部3/8	
3	22	7	13	Ⅰ区SB01 SP292	土師器 杯	(13.2)	(3.8)	(6.9)	横ナデ・底部 ヘラ切り、指ナデ	横ナデ	普通	灰白10YR8/2	密 0.1～5㎜の砂粒を含む	3/8	
4	25	7	16	Ⅰ区SB01 SP292	管状土錘	-	-	-	摩滅		普通	橙5YR6/6	密 0.1～1㎜の砂粒を少量含む	完存	
5	68	8	13	Ⅰ区SB02 SP406	土師器 小皿	(8.2)	(1.6)	(4.6)	横ナデ・底部 ヘラ切り後板目痕	横ナデ・横ナデ後指ナデ	良好	橙5Y6/6	密 0.1～1.5㎜の砂粒を少量含む	3/8	
6	29	9	16	Ⅰ区SB03 SP133	青磁 碗	-	-	-	施釉	施釉	良好	(内)(外)釉 暗オリーブ5Y4/3 (胎)黄灰2.5Y6/1	精良	破片	
7	26	9	16	Ⅰ区SB03 SP113	青磁 碗	-	-	-	施釉	施釉	良好	(内)(外)釉 暗オリーブ5Y4/3 (胎)灰白10YR7/1	精良	破片	
8	27	9		Ⅰ区SB03 SP116	東播系須恵器 甕	-	-	-	タタキ目(樹枝文)	摩滅	良好	灰7.5Y4/1	密 0.1～2㎜の砂粒を含む	破片	
9	30	12		Ⅰ区SB06 SP114	土師器 杯	(12.8)	(4.75)	-	指ナデ(摩滅)	指ナデ(摩滅)	普通	にぶい黄褐10YR5/3	密 0.1～3㎜の砂粒を含む	口縁1/8	
10	62	13		Ⅰ区SB07 SP281	土師器 杯	-	-	-	横ナデ・底部 ヘラ切り	横ナデ	普通	浅黄橙10YR8/3	密 0.1～2㎜の砂粒を含む	破片	
11	54	16		Ⅰ区SB10 SP213	土師器 杯	-	-	(8.3)	横ナデ・底部 ヘラ切り	横ナデ後ナデ	普通	にぶい黄橙10YR7/3	密 0.1～2.5㎜の砂粒を少量含む	底部1/8	
12	53	16	13	Ⅰ区SB10 SP213	土師器 杯	(11.3)	(3.4)	(8.3)	横ナデ・底部 指ナデ	横ナデ後指ナデ	良好	灰黄褐10YR5/2	密 0.1～0.5㎜の砂粒を僅かに含む	3/8	
13	64	16		Ⅰ区SB10 SP314	土師器 杯	-	-	(9.1)	摩滅	摩滅	普通	にぶい橙5YR6/4	やや粗 0.1～2.5㎜の砂粒を含む	底部1/8	
14	49	17		Ⅰ区SB11 SP192	弥生土器	-	-	(6.6)	横ナデ	横ナデ	良好	黒褐7.5Y3/1	密 0.1～4㎜の砂粒を含む	底部2/8	
15	31	19		Ⅰ区SB12 SP235	土師質土器 土鍋	-	-	-	横ナデ・摩滅	摩滅	良好	にぶい黄橙10YR7/2	やや粗 0.1～3㎜の砂粒を含む	破片	
16	71	20		Ⅰ区SB14 SP529	東播系 コネ鉢	-	-	-	横ナデ	指ナデ	良好	暗青灰5B4/1	粗 0.1～0.3㎜の砂粒を少量含む	破片	
17	42	21		Ⅰ区SB16 SP130	土師質土器 土鍋	-	-	-	摩滅	ハケ目(摩滅)	普通	灰黄褐10YR5/2	密 0.1～1㎜の砂粒を含む	破片	
18	45	21		Ⅰ区SB16 SP166	土師質土器 茶釜	(16.6)	-	-	横ナデ	横ナデ	普通	明赤褐5YR5/6	やや粗 0.1～3㎜の砂粒を含む	破片	
19	60	22		Ⅰ区SB15 SP242	土師器 杯	-	-	(6.7)	横ナデ(剥離・摩滅)	剥離・摩滅	普通(やや軟)	浅黄橙7.5YR8/4	密 0.1～0.3㎜の砂粒を少量含む	底部2/8	
20	58	22		Ⅰ区SB15 SP227	土師器 杯	-	-	(8.3)	摩滅	横ナデ(摩滅)	普通(やや軟)	浅黄橙7.5YR8/4	やや粗 0.1～0.5㎜の砂粒を少量含む	破片	
21	47	22	14	Ⅰ区SB15 SP180	土師質土器 土釜	-	-	-	横ナデ(摩滅)・指押さえ(摩滅)	指押さえ後横ナデ	良好	浅黄橙7.5YR8/3	やや粗 0.1～5㎜の砂粒を含む	口縁1/8	
22	39	25	14	Ⅰ区SB19 SP102	瓦質土器 釜	-	-	-	横ナデ	横ナデ(摩滅)	良好	暗緑色10GY3/1	密 0.1～1㎜の砂粒を含む	破片	
24	5	26		Ⅰ区SK02	土師器 小皿	(6.9)	(0.9)	(6.4)	横ナデ・底部 糸切り	横ナデ	普通	浅黄橙7.5YR8/4	密 0.1㎜以下の砂粒を僅かに含む	2/8	
25	3	26		Ⅰ区SK02	土師器 杯	-	-	(8.0)	横ナデ	横ナデ	普通	浅黄橙7.5YR8/4	密 0.1㎜前後の砂粒を含む	1/8	
26	4	26		Ⅰ区SK02	土師器 杯	-	-	-	摩滅	摩滅	普通	にぶい黄橙10YR6/3	密 0.1～2㎜の砂粒を少量含む	破片	
27	6	26	13	Ⅰ区SK03 1層	土師器 杯	-	-	(7.2)	横ナデ・底部 糸切り	横ナデ	良好	浅黄橙7.5YR8/4	密 0.1～0.5㎜の砂粒を少量含む	底部1/6	
28	7	26		Ⅰ区SK03	土師質土器 羽釜?	-	-	-	横ナデ	横ナデ	良好	にぶい黄褐10YR5/3	密 0.1～1㎜の砂粒を含む	破片	
29	11-2	26		Ⅰ区包含層	青磁 碗	-	-	-			良好	(内)(外)釉 灰オリーブ7.5Y4/2 (胎)灰白5Y7/1	精良	破片	上田分類D類 30と同一個体か?

第7表 迯田石垣遺跡 土器観察表

報文番号	実測番号	挿図番号	図版番号	出土位置	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	外面	内面	焼成	色調	胎土	遺存度	備考
30	11-1	26	16	Ⅰ区SK05	青磁 碗	-	-	(6.0)	施釉・高台内側　蛇の目釉剥ぎ	施釉・花文陰刻	良好	(内)(外)釉 灰オリーブ7.5Y4/2 (胎)灰白5Y7/1	精良	底部3/8	
31	9	27		Ⅰ区SK04	土師質土器 土釜	-	-	-	横ナデ・指押さえ	ナデ	良好	橙5YR7/6	やや粗　0.1～2.5㎜の砂粒を含む	破片	
32	8	27		Ⅰ区SK04 1層	土師質土器 土鍋	-	-	-	横ナデ	横ナデ	良好	橙5YR7/6	やや粗　0.1～3.5㎜の砂粒を多く含む	破片	
33	10	27	14	Ⅰ区SK04	東播系 コネ鉢	(28.1)	-	-	横ナデ	横ナデ	やや不良	青灰5BG5/1	粗　0.1～2㎜の砂粒を含む	破片	
34	14	29	13	Ⅰ区ST01	土師器 小皿	7.7	1.4	5.7	横ナデ・底部　糸切り	横ナデ	普通	にぶい橙7.5YR7/4	密　0.1～2㎜の砂粒を含む	7/8	
36	91	30	16	Ⅰ区SX01 床直	青磁 碗	-	-	(3.9)	施釉・底部　高台削り出し、無釉	施釉	良好	(内)(外)釉　灰10Y4/1 (胎)灰白N7/0	精良	底部7/8	
37	92	30		Ⅰ区SX01	青磁 碗	-	-	(7.1)	施釉・高台削り出し、無釉	施釉	良好	(内)(外)釉　灰ｵﾘｰﾌﾞ7.5Y6/2 (胎)灰白10YR8/2・淡橙5YR8/4	精良	底部1/8	
38	78	30	14	Ⅰ区SX01	土師質土器 土鍋	-	-	-	剥離・横ナデ	横ナデ	良好	にぶい橙7.5YR7/3	粗　0.1～3㎜の砂粒を多く含む	破片	
39	80	30		Ⅰ区SX01	土師質土器 土鍋	-	-	-	横ナデ(摩滅)	横ナデ(摩滅)	普通	にぶい橙7.5YR7/3	やや粗　0.1～4㎜の砂粒を含む	破片	
40	81	30		Ⅰ区SX01 4層	土師質土器 土鍋	-	-	-	格子目タタキ	ナデ	普通	灰褐7.5YR5/2	密　0.1～2㎜の砂粒を含む	破片	煤付着
41	79	30		Ⅰ区SX01	土師質土器 土釜	-	-	-	横ナデ・ナデ	摩滅	良好	橙2.5YR6/6	やや粗　0.1～3㎜の砂粒を含む	破片	
42	88	30		Ⅰ区SX01	土師質土器 すり鉢	-	-	(10.5)	摩滅・剥離・底部　ナデ	摩滅・条溝3条2カ所	やや不良	灰白2.5Y7/1	やや粗　0.1～0.3㎜の砂粒を少量含む	底部	
43	85	30		Ⅰ区SX01	備前焼 すり鉢	-	-	-	横ナデ・ナデ	横ナデ	普通	黄灰2.5Y5/1	やや粗　0.1～3㎜の砂粒を含む	破片	
44	84	30	15	Ⅰ区SX01	備前焼 すり鉢	(30.45)	-	-	横ナデ	横ナデ	良好	灰10Y4/1・灰褐5YR4/2	密　0.1～4㎜の砂粒を含む	口縁1/8	
45	83	30	16	Ⅰ区SX01	管状土錘	(6.0) 現存長	(2.2) 現存幅	(0.8) 厚さ	摩滅・横ナデ		普通	淡赤橙2.5YR7/4	やや粗　0.1～0.3㎜の砂粒を僅かに含む	破片	
46	90	30	17	Ⅰ区SX01	平瓦	(9.5) 現存長	(6.3) 現存幅	(1.5) 厚さ	摩滅	摩滅・タタキ	やや不良	灰10Y4/1	やや粗　0.1～4㎜の砂粒を含む	破片	天王谷で製作
47	89	30	17	Ⅰ区SX01	平瓦	(10.2) 現存長	(7.4) 現存幅	(2.3) 厚さ	摩滅	摩滅	不良	暗青灰10BG4/1	やや粗　0.1～4㎜の砂粒をやや多く含む	破片	
48	86	30		Ⅰ区SX01	備前焼 甕	-	-	-	ハケ目	横ナデ	良好	褐灰10YR4/1	密　0.1～2㎜の砂粒を含む	破片	
50	15	31		Ⅱ区SK01 1層	土師器 杯	-	-	(9.1)	横ナデ(剥離)・底部　ヘラ切り(剥離)	横ナデ(剥離)	普通	にぶい黄橙10YR7/3	密　0.1～1㎜の砂粒を含む	1/8	
51	17	32		Ⅱ区SK04 4層	土師質土器 土釜	-	-	-	指押さえ後横ナデ	ナデ(摩滅)	普通	黒褐2.5Y3/1	やや粗　0.1～7㎜の砂粒を含む	破片	
52	16	32		Ⅱ区SK04 4層	土師器 鉢？	-	-	(12.1)	剥離	摩滅・剥離	普通	灰5Y4/1	密　0.1～1.5㎜の砂粒を含む	底部2/8	
53	18	33		Ⅱ区SK05	土師質土器 土鍋	-	-	-	ハケ目後指押さえ	ハケ目(剥離)・剥離・摩滅	良好	灰黄褐10YR4/2	粗　0.1～4㎜の砂粒を含む	破片	
54	21	33		Ⅱ区SK06	土師器 杯	-	-	-	横ナデ・底部　糸切り	摩滅	普通	にぶい黄橙10YR6/3	密　0.1㎜前後の砂粒を含む	破片	
55	19	33	14	Ⅱ区SK06	東播系 コネ鉢	-	-	-	横ナデ	指ナデ	良好	灰N5/0	やや粗　0.1～0.5㎜の砂粒を少量含む	破片	
56	70	34	15	Ⅰ区SP514	亀山焼 甕	(27.7)	-	-	横ナデ・格子目タタキ	横ナデ・青海波文後ナデ	良好	灰5Y6/1	やや粗　0.1～3㎜の砂粒を含む	口縁1/8	
57	35	35	14	Ⅰ区SP001	瓦質土器 蓋？	(9.5)	-	-	指ナデ・横ナデ	横ナデ	良好	灰10Y4/1	密　0.1～0.3㎜の砂粒を少量含む	口縁1/8	
58	36	35		Ⅰ区SP050	土師器 杯	-	-	-	横ナデ・底部　ヘラ切り	横ナデ	良好	灰白N7/0	密　0.1～1㎜の砂粒を含む	破片	須恵質
59	37	35		Ⅰ区SP052	土師器 椀	-	-	-	摩滅・貼り付け高台	摩滅	普通	にぶい黄2.5Y6/3	密　0.1～1㎜の砂粒を含む	破片	

迯田石垣遺跡　土器観察表

報文番号	実測番号	挿図番号	図版番号	出土位置	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	外面	内面	焼成	色調	胎土	遺存度	備考
60	32	35		Ⅰ区SP005	東播系 コネ鉢	-	-	-	指押さえ・横ナデ後板ナデ	板ナデ・摩滅	良好	灰N5/0	密 0.1～3mmの砂粒を含む	破片	底部外面端部剥離(使用痕？)
61	38	35	14	Ⅰ区SP064	土師質土器 土釜	(19.2)	-	-	横ナデ・指押さえ	横ナデ・板ナデ後ナデ	良好	橙5YR6/6	やや粗 0.1～2.5mmの砂粒を含む	口縁	1/8 外面に煤付着
62	40	35		Ⅰ区SP109	土師器 杯	-	-	-	横ナデ(摩滅)・底部 糸切り	横ナデ	普通	にぶい黄橙10YR7/3	密 0.1～3mmの砂粒を少量含む	破片	
63	43	35		Ⅰ区SP134	土師器 器種不明	-	-	-	ナデ・摩滅	横ナデ	普通	にぶい橙5YR6/4	密 0.1～1mmの砂粒を含む	破片	
64	41	35	14	Ⅰ区SP120	土師質土器 土釜	-	-	-	横ナデ・指押さえ後指ナデ	指押さえ後横ナデ	良好	にぶい赤褐5YR4/4	やや粗 0.1～2mmの砂粒を含む	破片	外面に煤付着
65	46	35	14	Ⅰ区SP173	土師質土器 すり鉢	(24.9)	-	-	横ナデ	横ナデ・条溝8条以上	良好	灰黄2.5Y7/2	密 0.1～4mmの砂粒を含む	1/8	
66	48	35		Ⅰ区SP186	土師器 器種不明	-	-	-	横ナデ	横ナデ	普通	にぶい橙7.5YR7/4	密 0.1～1mmの砂粒を含む	破片	
67	51	35		Ⅰ区SP193	土師器 杯	-	-	-	横ナデ(摩滅)・底部 ヘラ切り(摩滅)	横ナデ(摩滅)	破片	浅黄橙10YR8/3	密 0.1～1mmの砂粒を少量含む	破片	
68	50	35	14	Ⅰ区SP195	土師質土器 土釜	-	-	-	横ナデ・指押さえ(摩滅)	指押さえ後指ナデ	破片	にぶい橙7.5YR6/4	やや粗 0.1～4mmの砂粒を含む	破片	
69	52	35		Ⅰ区SP196	土師器 杯	-	-	-	摩滅	摩滅	破片	にぶい黄橙10YR7/4	密 0.1mm以下の砂粒を含む	破片	
70	61	35		Ⅰ区SB08 SP252	土師器 椀	-	-	-	ナデ・貼り付け高台	ナデ	良好	橙5YR7/6	密 0.1～1mmの砂粒を少量含む	破片	
71	63	35		Ⅰ区SP283	土師器 杯	-	-	(8.0)	摩滅	横ナデ	普通	にぶい黄橙10YR6/3	密 0.1～0.3mmの砂粒を僅かに含む	底部1/8	
72	65	35		Ⅰ区SP330	東播系 コネ鉢	-	-	-	横ナデ	横ナデ	良好	青灰5PB6/1	やや粗 0.1～0.3mmの砂粒を含む	破片	
73	34	35		Ⅰ区SP337	西村産 須恵器 碗	-	-	-	横ナデ・一部ヘラミガキ	横ナデ	良好	灰白5Y7/1・灰5Y5/1	密 0.1～1mmの砂粒を含む	破片	
74	33	35	14	Ⅰ区SP337	東播系 須恵器 小皿	(7.0)	(2.1)	(5.1)	横ナデ・底部 糸切り	横ナデ	良好	灰N4/0	密 0.1mm以下の砂粒を僅かに含む	底部2/8	
75	66	35	16	Ⅰ区SP400	青磁 碗	-	-	(5.4)	施釉・連弁文	施釉・片彫り	良好	(内)(外)釉 灰ｵﾘｰﾌﾞ7.5Y5/2 (胎)灰白2.5Y7/1	精良	底部3/8	
76	67	35	15	Ⅰ区SP405	備前焼 器種不明	(8.8)	-	-	横ナデ	横ナデ	良好	黄灰2.5Y4/1	密 0.1～0.3mmの砂粒を僅かに含む	口縁1/8	
77	69	35		Ⅰ区SP471	土師器 小皿	-	-	-	横ナデ	横ナデ	普通	浅黄橙7.5YR8/4	密 0.1～1mmの砂粒を含む	破片	
78	72	35		Ⅰ区SP540	土師器 杯	-	-	(8.7)	横ナデ・底部 糸切り	摩滅・剥離	普通	にぶい橙7.5YR7/4	密 0.1～2.5mmの砂粒を少量含む	底部2/8	
79	77	35		Ⅰ区SP570	土師器 小皿	(7.8)	-	(8.3)	横ナデ	摩滅	普通	浅黄橙10YR8/3	やや粗 0.1mm以下の砂粒を少量含む	破片	
80	74	35		Ⅱ区SP08	土師器 円盤状高台杯	-	-	(6.0)	摩滅	剥離・摩滅	普通	浅黄橙7.5YR8/4	密 0.1～0.3mmの砂粒を少量含む	底部2/8	
81	76	35	15	Ⅱ区SP15	備前焼 鉢？	(12.3)	-	-	横ナデ	横ナデ	良好	7.5YR4/3	やや粗 0.1～1mmの砂粒を含む	口縁1/8	
82	75	35		Ⅱ区SP28	土師器 杯	(11.8)	(3.0)	(8.9)	摩滅・剥離	摩滅・剥離	普通	にぶい橙10YR7/3	密 0.1mmの砂粒を僅かに含む	口縁1/8	
83	94	36		Ⅱ区SR01	土師器 甕	-	-	5.8	摩滅	板ナデ	普通	黄褐2.5Y5/3	密 0.1～1mmの砂粒を含む	底部	
84	97	36	16	Ⅰ区包含層	瀬美灰釉端反皿	(13.2)	(3.5)	(5.9)	施釉・高台、外面無釉	施釉	良好	(内)(外)釉 灰白5Y7/2 (胎)灰白2.5Y8/2	やや粗 0.1mm以下の砂粒を含む	3/8	
85	112	36		Ⅰ区壁切り	磁器 皿	(11.9)	(2.6)	(4.7)	横ナデ・ヘラ削り・施釉	施釉	良好	(外)にぶい褐7.5YR5/4 (胎)灰白10YR8/1	精良	3/8	
86	98	36	16	Ⅰ区包含層	青磁 碗	-	-	(6.2)	施釉・高台削り出し、無釉	施釉	良好	(内)(外)釉 ｵﾘｰﾌﾞ褐2.5Y4/3 (胎)灰黄2.5Y7/2	精良	底部2/8	
87	103	36	16	Ⅰ区包含層	青磁 碗	(15.8)	-	-	施釉	施釉	良好	(内)(外)釉 ｵﾘｰﾌﾞ灰10Y4/2 (胎)灰N6/0	精良	破片	上田分類D類

迯田石垣遺跡　土器観察表

報文番号	実測番号	挿図番号	図版番号	出土位置	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	外面	内面	焼成	色調	胎土	遺存度	備考
88	1	36		Ⅰ区壁切り	備前焼 皿	(10.0)	-	-	横ナデ	横ナデ	良好	明赤褐色2.5YR5/6	密 0.1～1㎜の砂粒を含む	口縁1/8	
89	2	36		Ⅰ区包含層	土師質土器 土釜	-	-	-	横ナデ・指押さえ	指押さえ後横ナデ	良好	にぶい黄橙10YR6/3	やや粗 0.1～2㎜の砂粒を多く含む	破片	
90	96	36		Ⅰ区包含層	土師質土器 土釜	(21.5)	-	-	横ナデ・指押さえ	摩滅・ナデ	やや不良	橙5YR6/6	やや粗 0.1～2㎜の砂粒を含む	破片	
91	108	36		Ⅰ区包含層	土師質土器 土釜	(22.2)	-	-	指押さえ後横ナデ・指押さえ	横ナデ	良好	暗灰黄2.5Y4/2	密 0.1～3㎜の砂粒を含む	口縁1/8	
92	95	36	14	Ⅰ区包含層	土師質土器 土釜	(27.8)	-	-	横ナデ後指押さえ	板ナデ後ナデ	良好	にぶい褐7.5YR5/4	やや粗 0.1～3㎜大の砂粒を含む	口縁1/8	外面に煤付着
93	107	36		Ⅰ区包含層	土師質土器 土釜	(26.6)	-	-	指押さえ後横ナデ	ハケ目	良好	橙5YR6/6	やや粗 0.1～4㎜の砂粒を含む	破片	
94	114	36		Ⅰ区包含層	土師質土器 土釜脚	-	-	-	横ナデ・指押さえ		良好	にぶい黄橙10YR7/3	密 0.1～2㎜の砂粒を含む	脚部6/8	
95	106	36	14	Ⅰ区包含層	土師質土器 土鍋	-	-	-	剥離・摩滅	剥離・摩滅	やや不良	赤褐10R6/6	やや粗 0.1～3㎜の砂粒を含む	破片	
96	105	36		Ⅰ区包含層	土師質土器 土鍋	-	-	-	横ナデ・指押さえ・ナデ	横ナデ	良好	褐7.5YR4/3	やや粗 0.1～2.5㎜の砂粒を含む	破片	
97	104	36	14	Ⅰ区包含層	土師質土器 土鍋	-	-	-	横ナデ・指押さえ・ナデ	摩滅・横ナデ?	良好	黒褐10YR3/1	粗 0.1～5㎜の砂粒をやや多く含む	破片	
98	100	36	14	Ⅰ区包含層	東播系 コネ鉢	-	-	-	横ナデ	横ナデ	やや不良	灰黄2.5Y6/2	密 0.1～1㎜の砂粒を含む	破片	
99	13	36		Ⅰ区包含層	東播系 コネ鉢	-	-	-	横ナデ	横ナデ	良好	緑灰7.5GY5/1	やや粗 0.1～1㎜の砂粒を少量含む	破片	
100	73	36	14	Ⅰ区包含層	東播系 コネ鉢	-	-	-	横ナデ	指ナデ	良好	灰5Y6/1	やや粗 0.1～0.5㎜の砂粒を含む	破片	
101	109	36	14	Ⅰ区包含層	東播系 コネ鉢	(29.0)	-	-	横ナデ	横ナデ	良好	青灰5PB5/1	やや粗 0.1～0.5㎜の砂粒を含む	破片	
102	110	36	15	Ⅰ区包含層	湊焼甕	-	-	-	横ナデ・タタキ	タタキ後ナデ	良好	灰N5/0	密 0.1～1㎜の砂粒を含む	破片	内面に当て具痕?
103	101	36	15	Ⅰ区包含層	備前焼 すり鉢	-	-	(17.3)	横ナデ・ヘラ削り後ナデ	横ナデ後条溝7条	良好	灰褐5YR6/2	やや粗 0.1～1.5㎜の砂粒を含む	底部	
104	111	36	15	Ⅰ区包含層	備前焼 壺	-	-	-	横ナデ・頸部に降灰	横ナデ	良好	灰赤10R4/2	密 0.1～3㎜の砂粒を含む	破片	
105	102	36	15	Ⅰ区包含層	備前焼 不明?	-	-	-	横ナデ	横ナデ	良好	暗赤褐2.5YR3/2	密 0.1～1㎜の砂粒を僅かに含む	破片	
106	113	36	17	Ⅰ区包含層	軒平瓦	(11.8)現存長	(6.1)現存幅	(1.8)厚さ	凹面 ナデ・布目痕残存	凸面 ナデ	普通	(凹)(凸)暗青灰5B4/1	やや粗 0.1～1㎜の砂粒を含む	破片	顎後縁の面取り、凹面端部に凹型台圧痕
107	118	37		Ⅱ区包含層	土師質土器 土釜	-	-	-	横ナデ・指押さえ	板ナデ後ナデ	良好	明赤褐2.5YR5/6	やや粗 0.1～4㎜の砂粒をやや多く含む	破片	
108	116	37		Ⅱ区包含層	土師質土器 土釜	(23.5)	-	-	横ナデ・指押さえ	板ナデ後ナデ	やや不良	にぶい黄橙10YR7/3	やや粗 0.1～1.5㎜の砂粒を含む	破片	
109	115	37		Ⅱ区包含層	土師質土器 土釜脚	-	-	-	摩滅・指ナデ	板ナデ後ナデ	良好	浅黄橙10YR8/3	密 0.1～5㎜の砂粒を含む	破片	
110	117	37	14	Ⅱ区包含層	土師質土器 土鍋	(38.0)	-	-	剥離・指押さえ	剥離・ハケ目	やや不良	明黄褐10YR7/6	密 0.1～3㎜の砂粒をやや多く含む	破片	
111	119	37	14	Ⅱ区包含層	東播系 コネ鉢	(32.0)	-	-	横ナデ	横ナデ	良好	灰N6/0・暗青灰5B3/1	やや粗 0.1～0.3㎜の砂粒を含む	破片	

迯田石垣遺跡　土器観察表

報文番号	実測番号	挿図番号	図版番号	出土位置	器　種	現在長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	材　質	整形・調整の特徴
23	400	26	17	SK01	石鏃（未製品）	2.4	1.6	0.4	1.58	サヌカイト	凸基式・先端部,基部　欠損

報文番号	実測番号	挿図番号	図版番号	出土位置	器　種	現在長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	材　質	整形・調整の特徴
35	405	29	17	ST01	鉄刀	22.8	3.15	1.1	119.19		木質（サヤ）の残存
49	404	30	17	SX01	鉄釘	3.6	0.9	0.7	3.41		

第８表　迯田石垣遺跡　石器　鉄器　観察表

報文番号	実測番号	挿図番号	図版番号	出土位置	器　種	現在長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	材　質	整形・調整の特徴
1	300	42	19	SP01	石鏃	2.6	1.3	0.3	0.61	サヌカイト	凹基式，左基部，先端部欠損
2	301	42	19	SP109	石鏃（未製品）	(1.8)	1.5	0.5	1.53	サヌカイト	平基式

報文番号	実測番号	挿図番号	図版番号	出土位置	器　種	口径(cm)	器高(cm)	底径(g)	外　面	内　面	焼　成	色　調	胎　土	遺存度
3	3	43	19	予備調査Tr.19 包含層	吉備系 土鍋？	-	-	-	指押さえ後横ナデ	ナデ	良好	暗灰黄2.5Y4/2	密 0.1～2㎜の砂粒を含む	破片
4	5	43	19	予備調査Tr.19 包含層1	管状土錘	孔径 0.6	長 6.2	-	摩滅		普通	赤明褐5YR5/6	密 0.1～3㎜の砂粒を含む	完存
5	1	43	19	予備調査Tr.16 第２層	須恵器 甕	-	-	-	タタキ後カキ目	青海波文	良好	灰N6/0	密0.1㎜前後の砂粒を含む	破片
6	4	43		上面精査	弥生土器 壺 口縁	-	-	-	口縁端部 凹線文	横ナデ	普通	橙5YR6/6	密 0.1～1㎜の砂粒を少量含む	破 片

第９表　逊田谷川下池遺跡　遺物観察表

報文番号	実測番号	挿図番号	図版番号	出土位置	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	外面	内面	焼成	色調	胎土	遺存度	備考
3	201	59	28	A区 1面 SB07	土師器 杯	-	-	-	横ナデ・底部 糸切り	横ナデ	普通	浅黄橙10YR8/3	密 0.1～1mmの砂粒を含む	破片	
4	200	59		A区 1面 SB07	亀山焼 甕	-	-	-	格子目タタキ	ナデ	良好	橙7.5YR7/6	密 0.1～1mmの砂粒を含む	破片	
6	211	63	28	A区 1面 SK13	土師器 小皿	-	-	-	横ナデ・底部 糸切り	摩滅	普通	にぶい橙7.5YR7/4	密 0.1～1mmの砂粒を含む	破片	
7	252	63		A区 1面 SK13	土師器 小皿	-	-	-	摩滅	摩滅	普通	浅黄橙7.5YR8/4	密 0.1～1mmの砂粒を含む	破片	
9	205	67		A-2区 1面 SP12	土師器 杯	(10.8)	(3.3)	(6.4)	剥離・底部 糸切り	摩滅・剥離	普通	橙5YR6/6	密 0.1～0.3mmの砂粒を僅かに含む	破片	
10	207	67		A-2区 1面 SP40	弥生土器 甕	-	-	-	摩滅・横ナデ	摩滅・横ナデ	良好	浅黄橙10YR8/3	密 0.1～1.5mmの砂粒を含む	破片	
11	209	67		A-2区 1面 SP41	弥生土器 甕	(29.8)	-	-	横ナデ・摩滅	摩滅・横ナデ	良好	橙2.5YR6/6	やや粗 0.1～2.5mmの砂粒をやや多く含む	破片	
12	204	67	29	A-2区 1面 SP41	弥生土器 甕	(31.2)	-	-	横ナデ・摩滅	横ナデ・(剥離)	良好	にぶい赤褐5YR5/4	密 0.1～2.5mmの砂粒をやや多く含む	破片	
13	208	67		A-2区 1面 SP41	弥生土器 甕	-	-	-	横ナデ・摩滅	摩滅・横ナデ？	やや不良	にぶい橙7.5YR7/4	密 0.1～3mmの砂粒を含む	頸部1/8	
18	222	68		A区 1面 包含層	土師器 小皿	(6.2)	(1.5)	(5.5)	ナデ(摩滅)・摩滅	ナデ(摩滅)	普通	浅黄橙10YR8/3	密 0.1mm以下の砂粒を含む	1/8	
19	221	68	28	A区 1面 包含層	土師器 小皿	(7.2)	(1.15)	(6.4)	横ナデ(摩滅)・底部 糸切り(摩滅)	横ナデ(摩滅)	普通	浅黄橙7.5YR8/4	密 0.1～1mmの砂粒を含む	底部3/8	
20	220	68	28	A区 1面 包含層	土師器 小皿	(6.5)	(1.2)	(5.6)	横ナデ・底部 糸切り	横ナデ	普通	浅黄橙7.5YR8/4	密 0.1～3mmの砂粒を含む	3/8	
21	223	68	28	A区 1面 包含層	土師器 小皿	(6.3)	(1.1)	(5.8)	摩滅・横ナデ	摩滅・横ナデ	普通	浅黄橙7.5YR8/6	密 0.1～0.3mmの砂粒を含む	2/8	
22	224	68	28	A区 1面 包含層	土師器 小皿	(6.8)	(1.3)	(6.1)	横ナデ・底部 糸切り	横ナデ	良好	にぶい黄橙10YR6/3	密 0.1～1mmの砂粒を含む	1/8	
23	245	68	28	A区 1面 包含層	土師器 小皿	(8.1)	(1.75)	(6.0)	摩滅	摩滅	普通	灰白10YR8/2	密 0.1～2mmの砂粒を含む	2/8	
24	218	68		A区 1面 包含層	土師器 小皿	(8.8)	(1.4)	(7.2)	底部 ヘラ切り後横ナデ	横ナデ	普通	浅黄橙10YR8/4	密 0.1～0.2mmの砂粒を僅かに含む	2/8	
25	219	68	28	A区 1面 包含層	土師器 杯	(9.9)	(3.2)	(7.2)	横ナデ・(摩滅)・底部 ヘラ切り後ナデ	摩滅	普通	浅黄橙10YR8/3	密 0.1～3mmの砂粒を少量含む	1/8	
26	217	68	28	A区 1面 包含層	土師器 杯	-	-	(8.1)	摩滅・底部 ヘラ切り後横ナデ	摩滅	普通	浅黄橙10YR8/3	密 0,1～0.3mmの砂粒を僅かに含む	底部	
27	225	68		A区 1面 包含層	土師器 杯	(10.9)	(2.6)	(9.3)	横ナデ・底部 糸切り	摩滅	普通	灰黄褐10YR5/2	密 0.1～0.2mmの砂粒を僅かに含む	破片	
28	231	68	28	A区 1面 包含層	土師器 杯	-	-	(8.7)	横ナデ・底部 糸切り	横ナデ	良好	灰白5Y8/1	密 0.1～0.2mmの砂粒を含む	底部2/8	
29	238	68		A区 1面 包含層	土師質土器 土鍋	-	-	-	横ナデ・摩滅・指押さえ	ハケ目	良好	灰黄褐10YR4/2	密 0.1～1.5mmの砂粒を含む	破片	
30	243	68		A区 1面 包含層	土師質土器 土釜脚	-	-	-	指ナデ		やや不良	浅黄橙7.5YR8/3	やや粗 0.1～6mmの砂粒を多く含む	破片	
31	226	68		A区 1面 包含層	瓦器 椀	-	-	(5.0)	横ナデ・(摩滅)	摩滅	普通	にぶい黄橙10YR7/3	密 0.1～0.3mmの砂粒を少量含む	底部2/8	
32	228	68		A区 1面 包含層	瓦器 椀	-	-	-	横ナデ・(摩滅)	摩滅	普通	灰白2.5Y8/1	密 0.1～0.2mmの砂粒を僅かに含む	破片	
33	210	68		A区 1面 包含層	瓦器 椀	-	-	-	横ナデ・(摩滅)・貼り付け高台	摩滅	普通	灰5Y6/1	密 0.1～1mmの砂粒を含む	破片	
34	229	68		A区 1面 包含層	瓦器 椀	-	-	-	横ナデ・ナデ	横ナデ後ヘラミガキ	良好	灰N5/0	密 0.1～1mmの砂粒を少量含む	破片	

第10表 鹿庭遺跡 土器観察表

報文番号	実測番号	挿図番号	図版番号	出土位置	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	外面	内面	焼成	色調	胎土	遺存度	備考
35	230	68		A区 1面 包含層	瓦器？ 椀	(13.0)	-	-	ナデ(摩滅)・指押さえ	ナデ(摩滅)	普通	黄灰2.5Y7/2	密 0.1～1mmの砂粒を含む	1/8	
36	234	68		A区 1面 包含層	東播系 コネ鉢	-	-	-	横ナデ・ナデ	指ナデ	良好	青灰5BG5/1	やや粗 0.1～2.5mmの砂粒を含む	破片	
37	227	68		A区 1面 包含層	東播系 コネ鉢	-	-	-	横ナデ	指ナデ	良好	青灰5BG5/1・暗青灰5BG4/1	やや粗 0.1～1mmの砂粒を含む	破片	
38	250	68	28	A区 1面 包含層	管状土錘	孔径 0.4	長 3.8	-	ナデ(摩滅)		良好	にぶい橙7.5YR7/3	密 0.1～1mmの砂粒を含む	完存	
39	251	68	28	A区 1面 包含層	管状土錘	孔径 0.4	長 4.1	-	ナデ(摩滅)		普通	橙2.5YR6/6	密 0.1～1mmの砂粒を含む	完存	
40	241	68		A区 1面 包含層	弥生土器 甕	-	-	-	横ナデ・(剥離)	剥離	やや不良	にぶい黄橙10YR7/3	密 0.1～2mmの砂粒を含む	破片	
41	242	68		A区 1面 包含層	弥生土器 甕	-	-	-	横ナデ・(摩滅)	横ナデ・(摩滅)	良好	黒褐2.5Y3/1	密 0.1～1.5mmの砂粒を含む	破片	
42	246	68		A区 1面 包含層	弥生土器 壺	-	-	-	摩滅・貼り付け突帯	ナデ(摩滅)・指押さえ後ハケ目	良好	にぶい赤褐5YR5/4・黄灰2.5Y6/1	密 0.1～2mmの砂粒を含む	破片	
43	247	68	29	A区 2面 包含層	弥生土器 底部	-	-	(7.2)	ハケ目(摩滅)・ナデ(摩滅)	摩滅	良好	暗黄灰2.5Y5/2	密 0.1～4mmの砂粒を含む	底部2/8	
44	248	68		A区 1面 包含層	弥生土器 底部	-	-	-	摩滅	摩滅	普通	にぶい赤褐2.5YR5/4	密 0.1～3mmの砂粒を含む	破片	
79	253	74	28	A区 2面 SD03	器種不明	-	-	(5.6)	ナデ	剥離	普通	明赤褐2.5YR5/6	密 0.1～3mmの砂粒を含む	底部2/8	
80	206	75	29	A区 2面 SP21 8層	弥生土器 甕	(15.1)	-	-	摩滅・剥離	摩滅・剥離・指押さえ・ヘラ削り	良好	にぶい褐7.5YR5/4	密 0.1～3mmの砂粒を含む	口縁2/8	
95	216	82		B区 SX01	土師器 杯	(12.5)	-	-	ナデ(摩滅)	ナデ(摩滅)	普通	にぶい黄橙10YR6/3	密 0.1～2mmの砂粒を含む	1/8	
96	212	82	28	B区 SX01	土師質土器 土釜	(27.0)	-	-	横ナデ	板ナデ後ナデ	良好	灰白10YR8/2	密 0.1～3mmの砂粒を含む	口縁1/8	
97	213	82	28	B区 SX01	土師質土器 土釜脚	-	-	-	指ナデ		良好	橙2.5YR6/6	やや粗 0.1～4mmの砂粒を多く含む	破片	
98	214	82		B区 SX01	土師質土器 土釜脚	-	-	-	指ナデ		良好	にぶい黄橙2.5YR7/3	やや粗 0.1～3mmの砂粒をやや多く含む	破片	
99	203	83		B区 SB01-SP07	須恵器 蓋	-	-	-	摩滅・横ナデ	摩滅	不良	灰10Y5/1	密 0.1～0.3mmの砂粒を少量含む	破片	
102	202	84	29	B区 遺構面精査	弥生土器 甕(底部)	-	-	(5.0)	剥離	剥離	やや不良	橙2.5YR6/6	粗 0.1～4mmの砂粒を多く含む	底部3/8	
103	235	84		B区 機械掘削	土師質土器 土釜	-	-	-	横ナデ・指押さえ	横ナデ・板ナデ	良好	にぶい黄橙10YR7/3	やや粗 0.1～8mmの砂粒を含む	破片	
104	236	84	28	B区 壁切り	土師質土器 土釜	-	-	-	横ナデ・指押さえ	横ナデ・指押さえ後板ナデ	良好	橙7.5YR6/6	やや粗 0.1～3.5mmの砂粒を含む	破片	
105	237	84	28	B区 遺構面精査	土師質土器 土鍋	-	-	-	横ナデ	ナデ	良好	にぶい赤褐5YR5/4	やや粗 0.1～3mmの砂粒を含む	破片	
106	232	84		B区 遺構面精査	備前焼 すり鉢	(29.4)	-	-	横ナデ・横ナデ後ナデ	横ナデ後指ナデ後条溝	良好	灰N4/0	密 0.1～4mmの砂粒を含む	破片	
107	249	84		B区 壁切り	磁器 椀	(11.5)	-	-	施釉・二重網目文	施釉	良好	(外)釉 明ｵﾘｰﾌﾞ灰5GY7/1・網目文 青灰10BG5/1(胎)灰白7.5Y8/1	精良	破片	
108	244	84		B区 遺構面精査	土師質土器 ほうろく	(32.2)	-	-	横ナデ・指押さえ	横ナデ・(摩滅)	普通	青黒10BG2/1	密 0.1～0.3mmの砂粒を少量含む	破片	

鹿庭遺跡　土器観察表

報文番号	実測番号	挿図番号	図版番号	出土位置	器　種	現存長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	材　質	整形・調整の特徴
1	524	55	31	A区　1面　SB03　SP05	石錐	2.8	0.9	0.2	0.66	サヌカイト	錐部を丁寧に加工,頭部欠損
2	518	57	29	A区　1面　SB05	石鏃	1.6	1.5	0.3	0.47	サヌカイト	凹基式,先端部欠損
5	514	61	31	A区　1面　SK05　1層	石錐	4.2	1.95	0.5	5.02	サヌカイト	風化,錐部先端部欠損
8	511	66	30	A区　1面　SD01	石鏃	2.4	1.6	0.55	1.91	サヌカイト	凹基式,先端部,右基部欠損
14	521	67	29	A-2区　1面　SP41	石鏃	1.2	1.3	0.3	0.23	サヌカイト	凹基式,先端部,右基部欠損
15	515	67		A-1区　1面　SP03	スクレイパー?	4.85	5.65	2.1	43.17	サヌカイト	ツブレあり,欠損
16	517	67	30	A-1区　1面　SP24	石鏃	4.5	2.7	0.7	8.98	サヌカイト	円基式,側面右上部にツブレ
17	523	67	30	A-2区　1面　SP34	石鏃(未製品)	3.2	2.35	0.4	4.25	サヌカイト	
45	560	69	30	A区　1面　包含層	石鏃	1.45	1.2	0.3	0.44	サヌカイト	凹基式,先端部,左右基部欠損
46	537	69	29	A区　1面　包含層	石鏃	2.4	1.85	0.35	1.69	サヌカイト	凹基式,先端部欠損
47	536	69	29	A区　1面　包含層	石鏃(未製品)	2.6	2.4	0.4	3.59	サヌカイト	凹基式,側縁に自然面
48	561	69	30	A区　1面　包含層	石鏃?(未製品)	1.4	1.0	0.3	0.40	サヌカイト	凹基式
49	544	69		A区　1面　包含層	石鏃	1.65	1.25	0.35	0.87	サヌカイト	平基式,先端部,左基部欠損
50	554	69	30	A区　1面　包含層	石鏃(未製品)	2.1	1.3	0.3	1.20	サヌカイト	
51	555	69	30	A区　1面　包含層	石鏃	2.3	1.4	0.3	0.95	サヌカイト	平基式,先端部欠損
52	546	69	30	A区　1面　包含層	石鏃	2.55	1.45	0.25	1.37	サヌカイト	平基式,先端部欠損
53	543	69	30	A区　1面　包含層	石鏃	3.1	2.1	0.4	2.87	サヌカイト	平基式,先端部,左基部欠損
54	541	69	30	A区　1面　包含層	石鏃	3.3	2.15	0.5	3.26	サヌカイト	平基式,先端部欠損
55	539	69	30	A区　1面　包含層	石鏃	3.35	1.15	0.55	1.86	サヌカイト	凸基有茎式?,基部欠損
56	542	69	30	A区　1面　包含層	石鏃	4.0	1.55	0.35	1.80	サヌカイト	凸基有基式
57	545	69	30	A区　1面　包含層	石鏃	3.5	1.95	0.5	2.97	サヌカイト	平基有茎式,先端部,基部欠損
58	535	69	30	A区　1面　包含層	石鏃	3.3	2.4	0.55	4.12	サヌカイト	凸基有茎式,先端部欠損
59	563	69		A区　1面　包含層	石鏃	1.4	1.1	0.3	0.39	サヌカイト	基部欠損
60	558	69	30	A区　1面　包含層	石鏃(未製品)	1.45	1.15	0.35	0.52	サヌカイト	基部欠損
61	559	69	30	A区　1面　包含層	石鏃	1.5	1.3	0.3	0.71	サヌカイト	先端部,基部欠損
62	547	69	30	A区　1面　包含層	石鏃	2.5	1.8	0.4	1.60	サヌカイト	先端部,基部欠損
63	552	69	30	A区　1面　包含層	石鏃	2.1	1.2	0.3	0.97	サヌカイト	先端部,基部欠損
64	549	69	30	A区　1面　包含層	石鏃	2.5	1.25	0.5 1	74	サヌカイト	先端部,基部欠損
65	557	69	31	A区　1面　包含層	石錐	2.1	0.8	0.25	0.49	サヌカイト	頭部欠損
66	550	69	31	A区　1面　包含層	石錐	2.5	1.4	0.25	1.27	サヌカイト	頭部下縁から錐部にかけて細かい調整,錐部,頭部欠損
67	538	69	31	A区　1面　包含層	石錐	3.65	2.05	0.6	3.43	サヌカイト	基部,右側面にツブレ,先端部,頭部欠損
68	534	69	31	A区　1面　包含層	打製石庖丁	3.25	2.55	0.5	5.10	サヌカイト	抉り部にツブシ,欠損

第11表　鹿庭遺跡　石器観察表

報文番号	実測番号	挿図番号	図版番号	出土位置	器　種	現存長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	材　質	整形・調整の特徴
69	527	69	31	A区　1面　包含層	打製石鎌？(未製品)	3.3	6.3	0.65	20.41	サヌカイト	先端部欠損
70	526	70	31	A区　1面　包含層	石匙	4.75	6.95	1.05	29.25	サヌカイト	片刃
71	548	70	31	A区　1面　包含層	石匙	2.55	1.9	0.6	2.49	サヌカイト	ツマミ右側面にツブレ,欠損
72	531	70		A区　1面　包含層	スクレイパー	2.9	3.4	0.6	7.40	サヌカイト	刃部にツブレ,欠損
73	529	70	32	A区　1面　包含層	スクレイパー	2.75	4.55	0.7	10.17	サヌカイト	上部,刃部にツブレ,欠損
74	532	70	32	A区　1面　包含層	スクレイパー？	3.35	3.0	0.95	10.65	サヌカイト	背部と刃部にツブレ,欠損
75	528	70	32	A区　1面　包含層	打製石斧？	4.65	4.2	0.85	21.86	サヌカイト	刃部にツブレ,欠損
76	530	70	32	A区　1面　遺構面精査	楔形石器	4.9	2.3	1.4	15.35	サヌカイト	ツブレ,小剥離の密集
77	556	70	31	A区　1面　包含層	リタッチドフレイク	2.0	2.1	0.3	1.43	サヌカイト	ツブレ,欠損
78	533	70		A区　排土	火打ち石	2.2	3.5	0.7	—	サヌカイト	
81	522	75	32	A-1区　2面　SP21	打製石斧(楔形石器転用)	3.3	4.75	1.1	21.44	サヌカイト	右側面と刃部にツブレ・摩耗あり,欠損
82	519	75	29	A-2区　2面　SP59	石鏃	1.25	1.25	0.3	0.27	サヌカイト	凹基式,先端部,左基部欠損
83	551	76	29	A区　2面　遺構面精査	石鏃	2.6	1.7	0.25	0.72	サヌカイト	凹基式,右基部,先端部欠損
84	540	76	29	A区　2面　包含層	石鏃	2.45	1.8	0.45	1.53	サヌカイト	凹基式,先端部,左右基部欠損
85	510	78	29	B区　SK06	石鏃	1.6	2.6	0.6	1.95	サヌカイト	先端部,基部欠損
86	512	78	29	B区　SK02　2層	石鏃	1.7	1.6	0.45	0.82	サヌカイト	凹基式,先端部,左右基部欠損
87	513	78	29	B区　SK02　3層	石鏃	1.95	1.6	0.3	0.63	サヌカイト	凹基式,先端部,右基部欠損
88	507	78	32	予備調査6-3Tr.　SK02　No.1	大形剥片	3.6	8.8	1.2	33.64	サヌカイト	
89	506	78	32	予備調査6-3Tr.　SK02　No.6	大形剥片	4.3	6.35	0.8	33.16	サヌカイト	112と接合
90	508	78	32	予備調査6-3Tr.　SK02　No.4	大形剥片	3.9	8.9	0.8	19.27	サヌカイト	
91	501	79	33	予備調査6-3Tr.　SK02　No.2	大形剥片	11.75	17.7	2.4	662.36	サヌカイト	
92	500	79	33	予備調査6-3Tr.　SK02　No.3	大形剥片	12.15	17.15	2.65	568.93	サヌカイト	部分的にツブレ,小剥離あり
93	502	79	33	予備調査6-3Tr.　SK02　No.5	大形剥片	14.8	7.3	2.2	248.73	サヌカイト	部分的に弱い調整を施す
94	509	80	32	B区　SK05　1層	スクレイパー(楔形石器転用)	1.8	3.8	1.0	5.65	サヌカイト	側面にツブレ
100	520	83	30	B区　SB01-SP07	石鏃	2.6	1.65	0.6	2.31	サヌカイト	凸基有茎式,先端部,基部欠損
101	516	83	31	B区　SP14	石匙	3.15	4.7	0.5	8.43	サヌカイト	両刃,欠損
109	553	85		B区　遺構面精査	石鏃	1.7	1.5	0.25	0.34	サヌカイト	凹基式,先端部,左基部欠損
110	503	85	34	B区　遺構面精査(SK02より東に1m)	大形剥片	16.0	13.2	2.75	568.94	サヌカイト	
111	505	85	34	予備調査6-3Tr.斜面堆積	大形剥片	8.55	13.3	2.1	237.22	サヌカイト	部分的にツブレ
112	504	86	34	B区　遺構面精査　SK02より東へ3m(扇状地内)	大形剥片	15.1	9.15	2.2	344.41	サヌカイト	89と接合
1(まとめ)	—	89		B区　SK02より東に3m(扇状地内)	大形剥片(接合資料)	16.2	9.5	3.0	377.57	サヌカイト	報文番号89,112の接合資料

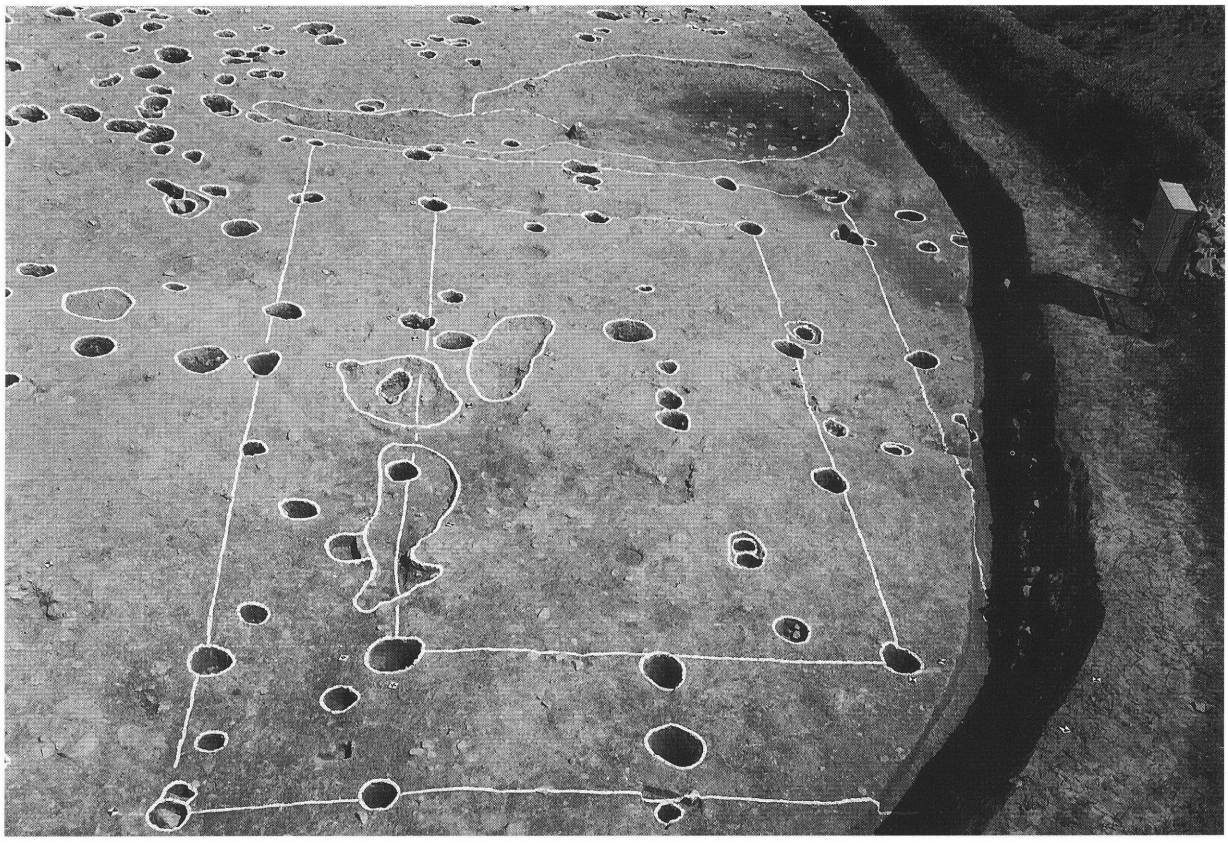
鹿庭遺跡　石器観察表

図　　版

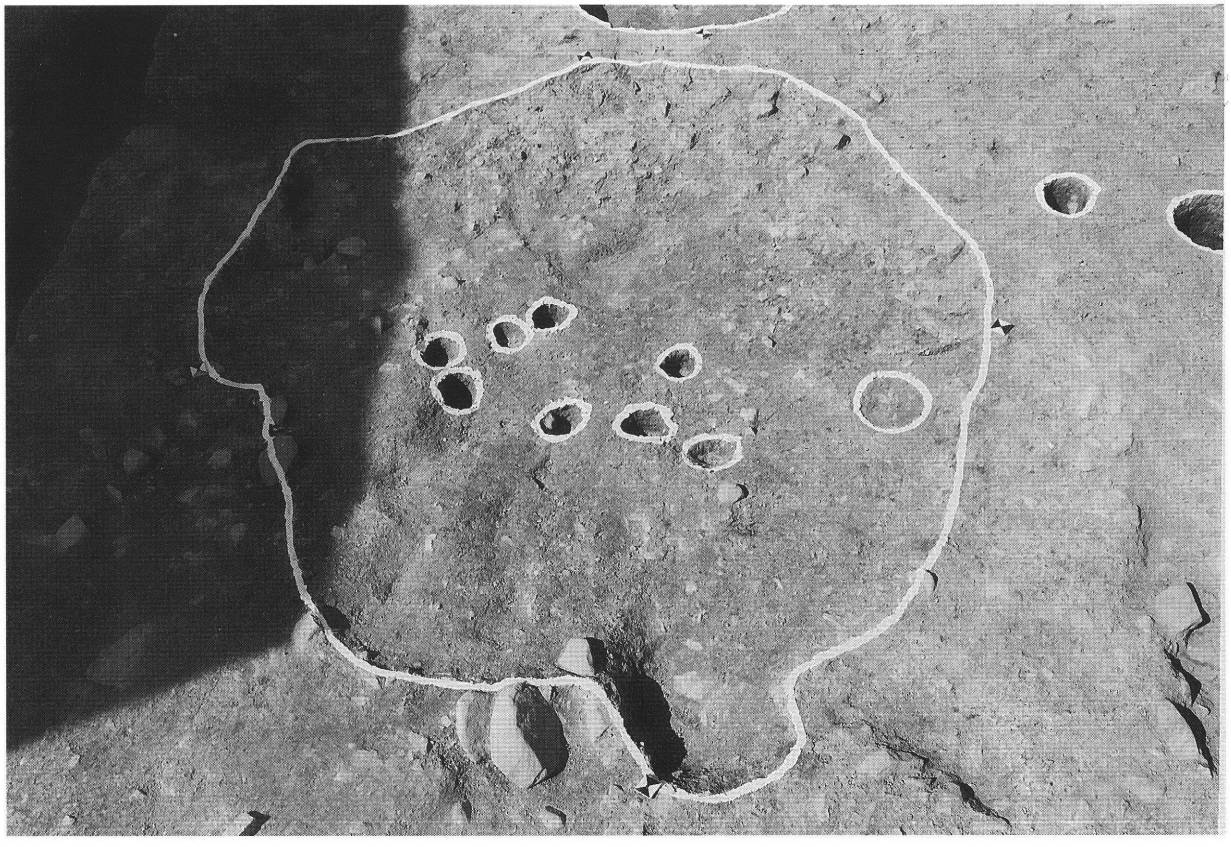
Ⅰ区遠景（真上から）

Ⅰ区遠景（西上空から）

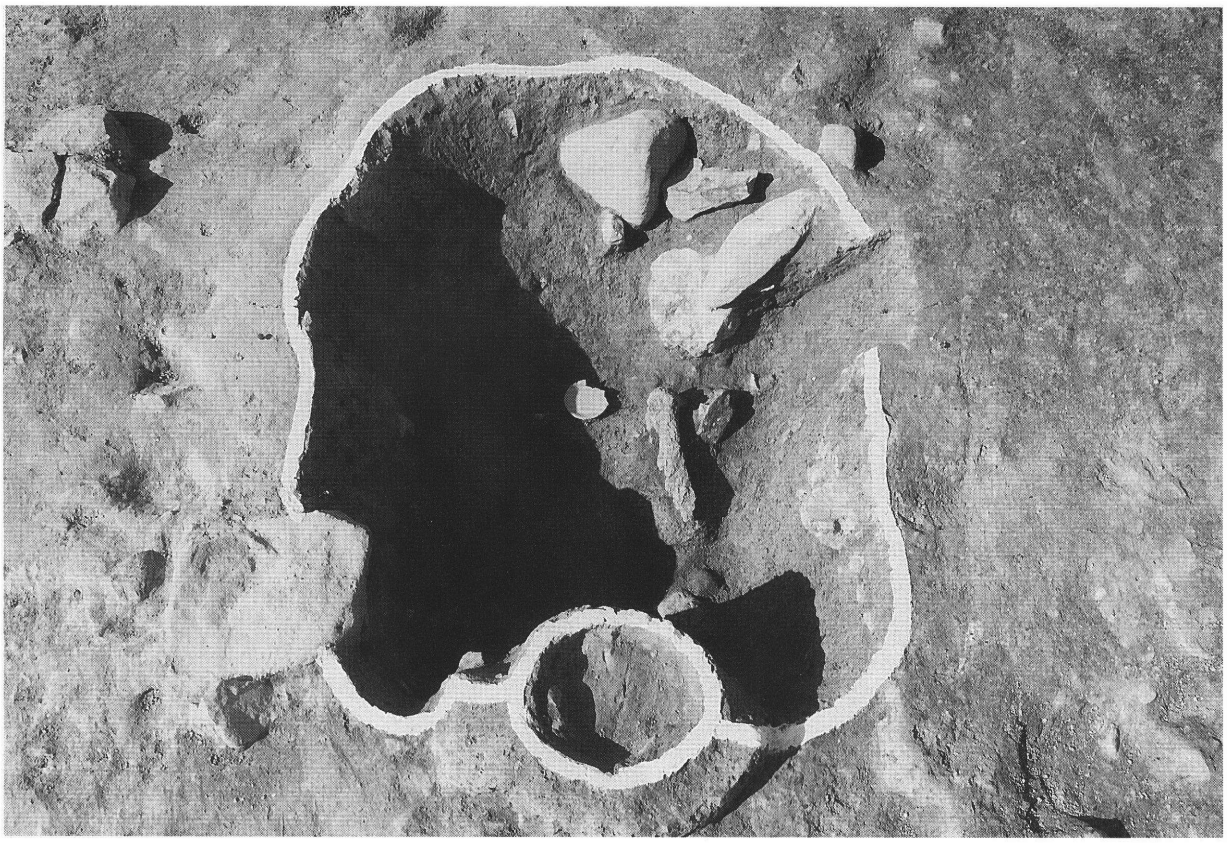
Ⅰ区調査区全景（西から）



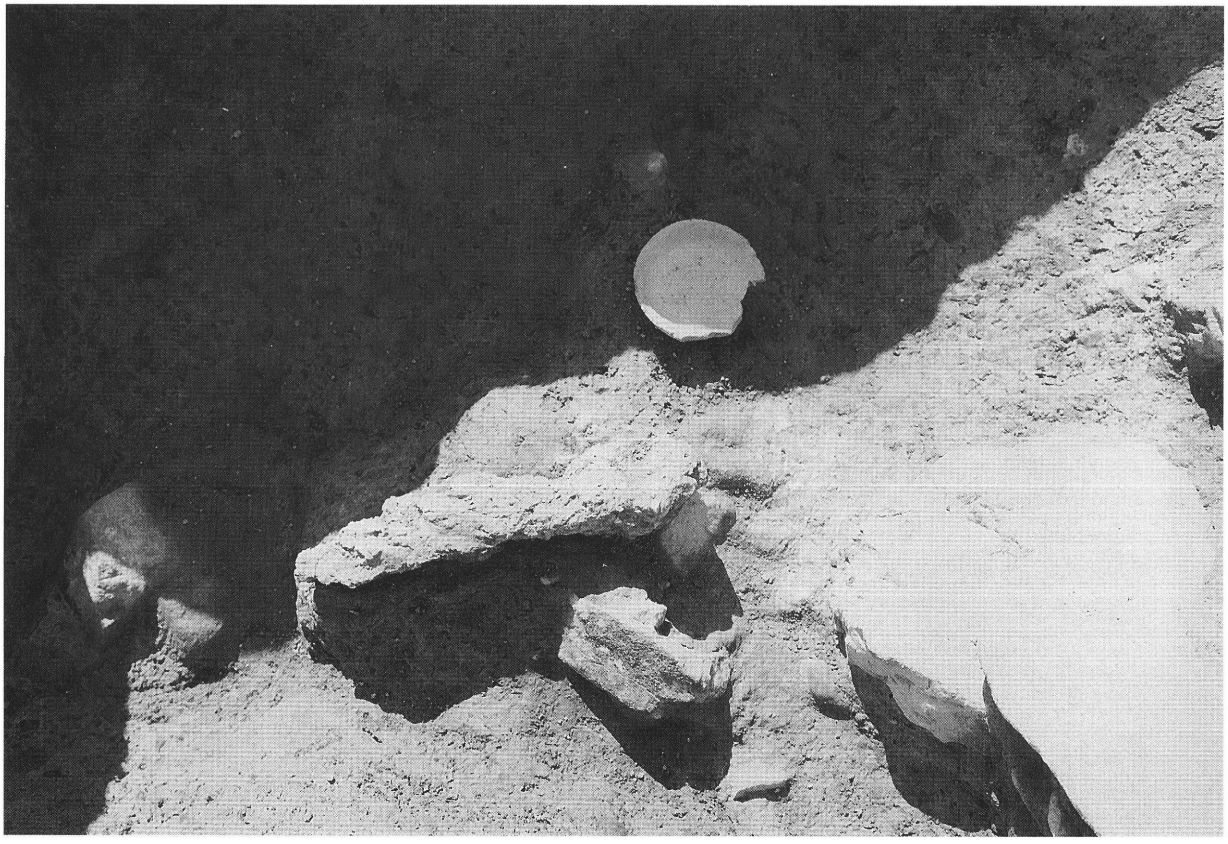
Ⅰ区ＳＢ01完掘状況（西から）



Ⅰ区ＳＫ04完掘状況（南から）

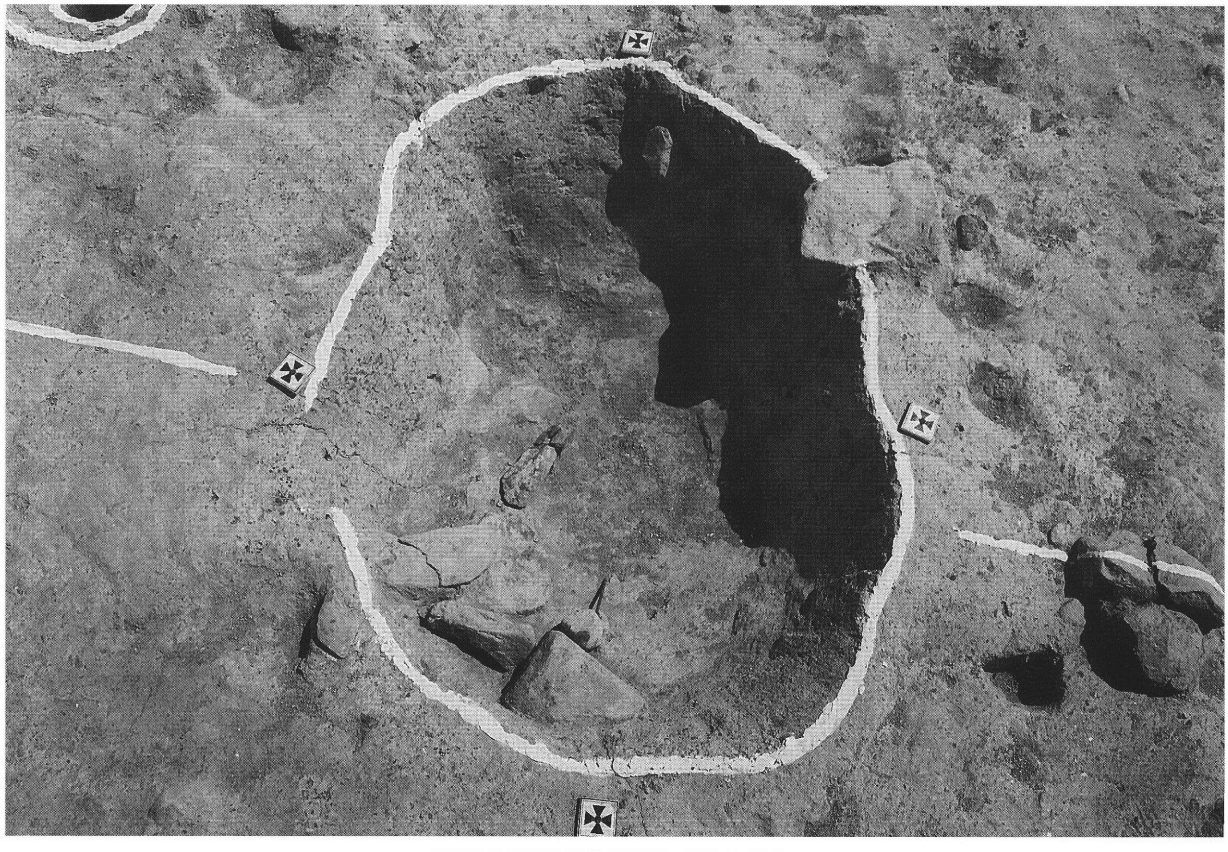


Ⅰ区ＳＴ01遺物出土状況（南から）



Ⅰ区ＳＴ01遺物出土状況（東から）

Ⅰ区ＳＴ01土層断面（北から）



Ⅰ区ＳＴ01完掘状況（北から）

Ⅰ区ＳＸ01礫出土状況（北から）

Ⅰ区ＳＸ01遺物出土状況（床直）（東から）

Ⅱ区遠景（真上から）

Ⅱ区全景（南から）